

長岡市埋蔵文化財調査報告書

# 上条遺跡

—上条高畠土地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター  
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016

新潟県長岡市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、新潟県長岡市上条町地内に位置する上条遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、上条高畠土地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター建設事業に伴うものであり、両者から委託を受けて長岡市教育委員会が実施した。
3. 遺跡確認試掘調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫・県費の補助交付金を受けた。本発掘調査に要した費用は原団体である上条高畠土地区画整理組合及び医療法人立川メディカルセンターが負担した。
4. 遺物の注記は、14 + 上条 + 出土位置 + 層位 + 取り上げ番号とした。
5. 遺構番号は、遺構略号 + 調査区全体の通し番号とした。
6. 出土した遺物と調査に関わる資料は、すべて長岡市教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆は、第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章第1・2節・第Ⅳ章第3節・第Ⅴ章第1～5節・第Ⅶ章第1～4・7・9節を山賀和也（長岡市教育委員会）、第Ⅲ章第3・4節・第Ⅳ章第1～3節・第Ⅴ章第6・7節・第Ⅷ章第5・6・8節を竹部佑介（株式会社大石組）、第VI章第1節・第2節をパリノ・サーヴェイ株式会社、第VI章第3節を四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）が行った。編集は竹部が担当し、山賀がそれを統括した。第IV章第3節の記述は、調査時に調査員がまとめた所見をもとに山賀、竹部が執筆した。
8. 調査・整理体制は、第Ⅲ章第1節に記した。
9. 遺物のX線写真及び赤外線写真は、新潟県埋蔵文化財センターで撮影した。
10. 報告書掲載の北は真北を指す。
11. 調査・整理の過程で成果を報告したが、本報告を持って正とする。
12. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

浅井勝利 石坂圭介 堅木宜弘 小林昌二 中沢悟 藤巻正信 前嶋敏 三ツ井朋子  
医療法人立川メディカルセンター 上条高畠土地区画整理組合 上条町町内会 高畠町町内会  
山通連合町内会  
(株)加賀田組 (株)中越興業 (株)竹中工務店 高野不動産 (株)  
佐渡市教育委員会 新潟県教育庁文化行政課 公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 長岡市都市整備部都市開発課

## 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯 .....	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境 .....	2
第1節 遺跡の位置 .....	2
第2節 周辺の遺跡 .....	2
第Ⅲ章 調査の概要 .....	6
第1節 調査体制 .....	6
第2節 調査の経過 .....	6
第3節 グリッドの設定 .....	7
第4節 基本層序 .....	7
第Ⅳ章 遺構 .....	9
第1節 遺構の概要 .....	9
第2節 遺構の分類と記述 .....	9
第3節 各説 .....	10
掘立柱建物 .....	10
竪穴建物 .....	14
埋納遺構・土器溜まり .....	17
埋葬関連遺構 .....	18
土坑 .....	20
井戸 .....	22
溝 .....	22
畝状小溝群 .....	24
柵列 .....	26
ピット .....	26
湿地・その他 .....	27
第Ⅴ章 遺物 .....	28
第1節 出土遺物の概要 .....	28
第2節 土器 .....	29
(A) 記述の方針 .....	29
(B) 土器の器種分類 .....	29
1 須恵器 .....	29
2 土師器 .....	29
3 内面黒色土器 .....	33
4 施釉陶器 .....	33
(C) 遺物各説 .....	34
第3節 土製品 .....	41

第4節 石製品	41
第5節 木製品	41
第6節 鋳冶関連遺物	42
第7節 金属製品・錢貨	42
第VI章 自然科学分析	43
第1節 上条遺跡の自然科学分析	43
(A) はじめに	43
(B) 放射性炭素年代測定	43
(C) 樹種同定	45
(D) 花粉分析	47
(E) 種実同定	48
(F) リン酸・カルシウム分析	49
第2節 上条遺跡出土骨同定報告	52
第3節 長岡市上条遺跡出土曲物付着物の科学分析	61
第VII章 考 察	65
第1節 挖立柱建物について	65
第2節 四面廻建物について	66
第3節 土器埋納遺構について	67
第4節 埋葬関連遺構について	68
第5節 焼土坑（SK342）について	69
第6節 敵状小溝群について	70
第7節 出土土器の位置づけ	71
第8節 墨書・漆書き器について	74
第9節 集落の変遷と遺跡の性格	77
《引用・参考文献》	80
《遺物観察表》	83

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第13図 木材（1）	58
第2図 遺跡分布図	5	第14図 木材（2）	59
第3図 グリッドの設定及び基本順序の観察地点	7	第15図 木材（3）	60
第4図 土層柱状図	8	第16図 出土骨	60
第5図 遺構の形状・覆土の堆積状況の分類	9	第17図 赤外線吸収スペクトル	62
第6図 器種分類（1）	30	第18図 漆塗膜の顕微鏡写真	63
第7図 器種分類（2）	31	第19図 挖立柱建物変遷図	66
第8図 器種分類（3）	32	第20図 土器種別組成図（重量比）	72
第9図 器種分類（4）	33	第21図 食膳具変遷図	73
第10図 曆年較正結果（ $1\sigma$ ）	44	第22図 古代文字資料出土位置図	75
第11図 人体骨格各部の名称	54	第23図 遺構変遷図	78
第12図 花粉化石・種実遺体	57		

## 表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	4	第7表 種実同定結果	49
第2表 作業工程表	6	第8表 土壌理化分析結果	50
第3表 土器・陶器重量計測表	28	第9表 骨同定結果	53
第4表 放射性炭素年代測定及び曆年校正結果	44	第10表 土器埋納遺構一覧	68
第5表 樹種同定結果	46	第11表 編年対照表	71
第6表 花粉分析結果	48	第12表 墨書・漆書土器集計表	75

## 図版目次

### 【図面図版】

図版1 調査区全体図	図版9 調査区分割図（8）
図版2 調査区分割図（1）	図版10 遺構個別図（1） SB166
図版3 調査区分割図（2）	図版11 遺構個別図（2） SB167
図版4 調査区分割図（3）	図版12 遺構個別図（3） SB316
図版5 調査区分割図（4）	図版13 遺構個別図（4） SB317（1）
図版6 調査区分割図（5）	図版14 遺構個別図（5） SB317（2）
図版7 調査区分割図（6）	図版15 遺構個別図（6） SB317（3）
図版8 調査区分割図（7）	図版16 遺構個別図（7） SB317（4）

図版 17	遺構別図 (8)	SB318 (1)	図版 50	遺構別図 (41)	P278・426・527・651・ SX119・120
図版 18	遺構別図 (9)	SB318 (2)・SB320 (1)			
図版 19	遺構別図 (10)	SB320 (2)	図版 51	土器 (1)	
図版 20	遺構別図 (11)	SB348 (1)	図版 52	土器 (2)	
図版 21	遺構別図 (12)	SB348 (2)・SB504	図版 53	土器 (3)	
図版 22	遺構別図 (13)	SB535	図版 54	土器 (4)	
図版 23	遺構別図 (14)	SB550	図版 55	土器 (5)	
図版 24	遺構別図 (15)	SB571	図版 56	土器 (6)	
図版 25	遺構別図 (16)	SB574	図版 57	土器 (7)	
図版 26	遺構別図 (17)	SB608 (1)	図版 58	土器 (8)	
図版 27	遺構別図 (18)	SB608 (2)	図版 59	土器 (9)	
図版 28	遺構別図 (19)	SB608 (3)	図版 60	土器 (10)	
図版 29	遺構別図 (20)	SB609	図版 61	土器 (11)	
図版 30	遺構別図 (21)	SI 5・SI10	図版 62	土器 (12)	
図版 31	遺構別図 (22)	SI46・SI49	図版 63	土器 (13)	
図版 32	遺構別図 (23)	SI54・SI70	図版 64	土器 (14)	
図版 33	遺構別図 (24)	SI130・SI207・SI211	図版 65	土器 (15)	
図版 34	遺構別図 (25)	SI212・SI268	図版 66	土器 (16)	
図版 35	遺構別図 (26)	SI429・SI465	図版 67	土器 (17)	
図版 36	遺構別図 (27)	SI664	図版 68	土器 (18)	
図版 37	遺構別図 (28)	P2・43・SX32・SK280・ 359・P279・306	図版 69	土器 (19)	
図版 38	遺構別図 (29)	SK492・493・573・594	図版 70	土器 (20)	
図版 39	遺構別図 (30)	SK106・146・SK205	図版 71	土器 (21)	
図版 40	遺構別図 (31)	SK246・260・482・512	図版 72	土器 (22)	
図版 41	遺構別図 (32)	SK6・42・48・151・210	図版 73	土器 (23)	
図版 42	遺構別図 (33)	SK216・259・361・365・ 378・396	図版 74	土器 (24)	
図版 43	遺構別図 (34)	SK342・SD347	図版 75	土器 (25)	
図版 44	遺構別図 (35)	SE403・SE677・SD3・7	図版 76	土器 (26)	
図版 45	遺構別図 (36)	SD8・97・153・267・ 273・302・480・481・491・SX494	図版 77	土器 (27)	
図版 46	遺構別図 (37)	満群1・2	図版 78	土器 (28)	
図版 47	遺構別図 (38)	満群3	図版 79	土器 (29)	
図版 48	遺構別図 (39)	満群4・5	図版 80	土器 (30)	
図版 49	遺構別図 (40)	満群6・SA680・P127・ 156	図版 81	土器 (31)	
			図版 82	土器 (32)	
			図版 83	土器 (33)	
			図版 84	土器 (34)	
			図版 85	土器 (35)	

図版 86 土器（36）

図版 87 土器（37）・土製品（1）

図版 88 土製品（2）・石製品

図版 89 木製品（1）

図版 90 木製品（2）・鍛冶関連遺物・金属製品・錢貨

【写真図版】

図版 91 調査写真（1） 遺跡全景

図版 92 調査写真（2） 基本層序・SB317・P306・SK205・SK482・SK342

図版 93 調査写真（3） 基本層序・SX1・掘立柱建物（1）

図版 94 調査写真（4） 掘立柱建物（2）

図版 95 調査写真（5） 掘立柱建物（3）

図版 96 調査写真（6） 掘立柱建物（4）・竪穴建物（1）

図版 97 調査写真（7） 竪穴建物（2）

図版 98 調査写真（8） 竪穴建物（3）

図版 99 調査写真（9） 土器埋納遺構・土器溜まり（1）

図版 100 調査写真（10） 土器埋納遺構・

土器溜まり（2）・埋葬関連遺構（1）

図版 101 調査写真（11） 埋葬関連遺構（2）

図版 102 調査写真（12） 埋葬関連遺構（3）・土坑（1）

図版 103 調査写真（13） 土坑（2）

図版 104 調査写真（14） 土坑（3）・井戸・溝（1）

図版 105 調査写真（15） 溝（2）・竪状小溝群（1）

図版 106 調査写真（16） 竪状小溝群（2）

図版 107 調査写真（17） 竪状小溝群（3）・湿地・

その他・作業風景

図版 108 遺物写真（1） 遺物集合写真

図版 109 遺物写真（2） 漆付着土器・施釉陶器・

石製品・墨書き・漆書き

図版 110 遺物写真（3） 土器（1）

図版 111 遺物写真（4） 土器（2）

図版 112 遺物写真（5） 土器（3）

図版 113 遺物写真（6） 土器（4）

図版 114 遺物写真（7） 土器（5）

図版 115 遺物写真（8） 土器（6）

図版 116 遺物写真（9） 土器（7）

図版 117 遺物写真（10） 土器（8）

図版 118 遺物写真（11） 土器（9）

図版 119 遺物写真（12） 土器（10）

図版 120 遺物写真（13） 土器（11）

図版 121 遺物写真（14） 土器（12）

図版 122 遺物写真（15） 土器（13）

図版 123 遺物写真（16） 土器（14）

図版 124 遺物写真（17） 土器（15）

図版 125 遺物写真（18） 土器（16）

図版 126 遺物写真（19） 土器（17）

図版 127 遺物写真（20） 土器（18）・土製品・石製品

図版 128 遺物写真（21） 木製品・鍛冶関連遺物・

金属製品・錢貨



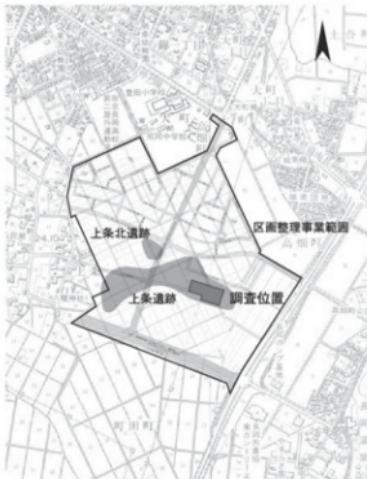
## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

上条町では、上条高畠土地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター建設事業が計画され、長岡市教育委員会（以下、市教委と略称）は、平成24年10月に事業を所管する長岡市都市整備部都市開発課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。事業計画地には周知の遺跡は存在しないが、周辺に周知の遺跡が存在するため、未発見の遺跡が存在する可能性があることから、試掘調査を実施し、遺跡の有無を確認することとした。その結果、遺跡が発見された場合には、事業計画と照らし、取り扱いを協議することで合意した。

試掘調査は、平成25年5月9日付け長教博第62号で新潟県教育委員会教育長に対し調査着手を報告し、5月13日から24日まで調査を実施した（平成25年9月5日付け長教博第220号終了報告）。対象面積は約331,000m<sup>2</sup>で、調査トレーナーを任意に304ヶ所設定し調査を行った。その結果、地表面から20～50cm下で遺物包含層を確認し、土坑や溝といった遺構も発見された。遺物は、平安時代の土師器、須恵器が出土した。これらの結果から平安時代の遺跡を2ヶ所で発見し、それぞれ上条遺跡、上条北遺跡として周知化した（平成25年9月5日付け長教博第219号）。

試掘調査の結果を踏まえ、上条高畠土地区画整理事業組合及び医療法人立川メディカルセンター（以下、事業者と略称）と協議を行った。上条遺跡及び上条北遺跡の範囲は、商業施設エリア及び立川メディカルセンターのエリアにまたがって広がっていた。商業施設エリアについては、詳細な開発計画が出来ていないため、計画が出来上がった段階で協議することとしたが、その一方、立川メディカルセンターのエリアは、病院本体が上条遺跡の範囲内に計画されており、遺跡保護の観点から建設位置の変更等を協議したが、計画変更是困難で遺跡の現状保存がはかれないことから、工事着手前の記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。調査面積は、病院本体が上条遺跡にかかる部分の5,900m<sup>2</sup>である。調査時期は、立川メディカルセンター建設工事が始まる平成26年10月までに調査を終了する必要があったため、雪解けがある程度進んだ平成26年春から9月までの期間で実施することとした。なお、発掘調査から報告書刊行までの費用については、事業者の双方から負担していただくことで合意した。

その後、事業者から市教委経由で新潟県教育委員会教育長に文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出（平成26年3月20日付け）が行われた。それを受けて新潟県教育委員会教育長は、事業者に対し平成26年3月26日付け教文第1563号で工事着手前の本発掘調査の実施を通知した。そして、市教委は平成26年3月26日付け長教博第427号で新潟県教育委員会教育長に本発掘調査着手を報告し、調査を開始した。



第1図 遺跡位置図（1：15,000）

## 第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

### 第1節 遺跡の位置

長岡市は、新潟県のほぼ中央部に位置しており、市町村合併により西は日本海から東は守門岳までの広大な範囲が市域となっている。上条遺跡が所在する長岡地域は、その中央部を日本一の長さを誇る信濃川が縱断し、その両岸に沖積平野が広がっている。さらに、その沖積平野の周縁部に丘陵が延びている。

平野部の西側には東頸城丘陵から派生する西山丘陵が位置している。西山丘陵は、南南西から北北東に延びる丘陵で、東頸城地方では1,000mを越えた標高も長岡市周辺では300m程になり、沖積地に埋没している。丘陵の周縁には信濃川によって形成された数段の河岸段丘があり、これらの河岸段丘は上流の中魚沼郡津南町・十日町市・小千谷市から続く大規模の段丘で、旧石器時代から縄文時代の遺跡が数多く存在する。段丘面は高いところほど形成期が古く、長岡付近では高いところから高寺面・関原面・上富岡面・深沢面に区分されており、関原面・深沢面は沖積地の下に埋没している。東側には魚沼丘陵から延びる東山丘陵が位置している。東山丘陵は、標高700mを越える急峻な地形で、北北東に向かって次第に高度を下げ、そこから信濃川に流れ込む栖吉川や椿桂川などの中小河川によって山裾に扇状地が形成されている。その扇状地に主に縄文時代から古代の遺跡が存在している。

平野部は、信濃川によって形成された全国でも有数の沖積平野である新潟平野の南端部に位置している。これらは信濃川の自然堤防が発達した氾濫原となっており、その自然堤防上に多くの遺跡や、現在の集落が形成されている。上条遺跡もこれらと同じく自然堤防上に形成された集落遺跡である。

### 第2節 周辺の遺跡

東山丘陵沿いには縄文時代から古代の遺跡が数多く分布している。その多くは発掘調査が行われておらず詳細は不明であるが、これまでの発掘調査成果と採集資料から主な遺跡を概観することにしたい。

旧石器時代の遺跡は長岡地域で五荘山遺跡、長峰団地西遺跡、大沢遺跡の3遺跡が確認されているが、すべて西山丘陵の高位及び中位面に位置しており、東山丘陵では発見されていない。縄文時代の東山丘陵で最も古い遺跡は松葉遺跡で少量ではあるが早期後半に位置づけられる土器が出土している。前期の遺跡としては、金倉遺跡、三貫梨遺跡、小塙山遺跡が挙げられる。いずれも、土器が少量確認されているのみで、遺構や集落の状況は不明である。中期になると遺跡の数が急激に増加しピークを迎える。その中には、多くの遺構や遺物が出土する大規模な集落跡が出現し、地域で中心的な性格を持った拠点的集落と考えられている。この拠点的集落としては、山下A遺跡、茨崎遺跡、中道遺跡、西片貝遺跡、松葉遺跡などが挙げられている。中道遺跡は、中期中葉から晩期まで続く大規模集落で、東山丘陵沿いでは唯一集落全体の発掘調査が行われた貴重な事例である。特に中期の集落構造については、詳細な検討がなされており、集落構成要素である廐棄城、居住城、貯蔵城、墓域は、広場を中心として同心円状に区分される重帯構造を持ち、また居住群を分割する分節構造が見られ、環状集落の特徴を備えている。したがって、その形状は広場を中心に同心円状に建物が展開する典型的な環状集落ではないが、扇状地に突き出た舌状台地という地形の制約を受けた、やや変形した環状集落と考えられるものである〔小熊2002〕。後・晩期の遺跡は、中期に比べると減少する。代表的な遺跡としては、中期から晩期にかけて營まれた中道遺跡や大明神遺跡が挙げられる。

弥生時代～古墳時代の遺跡数は、時期不明を除くと弥生前期3、弥生中期7、弥生後期15、古墳時代10ヶ所となっており、弥生前期から徐々に遺跡数を増やし、後期でピークを迎える。古墳時代になると不確明ではあるが前期まではやや減少しながらもいくつか見られるが、中期以降の遺跡は現在のところ1ヶ所しか見つかっていない。

弥生中期までの様相は明らかではないが、中期～後期にかけて営まれた横山遺跡は、集落の周囲を深さ1.5mの環濠が取り囲んでおり、防御機能を持った遺跡である。また、近接する原山遺跡では崖面で溝が確認でき、同じく環濠を持つ集落と見られている。古墳前期の集落遺跡は、五百刈遺跡、藤ヶ森遺跡、横町遺跡、浅田遺跡など弥生末期から続く遺跡で、沖積地に立地する遺跡が多くなる。藤ヶ森遺跡では、方形周溝墓と方形台状墓が発見されている。古墳は、丘陵の頂部に麻生田古墳群(2基)と七ツ塚古墳群(7基)が位置しており、調査されていないが、前期に属すると考えられている。古墳時代前期までに地域を支配する有力者が存在したことを窺わせる。しかし、中期以降の遺跡はほとんど発見されておらず、詳細は不明である。

古代になるとそれまで越国として包括されていた地域が、越前、越中、越後に三分割され、長岡地域は越中国古志郡に属していた。その後、古志郡は大宝2年(702)に頸城、魚沼、蘿原の各郡とともに越後国に編入されることとなった。古志郡の中心は、大領の館と考えられる八幡林遺跡や郡衙と考えられる下ノ西遺跡が存在する和島地域であり、長岡地域はそこから離れた場所に位置している。

信濃川右岸の古代の遺跡は、上条町周辺から見附市にかけての東山丘陵裾部とそれに近い沖積地内に遺跡が多く存在している。奈良時代の遺跡は少なく、平安時代に入ると徐々に増加し、9世紀後半にピークを迎える。奈良時代の様相ははっきりしないが、須恵器窯が4ヶ所存在している。間野窯跡は、8世紀前半に位置づけられ、信濃川左岸の篠山窯跡に次ぐ古さである。間野窯跡からは、佐波理の椀や皿の金属器を模倣した土器が出土しており、官衙に供給されていた可能性がある。岩村窯跡、中野内遺跡、朴ノ木谷遺跡は表採や試掘調査のみで詳細は不明であるが、8世紀後半に位置づけられる。これらの窯跡の製品の供給先は、現在のところ不明であり、今後の検討されるべき課題である。

平安時代の遺跡は、これまで存在は知られていたが詳細は不明であった。しかし、近年発掘調査が行われており、その様相が徐々に明らかとなってきた。富島町では、9世紀に営まれた五百刈遺跡、盲田遺跡がある。特に盲田遺跡では、神功開寶、隆平永寶、金属製の帶金具、漆器などの貴重な遺物が出土しており、9世紀半ばから後半頃の官衙関連施設あるいは有力者が存在した集落と考えられる。また、いずれの遺跡も墨書き土器、漆書き土器を出土し、特に五百刈遺跡で出土した「東人女」はどういった意味を持つのか注目される。悠久山の裾に位置する土用木西遺跡は、10世紀末から11世紀前半の遺跡で、平面積が110m<sup>2</sup>の三面に廟が付く大型の建物とそれに付属する建物が検出され、有力者の居宅と考えられている。このほか、抜間遺跡、大原C遺跡も小規模であるが発掘調査され、9世紀半ばから10世紀初頭に営まれた集落遺跡が存在している。

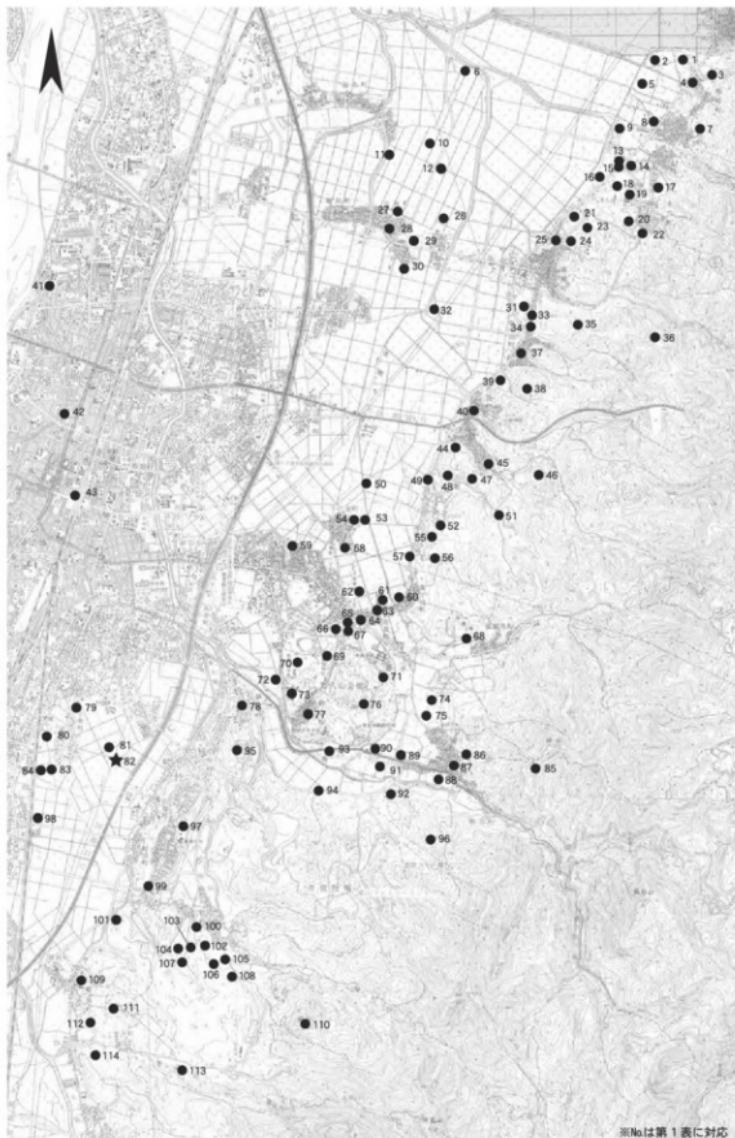
中世において、古志郡は5つの荘園と2つの国衙領の保が展開しており、上条町は大島荘の範囲となっていた。荘園は上条、中条、下条の3つに分かれており、上条町はその上条であったと考えられている。上条町付近に中世の遺跡は上条城跡が存在しているが、現在では土星や堀などの遺構は失われており、その様相は不明である。栖吉町付近で発掘調査が行われており、三貫梨遺跡、松葉遺跡、中道遺跡、ソデクネ遺跡が調査されている。遺跡は14～16世紀に営まれた集落で、三貫梨遺跡、松葉遺跡、中道遺跡では、掘立柱建物や井戸のほか土葬墓や火葬墓などの墓域が検出されており、当時の集落構成を想定することが

できる。三貫梨遺跡は、掘立柱建物と北側を除く三方を区画する溝が確認され、有力者の存在が窺われるが、一方で寺院の可能性も指摘されている。中道遺跡では地下式横穴が多数検出されており、神宗との関連が指摘されている。ソデクネ遺跡は、空堀で囲まれた16世紀前半の屋敷跡が検出された。また、下道遺跡では、14世紀後半頃に埋蔵されたと考えられる備蓄銭が出土している。城館、塚は、地形や伝承などから存在は知られている。栖吉城跡は、古志長尾氏によって築かれた山城である。大型の主廓や、堀切、縦堀、敵形阻障などを持ち、戦国期城郭としての特色を明確に残している。藏王堂城は、信濃川右岸沿いの沖積地に位置し、主郭を囲む土塁と濠の一部が残っている。

No.	種別	名称	時代	No.	種別	名称	時代	No.	種別	名称	時代
1	包含地	藤ヶ森	弥	39	包含地	南谷B	中世	77	包含地	御山大沢	古代
2	集落跡	五斗田	古墳	40	包含地	出清水	繩	78	包含地	西谷	奈~中世
3	包含地	西ノ谷A	古代	41	城館跡	鶴王堂城跡	室・安・江	79	包含地	加内	古代・中世
4	包含地	大石	中世	42	城館跡	大沼城跡	繩	80	包含地	八十刈	古代
5	包含地	横山	弥	43	城館跡	長岡城跡	中世・江	81	包含地	上条北	平
6	包含地	西八町	古代	44	包含地	岩村	弥	82	包含地	上条	平
7	包含地	北邑	弥	45	包含地	安楽寺	古代	83	包含地	上条谷内	古代・中世
8	包含地	早生田	弥	46	城館跡	乙吉城跡	室	84	包含地	山伏	古代・中世
9	包含地	原山	弥~古墳	47	城館跡	乙吉(日)城跡	室	85	城館跡	柄吉城跡	南・室・安
10	包含地	抜間	古代	48	墓跡	岩村墓跡	平	86	城館跡	柄吉支城跡	室~戰
11	包含地	盲田	平・中世	49	包含地	中野内	平	87	包含地	北原	中世
12	包含地	五百刈	弥・古墳	50	包含地	八枚田	古代	88	包含地	下道	中世
13	包含地	浜崎	繩	51	包含地	朴ノ木谷	古代	89	包含地	大明神	繩
14	包含地	大原A	中世	52	墓跡	問野塚跡	平	90	包含地	柄古	繩
15	塚	大原塚	中世	53	包含地	朴本	古代	91	包含地	中道	繩
16	包含地	大原C	平	54	包含地	岩瀬	古代	92	包含地	柄吉岩野	古代・江
17	包含地	村ノ内	古代・中世	55	古墳	七ツ塚古墳群	古墳	93	埴瓶	三貫梨遺跡	繩・中世
18	包含地	大原B	平	56	包含地	東片貝Ⅱ	繩	94	包含地	松葉	繩・奈~室
19	包含地	加津保行塚	弥	57	包含地	東片貝Ⅰ	繩	95	包含地	鉢ガ峰	弥
20	包含地	長者原西B	繩	58	包含地	山谷内	古代	96	城館跡	新田山跡跡	南
21	包含地	阿字原C	繩・古代 ・中世	59	城館跡	中沢城跡	軍	97	包含地	長間高畠	繩・平
22	包含地	長者原東	繩・古墳	60	包含地	花ヶ崎	中世	98	包含地	樋田	古代・中世
23	包含地	阿字原B	平・江	61	包含地	宮ノ前	古代	99	城館跡	町田城跡	繩
24	包含地	阿字原E	中世	62	包含地	西片貝	繩	100	城館跡	袖船跡	中世
25	城館跡	浦瀬船跡	戰	63	包含地	上ノ田	中世	101	包含地	下条山	繩
26	包含地	浅田	弥・古墳	64	包含地	西片貝上ノ山東	古代・中世	102	包含地	山下C	繩
27	包含地	古村	平	65	包含地	戸左衛門	繩・弥	103	包含地	金場	繩
28	城館跡	富島船跡	室~安	66	包含地	戸左衛門西	弥・古墳	104	包含地	青木	繩
29	包含地	櫻町	弥・古墳・平	67	包含地	西片貝上ノ山	古代	105	包含地	山下A	繩
30	包含地	大焚面	古代	68	包含地	百間堤	繩・古代	106	包含地	山下B	繩
31	包含地	石ノ下	古代	69	包含地	善栄神社裏	弥	107	包含地	金倉	繩
32	包含地	長兵	繩・弥・平	70	包含地	土用木	弥・古代	108	包含地	小桙山	繩
33	包含地	地下城	古代	71	包含地	柄吉前山	繩・古代	109	城館跡	黒塚城跡	戰
34	包含地	北谷	古代	72	集落跡	土用木西	平	110	城館跡	袖城跡	室
35	城館跡	地下城跡	戰	73	包含地	聖正寺	弥	111	包含地	靈風	弥
36	包含地	桂貝	繩	74	包含地	村下	繩・中世	112	包含地	天神山	繩
37	包含地	南谷A	古代	75	集落跡	ゾデクネ	室	113	包含地	山入	繩
38	古墳	麻生田古墳群	古墳	76	包含地	御山前山	繩・弥	114	經冢	難塚	繩

網：闕文 弥：弥生 室：奈良 平：平安 繩：縊合 室：室町 戰：戰国 安：安土桃山 江：江戸 ※包含地=遺物包含地

第1表 周辺の遺跡一覧



第2図 道路分布図 (1 : 50,000)

### 第Ⅲ章 調査の概要

#### 第1節 調査体制

平成 25・26 年度

調査主体	長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
事務局	長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋 茂人 平成 26 年 3 月 31 日まで、小熊 博史 平成 26 年 4 月 1 日から）
調査担当	山賀 和也（長岡市教育委員会科学博物館 主任）
調査員	笹澤 正史（株式会社 大石組）、瀧口 泰孝（同）、竹部 佑介（同）、南波 守（同）
調査補助員	遠藤 昌代（株式会社 大石組）、櫻井 美由貴（同）、田辺 美子（同）、中村 美智子（同）
現場代理人	笹川 順司（株式会社 大石組）

平成 27 年度

調査主体	長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
事務局	長岡市教育委員会科学博物館（館長 小熊 博史）
調査担当	山賀 和也（長岡市教育委員会科学博物館 主任）
調査員	竹部 佑介（株式会社 大石組）
調査補助員	榎本 好美（株式会社 大石組）

#### 第2節 調査の経過

平成 25 年 3 月 26 日調査区の南東から西に向かって重機による表土掘削を開始した。調査区南側が湿地（SX 1）であることが判明し、重機で底面付近まで掘削を行った。包含層は良好に残っており、古代の遺物が多量に出土した。4 月 28 日、大甕が出土した SK42 を検出する。5 月 28 日、木棺墓の SK205 で、布掘り状の痕跡を検出し、木棺が打ち込み式であることが判明した。6 月 4 日、調査区の南側を中心に測量のための 1 回目の写真撮影を行った。6 月 16 日、四面廻建物の SB317 を検出した。柱穴の半裁を行い、複数の柱穴から柱根が出土した。7 月 2 日、調査区の西側を中心に 2 回目の測量用写真を撮影した。7 月 11 日に長岡市立旭岡中学校の 1 年生が遺跡を見学した。8 月 6 日、3 回目の測量用写真及び全体の俯瞰写真を撮影した。その後、追加の調査を行い、新たな溝や SI664などを発見し、記録した。8 月 23 日に一般向けの現地説明会を開催し、約 200 名の方が来場した。9 月 2 日、長岡市立豊田小学校の 6 年生が遺跡見学を行った。9 月 3 日、全ての作業を終了し調査を終了した。その後は、土壤洗浄、土器洗浄、注記、図面整理を行い、平成 25・26 年度の作業を終了した。

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
調査準備	■						
表土掘削		■		■			
包含層掘削			■		■		
遺構精査					■	■	
現場撤収						■	■

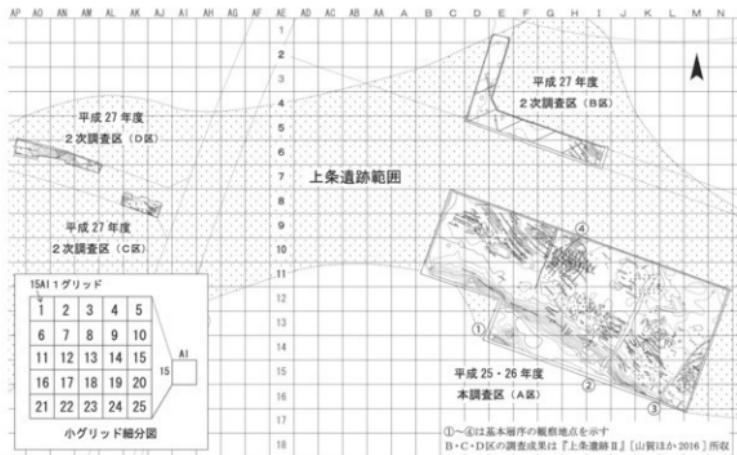
第 2 表 作業工程表

### 第3節 グリッドの設定

本調査を行うにあたり、調査区周辺の基準点を参考にして国家座標値によるグリッドの設定を行った。当該調査区（以下A区）外側、北西に原点1 A（X = 158070, Y = 31610）を定め、10 m方眼による大グリッドを設定した。原点となる1 Aの杭より南東側に該当する大グリッドが存在する。大グリッドの名称は原点と同様にアルファベットと算用数字を用いることとし、1 Aグリッドから南に向かって1, 2, 3, 4, 5, 6……、東に向かってアルファベットを順にA, B, C, D, E, F……と割り当てた。グリッドの呼称は算用数字を頭に配し、1 A, 2 A, 3 A……と呼称する。また、平成25年に行われた試掘の結果から、本遺跡はA区の北西および西側に広がりを持つことが判明している。そのため、今後の調査の利便性を考慮して、東西方向を示すアルファベットを2文字に拡張し、原点より西側へAA, AB, AC……となる名称が与えられている。この他、各々の大グリッド内において25個の2m方眼を設定し、北東より順に1～25までの小グリッド名称を与えた。よって、本遺跡における特定の地点について言及する際には、15AI 1のように大グリッドと小グリッドを合わせた名称で表す。

### 第4節 基本層序

平成25年に行われた試掘調査の結果、上位より順に、I：耕作土・盛土、II：灰色～灰褐色土、III：暗灰色～茶褐色粘土、IV：暗褐色～灰褐色粘土（遺物包含層）、V：漸移層（遺物包含層）、VI：灰黄色シルト・青灰色粘土（地山）の計6層を検出しており、地点により高低差はあるが、おおむね一様の堆積を示すことが判明している [長岡市教委2014]。だが、表土除去を実施した際にA区南西側に谷地形SX 1が広がっていることが判明し、当初想定されていたよりも旧地形は起伏に富む可能性が考えられた。このため、調査区内におけるSX 1の最深部①・②地点において土層の堆積状況を確認し、新たに層位を整理することで、本調査における基本層序とした（第3・4図）。なおSX 1内には、微高地上の遺物包含層であった試掘調査時のIV層に類似した黒色土層が、間層を挟みつつ計3層に渡り堆積している状況が観察された。遺物は



第3図 グリッドの設定及び基本層序の観察地点（1 : 2,000）

最も下位の黒色土層（基本層序VII層）にほぼ限られることから、同層を微高地上の遺物包含層相当層と位置付けた。このため、観察地点によっては微高地上とSX 1内において堆積状況が異なるため、Ⅲ～VI層間の相違が認められる場合もある。

以下、検出した基本層序を上位より記載する。ただし、土層の観察内容は観察者や観察地点等の条件により統一的な表記となり難く、同様の堆積状況であっても記載内容に異同が生ずる可能性がある。本調査及び平成27年に実施された2次調査において、表記が統一されていない場合があることを留意されたい。

I層 にぶい黄橙色粘土 粘性・しまり強 管状斑紋を多量に含む。現代の耕作土または盛土に相当する。

II層 灰黃褐色～褐灰色粘土 粘性・しまり強 管状斑紋を多量に含む。近・現代の耕作土であり、他の層位に比べて比較的厚く堆積している。そのため、同一層位内において色調が漸移的に変化する状況が認められた。細分化も可能であったが、遺構や遺物との関係性に乏しかったため、一括しておく。微高地上においては、下面が遺物包含層であるVII層と接続しているためか、古代以降の遺物が少量混ざる。

III層 黒色粘土 粘性・しまり強 微細な炭化物が多量に混ざる。SX 1内でのみ検出された層位である。

III b層 黒色粘土 粘性・しまりやや強 青灰色粘土ブロックが混ざる不連続層で、未分解植物が多量に混ざる。SX 1内でのみ検出された。

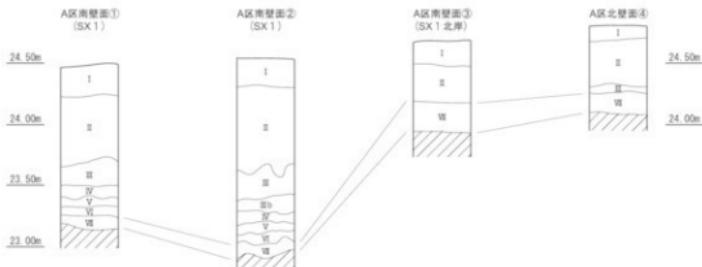
IV層 明青灰色粘土 粘性・しまり強 SX 1内でのみ検出された層位である。

V層 黒色粘土 粘性・しまり強 未分解植物が少量混ざる。SX 1内でのみ検出された。

VI層 明青灰色粘土 粘性・しまり強 V層同様、未分解植物が少量混ざる。SX 1内でのみ検出された。

VII層 黒～暗灰色粘土 粘性・しまり強 微高地上およびSX 1内で検出された。古代を主体とする遺物が出土している遺物包含層である。前述の通り、試掘調査時のIV層に相当し、遺構覆土に同層相当層が堆積していることが多い。VII層との境界に灰色を呈する漸移層が識別可能であった地点もある。検出遺構の中でも比較的古相段階に帰属するものは、この漸移層を覆土としている場合がある。

VIII層（地山） 明青灰～明褐色シルト 粘性弱 しまり強 砂質傾向が強く、地点によっては砂層と相違なくしまりの弱い場所も認められた。本遺跡における遺構検出面である。壁面の観察から、古代の遺構はVII層中より掘り込まれていたと考えられるが、遺構プランを識別できたのはVII層上面であった。



第4図 土層柱状図 (1 : 40)

## 第IV章 遺構

### 第1節 遺構の概要

本調査では掘立柱建物 14 棟、竪穴建物 14 棟の他、土器埋納遺構・土器溜まり・埋葬関連遺構・土坑・井戸・溝・畝状小溝群・柵列・ピットなどを検出した。遺構の多くは調査区のほぼ中央を北西—南東方向に延びる馬の背状の微高地上に展開している。調査区の南西部は谷地形 SX 1 が広がっており、低地における遺構密度は希薄である。このため、北側低地で検出された SB317 や SK260・SK280 等、南側低地の SX 1 斜面で検出された SE677 は例外的といえる。また、微高地を分断するように溝 SD 3・7・480・481 が伸びており、集落を区画する目的で掘削された溝であると考えられる。出土遺物から、集落は 9 世紀後半に竪穴建物を中心とした居住域が形成され、10 世紀第 2 四半期頃には廃絶したと考えられる。

### 第2節 遺構の分類と記述

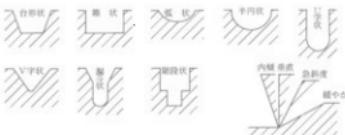
遺構名称にはアルファベットによる略号を用い、遺構種別に、掘立柱建物 (SB)、竪穴建物 (SD)、埋葬関連遺構・土坑 (SK)、井戸 (SE)、溝 (SD)、柵列 (SA)、ピット (P)、性格不明・自然地形 (SX) とした。また、土器埋納遺構・土器溜まりに関しては基本的に SK を用いたが、調査時に用いた P または SX を付したまま記述した遺構もある。この他、畝状小溝群は基本的に SD としたが、溝群 6 に関しては調査時に用いた SX 4 として記述した箇所がある。性格不明遺構および自然地形と考えられるものは SX とし、SX 1 や風倒木痕も含めて記述した。遺構の平面形や断面形の分類及び覆土の堆積状況の分類に関しては、『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 93 集 和泉 A 遺跡』[荒川・加藤 1999]、『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 133 集 青田遺跡』[荒川ほか 2004] を参考とした(第5図)。

平面形態の分類



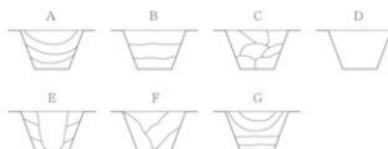
円形	長径が短軸の 1.2 倍未満のもの。
椭円形	長径が短軸の 1.2 倍以上のもの。
方形	長軸が短軸の 1.2 倍以上のもの。
長方形	長軸が短軸の 1.2 倍以上のもの。
不整形	凸凹で一円の平面形を持たないもの。

断面形態の分類



台形状	底部に平坦面を持ち、緩やか～急斜面に立ち上がるものの。
縦状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるものの。
横状	底部に平坦面を持たない状態で、緩やかに立ち上がるものの。
扇円状	底部に平坦面を持たない状態で、急斜面に立ち上がるものの。
半円状	底部に平坦面を持たない状態で、急斜面に立ち上がるものの。
U字状	確認面の長径よりも深さの幅が大きくて、ほぼ垂直状に立ち上がるものの。
V字状	点的な底部を持ち、急斜面に立ちあがるもの。
漏斗状	下部が U 字状、上部が V 字状の一段構造からなるもの。
閉限状	断面状の立ち上がりをもつものの。

遺構覆土の堆積状況の分類



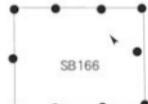
A レンズ状	複数層がレンズ状に堆積するもの。
B 水平	複数層が水平に堆積するもの。
C ブロック状	ブロック状に堆積するもの。
D 単層	幾層が單一層のもの。
E 杜版	柱の痕跡を示す土層が認められるもの。
F 斜位	斜めに堆積するもの。
G 水平・レンズ	幾層下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。

第5図 遺構の形状・覆土の堆積状況の分類 (荒川・加藤 1999・荒川ほか 2004 を転載・一部改変)

## 第3節 各説

## 掘立柱建物

**SB166** (国版10) 14K・15J・15K グリッドに位置する。調査区の南東側で、SX 1 の北肩付近にある。南東隅で SB167 と重複するが直接の切り合はないが前後関係は不明である。また、建物南東辺の中央付近では SK76 および P143 が建物プランと重複する位置に検出されている。2×3間で平面長方形の側柱建物である。桁行 6.7 m、梁間 5.2 m、床面積は 34.8m<sup>2</sup>を測る。長軸は N - 52° - W を向き、おおむね SB167・SB535 と主軸方位が一致する。柱穴は平面形が円形を基調とし、長軸が 0.35 m ~ 0.6 m を測る。断面形は U字状及び柱痕部が一段下がった階段状を呈する。深さは 0.21 m ~ 0.4 m を測る。P10 を除く 9 基の柱穴で柱痕状の覆土の堆積が認められた。覆土は黄灰色及び褐灰色を基調とし、地山の色調と類似している。柱間距離は、桁行方向では P 2・P 3 間及び P 7・P 8 間が最も長く 2.4 m ~ 2.5 m、その他は 2.1 m 前後を測る。梁間方向では 2.6 m 前後で一定する。遺物は柱穴より土師器の食膳具・煮沸貝、須恵器食膳具が少量出土した。時期は、出土遺物から 9 世紀後半から末頃と考えられる。



**SB167** (国版11) 15・16K グリッドに位置する。調査区の南東側で、SX 1 の北肩付近にある。北西隅で SB166 と重複するが直接の切り合はないが前後関係は不明である。2×2間で平面長方形を呈する側柱建物である。両梁間の中央の柱が建物外側へとわずかに突出し、独立棟柱建物の形式に類似する。桁行 5.1 m、梁間 3.8 m、床面積は 19.4m<sup>2</sup>を測る。主軸方位は N - 50° - W を向き、概ね SB166 及び SB535 と一致する。柱穴は平面形が円形を基調とし、長軸は 0.3 m ~ 0.66 m を測る。断面形は台形・箱形・弧状・U字状と一定しない。深さは 0.13 m ~ 0.28 m を測る。P 1 を除く 7 基の柱穴で柱痕状の堆積が認められた。覆土は黄灰色及び褐灰色を基調とし、地山の色調と類似する。柱間距離は、桁行方向では P 6・P 7 間が最も長く 2.7 m を測り、その他はおよそ 2.5 m 前後である。梁間方向は 1.9 m 前後で一定する。遺物は柱穴より土師器の食膳具及び須恵器食膳具が少量出土した。時期は、出土遺物から 9 世紀後半から末頃と考えられる。



**SB316** (国版12) 11・12F グリッドに位置する。調査区の西側で、SX 1 の北肩付近にある。他の遺構との切り合はないが認められなかった。2×3間で平面長方形を呈する側柱建物である。梁間中央の柱穴は建物内側に寄っている。桁行 7.5 m、梁間 4.62 m、床面積は 34.7m<sup>2</sup>を測る。主軸方位は N - 58° - W を向き、SX 1 の岸際に沿うように建てられている。また、SB608 と概ね一致する。柱穴は円形を基調とし、長軸は 0.29 m ~ 0.42 m を測る。断面形は半円または U字状・階段状を呈する。深さは 0.16 m ~ 0.42 m を測る。P 2・3・5 では柱痕状の堆積が認められた。覆土は灰色及び褐灰色を基調とし、検出された遺構の中では色調が比較的暗い。柱間距離は、桁行方向で 2.4 m ~ 2.6 m を測る。梁間方向は概ね 2.3 m 前後である。遺物は柱穴より土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。時期は、出土遺物及び覆土の色調から 9 世紀末から 10 世紀前半頃と考えられる。



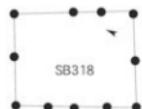
**SB317** (国版13～16) 11J・K・L 及び 12J・K・L グリッドに位置する。北東・南西方向に延びる SD 7 と重複しており、SD 7 を切る。また、P20 は SK378 を切り、P26 が SK280 及び SK359 と重複する。P28 は SD611 を切る。身舎 2×4 間で、四方に扉が付く四面廻建物である。北西および南西隅は廻柱穴を欠く。身舎の桁行は 7.6



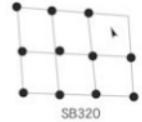
m、梁間 4.4 m を測る。廂を含めた規模は桁行 11.35 m、梁間 7.6 m を測る。床面積は 33.4m<sup>2</sup> であり、廂を含めると最大 73.7m<sup>2</sup> となる。主軸方位は N - 89° - W を向いており、方角が意識されている可能性が高い。身舎は東の梁間柱穴が内側に寄る。また、廂柱穴は P25・29 を除き概ね身舎と対応する。柱穴は平面形が円形ないしは隅丸方形を呈し、身舎柱穴で長軸 0.53 m ~ 0.94 m を測り、廂柱穴で 0.47 ~ 0.89 m を測る。断面形は U 字状及び階段状を基調とする。深さは身舎柱穴で 0.34 m ~ 0.57 m、廂柱穴で 0.14 m ~ 0.6 m を測る。P28 を除き柱痕状の堆積を確認、身舎柱穴で径 0.1 m ~ 0.21 m、廂柱穴で 0.12 m ~ 0.19 m を測る。P 1・2・4・6・8・9・11・13・14・15・19・20・21・22・23・24 の 16 基の柱穴で柱根が出土した。覆土は黒褐色及び黄褐色を基調とし、検出された遺構の中で色調が最も暗い一群に含まれる。柱間距離は、身舎桁行で 1.7 m ~ 2.2 m、梁間は 2.1 m ~ 2.3 m を測る。廂柱穴は 1.4 m ~ 2.9 m で一定しない。また、身舎柱穴列と廂柱穴列の距離は、南北辺が 1.4 m ~ 1.7 m で東西辺が 1.6 m ~ 2.6 m である。遺物は柱根の他、柱穴より土師器の食膳具・煮炊具及び須恵器食膳具が少量出土した。時期は遺物より 9 世紀末から 10 世紀初頭を上限とし、周囲の土器埋納遺構 SK280 及び P306 出土遺物との比較から 10 世紀第 2 四半期より下らないと考えられる。

**SB318** (図版 17-18) 12・13K 及び 13L グリッドに位置する。SD267・SI268 を切る。

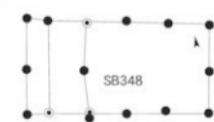
周囲は広範囲に渡り後世の搅乱を受けている。2 × 4 間で長方形を呈する側柱建物である。P 7・P 8 間は擾乱により柱穴が失われている。桁行 6.16 m、梁間 4.92 m、床面積は 30.3m<sup>2</sup> を測る。主軸方位は N - 24° - W を向く。柱穴は平面形が円形ないしは梢円形を基調とし、長軸 0.52 m ~ 0.66 m を測る。断面形は U 字状・箱形・台形を呈し、深さは 0.22 m ~ 0.5 m を測る。P 1・P 5 及び P 9 では柱痕状の堆積が認められた。覆土は褐灰色を基調とする。柱間距離は、桁行方向では 1.3 m ~ 1.6 m、梁間方向では 2.2 m ~ 2.6 m を測る。遺物は柱穴より土師器の食膳具・煮炊具、P 8 出土の墨書き土器など、須恵器の食膳具が少量出土した。時期は遺物より 9 世紀後半から末頃と考えられる。



**SB320** (図版 18・19) 8・9 D グリッドに位置する。P 5・8・9 は溝群 1 の SD332・SD326 を切る。P10・11 は SI664 を切る。2 × 3 間の総柱建物で、桁行方向の柱間が一致せず、平面形が平行四辺形を呈する。主軸方位は N - 62° - W を向く。桁行 5.7 m、梁間 4.34 m、床面積は 24.7m<sup>2</sup> を測る。柱穴は平面形が円形を基調とし、長軸 0.36 m ~ 0.63 m を測る。断面形は階段状または U 字状を基調とし、深さは 0.07 m ~ 0.43 m を測る。東柱は P 5・8 共に深さが 0.1 m 前後であり、側柱に比べて浅く掘り込まれている。P 1・2・3・4・6・7・9・10・11 では柱痕状の堆積が認められた。P10 は柱痕が北西寄りに傾斜している。覆土は灰色を基調とし、検出遺構の中では比較的色調が暗い。柱間距離は、桁行方向では 1.8 m ~ 1.95 m、梁間方向では 2 m ~ 2.3 m を測る。遺物は柱穴より土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器及び須恵器の食膳具が少量出土した。時期は 9 世紀末を上限とし、10 世紀第 2 四半期より下らないと考えられる。



**SB348** (図版 20・21) 9・10D、9・10E グリッドに位置する。北西隅では P13・15 が SI664 を切り、東辺は P12 が SK368 を切る。南辺では P 2・3 が SD347 を切っている他、溝群 2 と一部重複、P 7 および P 9 がこれを切る。梁間 2 間、桁行方向に 5 間の柱穴列が巡る側柱建物だが、西辺の P12・14・15 は桁行方向の柱間距離が他の柱穴列に比べて短く、廂ないしは目隠し扉等の可能性がある。また、東辺で検出された P10 に対応する棟持柱穴は P 5 および P12 であり、P 5 を西辺側柱とした身舎



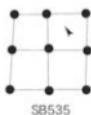
2×3間の平面プランであった可能性も考えられる。また、P 4では、ほぼ同規模の柱穴2基による切り合いが認められるため、同一地点における建て替えが行われた可能性も看過できない。ここでは便宜的に西辺をP11・13とした2×4間の身舎にP12・14・15の柱穴列が付属する平面プランを想定し、記述を行う。身舎の桁行は8.22m、梁間4.72m、床面積38.8m<sup>2</sup>を測る。P12を初めとする西辺を含めた最大規模では桁行9.32m、床面積44m<sup>2</sup>となる。主軸方位はN-80°-Wを向く。柱穴は平面形が円形を基調とし、P3・11では方形が志向されている。長軸は0.32m～0.66mを測る。断面形はU字状・階段状・方形を呈し、深さは0.3m～0.81mを測る。覆土が柱痕状を呈する柱穴が多く、P 4Aは柱痕が西側に傾斜している。P 4・6・11の3基から柱根が出土した。覆土は黒褐色から褐灰色を基調とし、検出遺構の中では比較的の色調が暗い。柱間距離は、身舎の桁行方向では1.89m～2.18m、P11・P14間は1.16m、P13・P15間は1.08mを測る。梁間方向では2.13m～2.72mを測り、P 5がやや南側に寄る。遺物は柱根の他、柱穴より土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器の食膳具、須恵器の食膳具・貯蔵具が出土した。また、P 3の覆土上面付近から羽口が1点出土している。時期は9世紀末頃を上限として、10世紀第2四半期より下らないと考えられる。

**SB504** (図版21) 9・10H及び10Gグリッドに位置する。溝群3に隣接し、他の遺構とは切り合い関係を持たない。1×1間の平面形が方形を呈する柱穴列であり、住居でない簡易的な施設と推測される。規模は東西1.4m～1.6m、南北1.4mを測り、やや南辺が長い。



床面積は2.2m<sup>2</sup>を測る。主軸方位はN-20°-Eを向く。柱穴は平面形が円形で、断面形はU字状ないしは階段状を呈する。柱穴の径は0.23m～0.28m、深さは0.18m～0.21mを測る。P471・472ではそれぞれ径0.12m・0.16mの柱痕状の堆積が認められた。覆土は黒褐色を基調とし、検出遺構の中では比較的の色調が暗い。遺物は出土しなかった。時期は覆土及び掘方が小さなことから、10世紀以降と考えられる。

**SB535** (図版22) 15・16Lグリッドに位置する。調査区南東部において、SD 3と重複



するが、前後関係は判然としない。2×2間の純柱建物であり、平面形は方形を呈する。

規模は北東・南西方向で3.9m、北西・南東方向で3.6m～4m、床面積は13.65m<sup>2</sup>を測る。

主軸方位はN-35°-Eを向く。柱穴は平面形が円形ないしは梢円形を基調とし、径は

0.22m～0.36mを測る。断面形は弧状・U字状・階段状が認められ、深さは0.16m～0.5mを測る。P 3からP 8では柱痕状の堆積が認められた。覆土は黒褐色を基調とする。柱間距離は1.6m～2.1mを測る。遺物はP 9より須恵器食膳具及び土師器の食膳具・煮炊具が微量出土した。時期は遺物及び覆土から9世紀末頃を上限として10世紀第2四半期より下らないと考えられる。

**SB550** (図版23) 11・12Gおよび12Hグリッドに位置する。調査区のほぼ中央において、SB574・608に隣接し、SX 1の北肩付近にあたる。P 4はSD295を切る。2



×3間の側柱建物である。桁行は4.9m、梁間3.85m、床面積は18.9m<sup>2</sup>を測る。主軸方位はN-40°-Wを向き、SB574と類似する。柱穴は円形を基調とし、径は0.22

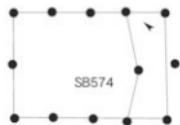
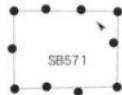
m～0.41mを測る。断面形はU字状・階段状を呈し、深さは0.16m～0.32mを測る。P 1・3・5・6・8・9・10において柱痕状の堆積が認められた。覆土は黒褐色から灰色を基調とする。柱間距離は桁行方向でP 1・2間が最短となる1.46m、P 6・7間が最長となる1.83mを測る。梁間方向はP 5・6間の1.7mが最短、P 4・5間の2.1mが最長となる。遺物はP 4より土師器食膳具が微量出土した。時期は掘方が小さいことから、9世紀末頃を上限として10世紀第2四半期より下らないと考えられる。

**SB571** (図版 24) 12H・I グリッドに位置する。調査区の中央付近で SB574・609 と重複しており、P 1・2・3 は SB574 の柱穴を切る。2×3間の平面長方形を呈する側柱建物である。桁行は 5.35 m、梁間は 3.93 m、床面積は 21m<sup>2</sup>を測る。主軸方位は N= 48°-W を向く。柱穴は円形を基調とし、径は 0.33 m~0.63 mを測る。

断面形はU字状・階段状を呈し、深さは 0.33 m~0.54 mを測る。P 1・3・4・8・9 では柱痕状の堆積が認められた。また、P 2 の覆土中からは拳大の礫が出土した。柱抜き取り時に投棄されたものと考えられる。覆土は褐色から暗灰色を呈し、検出構造の中では比較的色調が暗い。柱間距離は桁行方向で 1.6 m~1.96 mを測る。梁間方向は南東辺の P10 が北側に寄つており不均等で、1.6 m~2.3 mを測る。北西辺はおおよそ 2 m前後で一定する。遺物は柱穴より須恵器食膳具、土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器の食膳具が少量出土した。切り合ひ関係より、本遺構は SB574・609 に後続し集落内で新相段階に帰属する建物であると考えられる。建物プラン内では SK573 及び SK594 を検出、SK573 は SB609 を切っている。両土坑とも出土遺物より 10世紀第2四半期頃と考えられ、本遺構も同様の年代に帰属する可能性がある。

**SB574** (図版 25) 12H-I 及び 13H グリッドに位置する。SB571 に切られ、南東隅は SB609 と重複する。2×4間の平面長方形を呈する側柱建物である。北西及び南東辺中央の P 5・12 は建物プランの外側に寄つている。また、建物プラン内の東柱 P10 は当初 P 5 に対応する棟持柱の可能性が考えられた。やや南西側に寄つていて、桁行は 7.8 m、梁間 5.45 m、床面積 42.5m<sup>2</sup>を測る。主軸方位は N= 40°-W を測り、隣接する SB550 と主軸方位が一致する。柱穴は平面形が隅丸方形ないしは円形を呈し、長軸 0.49 m~0.86 mを測る。柱穴掘方は SB317 に次いで大きい。断面形は台形・半円・弧状と一定ではない。深さは 0.24 m~0.48 mを測る。P 1・2・9・10 では柱痕状の堆積が認められた。柱径は 0.13 m~0.25 mを測る。覆土は黄褐色から灰色を基調とする。柱間距離は桁行方向で 1.7 m~2.05 mを測り、梁間方向は P 4・5 間で 2.8 m、P 5・6 間で 2.6 mを測る。遺物は柱穴より須恵器の食膳具・貯蔵具、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。P 2 からは漆書須恵器無台壇が 1点出土している。時期は覆土の色調が地山に近いこと、掘方が大きいことから集落内の古相段階に位置づけられると想定される。出土遺物から 9世紀後半から末頃と考えられる。

**SB608** (図版 26~28) 10・11G 及び 11H グリッド、調査区中央付近に位置する。溝群 3 と重複し、P 7・18・19 が SD478 を切り、P 8・P20・P21 が SD487 を切る。P22 は SD475 及び SK512 を切り、埋没後に土器溜まり SK493 が形成される。P23 は SD438 に切られ、P28 は SD522 を切る。本遺構は、身舎 2×3間で四方に廂を持つ四面廂建物である。廂柱穴列は身舎の側柱列とほぼ対応しているが、北西及び南東辺の中央は身舎の棟持柱に対応する廂柱穴を持たない。また、南東隅の P12 は身舎側の P 2 より南西側に寄る。四隅の廂柱穴は検出されなかった。北東及び南西辺の廂列、北西隅の P30・31、北東隅の P26・27 は近接した距離に柱穴が 2 基ずつ検出されており、廂の改修が行われた可能性が考えられる。規模は、身舎の桁行が 6.55 m、梁間 5.08 m、床面積 33.3m<sup>2</sup>を測り、廂を含むと桁行 10.3 m、梁間 7.2 m、総面積 66.8m<sup>2</sup>となる。主軸方位は N= 58°-W を測り、SB316 と一致する。柱穴は平面形が円形ないしは梢円形を基調とし、径 0.26 m~0.64 mを測る。断面形はU字状・階段状・方形を呈し、深さは 0.2 m~0.59 mを測る。身舎と廂列では柱穴規模に明確な差異は認められない。P 3・4・5・6・7・8・10・12・



13・18・19・20・21・22・23・25・26・27・28・31では柱痕状の堆積が認められた。また、P 5から柱根が出土した。覆土は黒褐色から褐灰色を基調とし、検出遺構の中で比較的色調が暗い。身舎の柱間距離は桁行方向でP 1・2間の1.6mが最短で、P 9・10間の2.6mが最長となる。梁間方向は2.28m～2.6mを測る。廐列の柱間距離は桁行方向で1.96m～2.28mを測る。また、身舎柱穴列と廐柱穴列の距離は、梁側にあたる北西・南東辺で1.6m～2.12m、桁側にあたる北東・南西辺で1.16m～1.3mを測る。遺物は柱根の他、須恵器の食膳具・土師器の食膳具・煮炊具・黒色土器の食膳具が少量出土した。P22からは、SK512より混入したと考えられる骨片が少量出土している。時期は覆土及び切り合い関係から、9世紀末から10世紀初頭頃を中心とした年代が考えられる。

**SB609** (図版 29) 12H・I、13H・I グリッドに位置する。調査区中央付近において、SB571・574と重複する。SD8を切り、SK573・594に切られる。身舎2×2間で北東辺に廐が付く建物である。身舎北西辺の側柱は検出できなかった。桁行5.3m、梁間3.9m、身舎床面積は20.7m<sup>2</sup>を測る。廐を含むと梁間5.1mとなり、床面積は最大で27m<sup>2</sup>を測る。主軸方位はN-46°-Wを測り、SB550と類似する。柱穴平面形は円形を基調とし、径は0.3m～0.53mを測る。断面形は台形・U字状または階段状を呈し、深さは0.21m～0.43mを測る。P 2・5・9・10では柱痕状の堆積が認められた。覆土は褐灰色から黒褐色を基調とし、検出遺構の中で比較的色調が暗い。柱間距離は桁行方向で2.48m～2.8mを測る。梁間方向は、P 8が身舎の中心軸から外れた位置にあるため、1.68m～2.14mで一定しない。また、P 8に対応する北西辺中央の柱穴は検出できなかった。北西辺の廐柱穴列と身舎柱穴列の距離は、0.9m～1.2mである。遺物は須恵器甕・壺の細片及び土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。時期は、切り合い関係から9世紀末から10世紀初頭頃を中心とした年代が考えられる。



### 竪穴建物

**SI 5** (図版 30) 13・14I グリッドに位置する。P47・58に切られる。平面形はやや不整な隅丸長方形で、断面は孤状を呈する。主軸方位はN-30°-Eを向く。長軸2.8m、短軸2.25m、深さは0.32mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、黄褐色から褐灰色を基調とする。北東辺には平面形が半円形、深さ0.05m程度の浅い落ち込みが検出されており、本遺構に伴う施設であると考えられる。柱穴は検出できなかった。遺物は須恵器の食膳具・甕、土師器の食膳具・煮炊具・黒色土器の食膳具・管状土錐及び鉄滓が出土した。時期は、出土遺物から9世紀末から10世紀初頭頃を中心とした年代が考えられる。

**SI10** (図版 30) 14K・L グリッドに位置する。SK114・SK148・P150に切られるほか、溝群5のSD115と重複する。平面形はやや不整な隅丸方形で、北東及び南東側に突出する。断面形は台形状を呈する。主軸方位はN-21°-Eを向く。長軸2.75m、短軸は2.37m、深さは0.19mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、褐灰色を基調とする。柱穴は検出できなかった。北東辺の突出部は、覆土下部に炭化物粒及び焼土ブロックが混ざり、カマドであると考えられる。重複関係にあるSK148からも焼土ブロックを検出しており、カマド構築材が周囲に分散した状況が認められる。遺物は須恵器食膳具・甕、土師器の食膳具・煮炊具・黒色土器が出土した。時期は9世紀後半から末頃と考えられる。

**SI46** (図版 31) 13J グリッドに位置する。SD 7に隣接し、溝群4に切られる。平面形はやや不整な隅丸長方形で、断面形は箱形から台形状を呈する。主軸方位はN-65°-Eを向く。長軸2.96m、短軸2.36m、深さは0.22mを測る。覆土はレンズ状に堆積、灰黄色を基調とする。柱穴は検出できなかった。遺物は須

恵器の食膳具、土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器の食膳具、灰釉陶器壺の細片が出土した。時期は覆土の堆積状況から、9世紀後半から末頃と考えられる。

**SI49** (図版31) 13K グリッドに位置する。溝群5に隣接し、SD50に切られる。平面形は方形で、北東隅付近に煙道と考えられる突出部を検出した。断面形は弧状を呈する。主軸方位はN-49°-Wを向く。長軸1.93m、短軸1.77m、深さ0.1mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、褐灰色を基調とする。柱穴は5基検出した。P1からP4までは方形に並ぶ。平面は円形で、断面は半円形及びU字状を呈する。径0.24m~0.32m、深さは0.16m~0.25mを測る。P2では柱痕の堆積が認められた。煙道は長軸0.49m、短軸0.4m、深さ0.16mを測る。覆土には焼土ブロックが混ざる。遺物は須恵器の食膳具、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。時期は9世紀後半から末頃と考えられる。

**SI54** (図版32) 14K グリッドに位置する。SK6・SK48・溝群5のSD111に切られる。平面形は方形で、南東辺の中央付近が突出する。断面形は弧状ないしは台形状を呈する。主軸方位はN-49°-Wを向き、SI70・268、SB166と類似する。長軸3.01m、短軸2.64m、深さは0.25mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、褐灰色及び黄灰色を基調とする。色調は地山に近く、検出遺構の中では比較的明るい。南東辺の突出部は一段浅いテラス状で、人頭大の甕が出土した。カマドであった可能性が考えられる。また、床面北側には炭化物粒の広がりを検出した。微量の焼土ブロックを含む。炭化物粒を取り除いた後、床面において4基のピットないしは土坑を検出した。SK602は平面梢円形、断面は半円形を呈する。長軸0.72m、短軸0.58m、深さ0.24mを測る。覆土はレンズ状に堆積する。P602からP605は平面円形、断面は弧状からU字状を呈する。長軸0.37m~0.58m、深さはP603及び605が0.11m、P604が0.52mを測る。床面検出遺構の中から、掘方規模の比較的大きなSK602及びP604は、主柱穴として用いられていた可能性が高いと考えられる。遺物はP604内から土師器煮炊具の細片が1点出土したほか、SI54 覆土中から墨書き土器細片を含む須恵器食膳具、土師器食膳具及び煮炊具が少量出土した。時期は9世紀中葉から後半頃と考えられる。

**SI70** (図版32) 15K・L グリッドに位置する。SB166・167・535・溝群5と隣接している。切り合い関係はない。平面は不整な隅丸方形で、北東隅は溝状に突出する。断面は不整な弧状を呈する。主軸方位はN-38°-Eを向く。長軸2.32m、短軸2.08m、深さ0.12mを測る。覆土はレンズ状に堆積、黄灰色シルトを基調とする。覆土2層は地山ブロックが多量に混ざり、貼床されていた可能性が考えられる。主柱穴は検出できなかった。遺物は須恵器の食膳具・煮炊具、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。時期は、出土遺物から9世紀末を上限とし、10世紀第2四半期より下らないと考えられる。

**SI130** (図版33) 14M グリッド、調査区の東端部に位置し、一部は調査区外に延びる。SD131を切る。平面は方形で、断面は弧状を呈する。主軸方位はN-14°-Eを向く。長軸2.44m、短軸1.5m以上となり、深さは0.1mを測る。覆土はレンズ状堆積で、褐灰色を基調とする。主柱穴は検出できなかった。遺物は須恵器食膳具、土師器食膳具・煮炊具が少量出土した。覆土中より完形の土師器小皿が出土しており、本遺構の帰属年代は11世紀後半から12世紀初頭頃に下る可能性がある。

**SI207** (図版33) 13J グリッドに位置する。南西側にSI46が隣接し、溝群4に切られている。東辺はSD7に切られる。試掘調査169Tは本遺構とSD7の重複地点に該当する。平面は隅丸方形、断面は台形状を呈する。主軸方位はN-72°-Eを向く。長軸3.03m、短軸2.55m、深さ0.21mを測る。覆土はレンズ状に堆積、黄灰色を基調とする。主柱穴は検出できなかった。遺物は出土しなかった。時期は、切り合いから集落内の古相段階に帰属すると考えられる。9世紀後半か。

**SI211** (図版33) 13I グリッドに位置する。周囲にはSI5・SI212が存在し、南東辺が溝群4に切られて

いる。平面は隅丸方形、断面は台形状を呈する。長軸はN-48°-Wを向く。長軸2.82m、短軸2.5m、深さ0.1mを測る。覆土は黄灰色シルトの単層である。主柱穴は検出できなかつた。北西辺中央付近に径0.5mの円形ピットP628を検出した。焼土ブロックは認められなかつたが、カマド等の建物内施設か。遺物は須恵器食膳具・煮炊具、土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器の食膳具が少量出土した。時期はSI207同様、9世紀後半と考えられる。

SI212（図版34） 13Iグリッドに位置する。周囲には溝群4が広がり、北東辺をSD213に切られる。また、北西辺はSD8に切られている。平面は不整な隅丸長方形、断面は台形状を呈する。主軸方位はN-53°-Wを向く。長軸は3.66m、短軸2.53m、深さ0.1mを測る。西隅が張り出し、平面横円形のカマドを有する。長軸0.65mで、深さは0.06mを測る。覆土は灰黄色シルトの単層で、カマド覆土によって切られる。このため、1層は貼床である可能性が考えられる。カマド覆土2層は焼土ブロックが多量に混ざる。建物内においてP255・SD254等の遺構を検出しているが、覆土1層を切っており、建物に伴う可能性については判然としない。遺物は須恵器甕・土師器食膳具・煮炊具が少量出土した。また、SD254から土師器煮炊具が出土した。この他、カマド底面より帶金具が1点出土した。時期は9世紀後半頃と考えられる。

SI268（図版34） 13K・Lグリッドに位置する。SK205及びSB318に切られ、北東辺は擾乱を受けている。平面は隅丸方形、断面は台形状を呈する。主軸方位はN-51°-Wを向く。長軸2.64m、短軸2.4m以上、深さ0.2m～0.3mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、褐色を基調とする。覆土中位にあたる2層は炭化物ブロックが多量に混ざる。また、床面中央付近にて焼土ブロック・炭化物粒の広がりが検出された。覆土2層中の炭化物粒の存在も含め焼失住居の可能性も考えられたが、焼土ブロックの検出範囲が建物中央付近にまとまることから、その他の燃焼行為が行われた可能性も考慮すべきと考えられる。床面からピットを4基検出した。P314は最も掘方が整っており、長軸0.48m、床面からの深さ0.26mを測る。覆土はレンズ状に堆積しており、褐色を基調とする。遺物は須恵器の食膳具・甕類が少量、土師器の食膳具・煮炊具が出土した。また、P314より土師器の食膳具細片が1点出土した。時期はSK205に先行することから、9世紀第4四半期を下限として考えられる。

SI429（図版35） 11H・Iグリッドに位置する。溝群3の東端部にあたり、SD452・468・524に切られ、SD440を切る。平面は北西隅が擾乱により判然としないが、方形であったと考えられる。断面は弧状を呈する。主軸方位はN-37°-Wを向く。長軸2.85m、短軸2.74m、深さは0.07mを測る。覆土はレンズ状に堆積、黒褐色を基調とする。検出遺構の中で、色調は比較的暗い。床面においてP528・543・544・545を検出したが、SI429覆土を切る様子が認められた。このため、建物に伴うピットであるかは判然としない。遺物は須恵器食膳具・甕類がわずか出土した他、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。また、黒色土器有台椀が1点出土した。時期は9世紀末から10世紀初頭頃を中心とした年代が考えられる。

SI465（図版35） 10H・10Iグリッドに位置する。調査区の北端部にあたり、本遺構の大半は調査区外に延びている。溝群3、SD460・464に切られている。平面は方形と考えられるが、検出時点では軸線がやや北東に寄った平行四辺形が想定される形状を呈していた。断面は弧状で床面は平坦である。主軸方位はN-63°-Wを向く。東西辺3.66mで、南北方向は残存長1.27m、深さは0.23mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、黒褐色から褐色を基調とする。柱穴は検出できなかつた。遺物は覆土1層より土師器・須恵器の細片が微量出土した。時期は覆土の堆積状況からSI429と同様、9世紀末から10世紀初頭頃を中心とした年代が考えられる。

SI664（図版36） 9D・Eグリッドに位置する。SB320・348・溝群2に切られている。平面形は長方形、

断面は弧状を呈する。主軸方位はN - 56° - Eを向き、SD325とほぼ直交する。長軸 5.06 m、短軸 3.82 m、深さは 0.25 m を測る。覆土はレンズ状に堆積し、褐灰色から灰白色を基調とする。覆土は地山に酷似している。当初は検出できなかつたが、覆土が周囲の地山と異なつてわずかに粘土質であり、検出に至つた。カマドは南東辺の壁面付近で検出、焼土層及び炭化物粒の広がりが認められた。焼土層は径 1.14 m を測り、炭化物粒の広がりは長軸 1.6 m、短軸 0.96 m に渡る。床面においては、P 1 から P 4 まで 4 基のピットを検出した。P 1・2 は平面が楕円形、断面は台形状を呈する。長軸 0.75 m ~ 0.85 m、深さは P 1 が 0.16 m、P 2 が 0.23 m であり、ほぼ同規模と言える。P 3 は平面が隅丸方形、断面は台形状を呈する。SD325 により北東側が破壊されている。一辺 0.4 m 前後で、深さは 0.13 m を測る。P 4 は平面が円形、断面が弧状を呈する。径は 0.62 m、深さは 0.16 m を測る。覆土は地山と酷似する。遺物は須恵器食膳具、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。また、P 1 底面より土師器煮炊具の細片が出土した。時期は、切り合い関係から 9 世紀後半頃と考えられる。

#### 埋納遺構・土器溜まり

P 2 (図版 37) 10F22 グリッドに位置する。SD374・416 の上に位置しており、溝群 2 よりも新しい。平面は円形で、断面は弧状である。直径 0.48 m、深さ 0.1 m を測る。覆土は、2 層に分けることができ、1 層は灰色シルト層で、2 層は地山由来の灰黄層シルトである。1 層に完形の土師器無台椀が正位で 2 個体 (62・64) 並んで出土しており、土器埋納遺構と考えられる。遺物は底面から浮いているが、下層は砂質が強いシルト層であり、埋没が早いと判断できることから埋納時期と遺構構築時期の時間的な差はほとんどないと判断される。時期は、出土遺物から 10 世紀前半頃と考えられる。

SX32 (図版 37) 9E19・24 グリッドに位置する。SD44 の直上に位置し、P43 に切られる。約 30cm 四方の範囲に土器が集中しており、出土状況は、土師器の無台椀が正位で、重なった状態で出土している。明確な掘り込みがないため、地面に直接置いただけの可能性が高い。本遺構を切っている P43 から出土している遺物は、本来は本遺構に属するものと考えられる。出土遺物は、土師器無台椀が出土している。また、P43 からは、内面黒色処理の有台椀も出土している。時期は、10 世紀前半と考えられる。

SK280 (図版 37) 11K25、11L21 グリッドに位置する。SB317 - P26 を切り、本遺構のほうが新しい。検出当初は、隣接する SK359 と一緒に遺構と捉えていたが、調査の過程で 2 つに分けることにした。本遺構の平面形は円形で、断面は弧状を呈する。規模は、直径 0.77 m、深さ 0.11 m を測る。覆土は、黒褐色土が主体となり、地山土が混ざる。出土遺物は、本遺構前面より上から土師器無台椀を中心にまとめて出土している。SK359 の上面にも及ぶが、主体が本遺構であるため本遺構の中に捉えることにした。しかし、そのほとんどが、遺構上面からの出土であるため、本遺構及び SK359 がほぼ埋まった状態で、廃棄あるいは置かれたものと考えられる。土師器の無台椀の 4 個体が正位で置かれたような状況もうかがえ、SB317 に係わる埋納遺構と見ることもできる。出土遺物は、土師器無台椀がほとんどで、わずかに土師器煮炊具と内面黒色土器の無台椀が出土している。時期は、10 世紀前半でも新しい時期と考えられる。

P306 (図版 37) 11J14・15 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面は弧状を呈する。規模は、直径 0.54 m、深さ 0.15 m を測り、覆土はレンズ状に堆積し大きく 2 層に分けることができる。遺物は、1 層上面に土師器無台椀が正位で重なるように置かれている状態で出土した。出土状況から、土器埋納遺構と考えられ、遺構の位置から判断して SB317 に伴うものと考えられる。時期は、10 世紀前半と考えられる。

SK492 (図版 38) 11G15 グリッドに位置する。SD439 を切っている。平面形は楕円形であり、断面は弧

状である。規模は、長軸 0.90 m、短軸 0.63 m、深さ 0.25 m を測り、覆土は 2 層に分けることができる。底面は一定ではなく、やや雑な印象を受ける。遺物は、土師器無台椀が 4 個体正位で出土しており、すべて 2 層直上に位置している。底面から浮いていたり浮いている状況は他の埋納遺構と状況が一致する。出土状況から土器埋納遺構と考えられる。時期は、9 世紀末から 10 世紀初頭と考えられる。SK492 は SB608 内に位置しており、土坑内に土器が完全に埋められている状況から、SB608 の構築時の地鎮のための埋納であると考えられる。

**SK493** (図版 38) 11G 5・10 グリッドに位置する。本遺構は、SB609～P22 の上面にあり、完全にこれを覆う。長軸 0.70 m、短軸 0.50 m ほどの範囲に遺物がまとまって出土した。出土遺物は、須恵器甕、土師器無台椀、内面黒色土器無台椀などが出土した。遺物は破片資料が多く、意図的に置かれたような状況が見られないことから、廃棄された土器であると考えられる。時期は、10 世紀前半と考えられる。なお、480 は出土位置の主体が包含層だったため、遺物図版は遺構外の場所に掲載した。

**SK573** (図版 38) 12H15 グリッドに位置する。SB609～P 9 を切り、SB517 の中に位置している。平面形は梢円形で、断面は台形状である。規模は、長軸 0.74 m、短軸 0.46 m、深さ 0.12 m を測る。覆土は、灰色シルトと黄灰色シルトの 2 層に分けることができる。出土遺物は、土師器無台椀・小甕、内面黒色土器無台椀が出土している。土師器無台椀が土坑の底面ではなくやや浮いた位置で正位や逆位に置かれ、それらが完形や残りのいい状態で出土しており、他の埋納遺構と同じ状況である。本遺構の位置からすれば、SB571 に係わる埋納遺構と考えたい。時期は、出土遺物から 10 世紀第 2 四半期頃と考えられる。

**SK594** (SX266) (図版 38) 12I16 グリッドに位置する。SB609～P10 を切り、SB571 の中に位置している。SX266 は SK594 の上面の土器溜まりである。平面形は梢円形で、断面は階段状である。規模は、長軸 0.76 m、短軸 0.49 m、深さ 0.21 m である。覆土は、5 層に分けることができるが、4 層に焼土が溜まっている。何らかの燃焼行為があったものと考えられる。出土遺物は、須恵器食膳具、土師器食膳具・広口壺、内面黒色土器食膳具が出土している。これらは本遺構上面から完全に浮いた状態で出土している。土師器無台椀の中には正位に置かれたようなものも見られるが、全体的に乱雑な状態で、貯蔵具が含まれる器種構成から、埋納遺構というよりは、SK594 の廃絶後に SX266 部分の遺物が廃棄されたものと考えられる。時期は、10 世紀第 2 四半期頃が考えられる。

#### 埋葬関連遺構

**SK146** (図版 39) 14L 8・9 グリッドに位置する。北西側を SK106 に切られている。検出当初は、SK106 と暗渠が通されていたことによって、木棺墓とは認識できなかった。平面形は、隅丸長方形で長軸 1.76 m、短軸 0.92 m、深さ 0.44 m を測る。断面は箱状になり、9 層は地山由来の粘性の強い黄灰色シルトを多く含み、構築時の裏込土と考えられ、掘方の内側を 10cm 程度の幅で巡っている。8 層は、炭化物を多く含む層で、整地土であろうか。4～7 層はレンズ状に堆積していることから、木棺が腐食したことによる崩落土と推定される。なお、5 層には焼土が多く含まれており、木棺を埋めた後の儀式であろうか、墓の上で火を焚く行為が行われていた可能性がある。人骨や木棺の部材などの出土はなかった。出土遺物は、須恵器食膳具・貯蔵具、土師器食膳具・煮炊具などが出土したが、埋葬関連遺構内に据えられたと認識できる状況での遺物ではなく、木棺の上に置かれていたものと推測される。時期は、出土遺物から 9 世紀中葉から後半と考えられる。

**SK205** (図版 39) 13K25・14K5 グリッドに位置する。SI268 と重複し、それを切っている。SK205 から

は骨や木棺材などは出土していないが、土坑の形状や土層の堆積状況及び遺物の出土状況から、木棺墓と判断した。平面形は隅丸長方形で、長軸2.46 m、短軸1.02 m、深さ0.3 mを測る。覆土は、水平に堆積する2～5層とそれを貫くように堆積している6層と両壁側に堆積する7～10層に大きく分けることができる。6層は縦長に褐灰色粘土が堆積し、さらに地山を掘りこみ、その掘り込みは土坑の底面の周囲に巡っている。これは、木棺の側板であった打ち込み板の痕跡と考えられる。木棺の規模は、長軸1.79 m、短軸0.44 mである。木棺内の覆土と見られる2～5層は、水平に堆積している。側板は立ったまま土質化しており、崩壊による崩落の痕跡は確認できない。また、棺蓋が存在したかどうかは覆土の堆積状況から確認できなかった。棺外とみられる7～10層は裏込め土と考えられる。1～5層については、リン酸カルシウム分析を行ったが顕著なリン酸及びカルシウムの富化は認められなかった。出土遺物は、棺内にはなく、棺外から土師器無台椀1点が正位で出土している。埋葬時に供献されたものと考えられる。時期は、出土遺物から10世紀前半と考えられる。

**SK246** (国版40) 13H 1・6グリッドに位置する。平面形は、隅丸長方形で断面はやや不整な台形状を呈する。規模は、長軸2.01 m、短軸1.18 m、深さ0.24 mを測る。覆土は、2層に分かれるが、地山由来の黄灰色シルトを主体としている。出土遺物は、土師器の細片が出土しているのみで、国化できる資料は出土していない。骨などの出土はないが、土坑の規模や形状、遺物が少ない状況などから、埋葬関連遺構である可能性がある。時期は9世紀末から10世紀前半頃であろうか。

**SK260** (国版40) 12L20・12M16グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸1.11 m、短軸は残存している部分で1.00 m、深さ0.46 mを測る。断面形は、半円状を呈する。覆土の堆積状況は、レンズ状に堆積し、大きく分けて黒色シルトを主体とし炭化物を含む上層（1～10層）と灰色～オリーブ灰色シルトを主体とする下層（11～13層）に分けられる。上層は灰と見られる灰白色土と焼土ブロックを含み、特に3層は焼土が主体となっている。遺物は、土師器の無台椀・長甌、内面黒色土器の無台椀、被熱した礫などが出土している。遺物はすべて上層から出土し、下層からの出土はなかった。出土した土師器無台椀を見てみると、煤が付着したものがいくつか認められる。これらの覆土の堆積状況及び遺物の出土状況から、別な場所で火焚きが行われ、その際に発生した灰や炭、焼土を埋めたものと考えられる。また、煤が付着している土師器無台椀や被熱した礫などはその時に使われていたもので、一緒に廃棄されたものと考えられる。また、覆土のリン酸カルシウム分析を行ったところリン酸及びカルシウムの富化が認められた。覆土の状況及び出土遺物や土壤分析の結果から、火葬の際に発生した灰や焼土などを埋める「火葬灰埋納土坑」[小林1992]と考えられる。遺構の年代は、出土遺物から9世紀末から10世紀初頭と考えられる。

**SK482** (国版40) 10G 9・14グリッドに位置する。SD441・484を切っている。平面形は、梢円形で断面は弧状を呈する。規模は、長軸1.73 m、短軸0.75 m、深さ0.14 mを測る。覆土は、黒褐色シルト質土を主体としている。出土遺物は、土坑の南東端から土師器と内面黒色土器の無台椀が出土している。前者が正位で、後者が逆位で据えられた状態で出土し、埋葬時に供献されたものと考えられる。土坑の形状や出土遺物の出土状況から埋葬関連遺構と判断した。また、土層堆積からは木棺の痕跡は確認できなかったため、土坑墓と考えられる。時期は、出土遺物から9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。

**SK512** (国版40) 11G5に位置する。溝群3に切られており、また南東端はSB608-P22に切られている。平面形は長方形で、断面は弧状である。規模は、長軸1.57 m、短軸1.1 m、深さ0.27 mを測る。覆土は、全体に炭化物を含んでいるが、特に4層は多量に含まれている。また、2・4～6層で微細な焼骨片を含んでいた。そのため、覆土を水洗いして、骨を抽出する作業を行った。その結果、多くは粉状の骨片であつ

たが、数点小さな骨片と歯を抽出することができたため、骨同定の分析を実施したところ、人骨であることが確認できた。従って、多量に含まれる炭化物は、遺体を焼いた時に発生したものと考えられる。しかし、大きな骨は発見されていないことや炭化物とシルトブロックが混ざって堆積し、火を焚いた痕跡が見られないことから、遺体を焼き抬げた後に残った炭や骨が入れられたものと考えられる。従って、SK260と同様に「火葬灰埋納土坑」と考えられる。出土遺物は、図化できない微細な土師器と炭化米が少量出土している。時期は、切り合い関係から9世紀中葉から後半頃と考えられる。

### 土坑

**SK 6** (図版41) 14K 6・7・12グリッドに位置する。当初は1基との認識で調査を進めたが、2基の方形土坑が切り合っていることが判明し、A、Bと付けて区分した。Aの規模は、長軸1.56m、短軸1.10m、深さ0.12mを測る。Bの規模は、長軸1.38m、短軸0.94m、深さ0.07mを測り、ややBの方が規模が小さい。両造構とも断面は弧状を呈し、黄灰色シルトを主体とする。出土遺物は両造構で、須恵器食膳具、土師器食膳具・煮炊具、内面黒色土器食膳具が出土している。時期は、やや古い遺物も混ざっているが、9世紀末から10世紀初頭を主体としているため、その頃に位置づけられる。切り合いは、Bが古くAが新しいが、遺物から見ればほぼ周期的な差はないと思われる。SK 6は、SK48、SI54、P53、と切り合っている。切り合いから判断すれば、SI54が最も古く、次がSK 6 B、最も新しいのがSK 6 A、SK48、P53である。SK 6 A、SK48、P53の中での新旧関係は不明である。出土遺物からもSI54は9世紀中葉から後半に位置づけられ、SK 6が新しいことに矛盾しない。

**SK42** (図版41) 10D 5・10グリッドに位置する。SB348及びSK342に隣接している。土坑の平面形は梢円形で、断面形は台形である。規模は、長軸0.76m、短軸0.72m、深さ0.28mを測る。本遺構からは、須恵器の大甕が潰れた状態で出土している。覆土の3層は地山ブロックを多く含み、裏込め土の可能性があり、大甕が掘えられていたものと推定される。出土遺物は、大甕のほか土師器の無台椀、鉢が出土している。時期は10世紀前半頃と考えられる。

大甕がどのような用途で使われていたのか推定するため、大甕の内部に当たるであろう部分の土壤について花粉分析を行った。詳細は、「第VI章第1節」に掲載しているとおりであるが、良好な花粉化石が残っておらず、甕の内容物の推定までに至らなかった。

**SK48** (図版41) 14K 7グリッドに位置する。SI54、SK 6 Bと重複し、これらを切っており、SI54、SK 6 B、SK48の順に新しくなる。平面形は梢円形で、断面は不整な弧状を呈する。規模は、長軸1.12m、短軸0.82m、深さ0.09mを測る。出土遺物は、須恵器無台壺、土師器無台椀・小甕が出土している。時期は、9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。

**SK151** (図版41) 14K23グリッドに位置する。SB166に隣接し、SD69に切られる。平面形は不整形で、断面形は不整な弧状を呈する。規模は、長軸0.99m、短軸0.87m、深さ0.30mである。出土遺物は、須恵器無台壺が出土している。時期は、9世紀後半と考えられる。

**SK210** (図版41) 13I20グリッドに位置する。SI46に隣接し、SD38に切られる。平面形は長方形で、断面は弧状を呈する。規模は、長軸1.12m、短軸0.7m、深さ0.16mを測る。出土遺物は、土師器鍋と須恵器横瓶が出土している。時期は、9世紀後半と考えられる。

**SK216** (図版42) 13I16グリッドに位置する。SI 5、SI211に隣接する。平面形はやや不整な梢円形、断面はやや不整な弧状である。規模は、長軸0.98m、短軸0.77m、深さ0.25mを測る。出土遺物は、土師

器無台椀・鍋、内面黒色土器の無台椀が出土している。鍋(158)は、破片資料であるが、口縁部に布状の織維が付着している。時期は、9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。

**SK259** (図版42) 14L 2・7グリッドに位置する。SI10に近接し、SK148と重複しこれを切る。平面形は不整形で、断面は台形である。規模は、長軸1.62m、短軸0.74m、深さ0.21mを測る。出土遺物は、須恵器無台环、土師器無台椀・甕である。時期は、出土遺物から9世紀後半から末頃と考えられる。

**SK342・SD347** (図版43) 10E11・12グリッドに位置する。SK42、SB348に隣接する。平面形は隅丸方形に近い円形で、断面は浅い土坑(1~6層、上層)の中央や東寄りに井戸状の土坑(7~12層、下層)が掘り込まれ、階段状を呈する。規模は、長軸1.88m、短軸1.56m、深さ0.17mの土坑で、中央の土坑は長軸0.76m、短軸0.66m、深さ0.50mを測る。覆土は、全体的に灰を多量に含むシルトであるが、灰を多量に含む層(2・8・9層)と含まない層が互層となっている。また、中央の土坑の西側に長軸0.34m、短軸0.27m、深さ0.18mの小ビットがある。小ビットから南西側の上層の土坑の底面に焼土が広がり、この小ビット内の覆土は、焼土層と炭層の互層になっており、2・5・8層に焼土が認められ、複数回の燃焼行為があったものと考えられる。しかし、最後の燃焼行為は下層が完全に埋没してからであり、下層の灰を含む層と小ビットでの燃焼行為が必ずしも対応するわけではない。そのため、上層と下層が本来は別な目的を持った遺構である可能性もある。出土遺物は、須恵器食膳具・貯蔵具、土師器食膳具・煮炊具、土鍤、粘土塊、炭化米、骨粉などが出土している。多くが微細な破片で、実測に耐えるものは少ない。また、小ビット内からは、土師器無台椀が多量に出土したが、土器の被熱の痕跡は明瞭ではない。時期は、9世紀末から10世紀前半頃と考えられる。

SD347は、SK342を囲むと推測される周溝で、SD362を切る。SB348と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は長楕円形になり、断面は台形あるいは階段状になる。規模は、溝の外側で長径9.28m、短径4.12m、幅0.32~0.87m、深さ0.11~0.26mを測る。覆土は、2層に分層でき、下層は地山由来の黄褐色シルト層、上層は未分解植物を含む黒褐色シルト層である。上・下層ともに地山由来のシルトや黒褐色シルトをブロック状に混ざり、安定した堆積状況を示さない。出土遺物は、須恵器、土師器食膳具・煮炊具、内面黒色土器有台椀、綠釉陶器の椀などが出土している。時期は、覆土の色調と出土遺物から、9世紀末から10世紀前半と考えられる。

SK342とSD347の関係は、不明瞭であるが、一体のものであれば雨水や温氣対策などの機能が想定される。SK342の東側のスペースに掘立柱建物などの作業場のような建物が存在も想定したが、発見することはできなかつた。

**SK361** (図版42) 9D15・20グリッドに位置している。SB348及びSI664と重複し、切り合い関係から古い順に示すと SI664・SK361・SB348となる。平面形は楕円形で、断面は台形状である。規模は、長軸1.06m以上、短軸0.92m、深さ0.30mを測る。覆土は全体的に黒味が強く、有機質由来の土質である。出土遺物は、土師器無台椀・甕類が出土している。時期は、9世紀末から10世紀前半頃と考えられる。

**SK365** (図版42) 9E19グリッドに位置する。SD44と重複し、本遺構がこれを切る。平面形は丸みを帯びた方形で、断面は台形状を呈する。規模は、長軸0.64m、短軸0.57m、深さ0.14mを測る。出土遺物は、土師器有台鉢・無台鉢が出土している。有台鉢は1層から出土しており、遺構底面から浮いた状態で発見されている。これは、ほかの埋納遺構と同じ状況であり、やや傾いてはいるが、本来は正位で据えられた可能性もある。時期は、10世紀前半頃と考えられる。

**SK378** (図版42) 11K11グリッドに位置する。SB317-P20と重複し、これに切られる。平面形は円形で、

断面は不整な漏斗状を呈す。規模は、径 1.4m、深さ 0.58m を測る。覆土はレンズ状に堆積し、上半部の 1・3 層は 2 層の黄褐色砂を挟んで黒褐色シルトが、下半部の 4・5 層は黒褐色とオリーブ灰色シルトが堆積している。遺構の形状や堆積状況から井戸の可能性があるが、湧水はなく深度が浅いため、断定するには至らなかった。出土遺物は、土師器の長甕が出土している。時期は、9 世紀後半が考えられる。

**SK396** (図版 42) 10E 6 グリッドに位置している。SB348 に隣接している。平面形は不整な楕円形であり、断面は弧状を呈す。規模は、長軸 0.49 m、短軸 0.36 m、深さ 0.10 m を測る。出土遺物は、土師器無台椀が出土している。時期は、10 世紀前半頃と考えられる。

### 井戸

**SE403** (図版 44) 11F 4・5・9・10 グリッドに位置する。湧水はないが、規模と形状から井戸と判断した。平面形はやや不整な円形で、断面は漏斗状である。規模は、径 1.68 m で深さ 0.78 m を測る。中に施設はなく、素掘りの井戸である。覆土は、レンズ状に堆積し、1～3 層は黒色粘土を主体として、未分解植物を多く含んでいる。4～10 層は、未分解植物を含んだ層と地山由来の層と互層になって堆積している。出土遺物は微細な須恵器と土師器が出土しているが、図示できる遺物は出土していない。SB608 に近接した場所に位置していることから、SB608 に伴う井戸の可能性が高い。時期は、SB608 との関係から、9 世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

**SE677** (図版 44) 11D16・17・22 グリッドに位置する。微高地状の平坦地ではなく、SX 1 に向かってやや下がった傾斜地に構築されている。湧水はないが、規模や形状及び覆土の堆積状況から井戸と判断した。平面は不整円形で、断面は U 字状を呈する。規模は、長軸 1.92 m、短軸 1.66 m、深さ 1.07 m を測る。覆土は、レンズ状に堆積し、1・2 層は黒色土が堆積するが 3～11 層は、明オリーブ灰色土と灰色土の互層になっている。遺物は、上層で土師器無台椀及び須恵器の微細片が、下層でヒョウタンと木製品が出土している。土師器の無台椀は完形であり、内外面にススが多量に付着している。井戸を埋め戻す儀式に使われたものであろうか。出土状況は、当初立木痕との認識で掘削を開始したため、記録を残すことができなかった。下層のヒョウタン及び木製品は、比較的底面に近い場所から出土している。時期は、出土遺物から 10 世紀前半でも新しい時期と考えられる。

### 溝

**SD 3** (図版 45) 14M・14N・15L・15M・16L・16K グリッドに位置しており、調査区東側の 14N から入り、緩やかに南方向に進路を変え、わずかに蛇行しながら SX 1 に直交するようにして交わる。調査区内の全長は約 33.0 m で、最大幅 1.14 m、深さは最大 0.29 m を測り、断面は漏斗状を呈する。覆土は、2 層に分かれ、上層である 1 層には黒味を帯びた灰色土が堆積し、下層である 2 層は灰黄色シルトで地山由来の土が堆積していた。重複する SD131・163・201 よりも本遺構のほうが新しいが、SB535 については、切り合いで確認できず、前後関係は不明瞭である。出土遺物は、土師器食膳具・煮炊具、須恵器食膳具・貯蔵具、内面黒色土食膳具などが出土しているが、微細な破片が多く、ほとんど同化できなかった。時期は、9 世紀後半頃であろうか。

**SD 7** (図版 45) 11K・12J・12K・13J・13K・14I・14K グリッドに位置しており、調査区北側の 11K から入り、わずかに蛇行した後ほぼ直線状に伸び、南端は SX 1 に落ち込み収束する。調査区内の全長は 47.2 m で、幅は 1.22～2.78 m、深さは 0.4 m 前後で、断面は弧状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、

大きく分けて上層（1・2層）と下層（3・4層）に分けることができる。上層は黒褐色～褐灰色土を主体とした層で、下層は明オリーブ灰色～黄灰色シルトを主体とする層で、地山とかなり近い色調で識別しづらい。上層と下層が確認できるのは、ちょうどSB317の南側の12Kグリッドの南半からSX1までの南半分の区間（南区間）であり、遺物が出土するのもこの区間である。12Kグリッドの北半から11Kまでの北半分の区間（北区間）は、下層の土のみが堆積し、ほぼ地山と同質化している状況で、遺物も全く出土しなかった。北区間に重複するSB317は、本遺構に柱穴が掘り込まれており、確実に新しい。南区間は、SI207とSD153が重複する。SI207は、試掘トレーンチが当たっていたため、新旧関係を把握することができなかった。SD153は、本遺構を切っており、新しいと言える。

出土遺物は、南区間から出土している。須恵器食膳具、土師器食膳具、内面黒色土器食膳具が出土し、これらの中に転用硯、墨書・漆書土器を含む。この他、斐類や壺類、土鍾などが出土している。このうち、食膳具の種別割合（重量計測）を上層と下層に分けてみてみると、下層では土師器が42.6%、須恵器が57.4%であるのに対し、上層は土師器が58.1%、須恵器が38.5%、内面黒色土器が3.4%となり、土師器が須恵器を上回る。これは長岡市下ノ西遺跡SX852とほぼ同じ割合であり、食膳具の特徴をみても同時期に位置づけられよう。下層の食膳具は、特徴的には上層と大きく変わらない。また、下層出土遺物の総計のSD7出土遺物総計に対する割合は、約1割と少ない。そのため、下層の期間は、上層に近い時期でごく短かったと考えられる。従って、SD7の時期は9世紀後半から末頃に位置づけられよう。

以上の状況から、もともと自然の流路のような溝が存在していたが、集落が形成される頃には、北半分の区間は、埋没していたものと考えられる。一方、南半分の区間は、まだ埋設せず存在しており、利用され、9世紀末頃には埋没したものと考えられる。

**SD8** (国版45) 12I・13Iグリッドに位置する。真北から約45度西偏し、概ね直線状であるが途中S字状にクランクする。規模は、全長約6.9m、幅0.50～0.88m、深さ0.09～0.13mを測る。断面形は弧状で、覆土は黄灰色シルトが主体である。SB571及びSB609と重複するが、いずれも本遺構より新しい。出土遺物は、須恵器無台壺、土師器無台椀・煮炊具、内面黒色土器の無台椀などが出土しているが、微細な破片が多くほどんど実測できなかつた。時期は、9世紀後半から末頃と考えられる。

**SD97** (国版45) 14M19・24グリッドに位置する。SI130に隣接し、SD131と重複し、切り合いから本遺構のほうが新しい。主軸は、北東～南西方向で、やや湾曲しながら伸びる。断面形は、弧状を呈する。規模は、全長1.20m、幅0.32m、深さ0.07mを測る。出土遺物は、須恵器有台壺のほか土師器片が出土している。時期は、9世紀末頃と考えられる。

**SD153** (国版45) 14I・14J・15Jグリッドに位置している。遺構が乗る平坦面からSX1に傾斜する斜面の転換点に位置し、ほぼ直線状に伸び、北西側でやや蛇行する。規模は、全長14.2m、幅最大1m、深さ0.13mで、断面形は弧状を呈する。SD7と重複し、切り合いから本遺構のほうが新しい。出土遺物は、須恵器食膳具・貯蔵具、土師器食膳具・煮炊具、内面黒色土器の食膳具が出土している。時期は、切り合いから9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。なお、SD56・27・18・17・14・11は、本遺構と同じような軸方向、形態、位置であり、連続した溝群と捉えられよう。

**SD267** (国版45) 13K・13Lグリッドに位置している。SB318と重複し、切り合いから本遺構のほうが古い。西側はSB318の柱穴と重複し、SB318-P2を境に屈曲する。東西方向へは緩やかに弧を描きながら延び、SB318の東側で北西方向へ再度屈曲する。途中で枝分かれするように小溝が多く伸びており、平面形は不整形なコの字状を呈する。断面形は、弧状である。規模は、全長11.67m超、長さ0.40～0.80m、深さ約0.15m

mを測る。出土遺物は、須恵器無台壺、土師器長甕が少量出土している。時期は、出土遺物から9世紀後半から末頃と考えられる。

**SD273** (図版45) 13Lグリッドに位置する。本遺構は単独で存在し、やや湾曲して北西-南東方向に伸びる。規模は、全長2.35m、幅0.40m、深さ0.18mを測り、断面は弧状を呈する。出土遺物は、須恵器無台壺が出土し、底部外面に「手」とみられる墨書きが書かれている。時期は、出土遺物から9世紀後半から末頃と考えられる。

**SD302** (図版45) 12Iグリッドに位置する。本遺構は、SD307を切り、P309に切られている。南北方向にはほぼ直線状に伸び、規模は全長2.38m、幅0.34m、深さ0.12mを測る。断面形は、台形状を呈する。出土遺物は、土師器食膳具、須恵器食膳具、墨書き土器、土錐が出土している。時期は、出土遺物から9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。

**SD480・481** (図版45) 9G・10G・11F・12Fグリッドに位置し、調査区北側から入り、やや蛇行しながらほぼまっすぐに南西方向に伸びている。SD480は調査区内全長約13m、SD481は調査区内全長約26mで、約13mにわたって平行に走っている。両遺構の幅は約0.30m、深さ0.05～0.12mである。溝の規模や形状からすれば、敵小溝群と大きな違いはないが、他に同じ主軸方向で群を形成する溝はなく、小溝群と小溝群の間に位置していることから、区画溝のような性格を持ったものであろうか。出土遺物は、SD480から土師器無台壺の細片が、SD481からは須恵器無台壺と土師器無台壺が出土している。時期は、9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。

### 敵状小溝群

本調査区では、地形に沿って微高地に展開する敵状小溝を多数検出した。各々の小溝の主軸方位及び検出地点によって溝群1から溝群6までの6グループに大別した。溝群1が調査区の北西端部で検出されており、以下、東に向かい順にグループ名を付した。

**溝群1** (図版46) 9C・Dグリッド、調査区の北西隅に位置する。SB320に切れ、SI664を切っている。また、後述する溝群2とも切り合っており、本グループは溝群2に後出する。16条の溝が主軸方位N-66°-W付近を向く。最も長く検出したSD332は全長7.34mを測る。16条とも、幅は0.3m～0.4m、深さは0.1m～0.12mを測り、ほぼ同規模である。断面は弧状を呈するものが主体である。覆土は褐色シルトの單層が主体で、地山由来のシルトが混ざる。溝間は最も狭いSD332・333間で0.37m、最も広いSD339・340間で1.2mを測る。遺物は土師器食膳具・煮炊具、黒色土器食膳具が少量出土した。この他、SD326より土錐が1点出土している。時期は、遺構の切り合いから9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。

**溝群2** (図版46) 8・9・10Dグリッド、調査区の北側に広範囲に渡り平行する溝が検出され、溝群2とした。東端はSD480・481によって限られ、西側は主軸方位の異なる溝群1と重複する。溝群1・SB348・SD347に切れ、SI664を切っている。43条の溝が概ね主軸方位N-42°-W付近を向く。SD44が最も長く全長26.57mを測り、SD410の19mがこれに続く。幅は0.3m～0.5m、深さは0.1m～0.2mを測る。断面形は弧状を基調とし、灰色ないしは褐色シルトの单層が主体である。溝間はSD416・417で見られる1m前後を基本とするが、溝が不均等に並ぶ地点があり、一定しない。遺物は須恵器の食膳具、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。SD44の埋没後にはSX32及びP43が形成されており、土師器無台壺が定量出土している。また、SD323覆土中から土錐が1点出土した。時期は、SX32等との切り合いから9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。

**溝群3** (図版47) 10G・H, 11G・H グリッドに位置する。西側は SD480・481、東側では SI429 と重複する。また、南端では SK512、SB608 と重複する。49条の溝が主軸方位によって細別可能な3グループを形成し、各々が切り合っている。およそその主軸方位は前後関係の古いものからN-61°-W、N-43°-E、N-3°-E を向き、それぞれ溝群3-1、3-2、3-3とする。溝群3-1・3-2はほぼ直交しており、SK512を切り、SB608に切られる。SI429は溝群3-1に後出し、3-2に切られている。SB504、SD480・481が近接した主軸方位をとり、併存した可能性が高い。溝群3-1及び3-2はそれぞれ前者のSD440が全長12.3m、後者のSD443が全長14mと比較的長く延びており、溝群3-3は8.1m程度と短い。溝幅は0.3m~0.5mの間で推移、深さも0.06m~0.2m程度と各時期を通じてほぼ一定の値をとる。断面形は半円形を呈する。覆土は溝群3-1の色調が黄灰色を基調とし最も明るい。溝群3-2・3-3と時期が下るにつれて覆土の色調は暗くなる傾向があり、最新段階の溝群3-3では黒褐色を基調とする。溝間は溝群3-1のSD432・440間において1.8mを測り、北壁付近のSD456・466間では0.8mと狭い。溝群3-2ではSD436・439・443・444間が2m前後の値をとる。溝群3-3ではSD487・488間が最も広く2.1m、次いでSD448・449間が1.8mを測る。狭い地点では1.1m程度であり、溝間は一定ではない。遺物は須恵器食膳具・小壺・甕類、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。SK524より土鍤が1点出土したほか、SK512に隣接するSD438で骨片が少量出土している。時期は、切り合いから溝群3-1が9世紀後半頃、溝群3-2・3-3が9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。

**溝群4・5** (図版48) 13I・J、14I・J グリッドに位置する。SD 7 の東西両岸には畝状小溝群が展開しており、SD 7 を境に主軸方位が異なる傾向が認められる。SD 7 西岸の畝状小溝群を溝群4とし、東岸の方は溝群5と呼称する。溝群4は SI46・207・211・212を切っており、溝群5は SI54を切る。両群とも堅穴建物群より後出する点で共通する。また、溝群5は SB166と一部重複するため、同建物との併存は想定し難い。溝群4は17条の溝を検出、主軸方位は SD204 に代表される N-67°-W付近の値をとるグループ溝群4-1と SD39 に見られる N-41°-W付近の値をとるグループ溝群4-2に細別できる。SD34・35間の切り合いから、溝群4-1が古く溝群4-2が新しいと判断した。溝群4-1は鍵の手状に屈曲した状態で検出された SD204 や、全長9mを測る SD35 等により構成される。幅は0.24m~0.5m、深さは0.14m~0.25mを測る。これに対し溝群4-2は比較的小規模で、全長は2.5m程度、幅0.2m~0.3m、深さは0.12mである。断面形は半円形ないしは台形状、覆土は黄灰色を基調とし、溝群4-1より4-2の方が、色調が暗い傾向にある。溝間は溝群4-1では SD40・41 が切り合っており、多数時期の溝が含まれている点も看過できないが、およそ1.5m前後の値が認められる。溝群4-2では SD37・38・39において、1.16m~1.3mを測る。溝群5は32条の溝を検出、主軸方位は N-33°-W付近の値をとるグループ溝群5-1と N-47°-W付近の値をとるグループ溝群5-2に細別できる。両群の切り合は明瞭ではない。溝群5-1は全長0.9m~5m、幅0.2m~0.25m、深さは0.05m~0.15mを測る。溝群5-2は全長2m~12m、幅0.25m~0.4m、深さは0.08m~0.25mを測り、溝群5-1に比べやや大きな規模となる。断面形は両群とも弧状ないしは弧状を呈し、覆土は黄灰色から褐灰色を基調とする。溝間は溝群5-1で0.4m~1.3m、溝群5-2で0.7m~1.34mを測る。溝群4・5ともに遺物は須恵器食膳具・土師器食膳具・煮炊具が少量出土した。時期は9世紀後半から末頃と考えられる。

**溝群6** (SX4) (図版49) 15L・M、16L・M グリッド、調査区東端部に位置する。東西7.4m、南北14mの範囲で畝状小溝群が広がっており、一部が調査区外に延びている。SD 3 に隣接する。当初、幅0.4m、深さ0.15m~0.2m前後の溝で仕切られた隅丸方形の区画を検出し、SX 4 と名称を与え調査を進めた。

主軸方位はN-41°-W前後ないしはN-52°-E前後を向き、各溝が直交する。区画は溝の内辺で一辺1.6m～2.3mを測る。区画を構成すると考えられる溝同士の明確な切り合いはSD178・182・183・184を除き認められない。溝群の掘削当時から方形区画が意識されていたようである。また、前述の切り合いで発生する溝は、区画内に単独で存在するP679も含めて主軸方位がN-38°-Wを前後する値でまとまつており、P679・SD182・SD183によって構成される平行する溝群が先行して存在していた可能性が高い。各溝の断面形は弧状から半円状を呈し、色調は褐灰色を基調とする。遺物はSX4から須恵器の食膳具、土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器の食膳具、鍛冶津の細片が1点出土した。SD183からは土師器煮炊具の細片が1点出土した。時期は、出土遺物から9世紀末から10世紀前半と考えられる。

### 柵列

**SA680** (図版49) 10J19・24・25、10K21グリッドに位置する。P382～385の4基で構成される柱穴列で、規模は直径0.16～0.26m、深さ0.16～0.24mを測る。柱間は西から、1.3m、1.5m、1.5mとなる。掘方は検出されず、杭を打ち込んで立てたものと考えられる。当初は、調査区外へ広がる掘立柱建物と考えたが、調査区外まで若干広げて調査したが柱穴は発見できなかった。そのため、柵列と判断した。SB317に近い場所に位置するが、SB317と軸方向が合わないことからSB317に伴うものではないと思われる。調査区北側に軸方向が合う建物が存在している可能性がある。時期は、軸方向がSB320・608に近いことから、9世紀末から10世紀初頭が考えられる。

### ピット

**P127** (図版49) 14K3・4グリッドに位置する。本遺構は、SD112に切られる。平面形は不整形で、断面形状は階段状である。規模は、長軸1.52m、短軸1.19m、深さ0.13mを測る。出土遺物は、須恵器食膳具と土師器煮炊具であるが、図化できなかった。時期は、9世紀後半頃であろうか。

**P156** (図版49) 13L24グリッドに位置する。本遺構はP155に切られている。平面形は梢円形で、規模は長軸0.80m以上、短軸0.70m、深さ0.35mを測る。断面形は漏斗状で、2層は柱痕と考えられるが、建物となる他の柱穴との関係は見いだせなかった。出土遺物は、墨書きされた土師器無台椀が出土している。時期は9世紀末から10世紀前半頃であろうか。

**P278** (図版50) 12L1グリッドに位置する。本遺構は、P366を切っている。平面形は円形で、規模は長軸0.56m、短軸0.50m、深さ0.10mを測る。断面形は不整な弧状を呈する。出土遺物は、土師器無台椀、須恵器、人頭大の縄が遺構確認面からやや浮いた状態で出土している。本遺構は、SB317に隣接しているが、遺物の遺存度は悪く、出土状況も置かれたような状況でないことから、本遺構が廃絶し、ほぼ埋まった状態で廃棄されたものと考えられる。時期は、出土遺物が10世紀前半頃と考えられることから、それよりもやや古い時期かほぼ同じ頃に位置づけられよう。

**P426** (図版50) 10E10グリッドに位置する。溝群2と重複し、SD414を切っている。平面形は梢円形で、断面形はU字状を呈する。長軸0.48m、短軸0.39m、深さは0.49mを測る。覆土は褐灰色を基調とする單層で、底面付近で柱根(615)が出土した。柱根は北東側に傾いており、柱底面はピット底面より0.16m下まで到達していた。本遺構と対応する柱穴列は検出できなかった。出土遺物は、土師器の食膳具・煮炊具がわずかに出土した。時期は、溝群2を切ることから、10世紀初頭から前半に位置づけられる。

P527 (図版 50) 11I 2・7 グリッドに位置する。SI429 に隣接するピットで、SD524 に切られる。平面形は梢円形で、断面形は台形を呈する。規模は、長軸 0.68 m、短軸 0.54 m、深さ 0.46 m を測る。出土遺物は土師器の食膳具・煮炊具が出土している。時期は、9世紀後半から末頃と考えられる。

P651 (図版 50) 12H 7・4 グリッドに位置する。SB574 の西側に隣接する。平面形は梢円形で、断面形は階段状を呈する。規模は、長軸 0.86 m、短軸 0.55 m、深さ 0.45 m を測る。底面からは、柱根が出土しているが、他に結び付けられる柱穴を発見できず、建物にならなかった。出土遺物は、柱根のほかに土師器片が出土している。

### 湿地・その他

SX 1 調査区南側に広がる湿地帯である。東西方向に伸びており、遺構確認面からの深さは約 1.5 m で南側の立ち上がりは確認できていない。調査区の制限から詳細は不明であるが、試掘調査の結果から想定される遺跡範囲は、SX 1 を取り囲むように位置していることが想定される。覆土は、包含層相当層と見られるⅦ層の上には青灰色粘土と黒色粘土が互層になって堆積している。このことから、滯水と陸化を繰り返していたものと考えられる。また、SX 1 内に風倒木と思われる痕跡が検出された。これらは、SD 7 と交差する辺りに集中して見られる。本遺跡が形成される時点で木が立っていたのかどうかは不明であるが、この風倒木痕からも遺物が出土している。

SX 1 から出土した遺物は、食膳具・煮炊具・貯蔵具などの土器類を主体として、漁労具である土錘やわざかであるが鍛冶に関わる鉄滓や羽口が出土している。これらは概ね北側斜面の裾部での出土であり、微高地上の遺構検出面から流れ込んだものと考えられる。

SX120 (図版 50) 13L16・21・22 グリッドに位置する。SK205、SI268 に近接する。SX119、P242、SK245 と重複し、切り合いから SX119 が最も古く、次いで SX120、最も新しい遺構が P242、SK245 である。本遺構の平面形は不整形で、断面は弧状を呈する。SX120 は長軸 2.34m、短軸 1.35m、深さ 0.18m を測る。重複する SX119 は径 1 m 程度、P242 は長軸 0.6m、短軸 0.48m、深さ 0.18m である。SK245 は長軸 0.85m、短軸 0.47m、深さ 0.17m で平面梢円形を呈する。覆土は、黄灰色シルトと褐灰色シルトを主体としている。出土遺物は、須恵器食膳具・土師器食膳具・煮炊具・土錘が出土している。この他、人頭大の自然石が出土している。SI268 に近接した位置であることを考慮すれば、SI268 のカマド構築材であった可能性もある。時期は、9世紀後半から末頃に位置づけられよう。

SX400 11J21・22、12J1・2・3 グリッドに位置する。SB317 の西側に隣接する。土坑の形状や堆積状況および底面から木の根が発見されたことから風倒木痕と判断した。遺構ではないため、断面図等の掲載は省略した。発見された木の樹種同定を行ったところ、オニグルミと同定された。遺物は、土師器食膳具・煮炊具・須恵器食膳具・貯蔵具が出土している。ほとんどが細片であった。382 は底部外面に漆書がある須恵器無台環で、例外的に遺存状況が良好であった。



## 第2節 土器

### (A) 記述の方針

土器は、まず遺構から出土したものを遺構毎に記載し、その次に包含層出土を主体とする遺構外出土のものを記載した。遺構の順番は「第IV章 遺構」に準じている。土器の記載については、特徴的な点について記載し、その他については遺物観察表に記載した。調整技法の表現については、ロクロを利用した撫で、ハケ目を「ロクロナデ」・「カキ目」とし、ロクロを利用しないハケ目を「ハケ目」とした。また、ロクロの利用の有無にかかわらず削りは「ヘラケグリ」とした。貯蔵具、煮炊具に見られる成形痕は、外面の工具痕を「タタキ」、内面の工具痕を「当て具痕」とした。

須恵器の胎土の特徴から產地を推定したが、そのほとんどが佐渡小泊窯跡群と推定されるため、特に分類せずに佐渡小泊産以外の產地と推定されるものについて、その都度記載した。なお、土師器については、胎土分類はしていない。

### (B) 土器の器種分類

#### 1 須恵器 (第6図)

須恵器は食膳具と貯蔵具に大別され、食膳具は坏蓋・有台壺・無台壺、貯蔵具は小壺・長頸壺・広口壺・直口壺・突帯付壺・横瓶・甕、そのほか焼台が出土している。

**坏蓋** 全形を窺えるものはないが、扁平なつまみを持ち、端部が屈曲する。出土量は少ない。

**有台壺** 壺のうち、高台を持つもの。形が分かるものは身が深いものがほとんどで、浅いものは1点のみである。出土量は少ない。

**無台壺** 壺のうち、高台を持たないもの。身の形態により、分類した。A類は、底部から口縁に向かって直線的に立ちあがるもの。B類は、底部から口縁に向かって湾曲しながら立ちあがるもの。B類は、A類に比べて器高が低い。

**小壺** 外側に広がる高台が付き、やや長い頭で單口縁になるもの。

**長頸壺** 長い頸部を持つ壺類で、底部に張り付け高台が付く。

**広口壺** 長い頭部を持つ壺類のうち、口径10cmを越えるもの。1点のみ確認した。

**直口壺** 平底で肩が張る器形を呈し、直立気味の口縁になるもの。1点のみ確認した。

**突帯付壺** 体部上半および下半に突帯を巡らす壺。高台を有する。1点のみ確認した。

**横瓶** 俵型の体部に「く」の字状に外反する口縁が付くものと推定されるが、全体が窺えるものはない。

**甕** 丸みを帯びた体部から頸部が「く」の字状に屈曲するもの。底部は丸底になるものと思われるが、底部が平らなものが1点出土している。

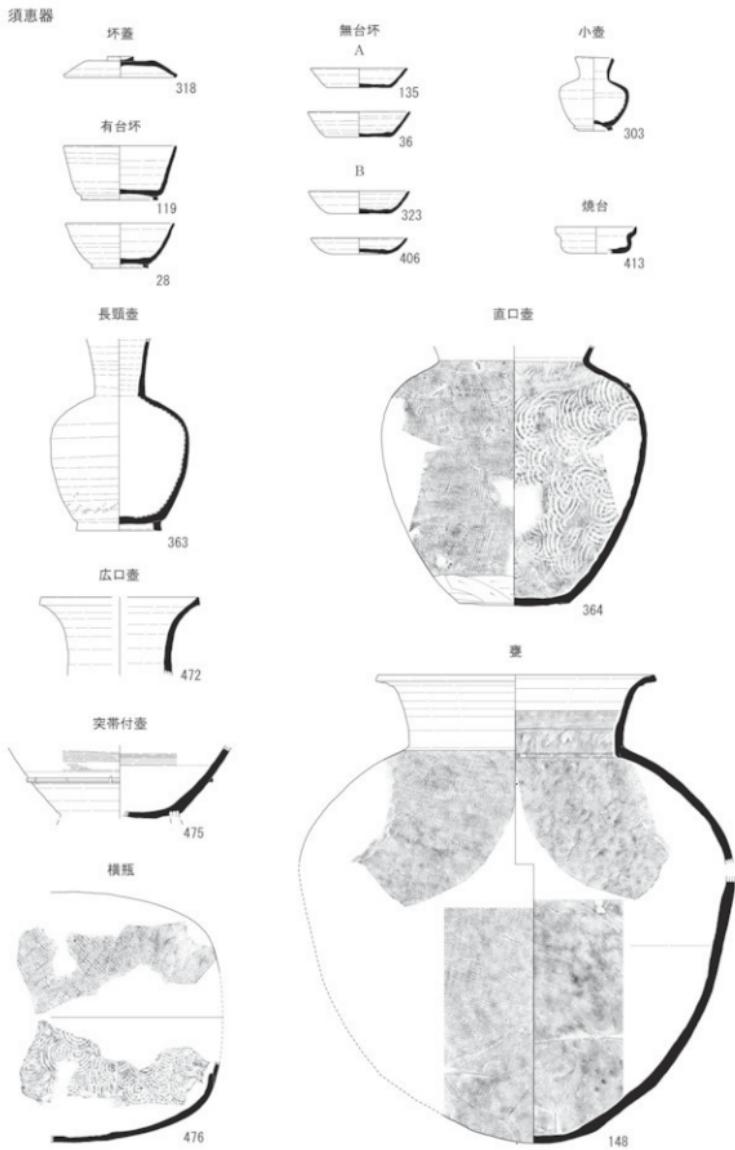
**焼台** 小型で折縁状の口縁部を持つ。壺類の蓋等の可能性も考えられる。1点のみ出土した。

#### 2 土師器 (第7・8図)

土師器は、食膳具、煮炊具、貯蔵具に大別され、坏蓋・有台椀・無台椀・有台皿・小皿・有台鉢・鉢・仏鉢型土器・広口壺・小甕・甕・長甕・鍋・羽釜型土器・甑・ミニチュア土器が出土している。煮炊具、貯蔵具については、非ロクロ成形のものをA類、ロクロ成形のものをB類に大別した。

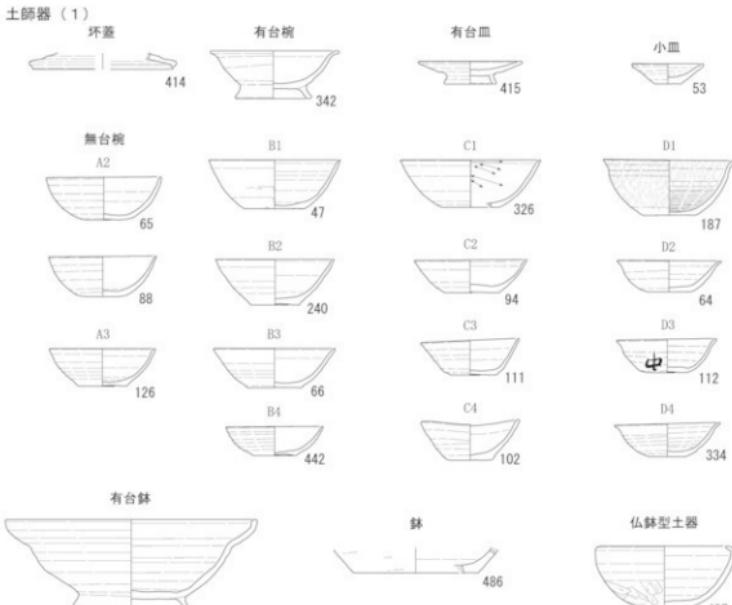
**坏蓋** 須恵器と同様の技法を用いて製作されている。出土量は極めて少なく、1点のみ図示した。

**有台椀** 椭のうち、高台が付くもの。全体を知れるものは1点で、他は高台部分のみの出土である。口縁部は外反し、やや高い高台が付く。出土量は少ない。



第6図 器種分類 (1)

148のみ1:8、その他1:6



第7図 器種分類 (2)

(1:6)

**無台椀** 多量に出土し、食膳具の主体を占める。体部や口縁部の形態から4つに分類した。底部から体部が内湾しながら立ちあがり、口縁部がほぼ直上に向かって伸びる、ボウル状のものをA類、体部が内湾して立ちあがり、概ね斜め上方に向かって口縁部が伸びるものB類、体部が直線的に立ちあがるものC類、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部で外反するものをD類とした。さらに、ヘラミガキやヘラケズリなどの再調整が施されるものを1類、施されないもので、丁寧に撫でられているものを2類、歪みが大きくロクロ痕が顕著に残るものを4類、2類よりもロクロ痕が残るが4類程顕著ではないものを3類とした。なお、底部でB類としている中に実際はD類も含まれると思われるが、ここではB類に分類した。

**有台皿** 高台を持つもののうち、身が浅く皿状を呈するもの。出土量はごく少量である。

**小皿** 平底を呈し、身が浅く皿状を呈するもの。1点のみ出土した。

**有台鉢** 有台椀よりも深く、口径が大きいもの。糸切りの底部に張り付け高台が付く。

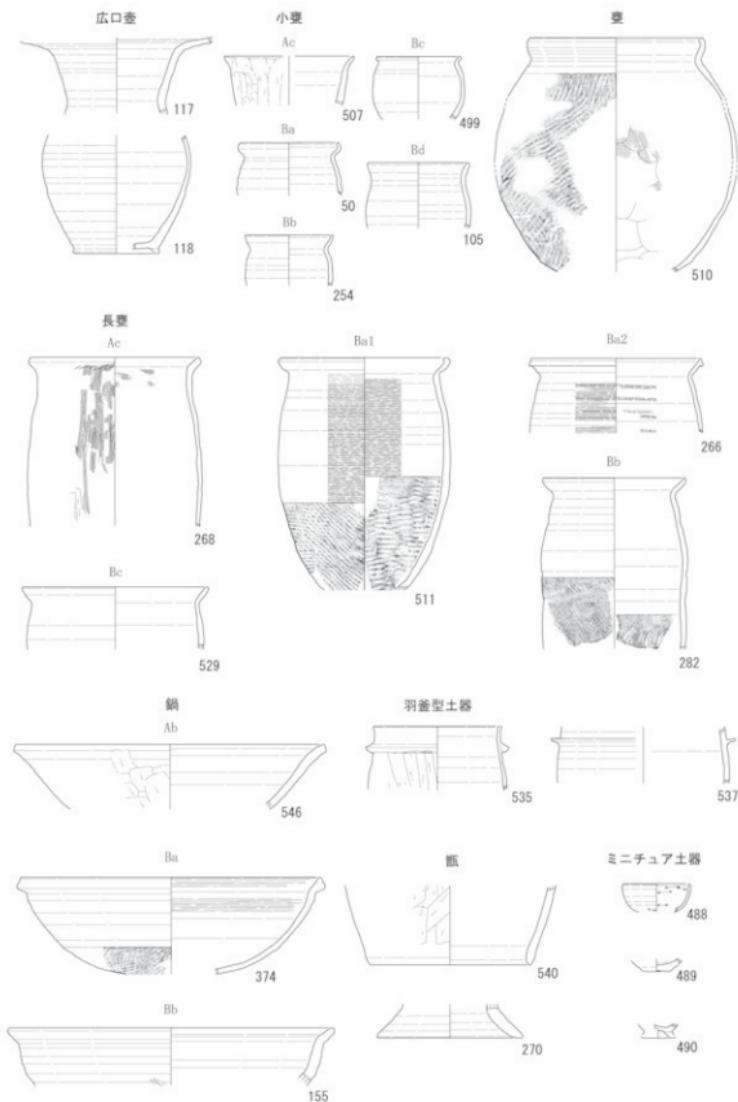
**鉢** 椭よりも底径が大きく、平底のもの。全体を知れるものではなく、底部の出土のみである。

**仏鉢型土器** 平らな底部から体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部が内側に屈曲するもの。出土量は少なく、須恵器の同器種は出土していない。

**広口壺** 須恵器の広口壺と同じ形態・技法で作られ、酸化焰焼成のものである。

**小甕** 非ロクロ成形のA類はわずかに3点であり、残りは全てロクロ成形のB類である。口縁部の形態に

## 土師器（2）



第8図 器種分類（3）

(510のみ1:8、その他1:6)

より4つ細分した。口縁端部が屈曲し、明確に受け口状になるものをa類、口縁端部内面の曲がりが弱く、ゆるく受け口状になるものをb類、口縁部が「く」の字状に外反するものをc類、上記にあてはまらないものをd類とした。b・c・d類は少なく、ほとんどがa類である。

**甕** 須恵器の甕と同じく胴部が丸くなり底部は丸底になると思われる。須恵器と同じ技法で作られているが、酸化焰焼成のものである。

**長甕** 口縁部形態により分類でき、小甕と同じ基準で分類した。さらに、a類については口縁端部の外面を下方につまみ出さないものを1類、つまみ出すものを2類とした。A類は少なく、掲載した1点はc類である。B類は、a類が大半を占め、その中でも1類が主体となっている。

**鍋** 口縁部形態により2つに分類した。口縁端部が上方や横方向などにつまみ出されるものをa類、口縁端部がつまみ出されることなく、丸く収まるものや平坦になるものをb類とした。A類は1点のみであり、B類のなかでも、口縁端部をつまみ出すa類が主体を占める。

**羽釜型土器** 口縁部の下に鶴が付くもの。全体を窓えるものはないが、鶴の断面形が三角形になるものと細長くなるものの2種類が認められる。出土量は少ない。

**甑** 全て底部資料である。単孔で底面はない。底部の形態は、まっすぐのものと、内傾するものと、外反するものに分けることができる。

**ミニチュア土器** 法量が小さく、通常の器種に入らないものをここに入れた。椀・壺・甕と思われる3点が出土している。

### 3 内面黒色土器（第9図）

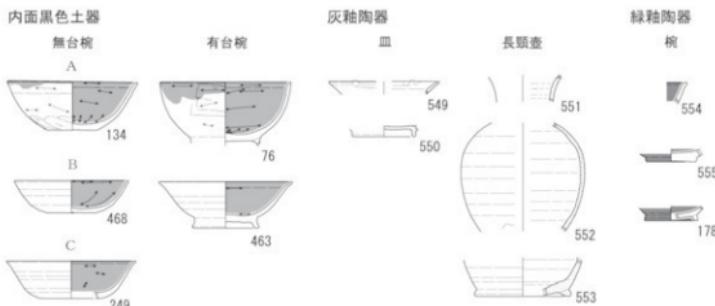
内面黒色土器は、食器具のみで、無台椀と有台椀が出土している。

**有台椀** 梗のうち、高台が付くもの。口縁部形態で分けられるが、数が少ないので分類はしなかった。

**無台椀** 原則として土師器無台椀の分類を適用した。しかし、再調整の有無に関しては基本的にはヘラケズリが施されるものであるため細分は適用していない。出土量は少ない。

### 4 施釉陶器（第9図）

緑釉陶器と灰釉陶器が出土している。緑釉陶器はわずかに4点の出土で全て椀である。灰釉陶器も同様にわずかに24点の出土で、皿と長頸壺が出土している。緑釉陶器は3点、灰釉陶器は5点を図示した。



第9図 器種分類(4)

(1:6)

## (C) 遺物各説

- SB166 (国版 51)** 1は小甕の下半部でP 9から出土している。2は長甕の口縁部でP 8から出土している。口縁部は大きく外反し、端部が上方に屈曲している。破片が小さいため、口径は出せなかった。
- SB316 (国版 51)** 3は土師器無台椀の口縁部でP 1からの出土である。口縁端部が外反している。
- SB317 (国版 51)** 4は土師器無台椀の底部でP25からの出土である。C 2類に分類される。
- SB318 (国版 51)** 5・6は須恵器無台坏の底部である。5は底部外面に墨書きが書かれており、3画以上の直線が直交する。7は小甕の底部で外面の底部付近にヘラケズリが施されている。8は長甕の口縁部で「く」の字状に屈曲したあと、湾曲しながら上方に伸び、受け口状の口縁部を形成する。
- SB348 (国版 51)** 9は須恵器長頭壺の下半部である。底部付近にヘラケズリが施され、高台は貼り付け高台である。高台には一部網代痕が残る。10～14は土師器無台椀である。破片資料が多く詳細は不明であるが、B類とD類が見られる。15は内面黒色土器の無台椀である。
- SB571 (国版 51)** 16・17は須恵器無台坏の口縁部である。18は土師器無台椀の底部で、内面は丁寧にヘラミガキが施されている。19は内面黒色土器の無台椀の底部である。
- SB574 (国版 51)** 20～22は須恵器無台坏である。20の底部外面には漆書きが見られる。「×」の一部か。22は在地産とみられる。23は土師器無台椀の口縁部で、B 3類に分類される。
- SB535 (国版 52)** 24は土師器小甕の口縁部である。口縁部が受け口状になるA類に分類される。
- SB608 (国版 52)** 25は土師器無台椀の口縁部である。B 3類に分類される。
- SB609 (国版 52)** 26は土師器無台椀の底部である。27は土師器長甕の口縁部でA 1類に分類される。
- SI 5 (国版 52)** 28は須恵器有台坏である。外端接地する方形の高台が付き、底部付近は丸みが強く椀に近い形態である。29は須恵器無台坏の底部である。30は内面黒色土器の無台椀で、外面の底部付近はヘラケズリが施されている。31・32は土師器小甕で、31は口縁部で頭部は弱く外反し、ゆるい受け口状になる。
- SI10 (国版 52)** 33は須恵器有台坏の底部で、方形で外端接地する低い高台が付く。34～38は須恵器無台坏である。口径 11.8～13.4cm、底径 6.6～8.4cm。器高 2.5～3.2cmと比較的まとまっており、体部は外側に大きく開く形態である。37の底部外面にはわずかに墨痕が見られる。39は土師器無台椀である。底部から体部が直線的に伸び、坏の形態に近い。40は土師器小甕の下半部である。
- SI46 (国版 52)** 41は須恵器無台坏の口縁部である。42は土師器無台椀の底部で、底径はやや小さい。
- SI49 (国版 52)** 43は土師器小甕の口縁部で、ゆるい受け口状になる。
- SI54 (国版 52)** 44～46は須恵器無台坏である。44の体部外面には墨書きが見られるが、文字は判読できない。47は土師器無台椀で外面底部付近はヘラケズリが施されている。身が深い大型の無台椀である。48は土師器鍋の口縁部で、「く」の字状に屈曲し口縁端部は上方につまみ出されている。
- SI70 (国版 53)** 49は土師器無台椀で、粗雑な作りである。50は土師器小甕、51は土師器長甕の口縁部でいずれも受け口状の口縁である。
- SI130 (国版 53)** 52は須恵器無台坏で、在地産の可能性がある。器壁にやや厚みがあり古い様相を持つ。53は小皿で、11世紀後半から12世紀初頭頃に位置づけられる。流れ込んだものか。
- SI211 (国版 53)** 54は須恵器無台坏で器壁が薄い。55は内面黒色土器の無台椀である。
- SI212 (国版 53)** 建物内の溝 SD254からの出土である。56は土師器小甕の底部、57は土師器長甕である。
- SI268 (国版 53)** 58は土師器無台椀で、内面にヘラミガキが施されている。59は土師器長甕、60は土師器鍋であるが両者とも口径は出せなかった。

SI429 (図版 53) 61 は内面黒色土器の有台椀である。高台は貼り付け高台である。

P 2 (図版 53) 62 ~ 64 は土師器無台椀である。62 は A 2 類に分類され、身が深い。63 は粗雑な作りである。

SX32 (図版 54) 65 ~ 73 は土師器無台椀である。口径 13.5 ~ 14.9cm、底径 5.6 ~ 7.0cm と比較的大きいものがまとまっている。67 は内面全体に漆が付着しており、漆塗りの椀とも考えられる。74 も土師器無台椀であるが、口径が 20cm を超え、鉢ともいえる特に大型のものである。75 は土師器有台椀の底部で、やや長い高台が付く。76 は内面黒色土器の有台椀でボウル状の椀に高台が貼り付けられている。

P43 (図版 54) 77 ~ 80 は土師器無台椀である。81 は土師器有台鉢の底部で、180 と同様の形態になると思われる。

SK280 (図版 54) 82 ~ 87 は土師器無台椀である。全て口縁端部が外反する D 3 類に分類される。87 は内面に漆が付着しており、漆バレットとして使われたものと考えられる。

P306 (図版 55) 88 ~ 91 は土師器無台椀である。88 は身が深い A 2 類で、他は口縁端部が外反する D 3 類である。

SK492 (図版 55) 92 ~ 96 は土師器無台椀である。94 は丁寧に撫でられている。96 は身が浅い。

SK493 (図版 55) 97・98 は土師器無台椀で、丁寧に撫でられている。99 は内面黒色土器の無台椀で、内面はヘラミガキが、底部外面付近にヘラケズりが施されている。

SK573 (図版 55) 100 ~ 104 は、土師器無台椀である。比較的口径が小さく、器壁は若干厚い。また、粗雑な作りで、101 や 102 のように歪みが大きいものもある。105 は土師器小漬で、くびれがゆるく口縁部はやや外側に開く。口縁端部は丸くおさまる。

SK594 (SX266) (図版 56) 106 は須恵器無台杯である。底部は欠損しているがやや深身の椀に近い形態になる。107 ~ 114 は土師器無台椀である。107 は法量が大きく深身で内面はヘラミガキが施されている。109 ~ 112 はやや深身の形態となり、109・110 は歪みが大きい。112 は体部外面に「中」の墨書が倒位で書かれている。115 は土師器無台椀の高台部分である。116 は内面黒色土器の無台椀で口縁部がわずかに欠損している。117・118 は土師器の広口壺で、須恵器模倣である。両者は接合しないが同一個体とみられ、太い頸部から大きく開く口縁を持ち、底部には高台が貼り付いている。

SK146 (図版 56) 119 は須恵器有台杯である。底部から直線的に立ち上がる深身の杯に方形の高台がやや踏ん張る形で貼り付けられている。本遺跡では古い様相を持つ。120 は須恵器無台杯で口縁に油煙痕が付着し灯明皿として使用されたとみられる。121 は須恵器長颈壺の頸部から口縁部で、断面に漆が付着し、漆雜ぎをしていた可能性がある。122 は土師器長甕で、123 は土師器小漬の底部である。124 は土師器鍋で外面上半にカキ目、下半に平行タタキが施される。

SK205 (図版 57) 125 は土師器無台椀である。器壁はやや厚く、体部は内湾しながら立ち上がる。

SK260 (図版 57) 126 ~ 131 は土師器無台椀である。126 は身が深く、129 ~ 131 は口径がやや大きい。132 は内面黒色土器の無台椀の底部片である。

SK482 (図版 57) 133 は土師器無台椀である。器壁は丁寧に撫でられている。134 は内面黒色土器の無台椀である内外面ヘラミガキが施され、外面底部付近にはヘラケズりが施されている。

SK 6 (図版 57) 135 は須恵器無台杯で器高が低く、体部は外に大きく開く。136・137 は土師器無台椀で 136 は内外面にヘラミガキが施されている。

SK 6B (図版 57) 138・139 は須恵器無台杯で、138 は底部外面に「×」の墨書がある。140 は土師器無台椀で B 2 類である。141 は土師器長甕で内面にカキ目が施される。

**SK42** (図版 58) 142～145は土師器無台椀である。142・144は油煙痕が残り、灯明皿として使われた可能性がある。147は土師器の鉢である。外面部底付近および底部切り離し後へラケズリが施される。148は須恵器の大型の甕で、口径 45cmを測る。外面には平行タタキが施されるが、内面上半は同心円當て具痕が見られ下半部はハケ目が施される。

**SK48** (図版 58) 149～151は須恵器無台坏で体部が外に開く。152は土師器小甕で口縁端部は内側に屈曲している。

**SK151** (図版 59) 153は須恵器無台坏で体部外面に墨書があるが、判読できなかつた。

**SK210** (図版 59) 154は須恵器の横瓶の胴部片で体部外面に平行タタキが施される。155は土師器鍋で口縁部は外側に屈曲し、口縁端部は丸くおさまる。

**SK216** (図版 59) 156は土師器無台椀の底部片である。157は内面黒色土器の無台椀で、内外面にヘラミガキが施される。158は土師器鍋で口縁部に織維が付着しており、その上から漆が付着している。

**SK259** (図版 59) 159は須恵器無台坏で、器高が低く体部が外に開く。

**SK361** (図版 59) 160～163は土師器無台椀である。160は身が深い形態になり、他は口縁端部が外反する。162・163は内面と外面口縁部に漆が付着しており、漆パレットとして使われた可能性がある。

**SK342** (図版 60) 164～170は土師器無台椀である。164は油煙痕が残っており灯明皿と考えられる。171は土師器有台椀になるものと考えられる。口縁端部は外反し、内外面が丁寧に撫でられている。172・173は土師器小甕である。172は状態が悪く体部表面が剥落している。173は小甕としてはやや大きい形態で、下半部はヘラケズリが施されている。166～169・173は小ピットからの出土である。

**SD347** (図版 60) 174～176は土師器無台椀である。175・176は口縁端部が外反する。177は内面黒色土器の有台椀で外に開く高台が付く。178は綠釉陶器の椀である。全面に淡緑色の釉薬が掛かり、胎土は暗青灰色で、底部には有段輪高台が付くことから、近江産と考えられる。179は土師器長甕の口縁部である。

**SK365** (図版 60) 180は土師器有台鉢である。口縁部は外反し端部は上方に折れ曲がっている。底部には細長い高台が張り付く。181は土師器小甕である。外面底部付近にヘラケズリが施される。

**SK378** (図版 61) 182は土師器長甕である。内外面にカキ目が施される。

**SK396** (図版 61) 183・184は土師器無台椀で、体部は内湾しながら立ち上がり、183は丁寧に撫でられている。

**SE677** (図版 61) 185～187は土師器無台椀である。186は作りが粗雑で、器壁が厚い。187は身が深く鉢に近い形態で、底部はヘラで撫でられている。内面に条線が巡っており、金属器模倣の可能性がある。内外面前面に煤が付着しており、井戸を埋める儀式に使われた可能性が高い。

**SD 3** (図版 61) 188は須恵器無台坏で、A類に分類される。

**SD 7** (図版 61～66) 189・190は須恵器坏蓋である。189は扁平なつまみを持ち、190は山笠形で端部が下方に屈曲し断面三角形になる。両者とも内面に墨痕が残っており、硯として利用されたとみられる。191・192は須恵器有台坏である。192は身が浅く椀に近い形態で、有段の高台が付く。193～230は、須恵器無台坏で、全て佐渡小泊産である。口径は 11.5～14.0cmであるが 12cm台が主体である。底径は 6.4～8.3cm、器高は 2.6～3.4cmである。全て底部ヘラ切りである。201・206・208・219～221は油煙痕が付着しており、灯明皿として使われたと考えられる。193・196～198・205・207・209・216・225・227・229は墨書土器である。196・216は体部外面に「三」、198・229は底部外面に「廿」、205は体部外面に「H」のようなもの、207は底部外面に「前カ」、225は底部外面に「千」、227は底部外面に「寺」が書かれて

いる。他は、判読できなかった。215は底部外面に「×」の墨書が認められる。230は内面に墨痕が残り、硯に転用されていた。231～247は土師器無台椀である。口径は11.8～17.2cmであるが、11.8～13.6cmと14.5～17.2cmの大きく2法量に分けられる。底径は5.0～8.2cmに分布し、器高は3.4～6.1cmに分布するがほとんどが4.0cmを超える。231～236・245はヘラミガキやヘラケズリ、底部ヘラケズリなどの再調整が施される。246は作りが粗雑である。244は底部に段を持つような形態となっており、縁釉陶器椀の模倣の可能性がある。233・235・241・243は油煙痕が残り、灯明皿として使われたとみられる。246・247は墨書き土器で、体部外面に書かれているが、内容は判読できなかった。248・249は内面黒色土器無台椀で、249は底径が大きい。250は須恵器長頸壺の胸部、高台が欠損している。251～259は土師器小甕である。すべてロクロ成形で、底部の確認できるものは回転糸切りであるが、255は静止糸切りである。260～269は土師器長甕である。260～267はロクロ成形で、全体を知りえるものはないが、底部が丸底になると思われる。268は、非ロクロ成形で、ハケ目調整される。口縁部は大きく外反し、端部は平坦になっている。270は甕の底部を見られる。外側に開く形態でロクロ成形である。271～274は土師器鍋である。底部を欠損しているが丸底になるものと考えられる。全てロクロ成形で下半分に平行タタキが見られる。

**SD 8** (図版 67) 275～277は土師器無台椀である。275は内外面へラミガキが施され、底部もヘラケズリされている。277は底部付近にヘラケズリが見られる。278は内面黒色土器の無台椀で、体部が外に大きく開く。279～281は土師器小甕である。279と280は接合はしないが同一個体である。279・281ともに受け口状の口縁部である。282は土師器長甕で、口縁部はゆるい受け口状になる。体部下半には外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が見られる。283は土師器鍋で、口縁端部はわずかにつまみあげられる。

**SD97** (図版 67) 284は須恵器有台环である。方形の高台がやや内傾して貼り付く。

**SD131** (図版 67) 285は須恵器無台环である。底部片のみが器壁は薄い。底部外面に「×」の墨書がある。

**SD153** (図版 67) 286は須恵器無台环である。体部外面及び底部内面に「土」のような墨書が見られるが、内容は判読できない。287は土師器小甕である。内外面の口縁部に煤・油煙痕が付着している。

**SD267** (図版 67) 288～290は須恵器無台环で、全て墨書き土器である。288は底部外面に「什」と考えられる墨書、289は体部外面に上半は不明だが下半は「十」、290は体部外面に「巾」が書かれている。291は、土師器長甕の口縁部で、わずかに受け口状になる。

**SD273** (図版 68) 292は須恵器無台环である。底部外面に「干」のような墨書が認められる。「千」字の変形したものと考えられる。在地産とみられる。

**SD302** (図版 68) 293は須恵器無台环で、底部内外面に墨書が認められる。内面は「×」であろうか。外は判読できなかった。

**SD480** (図版 68) 294は須恵器無台环で、底部から体部にかけては丸みを帯びている。295は土師器無台椀である。

**満群 2** (図版 68) 296・297・300は須恵器無台环である。300は底部外面に「什カ」が墨書きされている。また、内面には墨痕が残っており硯として転用されていた。298は土師器小甕の底部である。299は土師器長甕の口縁部で、断面に漆が付着しており漆継ぎをした可能性がある。

**満群 3** (図版 68・69) 301・302・306は須恵器無台环である。全て体部が外側に大きく開く形である。304・305・307・308は土師器無台椀である。全てB類に分類され304はヘラミガキが、305は外面部付近にヘラケズリが施される。303は須恵器小甕で、方形の高台が付き内端接地している。口縁部は少し外に開きながらまっすぐ伸びる形態である。309・310は土師器長甕である。311・312は土師器鍋である。

311は口縁端部が上方につまみ出され、312は平坦面を形成している。

**満群4** (図版69) 313は須恵器壺蓋で、山笠形で端部を下方に折り曲げている。内面にわずかに墨痕が残り硯として使用された可能性がある。314～316は須恵器無台壺である。314は口径が11.0cmと小さい。315は在地産とみられる。

**満群5** (図版69) 317は須恵器無台壺である。底部外面に墨書があるが、欠損部が多く判読不能である。318は須恵器壺蓋である。内面に墨痕が残り、硯として転用された。319は土師器無台椀で、内面はヘラミガキ、外面底部付近にヘラケズリが施される。

**満群6** (SX4) 320は須恵器有台壺である。短い方形の高台が付き、身は深い形態である。321～324は須恵器無台壺である。いずれも比較的身が浅く体部が外側に開いている。322・324は油煙痕が付着しており、灯明皿として使われたと思われる。325・326は土師器無台椀である。325も灯明皿として使われたと考えられる。326は内面がヘラミガキされ、丁寧な作りである。327は口縁部しかないと有台鉢になると考えられる。口縁部はゆるく受け口状になっている。328・329は土師器小甕である。いずれもロクロ成形で328は外面が剥離している。330は土師器長甕の口縁部である。

P156 (図版70) 331は土師器無台椀である。底部外面に墨書が見られるが欠損部が多く判読不能である。

P278 (図版70) 332～334は土師器無台椀である。332は丸みが強いA類、333・334は口縁端部が外反し、334は作りが粗雑である。

P527 (図版70) 335は土師器無台椀で、底径がやや大きい。336は土師器長甕で、口縁部は「く」の字に外反する。

**SX1** (図版71～74) 遺物は主に、基本層序のVII層に相当する覆土下部より出土した。また、SX1内の14H・I、15H・Iグリッドにおいて検出された風倒木痕(立木痕)からも遺物が出土しており(344・349・351・353・374・434)、ここでは一括して扱う。337～341は須恵器無台壺である。338を除く4点が墨書き土器である。337は底部外面に「×」、339は底部から体部にかけての外面に「鳥」が、340は体部外面に「三」が書かれている。341は底部外面に書かれているが、判読不能である。342は土師器有台椀である。口縁部は大きく外反し、底部は長い高台が外側に開くように付いている。343～356は土師器無台椀である。口径は11.0～16.7cmであり、11.0～12.1cmと13.6～16.7cmの大きく2法量に分かれる。底径は4.0～6.6cmで、5.0～5.5cmと6.2～6.6cmの大きく2法量に分かれる。器高は3.1～6.2cmである。343は底部外面に「千」が墨書きされている。345・346はヘラミガキや底部付近および底部の外面にヘラケズリが施される。357は仏鉢型土器である。底部は欠損しており、全体を知ることはできないが487のように平底になるものと思われる。体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁端部は内側に屈曲した形態になっている。358～360は内面黒色土器の無台椀である。359は内面に漆がきれいに付着しており、漆塗りの椀の可能性もある。360は器厚がやや厚い。361～363は須恵器長頸甕である。全形を窺える資料はないが、全てロクロ成形で、肩が丸みを帯びており、高台を持つ形態になると思われる。361は体部外面に漆が付着している。364は須恵器直口甕でSI429・SD7・SD431・包含層から出土の破片と接合している。もともとSI429で使われていた可能性もある。口縁部は欠損しているが、肩は丸みを帯び、底部は平底となる。胴部は外面に格子目タキ、内面に同心円文で具痕が残り、胴部外面の底部付近にはヘラケズリが施される。365～368は土師器小甕の底部片である。いずれも回転糸切りである。369～371は土師器長甕の口縁部である。いずれもロクロ成形で、下半は欠損しているが、丸底になる器形である。371の口縁端部は外面下方につまみ出されている。372～377は土師器鍋である。全てロクロ成形で内外面にカキ目を残

すものがほとんどである。372～375は口縁端部を上方あるいは下方につまみ出し、376・377は單口縁となり、端部が丸くなるものと平坦になるものがある。

**SX120** (図版74) 378は土師器無台椀で、丁寧に撫でられている。379～381は土師器小壺である。381は底部の切り離しは静止系切りで、胸部は球胴型になる。

**SX400** (図版74) 382は須恵器の無台壺である。底部外面に「×」が漆で書かれている。

**遺構外** (図版75～87) 383・384は須恵器壺蓋である。山笠形の身に扁平なつまみが付き、端部は下方に折れ曲がる。383は外面に、384は内面に墨痕が残り、硯として使われたものである。385～389は須恵器有台壺である。短い方形の高台を持ち、外端接地するものがほとんどであるが、388はやや丸みを持った高台で内端接地する。また、388は在地産とみられる。387は底部外面の高台内に墨痕があり、硯に転用されていたものである。390～412は須恵器無台壺である。口径は11.6～14.4cmであるが、391・408が約14cmと大きい。残りは13.0cm以内におさまる。底径は6.4～8.1cmであるが、ほとんどが7cm台である。器高は2.0～3.6cmである。全て底部ヘラ切りで、ほとんどが佐渡小泊産であるが、407是在地産とみられる。392・400・404は油煙痕が付着しており、灯明皿として使われたと思われる。411は内面に墨痕が残っており、硯として転用されている。390・391・397～399・412は墨書き土器である。391・412は体部外面及び底部外面に「卍」が、399は底部外面の端に「×」が書かれている。その他は、体部や底部の外面に文字や記号のようなものが見られる。401は底部外面に「×」とみられる漆書が残っている。408は内面に漆がわずかに付着している。413は体部がまっすぐ上に伸び、口縁部は外側に屈曲し端部は上方に屈曲して受け口状の口縁になっている。形態からは折縁壺のような形態であるが、口径が小さく、焼台の可能性もある。414は土師器の壺蓋である。端部の小片しかないため口径は出せなかつたが、山笠形で端部が下方に屈曲する須恵器の模倣である。415は有台皿で1点のみの出土である。口径の小さな皿に長めの高台が貼り付く形態で、灰釉陶器皿の模倣の可能性がある。416～418は土師器有台椀の底部で、いずれも外に開く高台が付く。419～462は土師器無台椀である。口径は10.4～16.7cm、底径4.2～7.6cm、器高3.3～5.9cmである。A類は420の1点で、他はB類がやや多くC、D類がほぼ同数である。再調整を施すものも定量存在する。422・426・457・461は油煙痕が付着し、灯明皿として使われたと思われる。423・438・439・441・448は墨書き土器である。423は底部外面に「ル」のような文字とも記号ともみられる墨書きが書かれている。438は底部外面の端に「加」が、439は体部外面に「手」が、441は体部外面に「大」が書かれている。448は「千」のように見えるが、全体が窓えず判読できない。423は内面に多量の漆が付着しており、赤外線撮影を行ったところ、墨書きが確認され漆紙が付着していることが判明した。紙はそのほとんどが失われており、器面付近にわずかに残った部分に墨書きが確認された。小林昌二氏に見ていただいたところ、「魄」と読めそうな文字が見えるとの御意見をいただいた。419・440は内面に漆が付着している。463～465は内面黒色土器の有台椀である。全形が分かるものは463のみで、残りは底部片である。463は口縁部が外反しやや深身の椀に外に開く高台が付く。465は内面に漆が付着している。466～470は内面黒色土器の無台椀である。466は口径17.0cmで身も深く、大振りである。また、内面に漆が付着している。471は須恵器の小壺で底部片である。全形は窓えないが303に類似した器形になると思われる。底部には方形で外に開き内端接地する高台が、貼り付けられている。472は須恵器広口壺である。頭部片のみが出土している。473・474は長頸壺である。全体を知りえるものはないが、いずれも肩に丸みを帯び、長い頸部に外反する口縁が付くものである。473は胸部下半にヘラケズりが施されている。475は突帶付壺である。この1点のみの出土である。胸部下半とみられ、底部には、欠損しているが、高台が付く。胸部には、突帶が巡り、

等間隔に切り込みが入っている。詳細は不明であるが、器形は上越市今池遺跡出土の有耳壺や長岡市八幡林遺跡出土の短頸壺と類似したものになると考えられる。しかし、上記2例は突帶部分に耳が付くものであるが、475は耳が付かず切り込みが入る。これが耳の省略形であるとすれば、上記2例よりも後出するものと考えられる。476は須恵器横瓶の胴部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が残る。477～480は須恵器甕である。477～479は口縁部で、いずれも外反し端部を外側につまみ出す。477は外面に「＊」のヘラ記号がある。480は胴部でSK493出土片とも接合する。外面に格子タタキ、内面上半に同心円、下半に平行當て具痕が残る。481～483は有台鉢である。いずれも破片資料で全形は見えないが、いずれも180度に類似した形態になるものと思われる。484～486は鉢の底部片か。487は仏鉢型土器である。底部は平底で、丸みを持って立ち上がり、口縁端部は内側に屈曲する。SX 1出土の357と類似する。488は椀、489は甕、490は高台が付く壺のミニチュア土器である。491～509は土師器小甕である。491～506はロクロ成形で、底部を確認できるものでは、切り離し技法が回転糸切りと静止糸切りの2種類がある。また、胴部にカキ目が見られるものもある。507～509は非ロクロ成形で、体部外面に縱方向のヘラケズリがみられる。ロクロ成形の小甕のように口縁部が「く」の字状に屈曲するものではなく、弱く外反し端口縁をもつ。510は、土師器の甕である。SB317～P 5及びSK280からも破片が出土している。また、ほとんどが包含層であるが、11Kグリッドを中心 SB317を含めてその周辺のグリッドからの出土であることから、SB317で使用されていた可能性が高い。須恵器の甕の形態と同じく丸い胴体に「く」の字状に屈曲した広い口縁が付き、基本的には須恵器模倣の甕である。しかし、口縁端部を見てみると、須恵器では外に聞くが、これは内側に屈曲し、土師器煮炊具によく見られる口縁端部の形態である。511～534は土師器長甕である。ロクロ成形によるもので、丸底になるものである。胴部上半はカキ目を残すものもあり、胴部下半は外面に平行タタキ、内面に同心円當て具などの痕跡を残す。516は胴部外面に斜位の工具痕が残る。533は内面にハケ目がみられる。535～537は土師器羽釜型土器である。長い胴部で口縁部直下に鈎が付く形態である。3点のみの出土で全形が分かるものは出土しなかった。535は非ロクロ、536・537はロクロ成形である。鈎の断面形で2種類に分類される。535は断面三角形の鈎が付き、鈎から下の胴部にはヘラケズリが施される。ヘラケズリは下から上への縱方向であり、鈎にヘラがぶつかった痕跡が残る。これらの特徴は、群馬県北部で盛行する月夜野型(中沢1986)と一致する。また、魚沼市金屋遺跡からまとまって出土しており、伝播経路が窺える。536・537は細長い鈎が付くものである。小片のため口径は出せなかつた。538～540は甕の底部である。538・540は内傾し、539はまっすぐの端部である。また、外面に煤が付着しているが、底部から約2.7cmまでの部分には煤が付着せず、何かに乗せて使用していたものと考えられる。539・540は胴部外面にヘラケズリが見られる。541～548は土師器鍋である。全てロクロ成形によるもので、丸底になるものと思われる。上半部はロクロナデとカキ目がみられ、下半は外面平行タタキ、内面同心円當て具痕やハケ目が残る。544・546は外面に一部ヘラケズリが残る。548は他に比べて、深い形態になる。549～553は灰釉陶器である。549は内面に段を持ち、口縁部にユビオサエがある輪花段皿である。釉薬は透明に近く漬け掛けである。550は底部で皿であろうか。549とは同一個体ではないと思われる。両者とも東濃産とみられ光が丘1号窯～大原2号窯の時期に位置づけられる。551～553は長頭壺でいずれも狼投産とみられる。551は頭部で、2次焼成を受けている。552は蘿型の胴部である。553は底部で端部が丸い高台が付く。554・555は綠釉陶器の椀である。いずれも軟陶で濃緑色の釉薬が掛かっており、畿内産と思われる。554は椀の口縁部で、555は有台椀の底部で、削り出しの円盤状高台である。

### 第3節 土製品

**円筒型土製品** (図版 87) 556・557は円筒型土製品で、包含層からの出土である。非口クロ成形である。556は高さ4.5cmと低く、上下端部は平坦になっている。煤が付着しているため、カマド等で使用されたものと思われる。557は端部片で平坦になっている。

**土錘** (図版 87・88) 土錘は、総点数171点が出土した。管状(558～569・577～592)と、球状(570～576・593・594)の大きくわけて2種類の形態に分かれる。内訳は、管状土錘が143点、球状土錘が28点である。管状土錘は長さが2.4～7.4cmに分布するが、長さにより4.2cm未満を小型、4.2～5.1cmを中型、5.2cm以上を大型として分けることができる。太さは、概ね1.0～2.0cmの間にわたり、大きな違いはない。端部を見てみると、平坦に加工しているもの(558・561・563・565・566・568・579・581・586～588)、わずかに面になるもの(560・567・582・591・592)、加工されないもの(564・569・580・583・585・589・590)に分けることができる。端部の加工の違いによる数量の違いや、サイズの偏りなどはみられない。球状土錘は、管状土錘に比べて数は少ない。サイズは最大径2cm前後で、比較的まとまっている。

### 第4節 石製品

**石錘** (図版 88) 595は包含層からの出土である。本資料1点のみである。やや歪んだ球体の石に抉りを入れてつまみ状の部分を作り出している。サイズは長さ4.4cm、最大径4.3cm、重量81.9gで、石材は砂岩である。一部赤彩されている。抉りの部分に糸等が巻けるような形状になっていることから、錘と想定した。

**椎状錘** (図版 88) 596は包含層からの出土である。石材は砂岩である。形態はやや縦長の三角形で、頂部は丸みを持つ。もう少し厚さがあったと思われるが欠損している。また、被然している。表面は全面丁寧に研磨され、上部に径1cm弱の孔が穿たれている。

**砥石** (図版 88) 14点あり、全て遺構外から出土した。遺存状況の良好な7点を図示した。597～603の内、602以外は凝灰岩である。602は砂岩である。597～601は四角い棒状に近い形態で、複数面を砥面として使用されている。また、598を除いて擦痕が残っている。602は撥形の扁平な形状で、広い面の表裏のほか狭い面の側面も使用されている。603は長楕円形の石材を使用しており、表面と左側面は全面が使われ、真ん中が最も薄んでいる。また、持って底ぐには石が大きいことから置いて使われたものと思われる。表面にはやや深めの溝が入っており、細いものを研いだ痕跡がある。

### 第5節 木製品

**柱根** (図版 89・90) 全部で22点出土している。その内、実測に耐えうるもの12点を掲載した。樹種同定を行っているので詳細は「第VI章第1節」で述べているが、ほとんどがクリである。SB608-P5から出土した614はヤマグワ、掲載していないがSB317-P15出土の柱根はサクラ属であった。木取りは多くが芯持材で、他に分割状や半裁状のものがある。604～611はSB317からの出土である。全て底面を平らに加工している。604・607は底部付近に抉りが入っている。612・613はSB348からの出土である。612は底面を平らに加工している。木取りは芯持丸木である。613は、底面を両側から斜めに加工し、尖らせている。615はP426からの出土で、木取りは芯持丸木である。底面は少し尖らせるように加工されている。

**漆桶** (図版 90) 616は包含層からの出土で、漆桶である。本来は、曲げ物状の木製品に漆が何重にも重なつて付着していたものと考えられ、木製品の部分が朽ち果てた結果、漆の部分だけが残ったものと考えられる。後述の四柳氏の分析(第VI章第3節)によれば生漆を保管していた小型の容器であることが判明しており、

本遺跡で漆を使った作業が行われていたことが窺える。

**その他** (国版 90) 617は包含層からの出土である。隅丸長方形の板に柄が付くような形状である。厚さは薄く約0.5cmである。618は棒状の木製品で、端部を加工し尖らせている。619は包含層出土で曲物の蓋板である。2ヶ所に小さい孔が穿たれており、縁辺付近に穿たれている孔には側板との連結に使われたと思われる樹皮がわずかに残存している。621はSE677からの出土で、弓状に加工された木製品である。樹種はトネリコ属でわずかに樹皮が残っている。大きさは、直径約1.5cm、長さ75cm以上のものである。実際に弓かどうかは、上下先端部が欠損しているため、判断できない。620は木筒である。「さけ口たし」と読める。Ⅷ層からの出土であるが、字体から近世の所産であると考えられる。

## 第6節 錫冶関連遺物

炉壁・羽口・椀形錫治津・鉄滓、被熱粘土塊が出土したが、総重量は2.2kgと少量である。内訳は炉壁(津付含む)0.03kg、羽口0.49kg、椀形錫治津1kg、鉄滓0.17kg、被熱粘土塊0.47kgとなる。炉壁には錫治津が付着する資料も見受けられた。また、形状より椀形錫治津とその他の鉄滓に分類したが、細片のため形状の判断が困難で、本来椀形錫治津の一部であったものも鉄滓に含まれる可能性がある。点数による内訳では羽口の17点が最も多く、椀形錫治津の13点がこれに次ぐ。錫冶関連遺物全体のおよそ6割がSX1を含む自然地形ないしは遺構外からの出土であり、特定の建物ないしは遺構に集中する傾向は認められなかつた。また、被熱粘土塊に限ると3割が堅穴建物出土で、遺構外出土量が2割を切る。錫冶関連としてだけではなくカマドの構築材が含まれる可能性が高い。

羽口 (国版 90) 622はSB348-P3上面から出土した。先端部が欠損し、体部のみが残存する。最大径6.9cm、通風孔径2.4cmを測る。先端部側は被熱し黄灰色から暗灰色を呈しており、先端部寄りが発泡する。胎土色は灰色～橙色を呈し、内外面ともに先端部～基部方向の成形痕が残る。胎土には軟質の白色粒子や砂粒を含む。623・624は共にSX1の覆土下層から出土した。2点とも同一グリッドからの出土であり、同一個体である可能性がある。2点とも先端部から体部にかけての破片で、外面は黒色に滓化・発泡する。体部は黄灰色を呈し、内面は橙色である。胎土にはスサが混ざる。623では通風孔部は径2cm以上となる。

椀形錫治津 (国版 90) 625はSD7から出土した。同一グリッドから出土した2片が接合した。最大径8.6cmを測る。上面中央部付近は窪み、下面中央部付近が椀形突出する。上面側の側面付近および下面に径0.2cm以下の気泡が認められる。また、上面付近は径1.5cm程度の気泡が重なる。

## 第7節 金属製品・錢貨

出土量はわずかであり、帶金具・鉄釘・板状鉄製品・錢貨合わせて6点であった。ここでは帶金具および錢貨を報告対象とし図示した。

**帶金具** (国版 90) 626は遼方の裏金具であり、SI212のカマド底面より出土した。平面方形の薄板状を呈し、一辺2.9cm、厚さ1.5mm、最大厚4mmを測る。表裏面共に全体が綠青に覆われており、表裏面とも平滑ではない。X線撮影により、四隅よりおよそ0.5cm内側の位置に4箇所の鋤孔が認められた。ただし、右下の鋤孔のみ下辺に近接するように穿たれており、鋤孔を繋ぐプランは正方形にならない。孔径は0.18cmを測る。写真では鋤孔が二重円状を呈していることから、鋤足の一部が残存している可能性が考えられる。

**錢貨** (国版 90) 627は遺構外15K17グリッド、Ⅶ層から出土した。元祐通寶(初鑄年1086年)で、錢文は篆書体が用いられている。背側は摩耗によるためか平滑である。

# 第VI章 自然科学分析

## 第1節 上条遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### (A)はじめに

上条遺跡（新潟県長岡市上条町地内）は、信濃川右岸に分布する冲積地の微高地に立地する。本遺跡では、発掘調査の結果、9世紀後半から10世紀前半頃の集落であることが明らかとされており、堅穴建物跡や掘立柱建物跡、井戸跡のほか、踏跡と想定される小溝群、土坑墓や木棺墓、火葬墓などの遺構が検出されている。

本報告では、発掘調査成果から課題とされた、1) 掘立柱建物跡の年代、2) 柱根や木製品などの樹種および木材利用、3) 古植生および植物利用、4) 木棺墓・火葬墓とされる遺構の遺体埋納などの検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

### (B)放射性炭素年代測定

#### 1. 試料

放射性炭素年代測定に供された試料は、2棟の掘立柱建物 (SB317, SB348) に伴う木柱（柱材）4点である。SB317試料は、P 1、P11の木柱2点が選択されており、面取りなどの加工痕が認められる芯持材である。一方のSB348試料は、P 4A、P11の木柱2点が選択されており、いずれも芯持丸木である。

試料の採取は、資料に認められた加工痕を避け、観察範囲内に残存する最外年輪から2～3年内側の3～4年分に相当する部位を対象とし、当該箇所より採取した木片を測定に供している。

#### 2. 分析方法

測定試料に土壤や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをビンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバッケグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に <sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C の測定も行うため、この値を用いて δ<sup>13</sup>C を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基準とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma/68%)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1 (Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ

Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

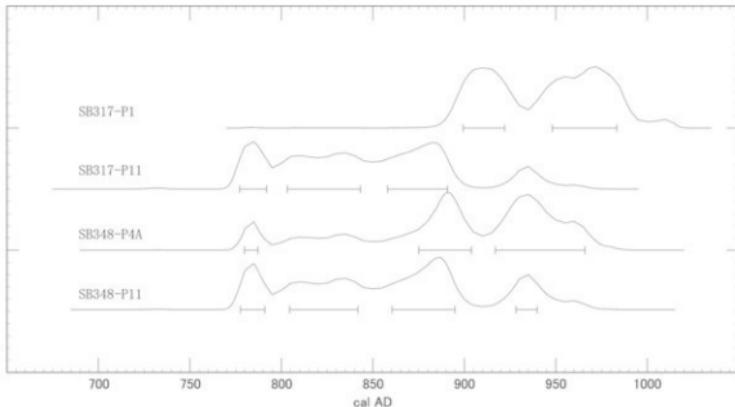
暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C 濃度の変動、及び半減期の違い (<sup>14</sup>C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正是、CALIB 7.0.1 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正結果は  $\sigma \cdot 2 \sigma$  ( $\sigma$  は統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95.4% の確率で存在する範囲) の値を示す。また、表中の相対比は、 $\sigma \cdot 2\sigma$  の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果			相対比	測定機関 Code No.
				$\sigma$	cal AD 899 - cal AD 922	cal BP 1,051 - 1,028		
SB317-P1 柱根 木材(クリ)	1,100 ± 20	-27.68 ± 0.43	1,098 ± 24	$\sigma$	cal AD 899 - cal AD 922	cal BP 1,051 - 1,028	0.405	IAAA- 141364
				$2\sigma$	cal AD 890 - cal AD 994	cal BP 1,069 - 956	1.000	
				$\sigma$	cal AD 777 - cal AD 792	cal BP 1,173 - 1,158	0.182	
				$2\sigma$	cal AD 803 - cal AD 843	cal BP 1,147 - 1,107	0.421	
SB317-P11 柱根 木材(クリ)	1,170 ± 20	-26.63 ± 0.61	1,172 ± 23	$\sigma$	cal AD 858 - cal AD 891	cal BP 1,092 - 1,059	0.397	IAAA- 141365
				$2\sigma$	cal AD 773 - cal AD 898	cal BP 1,177 - 1,052	0.925	
				$\sigma$	cal AD 924 - cal AD 945	cal BP 1,026 - 1,005	0.075	
				$2\sigma$	cal AD 780 - cal AD 787	cal BP 1,170 - 1,163	0.060	
SB348-P4A 柱根 木材(クリ)	1,150 ± 20	-28.00 ± 0.52	1,147 ± 24	$\sigma$	cal AD 875 - cal AD 964	cal BP 1,075 - 1,046	0.353	IAAA- 141366
				$2\sigma$	cal AD 917 - cal AD 966	cal BP 1,033 - 984	0.587	
				$\sigma$	cal AD 777 - cal AD 792	cal BP 1,173 - 1,158	0.067	
				$2\sigma$	cal AD 802 - cal AD 846	cal BP 1,148 - 1,104	0.130	
SB348-P11 柱根 木材(クリ)	1,160 ± 20	-27.38 ± 0.59	1,164 ± 23	$\sigma$	cal AD 855 - cal AD 972	cal BP 1,095 - 978	0.803	IAAA- 141367
				$2\sigma$	cal AD 778 - cal AD 791	cal BP 1,172 - 1,159	0.157	
				$\sigma$	cal AD 805 - cal AD 842	cal BP 1,145 - 1,108	0.313	
				$2\sigma$	cal AD 860 - cal AD 896	cal BP 1,090 - 1,055	0.421	
SB348-P11				$\sigma$	cal AD 928 - cal AD 940	cal BP 1,022 - 1,010	0.109	IAAA- 141367
				$2\sigma$	cal AD 774 - cal AD 901	cal BP 1,176 - 1,049	0.839	
				$\sigma$	cal AD 920 - cal AD 953	cal BP 1,030 - 997	0.157	
				$2\sigma$	cal AD 958 - cal AD 961	cal BP 992 - 989	0.004	

第 4 表 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

## Probability Distributions

第 10 図 暦年較正結果 (1  $\sigma$ )

### 3. 結果および考察

掘立柱建物を構成する柱根の同位体効果による補正を行った測定年代（補正年代）は、SB317-P1が $1,100 \pm 20$ yrBP、同P11が $1,170 \pm 20$ yrBP、SB348-P4Aが $1,150 \pm 20$ yrBP、同P11が $1,160 \pm 20$ yrBPである（第4表）。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果（ $\pm 1\sigma$ ）は、SB317-P1がcalAD 899・calAD 983、同P11がcalAD 777・calAD 891、SB348-P4AがcalAD 780・calAD 966、同P11がcalAD 778・calAD 940である（第4表・第10図）。

上条遺跡は、発掘調査成果から9世紀後半～10世紀前半頃の集落と推定されている。2棟の掘立柱建物に伴う柱根の暦年較正年代（ $\pm 1\sigma$ ）は、SB317が9世紀末から10世紀後半頃（P1）および8世紀後半から9世紀後半頃（P11）、SB348が8世紀後半から10世紀後半頃（P4A）および8世紀後半から10世紀前半頃（P11）までの範囲（第10図）を示しており、上記した調査所見より推定されている集落の年代観とも概ね整合する。なお、今回の得られた年代の詳細な評価にあたっては、資料に樹皮が認められず、表面に面取りなどの加工が認められることや、これらの加工痕を避けて残存する最外年輪のやや内側より試料を採取していることなどから、実際の使用（伐採）年代より古い年代を示している可能性があることを考慮する必要がある。

#### （C）樹種同定

##### 1. 試料

試料は、3棟の掘立柱建物に伴う柱根20点（SB317:16点、SB348:3点、SB608:1点）、井戸跡（SE677）から出土した弓状加工品1点、立木痕より出土した自然木2点（SX399、SX400）、さらに遺構外より出土した曲物蓋板1点（II-E3 VIII層）と遺構外の地山より出土した自然木2点（II-K11、12K3）の計26点である。各資料の詳細（名称、木取りなど）は、結果とともに第5表に併記したので参照されたい。

##### 2. 分析方法

資料の木取りを観察した後、剃刀を用いて木口（横断面）・極目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（泡水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバラートとする。プレバラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、[島地・伊東,1982]、[Wheeler他,1998]、[Richter他,2006]を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、[林,1991]や[伊東,1995;1996;1997;1998;1999]を参考にする。

### 3. 結果

同定結果を第5表に示す。分析に供された柱根や木製品および自然木は、針葉樹1分類群（スギ）と広葉樹6分類群（オニグルミ、クリ、ヤマグワ、カツラ、サクラ属、トネリコ属）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

#### ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晚材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔

遺構名等	グリッド	層位	器種	木取り	種類 (分類群)
SB317-P1			柱根	芯持材(面取?)	クリ*
SB317-P2			柱根	分割状	クリ
SB317-P4			柱根	芯持丸木	クリ
SB317-P6			柱根	半裁状	クリ
SB317-P8			柱根	芯持丸木	クリ
SB317-P9			柱根	分割状(破片)	クリ
SB317-P11			柱根	芯持材(面取)	クリ*
SB317-P13			柱根	分割状	クリ
SB317-P14			柱根	半裁状	クリ
SB317-P15			柱根	芯持材	サクラ属
SB317-P19			柱根	芯持材(破片)	クリ
SB317-P20			柱根	芯持丸木	クリ
SB317-P21			柱根	芯持丸木	クリ
SB317-P22			柱根	半裁状	クリ
SB317-P23			柱根	破片	クリ
SB317-P24			柱根	半裁状	クリ
SB348-P4A			柱根	芯持丸木	クリ*
SB348-P6			柱根	分割状	クリ
SB348-P11			柱根	芯持丸木	クリ*
SB608-P5			柱根	芯持材	ヤマグワ
SE677			弓状加工材	芯持丸木	トネリコ属
SX399			自然木	芯持材	カツラ
SA400			自然木	芯持材	オニグルミ
	1IE3	VII層	曲物蓋板	経目	スギ
遺構外	1IK11	地山層	自然木	芯持材	カツラ
	12K3	地山層	自然木	芯持材	カツラ

\*放射性炭素年代測定試料

第5表 樹種同定結果

道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

- ・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圈部は3-5列、孔圈外への移行は緩やかで、晚材部では単独または2-4個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。

- ・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-30細胞高。

- ・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-6個が複合、年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-30細胞高。

- ・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圈部は1-3列、孔圈外で急激に径を減じたのち、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

#### 4. 考察

##### (1) 柱根・木製品

掘立柱建築を構成する柱根や木製品の樹種同定の結果、針葉樹のスギ、落葉樹のクリ、ヤマグワ、サクラ属、トネリコ属の計5種類が認められた。スギは、主に低地に生育する常緑高木で、木材は木理が直通

はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または2-3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1-3細胞幅、1-40細胞高。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。

で割裂性が高く、加工は容易である。クリとサクラ属は、二次林などに生育する落葉高木で、クリは重硬で強度と耐朽性が高く、サクラ属は重硬・緻密で強度が高い。ヤマグワは、河畔等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。トネリコ属は、湿地などに生育する落葉高木で、木材は重硬で強度が高い。

遺構・用途別の樹種構成についてみると、廻付掘立柱建物とされるSB317の木柱16点は、形状や木取りなどから芯持丸木、芯持材、分割状（半裁状を含む）とに分類され、さらに芯持材の一部には面取りなどの加工をする資料も認められた。これらの柱根は、P15にサクラ属が認められた他は、全てクリであったことから、強度が高く、腐りにくい木材の利用が推定される。また、P15に認められたサクラ属も重硬であることから、クリと同様に強度が高いという材質などにより利用された可能性がある。

SB348の木柱3点は、芯持丸木と分割状を呈する。これらの資料も全てクリであったことから、SB317と同様の木材利用が推定される。一方、SB608の柱根はヤマグワの芯持材であった。他の2棟には認められなかった樹種であるが、強度が高く腐りにくい木材を利用している点は共通する傾向と言える。

なお、[伊東・山田,2012]などにより本遺跡周辺の古代の調査事例についてみると、岩田遺跡（旧越路町）、江添C遺跡（旧吉田町）、馬越遺跡（加茂市）などで出土した柱材にはクリの利用が多く、今回の結果はこれらの傾向と調和的である。

木製品では、曲物蓋板がスギ、弓状加工材がトネリコ属に同定された。曲物蓋板は、スギの割裂性などを利用した木材利用と考えられ、同様の事例は新潟県内でも多くの報告がある。弓状加工材は、形状から弓そのものである可能性が指摘されている。新潟県内の古代の遺跡から出土した弓の調査事例についてみると、星敷遺跡・蔵ノ坪遺跡（旧中条町）、桃川遺跡群（旧神林村）等で針葉樹のイヌガヤやカヤが認められている。樹種による器種の特定は困難であるが、今回の資料がトネリコ属であったことから強度を要する器種であると想定される。

## （2）自然木

自然木は、立木痕より出土した資料（SX399、SX400）と遺構外の地山層から出土した資料とがあり、SX399と遺構外試料がカツラ、SX400がオニグルミに同定された。カツラやオニグルミは、河畔等に生育する落葉高木であることから、地山形成時にはカツラやオニグルミなどの落葉広葉樹を含む河畔林が分布していたと考えられる。また、花粉化石に認められたサワグルミ属や種実遺体に認められたトチノキなども浜畔林・河畔林を構成する分類群であることから、これらも周囲の河畔に生育していた可能性がある。

## （D）花粉分析

### 1. 試料

試料は、上記した掘立柱建物（SB348）の南側に位置する須恵器埋設遺構（SK42）より出土した須恵器甕内より採取された土壌（黒褐色シルト質細粒砂）1点である。

### 2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的の処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同

定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や〔島倉,1973〕、〔中村,1980〕、〔三好ほか,2011〕等を参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

### 3. 結果

結果を第6表に示す。SK42の須恵器甕内土壌からは花粉化石がほとんど検出されず、検出された花粉化石も外膜が破損あるいは溶解するなど保存状態が悪い。わずかに産出した花粉化石の産状は、木本花粉はツガ属、サワグルミ属、ブナ属、草本花粉のガマ属、イネ科、アカザ科が、1～数個体認められた程度である。

なお、分析残渣中には、強分解～炭化した微細植物片が多く認められた。微細植物片のほとんどは母材の推定が困難な不明型であったが、分野壁孔が残る針葉樹（スキ）の組織片や、イネ科葉部由来するとされる波状構造を持つもの〔小椋,2007:2008など〕が確認された。

### 4. 考察

SK42の須恵器甕内土壌からは、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、或いは取り込まれた花粉が消失したなどの可能性が考えられる。また、一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている〔中村,1967、徳永・山内,1971、三宅・中越,1998など〕。試料の採取位置や花粉化石の保存状態などを考慮すると、堆積時に花粉や胞子が取り込まれ難かったことや、その後の経年変化により分解・消失したことなどが推定される。

なお、わずかに検出されたツガ属、サワグルミ属、ブナ属などの木本類は、周辺の山地・丘陵や河畔などの森林植生に由来すると考えられ、イネ科、アカザ科などの草本類は集落内やその周囲に分布した草地、水湿地生植物のガマ属は周辺に分布した水湿地などに由来する可能性があり、このような草地および水湿地環境の存在は、後述する（E）の種実同定結果からも示唆される。

### （E）種実同定

#### 1. 試料

試料は、井戸跡（SE677）の最下層より出土した種実遺体1試料である。分析に供された試料は、植物片などを含む多数の種実遺体からなり、いずれも乾燥した状態にある。

#### 2. 分析方法

試料を粒径別に篩別けした後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本および〔石川,1994〕、〔中山ほか,2000〕、〔鈴木ほか,2012〕等を参考に実施し、部位・状態別に個数を数えて、結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管

	SK42 須恵器 甕内土壌
木本花粉	
ツガ属	1
サワグルミ属	1
ブナ属	2
草本花粉	
ガマ属	1
イネ科	7
アカザ科	1
不明花粉	1
シダ類胞子	
ゼンマイ属	1
他のシダ類胞子	20
合計	
木本花粉	4
草本花粉	9
不明花粉	1
シダ類胞子	21
合計(不明を除く)	34

第6表 花粉分析結果

する。分析残渣（植物片等）は、容器に戻して保管する。

### 3. 結果

同定結果を第7表に示す。また、種実遺体各分類群の写真を図版1に示し同定根拠とする。

井戸跡（SE677）最下層より出土した種実遺体試料からは、被子植物6分類群364個の種実遺体が抽出・同定された。種実遺体以外の分析残渣は、植物片主体で、炭化材や昆虫、骨片等も確認された。

種実遺体群は、木本1分類群（トチノキ）1個と、草本5分類群（イネ科、カナムグラ、サナエタデ近似種、ミゾソバ、ポンクトタデ近似種）363個から成り、草本主体の組成を示す。木本種実は、落葉広葉樹で高木になる河畔林要素のトチノキの炭化した種子（種皮）の破片が1個確認され、残存径は5.0mmを測る。草本種実は、道ばたや荒れ地などに生育するつる性一年草のカナムグラの核が203個（うち43個果皮残存）、一年草のサナエタデ近似種の果実が10個、水辺などのやや湿った場所に生育する一年草のポンクトタデ近似種の果実が78個、ミゾソバの果実が71個確認された。

### 4. 考察

井戸跡（SE677）最下層からは、木本1分類群（トチノキ）1個、草本5分類群（イネ科、カナムグラ、サナエタデ近似種、ミゾソバ、ポンクトタデ近似種）363個の種実遺体が確認された。種実遺体群の主体を占める草本類は、カナムグラやサナエタデ近似種などのやや乾いた場所にも生育可能な中生植物と、ミゾソバやポンクトタデなどの湿生植物が確認され、いずれも明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群から構成される。これらは、おそらく井戸跡（SE677）周辺域の湿地などを含む草地環境に生育していたと考えられる。

また、木本類で確認されたトチノキは、河畔林要素の落葉高木で、あく抜きすれば種子内の子葉が食用可能な有用植物である。トチノキは、当時の信濃川流域の河畔林に生育していたと考えられる。出土種子は破片1個のみであるが、炭化していることから人が利用した痕跡の可能性がある。

### (F) リン酸・カルシウム分析

#### 1. 試料

試料は、木棺墓（SK205）および火葬墓（SK260、SK512）とされる遺構の覆土や地山より採取された土壤19点である。本分析では、上記した各遺構の性格として推定される遺体痕跡の有無の検討を目的として、土壤化学性、とくに遺体や骨成分を構成するリン酸やカルシウムの含量に着目した。なお、分析に供された試料の詳細（試料採取位置、土色、土性など）は、結果とともに一覧として第8表に記したので参照されたい。

## 2. 分析方法

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解ーバナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法[土壤標準分析・測定法委員会,1986]に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

### (1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105°Cで4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

### (2) リン酸・カルシウム含量

粉砕土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO<sub>3</sub>)約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO<sub>4</sub>)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干涉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

## 3. 結果

測定結果を第8表に示す。以下に、造構別の産状を記す。

### 1) SK205

試料の野外外性[ペドロジー学会編,1997]は、LS(壤質砂土)からSL(砂壤土)と砂分が多い土壤からなる。土色は、1、2層が暗灰黄色、3層・地山が暗オリーブ褐色、4層が暗オリーブ色と、いずれも黒色味に欠ける。リン酸含量は、1層が1.34mg/g、2層が1.08mg/g、3層が0.92mg/g、4層が0.98mg/g、地山が1.04mg/gである。カルシウム含量は、1層が6.83mg/g、2層が6.58mg/g、3層が6.88mg/g、4層が5.60mg/g、地山が5.88mg/gである。

### 2) SK260

試料の野外外性は覆土および地山試料のいずれもSiL(シリト質壌土)からなる。土色は、覆土1・5・8層が黒色、覆土3・11層が黒褐色と黒色味に富み、覆土12層・地山は暗灰黄色～オリーブ褐色とやや明るい土壤である。リン酸含量は、覆土1層が4.61mg/g、覆土3層が6.31mg/g、覆土5層が1.09mg/g、覆土8層が1.85mg/g、覆土11層が0.81mg/g、覆土12層が0.86mg/g、地山が0.87mg/gである。

試料名	土色 <sup>1)</sup>	土性 <sup>2)</sup>	全リン酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)
SK205	1層 2.5Y4/2 暗灰黄	LS	1.34	6.83
	2層 2.5Y4/2 暗灰黄	LS	1.08	6.58
	3層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐	LS	0.92	6.88
	4層 5Y4/3 暗オリーブ	SL	0.98	5.60
地山	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	LS	1.04	5.88
覆土1層	2.5Y2/1 黒	SIL	4.61	7.36
覆土2層	2.5Y2/2 黒褐	SIL	6.31	7.01
覆土3層	2.5Y2/1 黒	SIL	1.09	7.05
SK260	覆土4層 2.5Y2/1 黒	SIL	1.85	7.51
覆土11層	2.5Y3/1 黒褐	SIL	0.81	6.14
覆土12層	2.5Y4/2 暗灰黄	SIL	0.86	5.85
地山	2.5Y4/3 オリーブ褐	SIL	0.87	5.83
覆土1層	10Y4/2 反灰褐	LS	1.73	7.64
覆土2層	2.5Y4/2 暗灰黄	LS	1.42	8.20
SK512	覆土3層 2.5Y4/6 オリーブ褐	LS	0.95	5.06
覆土4層 5Y3/1 オリーブ黒	SIL	43.7	58.6	
覆土5層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐	LS	3.70	7.48	
覆土6層 2.5Y4/3 オリーブ褐	LS	2.25	7.40	
地山	2.5Y3/3 黄褐	LS	0.86	5.19

1)土色:マゼンタ色系に準じた新規標準工色板(農林省農林水産技術会議監修,1997)による。

2)土性:土壤調査ハンドブック改訂版(ペドロジー学会編,1997)による。

SIL:シルト質壤土(粘土0~15%,シルト45~100%,砂0~55%)

SL:砂壤土(粘土0~15%,シルト0~35%,砂65~85%)

LS:壤質砂(粘土0~15%,シルト0~10%,砂85~95%)

第8表 土壤理化学分析結果

0.86mg/g、地山が0.87mg/gである。カルシウム含量は、覆土1層が7.36mg/g、覆土3層が7.01mg/g、覆土5層が7.05mg/g、覆土8層が7.51mg/g、覆土11層が6.14mg/g、覆土12層が5.85mg/g、地山が5.83mg/gである。

### 3) SK512

試料の野外土性は、覆土4層がSIL（シルト質壤土）である他はいずれもLSと砂質主体である。土色は、覆土1層が灰黄褐色、覆土2層が暗灰黄色、覆土3・6層がオリーブ褐色、覆土5層が暗オリーブ褐色、地山が黄褐色とやや明るい土色であり、覆土4層がオリーブ黒色と暗色である。リン酸含量は、覆土1層が1.73mg/g、覆土2層が1.42mg/g、覆土3層が0.95mg/g、覆土4層が43.7mg/g、覆土5層が3.70mg/g、覆土6層が2.25mg/g、地山が0.86mg/gである。カルシウム含量は、覆土1層が7.64mg/g、覆土2層が8.20mg/g、覆土3層が5.06mg/g、覆土4層が58.6mg/g、覆土5層が7.48mg/g、覆土6層が7.40mg/g、地山が5.19mg/gである。

## 4. 考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壤有機物や土壤中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。

土壤中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例〔Bowen,1983, Bolt・Bruggenwert,1980, 川崎ほか,1991, 天野ほか,1991〕があり、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g〔川崎ほか,1991〕という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では6.0mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1～50mg/g〔藤賀,1979〕といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。なお、今回の調査において比較対照試料として供された各遺構の地山3点（以下、地山試料）についてみると、リン酸含量は0.86～1.04mg/g、カルシウム含量は5.19～5.88mg/gであり、概ね同程度の値を示している。

以上の既知の天然賦存量および上記した地山試料の値を参考とすると、火葬墓とされるSK512では、特に覆土4層においてリン酸含量が43.7mg/g、カルシウム含量が58.6mg/gと極めて高い値を示した。いずれも上述した天然賦存量および比較対照の地山試料の含量を上回る状況から、これらの成分の富化が示唆される。なお、提供資料を参考とすると、覆土4層は黄灰色土の偽礫が混じる黒色土からなり、遺構内に面的に分布するほか、白色物質が混じる状況が確認できる。おそらく骨片や黒色に起因する腐植物などが混在する状況を反映していると思われる。また、同遺構の覆土3層を除く、覆土4層の上・下部（覆土2・6層）や側方（覆土5層）に相当する層準も、比較対照の地山試料と比較してリン酸・カルシウム含量が高い値を示した。これらの層準には、覆土4層に由来すると思われる偽礫（ブロック）の分布も認められるため、覆土4層の影響も考えらえる。

同じ火葬墓とされるSK260は、覆土1・3層において天然賦存量を超えるリン酸含量が認められ、カルシウム含量は覆土1層から覆土8層までの層準において地山試料より明瞭に高い値を示すことが確認された。このような状況から、これらの層準にはリン酸およびカルシウムの富化が推定される。ただし、覆土1・3層と覆土5・8層との間ではリン酸およびカルシウム含量の増加幅が付随していないため、特に覆土上部試料（覆土1・3層）におけるリン酸の由来については腐植の影響も想定する必要がある。

次に、木棺墓とされる SK205 は、フク土試料のリン酸含量は地山試料と同程度あるいは僅かに高い値を示す程度であり、カルシウム含量は 1 ~ 3 層では地山試料よりやや高い値を示した。このようにリン酸およびカルシウム含量に若干の変化が認められるものの、上記した火葬墓とされる遺構との比較ではいずれも含量の値が低く、また含量幅の変化も乏しいなど明確な有意差を見出せないため、遺体痕跡の有無（遺体成分の富化など）を判断するには至らない。

## 第 2 節 上条遺跡出土骨同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

### （A）はじめに

上条遺跡（新潟県長岡市上条町地内）は、信濃川右岸に分布する沖積地の微高地に立地しており、発掘調査により 9 世紀後半から 10 世紀前半頃の集落であることが明らかとされている。なお、本遺跡では、土坑墓をはじめ、木棺墓、火葬墓などの埋葬施設と考えられる遺構が検出されており、これらの遺構覆土（埋植物）からは水洗選別により骨片が回収されている。

本報告では、出土骨の種類や部位、被葬者に関する資料の作成を目的として、特に多量の骨片が回収された火葬墓とされる土坑（SK512）および溝跡（SD438）を対象として出土骨の同定を行った。

### （B）試料

試料は、土坑（SK512）や溝跡（SD438）の覆土の水洗選別により回収された骨片試料 16 試料である。これらの試料は、水洗選別により回収された骨片のうち、篩目 2mm 以上の破片と、担当者により抽出された歯牙等の特徴を有する部位などからなる。

なお、今回の試料は、同一試料名の試料が複数含まれていたため、便宜的に分析番号（No. 1 ~ 16）を付して扱っている。各試料の詳細は結果とともに表 1 に示したので、参照されたい。

### （C）分析方法

試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、形態学的な特徴から種および部位を同定する。なお、人体骨骼各部の名称を第 11 図に示す。

### （D）結果

結果を第 9 表に示す。No. 14 は、表面が白色を呈するものの、海綿質がオレンジ色を呈する。この他の骨片は内部まで白色を呈し、表面に微細なひび割れが確認される。以下、遺構・試料別に結果を記す。

#### （1） SD438

- No. 1

哺乳類の四肢骨と部位不明破片である。

- No. 2

哺乳類の四肢骨である。

- No. 3

哺乳類の頸蓋骨・四肢骨、および部位不明破片である。

分析番号 (No.)	グリッド	遺構	層位	日付	重量 (g)	種類	部位	部分	数量	被熱	備考
1	1116	SD438	覆土1層	2014.7.15	2.6	哺乳類	四肢骨	破片	1	○	
2	1116	SD438	覆土1層	2014.7.14	1.3	哺乳類	四肢骨	破片	1	○	
3	1116	SD438	櫻土層	2014.7.8	18.2	哺乳類	頭蓋骨	破片	1	○	
							四肢骨	破片	7	○	
							不明	破片	10.48 g	○	
4	1165	SK512	櫻土上層	2014.7.23	8.8	哺乳類	四肢骨	破片	3	○	
							不明	破片	4.61 g	○	
5	1165	SK512	櫻土上層		60.1	ヒト	基節骨	高位端片	1	○	
							系筋骨/中節骨	高位端	1	○	
						哺乳類	頭蓋骨	破片	1	○	
							四肢骨	破片	1	○	
							不明	破片	57.81 g	○	
6	1165	SK512	櫻土上層		0.4	ヒト?	歯牙	齒根片	3	○	
7	1165	SK512	覆土1段層	2014.7.23	3.5	ヒト?	上腕骨/大腿骨	高位端片	1	○	
						哺乳類	不明	破片	1.47 g	○	
8	1165	SK512	櫻土1・2層	2014.7.29	4.2	哺乳類	脳頭蓋	破片	4	○	
							不明	破片	1.49 g	○	
9	1165	SK512	覆土1・2層	2014.7.25	8.5	ヒト	足根骨(舟状骨)	破片	1	○	
						哺乳類	四肢骨	破片	1	○	
							不明	破片	4.16 g	○	
10	1165	SK512	櫻土3層	2014.7.29	57.8	哺乳類	脳頭蓋	破片	3	○	
							頭蓋骨	破片	1	○	
							肋骨	破片	5	○	
							四肢骨	破片	14	○	
							不明	破片	31.29 g	○	
11	1165	SK512	櫻土3層	2014.7.25	8.5	哺乳類	頭蓋骨	破片	1	○	
							四肢骨	破片	3	○	
							不明	破片	5.58 g	○	
12	1165	SK512	櫻土3層			ヒト	第2頸椎	側突起	1	○	
							中手骨/中足骨	高位端片	1	○	
						哺乳類	四肢骨	破片	10	○	
							不明	破片	281.81 g	○	
13	1165	SK512	覆土3層		0.1	ヒト?	歯牙	齒根片	1	○	
14	1165	SK512	櫻土3層		0.2	哺乳類	不明	破片	0.2 g	○	被熱表面のみ
15	1165	SK512	覆土4層	2014.7.28	2.2	哺乳類	不明	破片	2.24 g	○	
16	1165	SK512	覆土6層		22.4	哺乳類	肋骨	破片	1	○	
							不明	破片	21.41 g	○	

第9表 骨同定結果

## (2) SK512

• No.4

哺乳類の四肢骨と部位不明破片である。

• No.5

ヒトの基節骨と基節骨/中節骨、哺乳類の頭蓋骨・四肢骨、および部位不明破片である。

• No.6

ヒトの可能性がある歯牙歯根部である。

• No.7

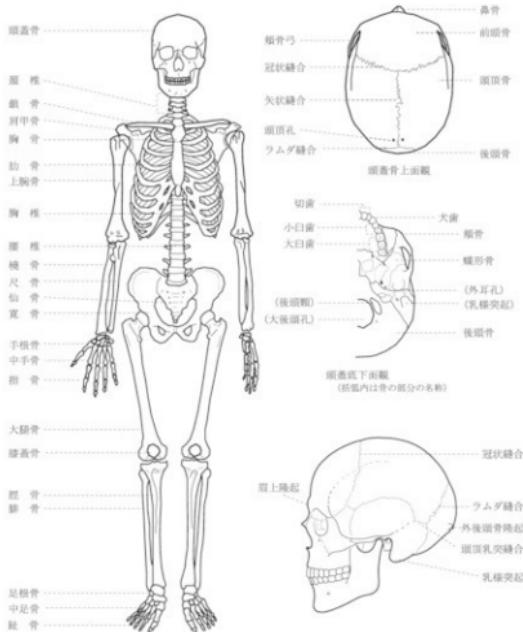
ヒトの可能性がある上腕骨/大腿骨の骨頭部、および哺乳類の部位不明破片である。

• No.8

哺乳類の脳頭蓋と部位不明破片である。

• No.9

ヒトの足根骨(舟状骨)、哺乳類の四肢骨、部位不明破片である。



第11図 人体骨格各部の名称

• No. 10

哺乳類の脳頭蓋・頭蓋骨・肋骨・四肢骨、および部位不明破片である。

• No. 11

哺乳類の頭蓋骨・四肢骨、および部位不明破片である。

• No. 12

ヒトの第2頸椎突起および中手骨／中足骨、哺乳類の四肢骨、および部位不明破片である。

• No. 13

ヒトの可能性がある歯牙衛根部である。

• No. 14

哺乳類の部位不明破片である。

• No. 15

哺乳類の部位不明破片である。

• No. 16

哺乳類の肋骨、および部位不明破片である。

## (E) 考察

SD438 より出土した骨片には、頭蓋骨や四肢骨の破片が認められた。ただし、いずれも小さな焼骨の破片であったため、種類等の詳細は不明である。一方、SK512 より出土した骨も焼骨の破片であったが、明らかにヒトの第2頸椎・足根骨(舟状骨)・中手骨/中足骨・基節骨・基節骨/中節骨、ヒトの可能性がある歯牙・上腕骨/大腿骨骨頭が確認された。このことから、本遺構の哺乳類とした破片もヒトに由来する可能性がある。また、今回の SK512 の出土骨は、いずれも小型の破片であり、1体の出土骨として数量的に少なく、さらに頭蓋骨や主要四肢骨などの大型の破片が検出されないという特徴が指摘できる。このような状況から、別の場所で火葬された遺骸の一部が、本遺構に埋葬された可能性が考えられる。なお、被葬者の性別や年齢などについては、前述したように小片かつ特徴的な部位が認められないため、その詳細を言及することは困難である。

さらに、今回の試料には、前述したように焼骨の特徴が認められた。樋崎 [2007] によると、遺体をそのまま火葬にした場合、横に曲がった亀裂、縦に不規則な亀裂、また歪みや捻れが生じるとされるが、これに対して白骨化させたものを火葬にするとひび割れが生じるが歪みや捻れが生じないとしている。また、馬場ほか [1986] を参考にすると、人骨を焼いた際、600°C以下ではほとんど変化がなく、800°C付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされている。今回の試料では、SK512 の No.14 のように表面だけが白色を呈し、内部の海綿質部が被熱していない骨もみられることから、高い温度で火葬されてなかった、火力にムラが生じていた、火葬時間が短かったことなどが推定される。

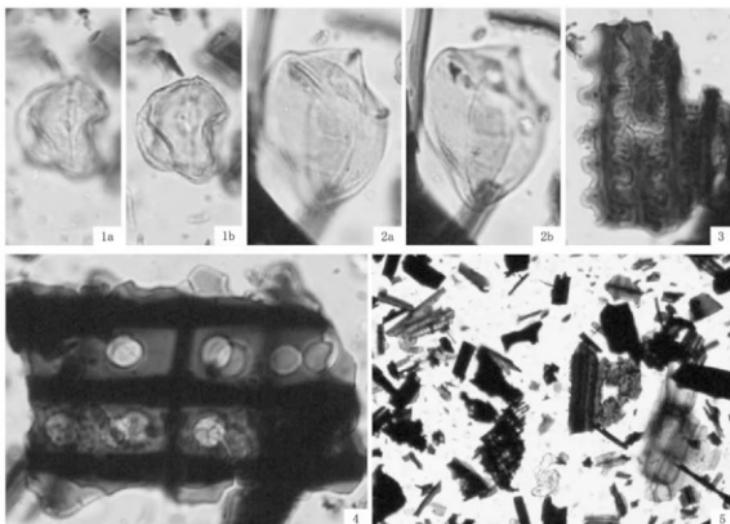
## &lt;第1節 引用文献&gt;

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信 1991 「中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量」農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』28-36p
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M. 1980 「土壤の化学」岩田進午・三輪壽太郎・井上隆弘・陽 捷行訳 学会出版センター 309p
- Bowen,H.J.M. 1983 「環境無機化学・元素の循環と生化学」浅見輝男・茅野充男訳 博友社 297p
- 土壤標準分析・測定法委員会編 1986 「土壤標準分析・測定法」博友社 354p
- 藤賀 正 1979 「カルシウム・地質調査所化学分析法」52,57-61 p
- 林 昭三 1991 「日本産木材・顯微鏡写真集」京都大学木質科学研究所
- 石川茂雄 1994 「原色日本植物種子写真図鑑」石川茂雄図鑑刊行委員会 328p
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料 31」京都大学木質科学研究所 81-181p
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料 32」京都大学木質科学研究所 66-176p
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料 33」京都大学木質科学研究所 83-201p
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料 34」京都大学木質科学研究所 30-160p
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料 35」京都大学木質科学研究所 47-216p
- 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012 「木の考古学 出土木製品用材データベース」海青社,449p.
- 川崎 弘・吉田 邦・井上恒久 1991 「九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量」農林水産省 農林水産技術会議事務局編『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』25-27p
- 三宅 尚・中越信和 1998 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植物学研究 6』 15-30p
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子 2011 「日本産花粉図鑑」北海道大学出版社 824p

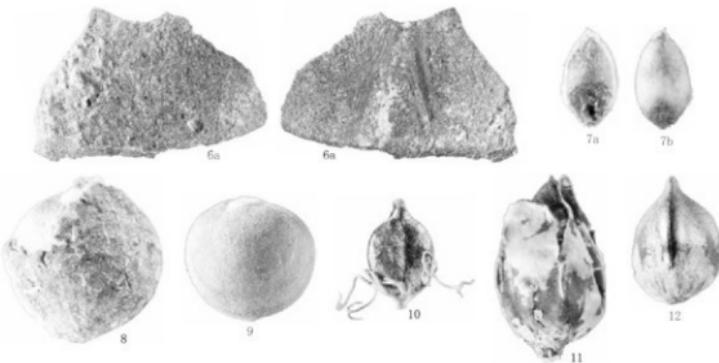
- 中村 純 1967 『花粉分析』古今書院 232p
- 中村 純 1980 『日本産花粉の標微 I II (図版) 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』 第12,13集 91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』東北大学出版会 642p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 『新版標準土色誌』
- 小桜純一 2007 「微粒炭の母材植物特定に関する研究」『植生史研究15』 85-95p
- 小桜純一 2008 「鋼路温泉北東陸地部における微粒炭分析」『日本植生史学会第23回大会講演要旨集』 46-47p
- ペドロジー学会編,1997, 土壌調査ハンドブック改訂版, 博友社,169p
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L. and Gasson P.E. (編) 2006 「針葉樹材の識別」『IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L. and Gasson P.E.,2004.IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 176p
- 島倉巳三郎 1973 『日本植物の花粉形態』大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集 60p
- 鈴木康夫・高橋 駿・安延尚文 2012 『ネイチャーウォッキングガイドブック 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632 種-』 誠文堂新光社 272p
- 德永重元・山内輝子 1971 「花粉・孢子」『化石の研究法』共立出版株式会社 50-73p
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 「広葉樹材の識別」『IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社 122p [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.,1989.IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

<第2節 引用文献>

- 柄崎修一郎 2007 「火葬人骨と考古学」狭川真一編著『墓と葬送の中世』高志書院 107-126.
- 馬場惣男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 1986 「根古屋遺跡出土の人骨・動物骨」『雲山根古屋遺跡の研究 一福島県雪彦町根古屋における再葬墓群-』福島県雪彦町教育委員会 93-113.

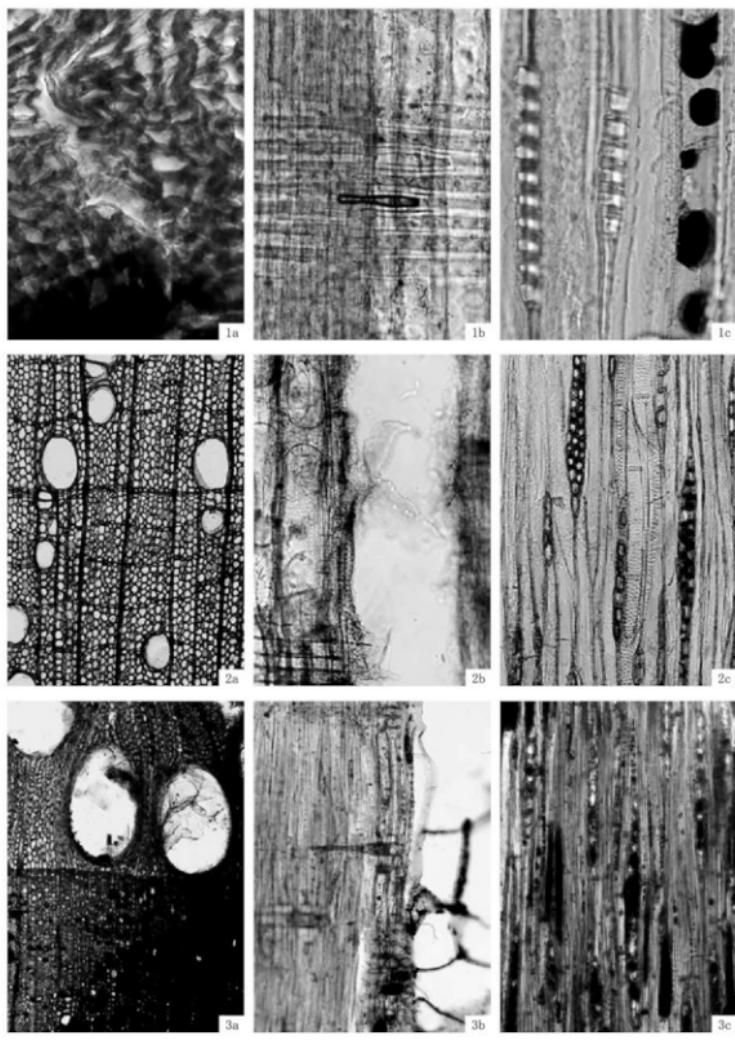


1. ブナ属(SK42) 2. イネ科(SK42)  
3. 微細植物片(草本由来)(SK42) 4. 微細植物片(木本由来)(SK42) 5. 分析プレパラート内の状況(SK42)



6. トノキ 炭化種子(SE677)  
8. カナムグラ 核(果皮残存)(SE677)  
10. サナエタデ近似種 果実(SE677)  
12. ポントクタデ近似種 果実(SE677)  
7. イネ科 胚乳(SE677)  
9. カナムグラ 核(SE677)  
11. ミゾソバ 果実(SE677)

第12図 花粉化石・種実遺体

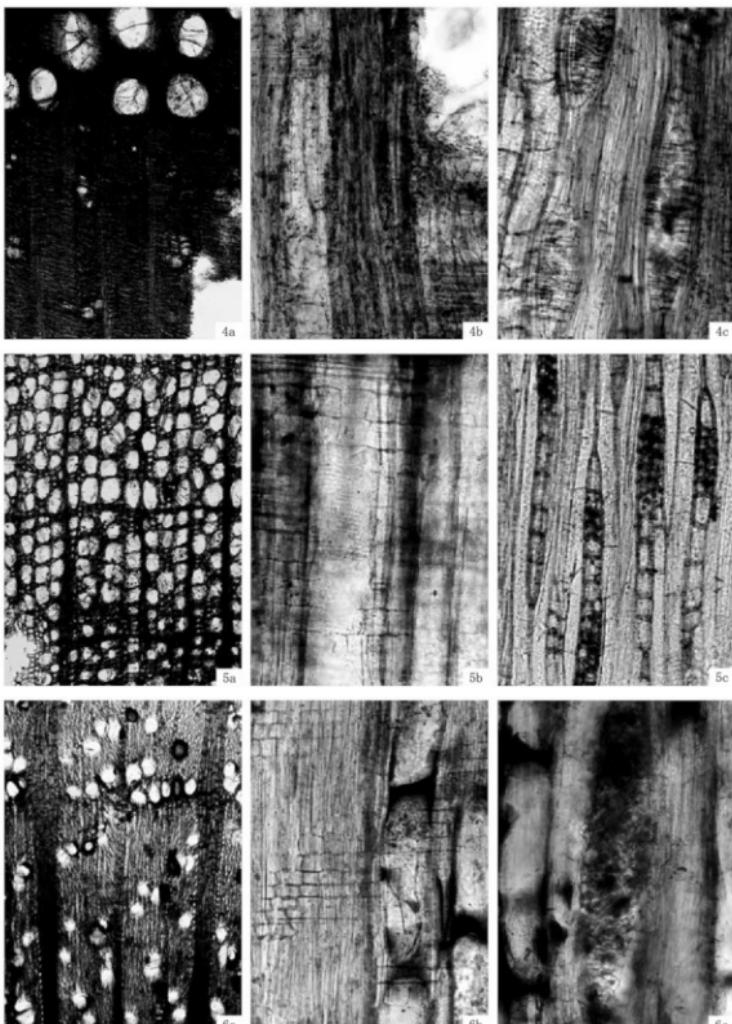


1. スギ(11E3VII層;自然木)  
2. オニグルミ(SX400;立木痕の自然木)  
3. クリ(SB317-P1;木柱)

a:木口, b:柾目, c:板目

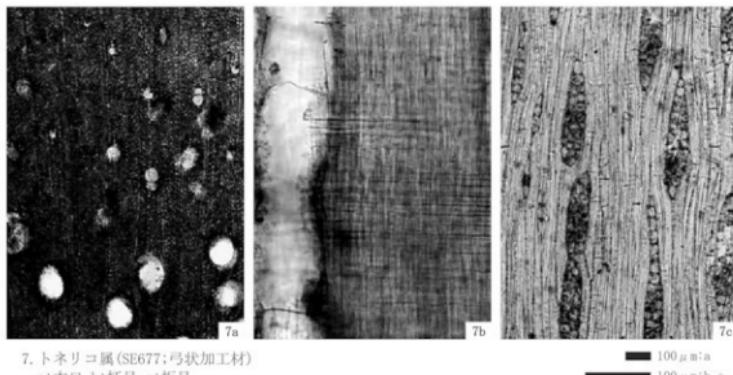
— 100  $\mu$  m:2-3a  
— 100  $\mu$  m:2-3b, c  
— 100  $\mu$  m:1b, c

第13図 木材(1)

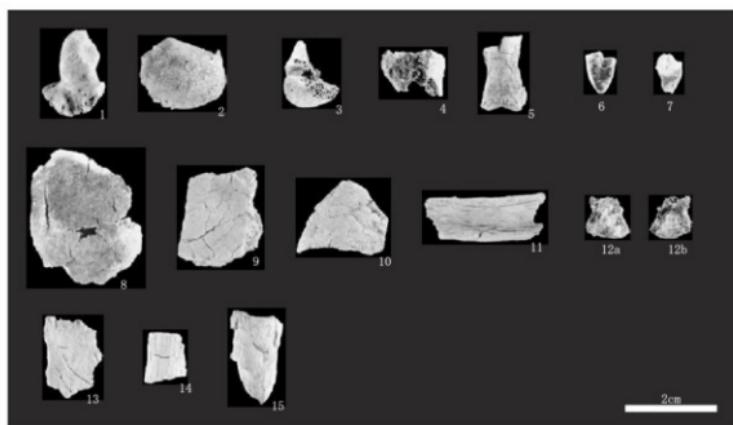


4. ヤマグワ (SB608-P5; 木柱)  
5. カツラ (11K11; 自然木)  
6. サクラ属 (SB317-P15; 木柱)  
a:木口, b:柾目, c:板目

第14図 木材(2)



第 15 図 木材 (3)



1. ヒト 第2頸椎(No.12; 11G5 SK512覆土上3層)
2. ヒト 足根骨/舟状骨(No.9; 11G5 SK512覆土1・2層)
3. ヒト 中手骨/中足骨(No.12; 11G5 SK512覆土3層)
4. ヒト 基節骨(No.5; 11G5 SK512覆土上層)
5. ヒト 基節骨/中節骨(No.5; 11G5 SK512覆土上層)
6. ヒト? 犬牙(No.6; 11G5 SK512覆土上層)
7. ヒト? 犬牙(No.13; 11G5 SK512覆土3層)
8. ヒト? 上腕骨/大腿骨(No.7; 11G5 SK512覆土1炭層)
9. 哺乳類 脑頭蓋(No.8; 11G5 SK512覆土1・2層)
10. 哺乳類 脑頭蓋(No.10; 11G5 SK512覆土3層)
11. 哺乳類 肋骨(No.10; 11G5 SK512覆土3層)
12. 哺乳類 不明(No.14; 11G5 SK512覆土3層)
13. 哺乳類 頭蓋骨(No.3; 11H6 SD438覆土上層)
14. 哺乳類 四肢骨(No.1; 11H6 SD438覆土1層)
15. 哺乳類 四肢骨(No.2; 11H6 SD438覆土1層)

第 16 図 出土骨

## 第3節 長岡市上条遺跡出土曲物付着物の科学分析

漆器文化財科学研究所 四柳嘉章

## (A) はじめに

長岡市上条遺跡からは、内外面にびっしりと付着物（膠着液）のある曲物容器が出土した。時期的には平安時代（9世紀後半から10世紀前半）の可能性が高いと考えられている。膠着液が漆であることを以下に報告する。分析には下記の塗膜分析と赤外分光分析を実施した。

## (B) 塗膜分析（第18図）

塗膜分析は膠着液の塗装工程や液の特徴を識別するもので、実体顕微鏡による観察後、漆器の内外面箇所から数mmの塗膜片を採取し、ポリエチル樹脂に包埋する。包埋断面を研磨の後プレパラートに接着し、さらに研磨を加えて（#100～3000）、金属・偏光顕微鏡で観察する方法である。各種状況に応じたデータ（手板）と比較検討しながら塗装工程や下地材料の同定を行う。これによって表面観察ではわからない塗装工程や材料の特色が把握できる。塗膜分析は1資料につき、内外面各3～5点の試料を作製し平均値を算出した。したがって必ずしも図版のスケールとは一致しない。塗膜断面写真は偏光顕微鏡下における透過光。

曲物の法量：口径12.6cm、現存器高6.6cm、底径（推定）12.0cm。内外面に素地が隠れるほど膠着液が付着している。

塗膜分析（外面）：分析面の最大層厚は $260\text{ }\mu\text{m}$ 前後で、7層前後の重なりがみられる。中ほどに径 $27\text{ }\mu\text{m}$ の大きな円形のゴム質水球と径 $3\text{ }\mu\text{m}$ 以下のゴム質水球が見られ、生漆の特徴を示している。

## (C) 赤外分光分析（第17図）

赤外分光分析は膠着液を特定するもので、赤外線（普通赤外波長 $2.5\sim25\text{ }\mu\text{m}$ 、波数 $4000\sim400\text{cm}^{-1}$ ）を固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射して、分子構造を解析するフーリエ変換赤外分光法（FT-IR）を用いた。測定機器は日本分光製FT/IR-4600。試料は1mgを採取しKB-r（臭化カリウム）100mgをメノウ鉢で磨り潰して、これを鉈剤成形器で加圧成形したもの用いた（鉈剤法）。条件は分解能 $4\text{cm}^{-1}$ 、積算回数16、アボダיזーション関数Cosine。縦軸は吸光度（Abs）、横軸は波数（カイザー）。

第17図は基準データとした岩手県淨法寺産精製漆（③1992年作製）と生漆（②1994年作製）の赤外線吸収スペクトルに、上条遺跡出土曲物膠着のデータを重ねたものである。 $2920\text{cm}^{-1}$ （炭化水素の非対称伸縮振動）、 $2850\text{cm}^{-1}$ （炭化水素の対称伸縮振動）、 $1720\sim1710\text{cm}^{-1}$ （カルボニル基）、 $1630\sim1620\text{cm}^{-1}$ （糖タンパク）、 $1465\text{cm}^{-1}$ （活性メチレン基）、 $1280\sim1273\text{cm}^{-1}$ （フェノール性OH）、 $1070\sim1030\text{cm}^{-1}$ （ゴム質）の吸収が確認でき漆の同定要素を満たしている。表面は茶褐色化しているが、基準データの生漆に近似しており、さほど劣化もなく遺存状況は良好である。

## (D) 小結

長岡市上条遺跡は信濃川右岸の沖積低地（標高24m）に立地し、9世紀後半から10世紀前半に営まれた集落。14棟の掘立柱建物や墓域が検出され、畿内・東海産の施釉陶器や墨書き土器が出土している（1）。掘立柱建物のうち2棟が廻付であることから富豪層の居館跡と考えられている。生漆入りの曲物は漆バレットではなく定型的な小型の漆容器である。これから小分けされた漆バレットも出土していることから、

集落内で接着などの作業が行われていたことを示している。漆は古代では貴重品であることから、一般集落では使用されなかつたことが明らかになっており、当該集落の性格を検討するでは重要な遺物の一つと考えられる<sup>(2)</sup>。

### 〈第3節 引用文献〉

(1) 長岡市教育委員会・大石組 2014 「上条遺跡現地説明会」資料

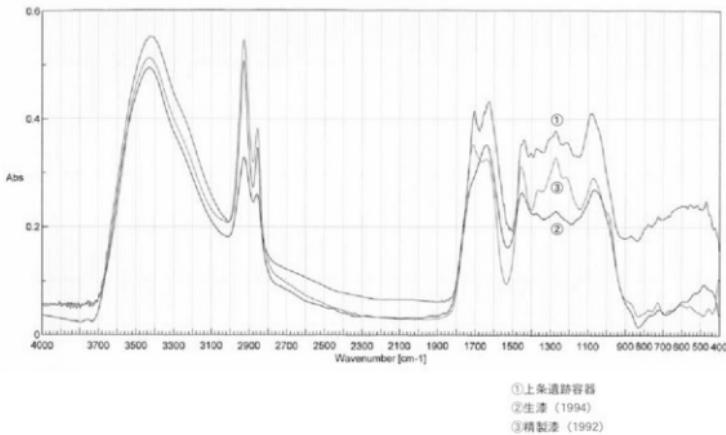
山賀和也 2015 「長岡市 上条遺跡の調査成果」『新潟県考古学会第27回大会研究発表会発表要旨』

(2) 四柳嘉章 2010 「加茂市馬越遺跡出土漆器（平成18年度）の科学分析」『馬越遺跡Ⅲ』加茂市教育委員会

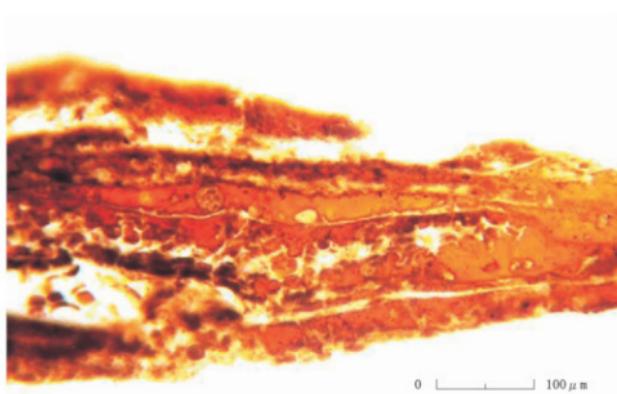
四柳嘉章 2011 「太田遺跡出土須恵器・土師器付着物の科学分析」『荒又遺跡・太田遺跡』加茂市教育委員会

四柳嘉章 2010 「西部遺跡出土漆器等の科学分析」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告XXXIII 西部遺跡II（本文編）』

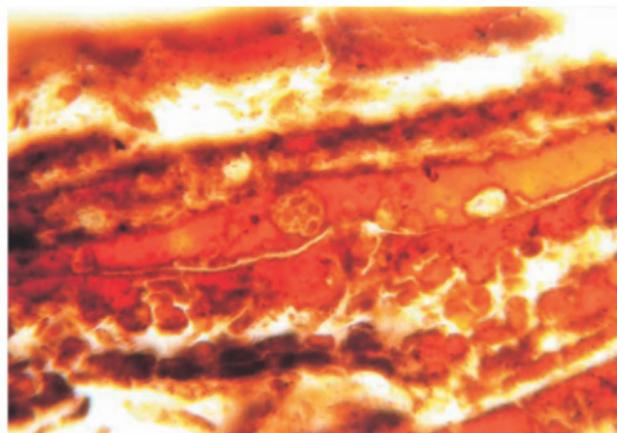
新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団



第17図 赤外線吸収スペクトル



1 曲物内面付着漆の重なり ×200



2 同上拡大 ×400

第18図 漆塗膜の顕微鏡写真



## 第VII章 考 察

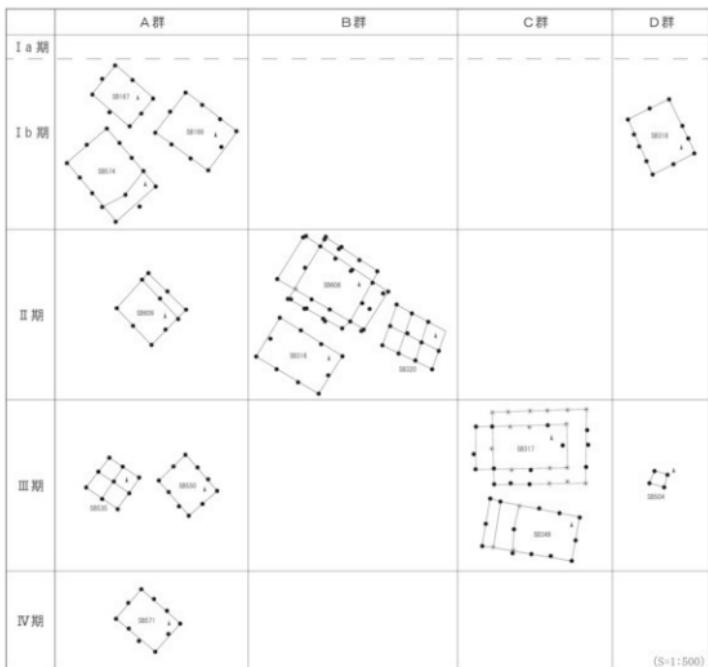
### 第1節 堀立柱建物について

今回の調査では、堀立柱建物は14棟発見された。ここでは、堀立柱建物の規模や主軸方向、切り合い関係、出土遺物などから帰属時期について検討し、その変遷について考えてみたい。

建物の長軸を主軸として、北を基準に東西への傾きを整理してみると、大きく4つのグループに分けることができる。A群は、N=40°～55°-Wを示す一群である。SB166・167・535・550・571・574・609の7棟であり、最も数が多い。A群は、SX1の岸際に立地しており、概ね地形に合わせた主軸方向になっている。SB609は、2間×2間の身舎に北東側に1間分の廊が付く。SB535は、2間×2間の純柱建物である。その他の5棟は2間×3間が4棟、2間×2間が1棟の側柱建物である。SB166・167が切り合い、SB571・574・609が切り合っている。SB166・167は前後関係を判断する材料がなくはっきりしないが、時期はどちらも9世紀後半から末頃の時期とみられ、短い期間に建て替えられた可能性がある。SB571・574・609は柱穴の切り合い関係から、SB574がSB571に切られており、SB574→SB571の変遷が捉えられる。SB609は柱穴同士の切り合いはなくやや不明瞭であるが、SB609を切るSK573・594が10世紀第2四半期頃と考えられることから、それより前の段階である9世紀末から10世紀初頭頃が考えられる。これを整理するとSB574→SB609→SB571と変遷したことが考えられる。A群は9世紀後半から10世紀第2四半期頃までの本遺跡の全期間にわたって存在する。B群は、N=58°～62°-Wを示す一群である。SB316・320・608の3棟である。3棟は、調査区西半分に位置しており、SB320がやや離れた位置に立地する。3棟とも形態が違い、SB316は2間×3間の側柱建物、SB320は2間×3間の純柱建物、SB608は2間×3間の身舎に四方に廊が付く四面廂建物である。時期は3棟とも9世紀末から10世紀初頭を中心とする時期に帰属し、まとまっている。C群は、N=80°～89°-Wを示す一群である。SB317・348の2棟である。主軸は、ほぼ方位に合っている。2棟は約60m離れている。SB317は2間×4間の身舎に四方に廊が付く四面廂建物である。SB348は、やや変則的な柱穴配置で、2間×4間の身舎に西側に1間分の廊あるいは目隠し壇などの施設が付く形態と思われる。時期は、両者とも10世紀第1四半期を中心とする時期に帰属する。D群は、A～C群に属さない建物である。SB318・504があり、SB318がN=24°-Wで、SB504がN=70°-Wである。SB318は2間×4間の側柱建物で、9世紀後半から末頃が考えられる。SB504は1間×1間の建物で簡易的な建物が想定される。時期は、10世紀以降が考えられる。

平面積を見てみると、20m<sup>2</sup>付近と30m<sup>2</sup>台に比較的まとまった数値を示す。最大の面積を持つ建物は、SB317で73.7m<sup>2</sup>と突出している。それに次ぐのが、SB608で66.8m<sup>2</sup>である。SB317・608は四面廂付建物で、側柱建物よりも格が高い建物であると考えられており、形態、面積から本遺跡の中心的な建物であると言える。SB317・608と同じ群に属する建物との関係は不明瞭であるが、SB348・320ともに一般的な側柱建物でないことから、倉庫やその他何らかの施設であった可能性もある。側柱建物で最大のものはSB574で42.5m<sup>2</sup>である。これも他の建物と比べるとやや大きい数値となっている。

以上の検討結果を踏まえ、建物の変遷を整理してみると第19図になる。A群が全期間をとおして存在し、B群からC群への主軸方向の変遷がたどれる。中心的な建物とみられるSB608はB群、SB317はC群に属し、次に大きいSB574はA群で9世紀後半と考えられ、この時期では最大の建物となる。従って、集落の中心的な建物はSB574→SB608→SB317と変遷する可能性が考えられる。



第19図 据立柱建物変遷図

## 第2節 四面廂建物について

四面廂建物は、一般的に官衙関連施設、寺院、有力者層の居宅、村落内寺院などに採用される建物である。ここでは、本遺跡で発見された2種の四面廂建物の性格について検討してみたい。

SB317は2間×4間の身舎に1間分の廊が付くが西側廊部分の隅を欠く形態であり、SB608は2間×3間の身舎に1間分の廊が付くが廊の四隅を欠く形態となっており、両者とも特異な平面形態である。柱穴は円形あるいは隅丸方形であり、これらに付属する建物は認められず、単独で立地している。これらの状況から官衙関連施設や寺院にはならないと考えられる。だが、本調査では、「寺」字墨書き土器、灯明皿、仏鉢型土器などの仏教に係わる遺物が出土しており、村落内寺院が存在した可能性が考えられる。村落内寺院は、須田勉氏によって提唱された、集落の中に建てられた仏堂施設である〔須田 1985〕。須田氏は、千葉県の事例を取り上げ、村落内寺院は四面廂建物であるが、柱間寸法のばらつきや柱掘方が円形であるなど、造営技術が低い建物とした。そして、村落内の結合を強化する目的で建てられたものと想定した。さらに、 笹生衛氏は、同じく千葉県内の事例をとりあげ、建物構造や配置、出土遺物の内容を分析し、寺院や小規模の仏教施設などの7類型に整理している〔笹生 2006〕。

本遺跡は四面廂建物が単独で位置しており、 笹生氏の分類に従えば、本遺跡の建物が仏堂施設であるな

らば、第2類型の一定の仏教儀礼を執行可能な「村寺」に当てはまる可能性がある。しかし、仏教関連遺物の時期は9世紀後半から10世紀初頭頃に位置づけられるものが多く、出土地点を見てみると、仏跡型土器は調査区隅からの出土であるが、灯明皿、「寺」字墨書き土器はSD7及びSD7周辺からに集中している。遺物の時期に属する建物はSB608で、SB317はSD7埋没後の10世紀前半頃に位置づけられ、SB317を仏堂とみるのは難しい。一方、SB608は同時期に存在するものの、出土位置からは離れた場所に位置するため、仏教関連遺物との関係が希薄である。従って、両建物を仏堂施設として積極的に評価しがたい。

有力者の居宅の可能性もあるが、居宅は門新遺跡や時代は少し下るが本遺跡の東方に位置する土用木西遺跡など見ても、中心的な建物に主軸を合わせた建物が周辺に立ち並ぶことが多く、本遺跡のように単独で存在するものは少ない。

四面廻建物の性格は、村落内寺院と有力者の居宅では、どちらも積極的に評価することができないが、仏教関連遺物以外の遺物を見てみれば、施釉陶器、漆紙を含む漆画関連遺物、巡方の裏金具など一般集落では出土しない遺物が出土することから、門新遺跡のような開発領主層とまではいかないまでも、この地域を開発するにあたり、本遺跡が拠点的な集落として存在し、その首長的な役割を持った人物の居宅と考えるのが妥当であろう。

一方で、仏教関連遺物の出土は仏事があったことを窺わせるものである。仏堂施設が調査区外にあった可能性もあるが、調査区内にあったとすれば、時期及び位置的に可能性が高いものとしてはSB318が考えられるが、あくまでも推測にすぎない。本遺跡の仏堂施設がどのようなものだったのか今後検討していくべき課題である。

### 第3節 土器埋納遺構について

土器がある程度まとまって出土した土坑あるいは土器溜まりの中に土器埋納遺構として分類できるものがある。埋納遺構は、完形あるいはそれに近い食器具が正位あるいは逆位で置かれたような状況で出土した遺構とされ〔前田1997〕、本遺跡では土器埋納遺構及びその可能性を指摘できる遺構はP2、P306、SK492、SX32、SK280、SK573の6基である。

土器埋納遺構については、石川県千本ヤシキダ遺跡における掘立柱建物の柱穴や建物敷地内外に存在する土坑の検討から建物の造営・廃棄に係わる祭祀土坑であることが指摘されている〔楠1987、出越1991〕。さらに、前田清彦氏によって石川県三浦・幸明遺跡の調査成果から、出土土器の器種構成と数量、出土遺構の性格の違い及び建物・建物群との関係から、祭祀の対象と規模に応じた数種類の土器の祭祀類型が想定された〔前田1996・1997〕。

埋納遺構が地鎮などの建物に係わる祭祀の遺構として、本遺跡の埋納遺構と建物との関連を見てみると、第10表のようになる。各遺構が個別の建物に対応しているが、P2はSB348と608の中間地点に位置し、どちらともいえない状況である。建物との位置関係を見てみると、P306とSX32は建物の外、SK492とSK573は建物の中、SK280は柱穴列上に位置しSB317の廃絶後に廃棄された土器の可能性もある。出土遺物の内容を見てみると、土師器無台椀がほとんどでわずかに有台器種や内面黒色土器、小甕が出土する。須恵器は出土しない。時期は、9世紀末頃から10世紀前半頃に位置付けられる。

前述の前田氏の分析から、祭祀の対象が個別建物→建物群→村落全体と大きくなるに従い、土師器無台椀の点数は増え、同時に器種構成が変化し、輸入陶磁器・国産施釉陶器・黒色土器・土師器有台器種の比率が高くなっていくことが明らかにされている〔前田1997〕。これに従えば、本遺跡の埋納遺構は、土師

器無台椀が中心でその数も少なく、個別の建物に対する小規模の祭祀だったものと考えられる。また、埋納遺構は、どの建物にも伴うものではなく、SB348・571にも伴うものの、中心的な建物であるSB317・608に伴うものであり、SB571もIV期の主要な建物とみることも可能であろう。出越氏は祭祀が執り行われる大型建物は、他の建物より一段上の格付けがなされたと想定したが、本遺跡の状況もそれに当てはまるものであろう〔出越1991〕。

遺構	遺物	関連建物	建物との位置
P2	土師器無台椀3点		
P306	土師器無台椀4点	SB317	建物外
SK280	土師器無台椀6点	SB317	柱穴列上
SK492	土師器無台椀5点	SB608	建物中
SK573	土師器無台椀5点・小甕1点	SB571	建物中
SX32 (P43含む)	土師器無台椀14点、有台椀1点、有台鉢1点、内面黒色土器有台椀1点	SB348	建物外

第10表 土器埋納遺構一覧

#### 第4節 埋葬関連遺構について

これまでの新潟県内の古代の埋葬関連遺構は、調査事例が少ないため研究の蓄積が少なく、春日真実氏〔春日1995〕と江口友子氏〔江口2000〕によって集成され、その後の調査例を追加しても18遺跡と少ない。これは、実際はかなりの数の埋葬関連遺構が検出されていると想定されているが、比較的わかりやすい火葬墓の検出例が少なく、土坑墓は出土遺物や遺構の状況から積極的に位置づけが難しいことから検出例が少なくなっていると考えられる〔伊藤2005〕。

本遺跡からは、埋葬関連遺構は可能性があるものも含めて、SK146・205・246・260・482・512の6基が発見された。その内訳は、木棺墓2基(SK146・205)、土坑墓2基(SK246・482)、火葬灰埋納土坑2基(SK260・512)である。木棺墓は、大きな意味で土坑墓に含まれるものであるが、覆土の堆積状況から木棺の存在が推定できるものを木棺墓とし、堆積状況から推定できず、遺体を直接埋葬したと考えられるものを土坑墓として取り扱う。木棺墓、土坑墓とともに埴丘などの上部構造は確認できなかった。

木棺墓は、2基で違いが見られる。SK146は、覆土中に土器が散在していたため、木棺を埋めた後その上あるいは墓上で祭祀を行った可能性があろう。確實に木棺内に納められたと言える遺物は確認できなかつた。遺物は、食膳具・貯蔵具・煮炊具とバラエティーに富む。SK205は、側板を打ち込んで木棺部分を形成しており、棺外に土師器無台椀が1点埋納されているのみである。時期は、SK146が9世紀中葉から後半、SK205が10世紀前半頃と考えられる。

土坑墓は、SK246からの出土遺物などがないため詳細は不明であるが、土坑の規模や形状から土坑墓と判断した。SK482は、楕円形で南東隅に土師器無台椀が正位、内面黒色土器無台椀が逆位で埋納されている。その他の遺物は出土していない。時期は、SK482が9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。

火葬灰埋納土坑は、今回の調査では2基がそれに該当すると思われる。SK260は円形の土坑で、炭化物、焼土及び灰と見られる白色土が多量に含まれており、土師器無台椀を中心とした遺物が出土している。SK512は長方形の土坑で、底面には炭化物がまとまって埋まっており、その中に微細な焼骨片が混ざっていた。骨は分析を行ったところ、人の骨との結果であった。土器などの遺物は出土していない。両遺構と

も覆土の土壤分析を行ったところ、リン酸およびカルシウムの富化が認められた。どちらも炭化物や焼土を多量に含んでいるが、焼土が面的に広がらず覆土に混ざる状態で含まれており、遺構内で火を焚いた可能性は低いと考えられる。また、火葬墓としては、骨蔵器がなく、まとまった骨も出土しないことからその可能性も低い。覆土の状況が火葬灰埋納土坑に類似することから、そのように判断した。火葬墓の発見はできなかったが、調査区外に存在する可能性がある。

本遺跡の特徴は、木棺墓、土坑墓、火葬墓が併存する可能性が高く、それぞれが集落内に散在し単独で造られていることである。古代の墓制については、各地域で研究が進んでおり、畿内の様相は9世紀後半以降は火葬墓と薄葬化した木棺墓が混在する時期とされており [黒崎 1980]。隣接する長野県あるいは関東の様相も9世紀後半から900年を前後する頃まで、火葬墓と土坑墓が混在しているとされる [原1998、仲山1995]。9世紀中葉から10世紀の前半頃まで営まれる本遺跡はちょうどその期間にあたり、土葬と火葬が混在していることは畿内や周辺地域の様相に沿つたものと言えよう。

被葬者は、集落の有力者である可能性が高いが、木棺墓、土坑墓、火葬墓の採用の違いについては、今回の調査からは明確ではない。木棺墓と土坑墓の違いは、遺体を木棺に入れて埋葬するという、より丁寧な埋葬方法である木棺墓の方が集落内において上位者が被葬者であることが考えられる。しかし、火葬墓が見つかっておらず様相が分からることから、土葬と火葬あるいは木棺墓と土坑墓の違いが何に起因するのかは今後の検討課題である。

## 第5節 焼土坑（SK342）について

調査区北西部で焼土層の広がりを検出したSK342の性格については、判然としない。遺構形状と推定されるべき性格の不一致が問題を困難にさせている要因である。調査時からSK342に関しては1. 土師器焼成坑、2. 鋳治関連遺構、3. 廃棄土坑、4. 炊事場、5. 祭祀場、6. 火葬関連遺構と6つの可能性を想定しており、覆土の洗浄を行った。本遺構では2.7kgを越える土師器が出土しており、SX1やSD7を除くと最も出土量が多い。また、その内74%が無台椀であり、器種の偏りが認められる。SK342の周囲には平面梢円形を呈する溝SD347が巡っており、煮炊具の割合が多いものの、土師器が1.6kgと比較的多数出土している。遺物出土量の偏重から、両遺構合わせて一体の施設が形成されていたと推定される。なお、本遺構はSK342の形状が漏斗状を呈しており、加えて小ビットが併設される。各部の名称について、ここでは漏斗状の上部で断面弧状を呈する部位を土坑上部（図版43：SK342 覆土1～6が該当）、漏斗状下位の覆土7～11が堆積する部位を土坑下部、小ビットに分けて呼称する。

最も可能性が高いと考えられるのは1. 土師器焼成坑としての性格であろう。まず、小ビットにおいては断面より少なくとも3回に渡る焼土の堆積が認められ、本遺構が複数回運営された燃焼施設であったと推定される。また、小ビット覆土下位より土師器無台椀(167ほか)が出土しており、燃焼行為と土師器無台椀の関係性が示唆される。小ビット内から土師器無台椀は494gが出土しており、これらはSK342から出土した土師器総量の2割弱に相当する。調査時においても小ビット内には土師器無台椀が多く含まれている印象であったが、SK342における土師器の出土量と各部の規模とを比較すると、相対的に無台椀の破片が小ビット内の焼土及び炭層に多量に含まれている状況がうかがえる。対して土坑下部からの土師器の出土量は散発的であり、燃焼行為ならびに土師器無台椀の関係性から、土坑下部は燃焼行為が行われた際にある程度埋没していた可能性を示唆するものと捉えられよう。これは、土師器の出土量に限らず、覆土中における焼土ブロックないしは焼土層の広がりが小ビット及び土坑上部に限られる点と相補的に考えら

れる。ただし、土坑下部の覆土 8 層中には灰が含まれており、土坑下部の完全埋没後に燃焼行為が行われたとも考え難い。燃焼行為が複数回行わるにつつ小ビットおよび土坑下部の埋没が進行していった状況が窺える。最終的には土坑上部の底面で検出された焼土範囲が小ビットの最終焼土層と接点を持つことから、遅くとも土坑下部の完全埋没後に 3 度目の燃焼行為が行われたと考えられる。これらの状況から、SK342 は土師器焼成坑である可能性が考えられる。

県内における土師器焼成坑には、出雲崎町の梯子谷窯跡や小千谷市の城之腰遺跡、新潟市の草水町 2 丁目遺跡などの事例がある〔望月 2005〕。また近年では、新発田市の丸山 A 遺跡で 8 世紀後半から 9 世紀の中頃まで継続的に土師器の焼成が行われていた事例が報告されている〔渡邊ほか 2014〕。時期が下った 10 世紀第 4 四半期には、本遺跡と同じ東山丘陵沿いに長岡市土用本西遺跡の事例がある〔田中 2007〕。県内を含めた北陸の土師器焼成坑に関しては望月精司氏の一連の研究があり、梯子谷窯跡に見られるような拠点的な須恵器窯との密接な関係が認められる一方、9 世紀代には須恵器生産と切り離された形で経営される小規模な土師器生産が主体となっていく様相が指摘されている〔望月 1997・2005〕。その過程において望月氏が小規模経営窯の類型とした「A 類不整形タイプ」〔望月前掲書〕が、越後で主体的であるとされる。A 類不整形タイプの土師器焼成坑は掘方が浅く床面の被熱度合いが弱いとされ、SK342 土坑上部のみであれば越後特有の小規模経営窯としての評価が与えられよう。しかし、SK342 土坑下部や SD347 といった付随する施設は一般的な土師器焼成坑には見られないようである。

そのため、1. 土師器焼成坑以外の可能性について検討を行った。本遺構の調査を進めるにあたり切り合ひ関係にある SB348 - P 3 より羽口が出土したこともあり、2. 鍛冶関連遺構の可能性を考慮して遺構覆土を水洗し微細遺物の獲得に努めた。その結果、期待されるべき鍛冶関連遺物は含まれておらず、また遺構内の被熱痕跡も弱いことから、本遺構に関し鍛冶関連遺構としての性格は想定し得ない。同様に、微細骨片は 2 g 弱が出土したが、あまりに少量で 6. 火葬関連遺構である可能性も低いと考えられる。SD347 に隣接して SK42 が存在し、須恵器の大甕が本来は据えられていた可能性が考えられるため、4. 炊事場、5. 祭祀場としての可能性も検討したが、断定的ではない。洗浄の結果、土坑覆土中に炭化米が 275 粒含まれていることが判明したが、土坑の性格についてほぼ全ての可能性について何らかの理由付けが可能である。ただし、炭化米は小ビットが 7 粒、土坑下部が 212 粒、土坑上部が 56 粒であり、土坑下部に多い傾向が認められる。土師器焼成時に薪燃料を用いた場合、米が残る可能性も皆無ではないが、その場合、SK342 土坑下部があくまで廃棄土坑、つまりは灰捨て場であった可能性を支持する要因となり得るに過ぎない。以上のことから、SK342 の中でも土坑下部は焼土坑上部に先行する廃棄土坑であった可能性が考えられる。廃棄土坑の埋没に合わせて、同地点を利用して土師器の焼成を行ったという複合的な利用形態があった可能性が示唆される。

## 第 6 節 砓状小溝群について

「第IV章第3節」で触れたように、居住域と重複する形で砓状小溝群が展開しており、主軸方位から 6 群に分けた。調査区を大きく SD480・481 以西、SD480・481 - SD 7 間、SD 3 - 7 間、SD 3 以東の 4 地域に分けるとするならば、それぞれの地域に溝群 1・2、溝群 3・4、溝群 5、溝群 6 が対応し、各溝群は微高地の方向と SD 7 等の溝によって区画される状況が窺える。また、各溝群は、集落の居住域ないしは墓域と重複して検出されており、本遺跡では各時期において集落内の構成が大きく変化していた可能性が考えられる。砓状小溝群に関しては、近年、細井佳浩氏が県内の事例を集成し、その性格や集落内にお

ける土地利用のあり方について考察を行っている。そこでは居住域との位置関係から畝状小溝群を大きく「集落周辺型」と、坂井秀弥氏が「住耕一体型」[坂井1999]とした「居住地内型」の2種に分類されており[細井2014]、本遺跡における検出事例は「居住地内型」に比定される。畝状小溝群の性格に関しては、一般的に「島」跡と考えられており、本遺跡もこれに従う。溝群1・2・4・5では微高地の方向に沿って平行する状況、溝群3では同一地点において主軸方位を変えながら切り合う状況、そして溝群6では切り合いを持たず方形区画を志向したと考えられる状況の3つの耕作パターンを確認することができた。溝群3では最も古い溝群3-1が北西-南東方向で、これと直接切り合う溝群3-2は北東-南西方向で直交する。最も新しい溝群3-3は南北軸をとり、方角を意識した集落構造のあり方へと変化する状況がうかがえる。畝状小溝群の帰属年代は遺物量が豊富ではないため断定的ではない。しかしながら、遺構の切り合いを参考に、9世紀末から10世紀初頭頃を中心に、溝群3-1がやや古く溝群3-3および溝群6はやや新しいと考えられる。当該期の集落のあり方については、信濃国城における木棺墓を主軸とした原明芳氏の論考があり、「朝野群載」巻十七所収の上総国藤原莊の記事を引用して、「墓を造った地を子孫が手放し、自らの墳墓が「牛羊」に踏み荒らされ（中略）繼承して經營されないことが想定されており、それが当然であった可能性さえ」あると指摘される[原2009]。本遺跡において溝群3-1がSK512を切る状況も同様であろう。加えて、地山は妙質分の多いシルトであり、調査時は少雨であっても遺構内に土壤が堆積したり遺構の肩が崩れたりした経験がある。小溝群の埋没・変遷に関しては時期を大きく隔てず、居住域・墓域・生産域の構造も比較的短期間に変化した可能性が考えられる。

## 第7節 出土土器の位置づけ

新潟県における古代の土器編年については、上越市今池遺跡、聖籠町山三賀遺跡の調査から坂井秀弥氏によって整理され[坂井1984・1989]、また一方で、新潟県内の古代須恵器の主要な供給元の佐渡小泊窯跡の編年が再検討され[坂井・春日ほか1991]、これによって供給元及び消費地での編年の大枠が示された。これを基礎に、その後は百瀬正恒氏[百瀬2008]や 笹澤正史氏[笹澤2011]によって問題提起がなされているものの、春日真実氏の一連の研究[春日1999・2005など]により示された土器編年が基準になっている。その中で、古志郡の土器編年については、春日氏によって出雲崎町梯子谷窯跡調査成果[春日2001]から、田中靖氏によって長岡市八幡林遺跡[2005]、下ノ西遺跡[2003]、門新遺跡[1995・1996]、土用木西遺跡[2007]の発掘調査成果から、その概要が示されている。ここでは田中氏の成果に依拠しながら、食膳具を中心に検討し、本遺跡の年代的な位置づけを行いたい。

年代	春日1999	春日2001	田中1996・2003・2005	本書
850	V 1期	梯子谷窯跡7期	下ノ西遺跡7期	
	V 2期	(+)	下ノ西遺跡8期	I a期
900	VI 1期	梯子谷窯跡8期		I b期
	VI 2・3期	梯子谷窯跡9期	下ノ西遺跡9期	II期
	VII 1期	梯子谷窯跡10期	下ノ西遺跡10期	III期
	VII 2期	梯子谷窯跡11期	門新遺跡III期	IV期

第11表 編年対照表

I期は、量は少ないが、やや古い様相を持つものが存在し、a期とb期に分けることが出来る。a・b期とともに食膳具は須恵器が土師器よりも多い傾向がある（第20図）。

Ia期として捉えられるのは、SI54・SI664・SK146である。須恵器有台坏は底径が大きく、身が深い形態であり、しっかりした高台が付く。須恵器無台坏は、器壁が厚く、体部の外傾度合いは弱い。土師器無台椀は、口径が大きく身が深い形態で、外面にヘラケズリの再調整が施されている。

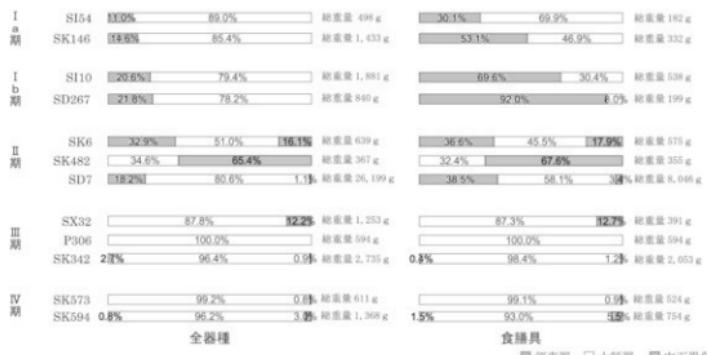
Ib期は、SI10・SD3・8・267が該当する。須恵器有台坏は、a期に比べ底径が小さくなり、体部は外に開く。高台は低くなり、外端設置する。須恵器無台坏は、口径11.8～13.4cm、底径7.0cm～8.4cm、器高2.5～3.2cmを測り、器壁が薄くなり体部はより外に開く。土師器無台椀はa期と同様に大振りのものも見られるが、器高が低く坏型に近い形態のものも見られる。

I期の時期は、土器の特徴から下ノ西8期に相当するものと考えられるが、a期はそれよりやや先行するものと考えられることから、Ia期を9世紀中葉頃、Ib期を9世紀後半頃と考えたい。

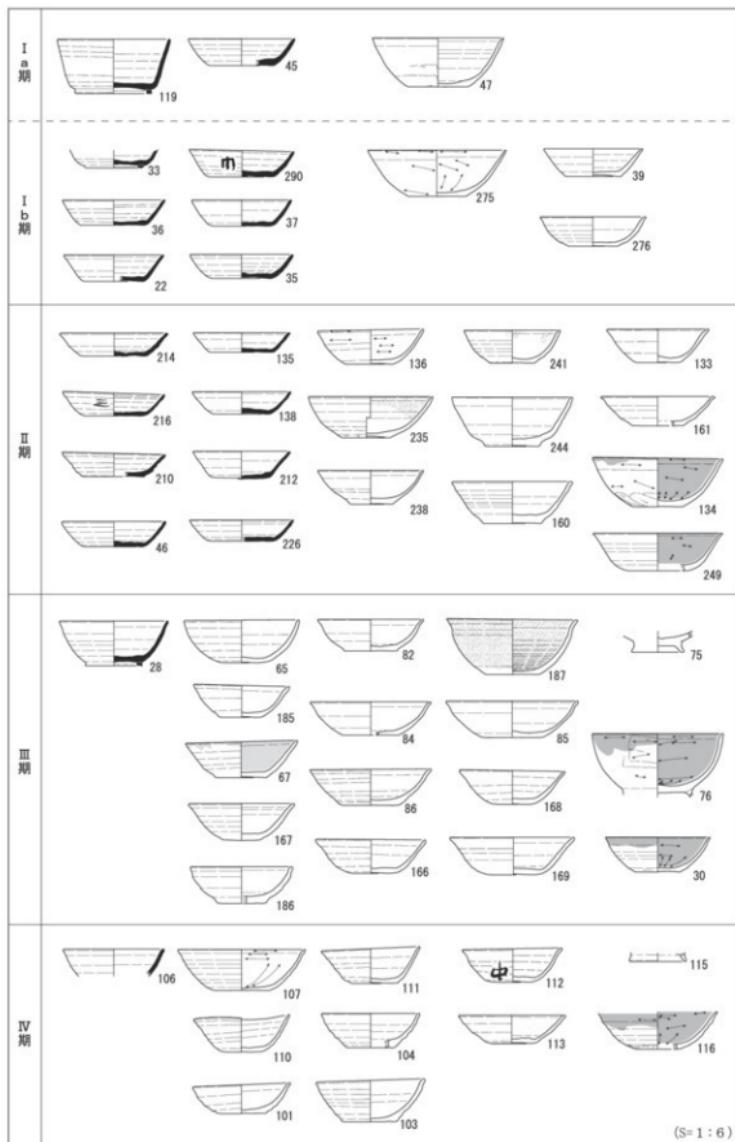
II期は、SK6・48・361・482・492及びSD7が該当する。須恵器無台坏は、口径11.8～12.8cm辺りに集中する。底径6.3～8.3cm、器高2.4～3.4cmであり、I期と大きな違いは見られない。土師器無台椀は、口径12.4～13.8cmが主体で、15cmを超えるものも存在する。底径は、5.4～6.5cmが主体となっており、I期よりも小型化する。器形は、B類が主体を占めており、C類・D類が同程度ある。I期に続き再調整されるものも定量存在するが、ロクロ痕が顕著なものが多くあり、粗雑化が窺える。内面黒色土器も定量存在し、外面にヘラミガキやヘラケズリを施すものもある。

II期の時期を考えてみたい。SD7の説明で述べたように、SD7の食膳具構成比率が須恵器38.5%、土師器58.1%、内面黒色土器3.4%となり、土師器が須恵器を上回るようになる。これは、下ノ西編年9期にみられる変化であり、構成比率もほぼ近い。従って、II期は9世紀末から10世紀初頭頃に位置づけられよう。

III期はSK260・280・342、SE677、P2・43・306、SX32が該当する。須恵器食膳具はほとんど見られなくなり、流れ込みの可能性が高いが、SI5から出土している有台坏は、椀型にかなり近く新しい様相である。土師器食膳具は、数は少ないが有台椀が加わる。無台椀は、口径は、12.0～14.0cmを主体とするが、15cm以上の大振りのものも定量存在する。器高は4.0～5.5cmを主体とする。底径は、5.6～7.0cmが



第20図 土器種別組成図（重量比）



第21図 食膳具変遷図

主体となる。再調整されるものはほぼなくなり、丁寧に撫でられるものもわずかにみられるが、ほとんどがクロク痕を残すもので、さらに粗雑化が進んでいる。形態は、B類とD類がほぼ同程度で大半を占め、わずかにA類とC類がある。C類はII期に比べて大幅に減っている。内面黒色土器は少ないながらも存在し、有台椀も加わる。

III期の時期を考えてみたい。須恵器食膳具がほとんどなく、土師器食膳具が主体を占めること。土師器無台椀では口縁端部が外反するD類が増え、II期よりも粗雑化が進行するが、10世紀第2四半期に位置づけられる門新遺跡 SD152 出土のものよりも全体的に口径が大きく器高が高いことから、それよりも前に位置づけられること。また、土師器と内面黒色土器に有台器種が加わることなどから、下ノ西 10期に平行する、10世紀前半頃が考えられる。

IV期は、SK573・594 (SX266) が該当する。須恵器食膳具はわずかに残るのみである。土師器食膳具はこれまで同様B類が主体である。107のように大振りの椀でヘラミガキが施される古い様相のものを含むが、口径15cmを超える大振りの椀が見られなくなる。全体的にはロクロ痕が顕著になり、さらに器形のゆがみが大きくなり、また器壁が厚くなるものがある。内面黒色土器もわずかに存在する。

IV期の時期は、土師器無台椀の粗雑化が進行し、ゆがみが大きくなる点は、門新遺跡 SD152 出土土器に類似するが、門新遺跡よりも若干深身の形態である。そのため、IV期を10世紀第2四半期の中でも早い時期に位置づけたい。

## 第8節 墨書・漆書土器について

本調査では、69点の土器において墨書・漆書を確認することができた(第12表)。墨書は64点、漆書は5点であり、その内50点を図示した。最も多く出土したのはSD 7で17点あり、次いでSX 1の6点、SD267の3点となる。結果として、墨書・漆書土器はこのSD 7を中心としてSD267を含む半径30m程度の範囲に集中する傾向が見られる(第22図)。これに対して、漆書は「×」字で統一され、SD 7とSB574を結ぶ範囲には限られる。I・Jグリッドの周囲に展開する建物群との関連性が示唆されよう。

文字の構成は1文字墨書が主体であり、286・293では内外面に1文字ずつ計2文字が書かれている。墨書・漆書の内、文字の一部ないしは全体が遺存しており判読対象となり得るものは51点を数え、墨書・漆書合わせて「×」字状の記号が14点と最も多い。類似した文字・記号に「十」字が3点あるが、「×」字の中には分類し難いものも含む。2画の角度や正位ないしは倒位における文様の向きで判断した。「卍」字は10点あり、「×」字の次に多い。その他の文字・記号は散発的で、各1~5点程度に留まる。また、記銘部位は須恵器無台杯の場合、体部外面に書かれるものは3割弱であるのに対し、土師器無台椀では9点を数え半数を超える。土器の種類および時期による選択が働いた結果と捉えられる。

文字種の判読に関しては『改訂新版 日本古代木簡字典』[独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所編 2013]を参考にしたほか、新潟県立歴史博物館の浅井勝利氏にご教示を賜った。また、県内外の事例に関しては新潟墨書土器検討会による一連の調査成果[小林ほか2004・新潟墨書土器検討会2013]及び、これらを基に明治大学日本古代学研究所において作成された2013年3月までのデータベース[吉村武彦ほか編2014・加藤友康ほか編2015]を参考にした。以下、主な文字種について概観する。

「寺」字墨書(227) SD 7の覆土1層より1点出土した。SD 7ではSB317とSD153の間の範囲に墨書土器の出土が限られており、この限られた範囲は微高地ならびに居住域の範囲と重複する。SD 7の埋没過程において近隣の建物群から遺物が流れ込んだ状況を示すものと考えられる。底部外面に「寺」字の

No.	出土位置	遺構	領部器			記録部位				向き	墨書	漆書	備考
			食器具	土器器	内器	体部外 上面	体部外 外面	体部外 下部	底部 外面				
5	13 K 5	SH318-P8	1						1	-	1	「升」#	
20	13 H 2	SH674-P2	1						1	-	1	「×」#	
27	14 L 1	S110	1						1	-	1	墨気あり	
44	14 K 12	S194	1						1	正位	1	「キ」状	
112	12 I 16	SK594	1						1	側位	1	「中」	
138	14 K 7	SK68	1						1	-	1	「×」	
152	14 K 23	SK151	1						1	-	1	文字種不明	
192	13 J 15	S97	1						1	正位	1	「十」#	
196	13 J 15	S97	1						1	正位	1	「三」	
197	13 J 15	S97	1						1	-	1	「×」#	
198	14 J 12	S97	1						1	-	1	「升」	
205	13 J 24	S97	1			1				-	1	「H」状	
207	13 J 10	S97	1						1	-	1	「前」#	
209	12 K 21	S97	1						1	正位	1	「十」#	
210	14 J 12	S97	1						1	-	1	「×」	
216	14 J 12	S97	1			1				正位	1	「三」	
225	12 K 16	S97	1						1	-	1	「千」	
226	13 J 10	S97	1						1	-	1	「×」	
227	13 J 24	S97	1						1	-	1	「升」	
229	12 K 21	S97	1						1	-	1	「升」	
246	14 J 3	S97	1						1	正位	1	「十」#	
247	13 J 23	S97	1						1	側位	1	「乙」#	
285	14 M 19	SD131	1						1	-	1	「×」	
286	14 I 15	SD153	1						1	正位	1	文字種不明	
288	13 K 13	SD267	1						1	-	1	「升」#	
290	13 K 13	SD267	1						1	-	1	文字種不明	
290	13 K 14	SD267	1						1	正位	1	「巾」	
292	13 L 29	SD273	1						1	-	1	「千」（「平」状）	
293	12 I 23	SD302	1						1	正位	1	「×」（「口」内あり	
300	10 P 17	SD416	1						1	-	1	「升」#	
317	14 K 8	SD111	1						1	-	1	文字種不明	
331	13 L 24	P156	1						1	-	1	「キ」状	
337	13 E 24	S31	1						1	-	1	「×」	
339	14 E 8	S31	1						1	側位	1	「馬」	
340	13 G 12	S31	1			1				正位	1	「三」	
341	14 F 12	S31	1						1	-	1	「大」#	
343	14 H 24	S31	1						1	-	1	「千」#	
362	12 J 2	SD400	1						1	-	1	「×」	
390	13 M 24	遺構外	1						1	正位	1	「升」#（「口」）	
391	13 J 24	遺構外	1						1	正位	1	「透」	
397	13 L 6	遺構外	1						1	-	1	「透」	
398	14 M 2	遺構外	1						1	-	1	「山」#	
399	13 L 6	遺構外	1						1	-	1	「×」	
401	13 I 1	遺構外	1						1	-	1	「×」	
412	14 K 12	遺構外	1						1	-	1	「升」	
422	13 M 14	遺構外	1						1	-	1	「几」、漆紙付	
430	14 L 5	遺構外	1						1	-	1	「加」	
420	13 J 19	遺構外	1						1	正位	1	「千」	
441	11 I 19	遺構外	1						1	正位	1	「大」	
448	地上		1						1	斜	1	「千」#	
米南物（点数）			12	7	1	0	2	1	8	1	5	18	1脚片
計（点数）			59	18	1	21	11	11	38	3	5	641	5

第12表 墨書・漆書土器集計表



第22図 古代文字資料出土位置図（1:1,000）

墨書が認められた無台杯もその一つと言え、SD 7 の比較的浅い位置から出土した。底部片のみが遺存しており全体像は判然としないが、底部のやや丸みを帯びた形状からⅡ期の所産と考えられる。県内における「寺」字墨書は、2013 年時点で 13 遺跡 26 点報告されている。須恵器・土師器の食膳具に関しては 11 点が本資料と同様の底部外面に書かれており、記銘部位としては最も多い。類例の中では比較的近い地域に所在する見附市上田遺跡では、「寺」字が 2 点、「寺万呂」が 1 点出土している。報文の中で分析者の田中一穂氏は上田遺跡出土資料について、県内における寺院や仏教的な施設が考えられない地点からの出土例などから、「寺」字墨書を「寺院・仏教とは無関係で、人名「寺万呂」の象徴的な一文字を抜書きしたもの」[田中 2005] とする理解を示している。本遺跡においては四面廻建物 SB317 が検出されたことから、本資料の出土をもって村落内寺院が存在した可能性を検討したが、「第VII章第2節」のとおり、寺院としての性格を確定するには至らなかった。「寺」字に関しては、前述の上田遺跡の例に見られたように、人名等を示した可能性や SB317 以外の構造が寺院であった可能性についても看過すべきではないと考えられる。なお、SI54 出土の須恵器杯 (44) や P 156 出土の土師器無台椀 (331) など、文字の一部しか残存していない資料において「寺」字を想起させるものが 4 点出土しており、その形状から「キ」字状墨書とした。細片が多く原位置を留めていない可能性も含むが、出土地点は SD 3 および SD 7 によって区切られた SB318・SI54 等の建物群が所在する範囲に限られる。

**数字を記した墨書** 「廿」字 (5・198・229・288・300・390・391・412) が 10 点、「千」字 (225・292・343・439・448) が 5 点、「三」字 (196・216・340) および「十」字が 3 点 (193・209・246) 出土した。漢数字を用いたものは 1 b 期～Ⅱ期に見られる。「廿」字は全て須恵器の無台杯である。SB318 出土の 5 は他の文字である可能性も考えられる横・縱共に直線状で、払い、ハネは認められない。198・229・288・412 では 4 画目の横線が無い。県内では、可能性があるとされたものも含むと 7 遺跡 26 点が数えられている。新潟市の場遺跡や上越市今池遺跡の事例では 4 画目の横線も認められ、本遺跡と異なる。「千」字は須恵器無台杯および土師器無台椀が 2 点ずつ、計 4 点出土した。土師器の 2 点は共に構外からの出土である。皆、筆順は通常の「千」字と同じで、SD273 出土の 292 は 1 画目が 2 画目に平行し「弔」状を呈する。ここでは「千」字の変形と捉える。「千」字を用いた例は県内では 20 遺跡 108 点が確認されている。新潟市积迦堂遺跡では「千繩」と 2 文字を用いた事例が報告され、人名を表した可能性が指摘されている [江口 2000]。だが、「千」字の類例は多いため、本遺跡における同字が人名を表すものか判然としない。「三」字は SD 7 から 2 点、SX 1 から 1 点出土しており、全て須恵器無台杯である。3 点とも体部外面に正位で書かれており、216・340 は口縁寄りの高い位置に記される。「十」字としたものは SD 3 に限られる。須恵器無台杯が 2 点、土師器無台椀が 1 点である。体部外面下部に正位で書かれる点で共通する。

**その他の文字を記した墨書** 須恵器無台杯に「前」(207)、「巾」(290)、「鳥」(339)、「大」(341)、「邊」(397)、「山」カ (398)、土師器無台椀に「中」(112)、「几」(423)、「加」(438)、「大」(441) がある。「鳥」・「大」字を除く 7 種の文字では各 1 点ずつ出土した。須恵器無台杯はいずれも 1 b ～Ⅱ期の所産である。「前」字は SD 7 出土で、県内でも 2 点が集成されているに留まり出土例は少ない。207 は底部外面の中央に書かれており、文字の右半を欠く。文字の上部に書かれるべき横画は所謂「ひとやね・ひとがしら」のように傾斜している。「鳥」字は SX 1 出土の 339 が文字の全形を留めており判読し易い。字形は、「山」へんが冠のように上部に配置された形をとっている。構外Ⅷ層からこの冠状の「山」が書かれていると考えられる細片が出土しており「島」字の可能性がある。339 は底部外周から体部外面にかけて倒位で書かれており、運筆は粗く下部の「島」は崩れた形をとっている。県内では「島」字が 1 点、「鳴」字が 7 遺跡 21 点集成されてお

り、数多く出土しているとは言い難い。長岡市八幡林遺跡における「足嶋」、上越市寺町遺跡における「嶋繼」のように、複数文字を用いて人名を表したと考えられる事例があるため、本遺跡の事例も人名の一部である可能性がある。ただし本字の本来の意味から、地名を表した可能性に留意すべきであろう。「邊」字(397)は遺構外出土であり、底部外面に書かれている。文字上部は大きく欠損するが、「しんよう」及び上部の「方」形の運筆から同字と判断した。県内における出土例は認められず、隣県の富山県で2例報告されている〔加藤ほか2015〕が全国的に見ても少ないようである。本字は「山・川・野・垣」などに後続し地名や人名を表すことが多く、本遺跡でも地名等を表す可能性が考えられる。しかし、底部の面積に対して文字が大きいため、複数字が書かれていたとは考え難い。「山」カとした398は遺構外出土で、底部外面に書かれている。直線状の3画がそれぞれ1点で交差しており、矢印状の記号である可能性も考えられる。見附市の上田遺跡において矢印状を呈する「山」字が報告されており、「集団内でも文字について不分明な者たちが真似て書き継ぐうちに次第に省画・簡略化が著しくなり、字体の変化が生じたもの」〔田中2005〕と考えられている。

土師器無台椀における墨書き土器は遺構外からの出土が多く、時期の特定は困難である。9世紀後半から10世紀第2四半期のいずれかの時期に収まるものであろう。「中」字が書かれた112はSK594の浅い箇所から出土しており、遺構外の破片と接合した。墨書きは体部下半にあり、運筆から倒位で記されたと考えられる。10世紀第2四半期頃の所産と考えられ、本遺跡における墨書き土器の中では後出的である。

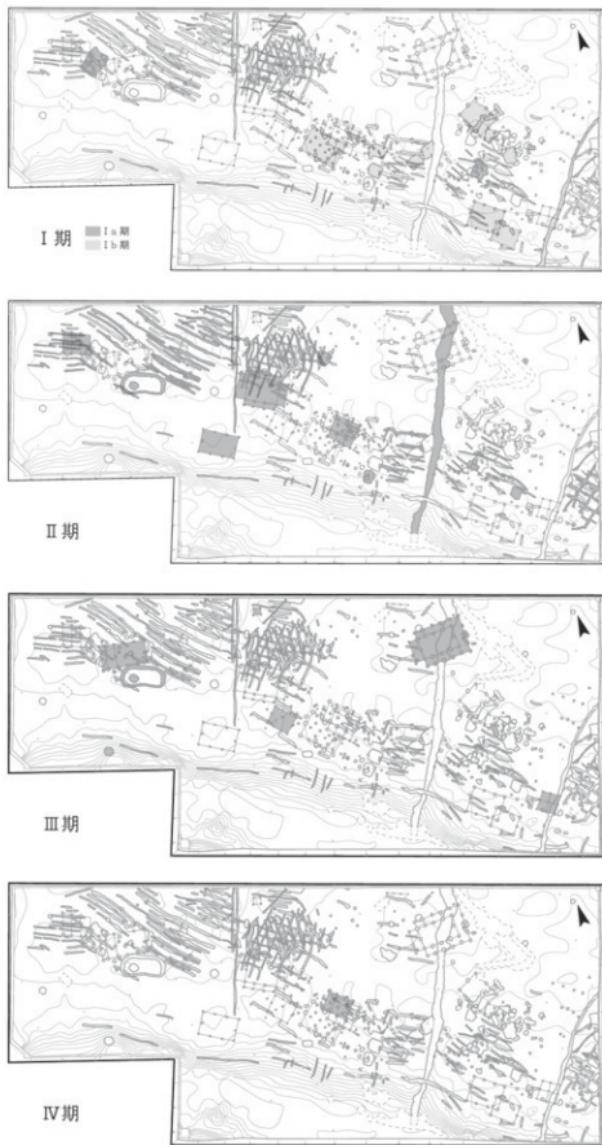
## 第9節 集落の変遷と遺跡の性格

### I期（9世紀中葉～末頃）

8棟の竪穴建物と4棟の掘立柱建物で構成され、畠や溝などが伴う。SD7はこの頃から利用されていたと思われる。SI54・664は他の建物に比べて若干先行するものと考えられる。今回の調査で検出された竪穴建物の面積は小さく10mに満たないが、SI664は集落の中では突出して大きく約19m<sup>2</sup>となっている。SB574は平面積が43.1m<sup>2</sup>あり、当期の最大の建物で中心的な建物と考えられる。SB166・167は重複するが、同時期で捉えられたため、短期間で建て替えが行われた可能性がある。竪穴建物は、2棟が一組になるように立地しており、掘立柱建物に隣接し、それぞれの建物に付属するものであろうか。SI212からは遙方の裏金具が出土している。また、木棺墓および火葬墓の存在が想定される火葬灰埋納土構があり、有力者の存在が窺われる。

### II期（9世紀末～10世紀初頭頃）

竪穴建物4棟と掘立柱建物4棟で構成され、畠、溝、土坑、井戸などが伴う。畠が大きく拡大し、広範囲で畠が作られる。竪穴建物は、I期のように掘立柱建物に隣接した位置ではなく、畠に隣接し散在する。そのため、畠の耕作者の住居や作業小屋だった可能性が考えられる。一部の畠に後出して、掘立柱建物が建てられる。掘立柱建物は廟が付く建物や総柱の建物が見られる。中でもSB608はやや特異な形態ではあるものの四面廁建物で、井戸を伴う可能性が高く、集落の中心的な建物であることは間違いない。また、SB608には土器埋納遺構が伴っており、地鎮などの祭祀が行われた可能性が高い。SB316・320・608・SK342は主軸方位を同じくし、同時期に位置づけられよう。SK342はⅢ期まで存続していたものと考えられ、土師器焼成坑として機能していた可能性がある。SB320は総柱建物で、穀物や耕作物の保管をしていた倉の可能性がある。集落で最大の溝であったSD7はこの時期に埋没する。土坑墓（SK482）と火葬灰埋納土坑（SK260）があるが、SK482はSB608と溝群3に近接したところに位置し、居住区域の中に位置



第23図 遺構変遷図 (1 : 1,000)

しており、SK260は居住区域から離れた何もないところに位置している。当該期の遺物には、「寺」字墨書土器や灯明皿や仏鉢型土器が出土していることから、仏堂施設の特定までは至らなかつたものの仏事が行われていた可能性が高い。当該期は、Ⅰ期から畠が大きく広がり、廂付建物が建つななど、開発が大きく進み集落の最盛期を迎える。

#### Ⅲ期（10世紀前半頃）

掘立柱建物5棟で構成され、井戸、土坑などが伴う。堅穴建物は造られなくなり、掘立柱建物が主体となる。集落で最大のSB317が存在し、Ⅱ期のSB608より規模が大きく整った四面廂建物となり、集落の中心的な人物が成長したことが窺える。Ⅱ期に見られた畠は、ほとんどなくなり建物のみの景観になる。SB535の存在は、農耕が行われ収穫物を収蔵していたことが考えられる。そのため、この時期まで残る畠もあったと想定され、また調査区外に広がっている可能性が考えられよう。大甕を据えたSK42が隣接するSB348に付属するものであるとすれば、SB348は何らかの工房や祭祀を行う施設だった可能性も考えられよう。井戸（SE677）は、SX 1の斜面に位置し、特定の建物に付属するような状況ではないため、集落全体で使う井戸だったであろうか。立地は悪いが、湧水する場所を選定した結果、少しでも低く水に近いこの位置になったと考えられる。木棺墓が造られ、SB317に係わる人物が埋葬されていた可能性が考えられる。当該期は、Ⅱ期に引き続き集落の最盛期であり、安定した時期だったと考えられる。

#### Ⅳ期（10世紀第2四半期頃）

建物は掘立柱建物1棟（SB571）でそれに伴う埋納土坑や廐棄土坑が存在する。Ⅲ期にみられた大型の四面廂建物がなくなり、建物数が極端に減少することから当該期を最後に集落は衰退していったものと考えられる。

以上から、9世紀中葉頃に新たにこの地域に進出し、周辺を開発した集団で、そこから急速に成長し、9世紀末頃には四面廂建物を持つほど集団になっていった。しかし、10世紀第1四半期頃を過ぎると衰退し、10世紀第2四半期頃には廐絶するものと考えられる。これまで検討してきたように、建物の構造や配置、その他の造構の構成からは官衙関連施設であることは考えがたく、新たに勢力を拡大してきた集団の集落と考えたい。集落が営まれた期間は100年にも満たず、居住城と耕地が一体となって住耕一体型の集落を形成しそれに井戸や土坑が伴う、「王朝国家型村落」[坂井1999]ということができるだろう。そして、一般集落ではあまりみられない廂付の大型掘立柱建物、施釉陶器、帶金具が出土している。また、権状鍼が出土しており、一般集落ではなく公的な色彩を帯びる遺跡からの出土が大半を占めること〔望月2003、神谷・笹澤2008〕が指摘されている。従って、本遺跡は一般集落よりも階層が上であることは間違いないだろう。

出土遺物からは、農業を生業の中心とし、手工業、漁労活動を行っていたことが窺える。手工業では、集落の始まりから一貫して漆を利用しており、漆紙が付着する漆パレットや漆桶の出土から漆工房の存在も想定される。また、土師器焼成坑があったとすれば、土器生産も行っていたということになろう。

信濃川右岸の地域では、富島地区の五百刈遺跡や盲田遺跡の調査において、9世紀代に有力者の存在が明らかとなり、また土用本西遺跡の調査から10世紀末から11世紀前半の有力者の居宅が存在していたことが明らかにされ、徐々に古代の様相が明らかとなってきている。今回の調査において9世紀後半から10世紀前半の様相を捉えられ、この地域の歴史を考える上で一つの事例を追加することができた。今後は、10世紀中葉以降の空白を埋めることにより、より古代の様相を明確にしていくことが課題となろう。

## 引用・参考文献

- 相田泰臣 2012 「第VII章第2節 遺物」『林付道路 第2次調査』新潟市教育委員会
- 愛知県 2015 「愛知県史 別編 黒葉1 古代 猿投系」愛知県史編さん委員会
- 天野努 2005 「墨書き器からみた古代房総の郷と村と集落・家族」『千葉県文化財センター 研究紀要』24 財團法人千葉県文化財センター
- 雨宮龍太郎 1983 「古代村落と仏教」『研究連絡誌』2号 千葉県文化財センター
- 荒川隆史・加藤学 1999 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉A遺跡」新潟県教育委員会 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2004 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡」新潟県教育委員会 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安藤正美 2005 「見附市埋蔵文化財調査報告 第20 上田遺跡」見附市教育委員会
- 石毛彩子 2007 「古代豪族居宅の構造—官衙・集落との比較から—」『古代豪族居宅の構造と機能』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 伊藤秀和 2001 「加茂市文化財調査報告 (13) 鬼倉遺跡」加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2005 「加茂市文化財調査報告 (14) 馬越遺跡」加茂市教育委員会
- 伊東隆夫ほか編 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 江口桂 2012 「東日本における古代四面彌陀物の構造と特質」『四面彌陀物を考える』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 江口友子 2000 「第VII章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第100集 釈迦堂遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小熊博史 2002 「東山丘陵における縄文時代の集落跡—中道遺跡の中高集落を中心に—」『長岡市立科学博物館研究報告』第37号 長岡市立科学博物館
- 春日真実 1993 「王朝国家期の越後一上越市一之口遺跡（西地区）・新潟市小丸山遺跡を事例として—」『新潟考古』第4号 新潟県考古学会
- 春日真実 1995 「新潟県の奈良・平安時代の墓制について」『東日本における奈良・平安時代の墓制』 東日本埋蔵文化財研究会
- 春日真実 1995 「古代集落の展開—越後を事例として—」『研究紀要』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1997 「第VII章B 平安時代」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集 上郷遺跡II』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997 「越後ににおける10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1999 「第4章第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 春日真実 2001 「第VI章2 和島・出雲崎地域における7世紀末から10世紀の土器の変遷」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集 梶子谷遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2005 「越後ににおける奈良・平安時代土器編年の対応関係について」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 春日真実 2007 「越後ににおける古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 加藤真二 1997 「木棺墓8X6428について」『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告書』 奈良県立文化財研究所
- 加藤友康ほか編 2015 「全国墨書き土器・刻書き土器、文字瓦 横断検索データベース (試行版)」2014年度科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) 墨書き土器データベース (課題番号268006)  
<http://www.kise.mext.go.jp/~meikodai/bokusyoDB.html> 明治大学日本古代学研究所
- 神谷住明・荒澤泰史 2008 「出土度量衡遺物について」『研究紀要』26号 (財)郡馬県埋蔵文化財調査事業団
- 北村淳 2004 「第VII章6 B 1 古代の遺物 仏鉢型土器」『中谷内遺跡Ⅲ・沖ノ羽遺跡Ⅱ・細池寺道上遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 北村亮・山本肇ほか 1985 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡」新潟県教育委員会

- 橋正勝 1987 「第5章第1節3 理納土坑について—掘立柱建物に伴う祭祀について—」『金沢市文化財紀要 68 金沢市千木ヤシキダ遺跡』 金沢市教育委員会
- 黒崎直 1980 「近畿における8・9世紀の埴墓」『研究論集VI』 奈良国立文化財研究所
- 小池邦明・藤原明ほか 1993 『新潟市の場跡』 新潟市教育委員会
- 小池邦明・木間桂吉 1995 『新潟市小丸山遺跡』 新潟市教育委員会
- 小林義孝 1992 「灰を納めた土壤」「究班」 理藏文化財研究会
- 小林昌二ほか編 2004 『新潟県出土古代文字資料集成』 新潟県書土器検討会
- 齊藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産—猪突窯を中心にして—」『古代の土器研究—律令の土器様式の西・東3 施釉陶器一』 古代の土器研究会
- 坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『新潟県理藏文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 「第VII章2 奈良・平安時代の土器」『新潟県理藏文化財調査報告書第53集 山三賀II遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・春日真実ほか 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥 1994 「疗と館、集落と屋敷—古代東国における郷の形成ー」『城と館を齧る・読む』 山川出版社 (『古代地域社会の考古学』 2008 所収)
- 坂井秀弥 1996 「律令以後の古代集落」『歴史学研究』第681号 歴史学研究会  
『古代地域社会の考古学』2008所収
- 坂井秀弥 1999 「第4章第1節 総論」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 桜岡正信 2003 「夜行野型羽釜の生産と流通—地域限定流通の背景ー」『研究紀要』21 (財)郡馬県理藏文化財調査事業団
- 笠生衛 2006 「古代東国集落と仏教信仰—千葉県内の事例を中心にー」「在地社会と仏教」 奈良文化財研究所
- 笠澤正史 1998 「III. 付録 高田平野における平安時代前半期の食膳具について」『保坂遺跡発掘調査報告書』 上越市教育委員会
- 笠澤正史 2001 「第VI章 まとめ」『新発田市理藏文化財調査報告書第23-2集 坂ノ沢C遺跡II』 新発田市教育委員会
- 笠澤正史 2011 「第VII章2 古代の土器の時期と特徴」『新発田市理藏文化財調査報告第42集 七社遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
- 上越市 2003 『上越市史 資料編2 考古』 上越市史編さん委員会
- 菅原祥夫 2012 「石のおもりと土のおもり」『研究紀要 2012』 福島県文化財センター白河館
- 鈴木俊成・春日真実ほか 1994 『新潟県理藏文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』 新潟県教育委員会・(財)新潟県理藏文化財調査事業団
- 鈴木俊成・三ツ井朋子ほか 2010 『新潟県理藏文化財調査報告書第206集 西部遺跡II』 新潟県教育委員会・(財)新潟県理藏文化財調査事業団
- 須田勉 1985 「平安初期における村落内外寺院の存在形態」『古代探査II』 早稲田大学出版部
- 高橋照彦 1995 「Ⅲ土器・陶磁器 3. 緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 田嶋明人 1983 「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡一加賀・能登の掘立柱建物群を中心とした覚え書ー」『北陸の考古学』 石川考古学研究会
- 田中一徳 2005 「見附市上田遺跡出土の文字資料について」『見附市埋蔵文化財調査報告 第20 上田遺跡』 見附市教育委員会
- 田中靖 1995 「第V章1 平安時代の土器食膳具について」『和島村埋蔵文化財調査報告書第4集 門新遺跡』 和島村教育委員会
- 田中靖 1996 「第IV章1 平安時代の土器について」『和島村埋蔵文化財調査報告書第5集 門新遺跡外割田地区』 和島村教育委員会
- 田中靖 2003 「第VI章2 出土土器について」『和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡IV』 和島村教育委員会
- 田中靖 2005 「第V章2 出土土器について」『和島村埋蔵文化財調査報告書第16集 八幡林遺跡IV』 和島村教育委員会
- 田中靖 2007 「第VI章2 出土土器について」『土用木西遺跡』 長岡市教育委員会
- 鶴巻康志ほか 2003 『新発田市埋蔵文化財調査報告 第27 桑ノ口遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
- 出越茂 1991 「第5章1 千木ヤシキダ遺跡に見る古代地鎮祭祀」『金沢市文化財紀要 86 金沢市千木ヤシキダ遺跡II』 金沢市教育委員会

- 出越茂和 1999 「古代北陸における官寺・山寺・里寺」『北陸の考古学Ⅲ』 石川考古学研究会
- 戸田芳実 1967 「日本領主制成立史の研究」 岩波書店
- 富永樹之 2007 「富豪の寺」『神奈川考古』第43号 神奈川考古同人会
- 鳥居美栄 2015 「五百刈遺跡」 長岡市教育委員会
- 鳥居美栄 2015 「首田遺跡」 長岡市教育委員会
- 長岡市 1992 『長岡市史』資料編Ⅰ 考古
- 長岡市教育委員会 2014 『平成25年度長岡市内道路発掘調査報告書』
- 中沢悟 1986 「第6章第2節(3)月夜野型鋒鏡の様相と月夜野古宮跡群」『大原道路・村主道路』(財)群馬県立文化財調査事業団
- 仲山英樹 1995 「古代東国における墳墓の展開とその問題点」『東日本における奈良・平安時代の墓制』 東日本理叡文化財研究会
- 奈良国立文化財研究所 1985 「木器集成図録 近畿古代編」
- 奈良国立文化財研究所 1993 「木器集成図録 近畿原始編」
- 奈良文化財研究所編 2012 「四面廻建物を考える」 独立行政法人國立文化財機構奈良文化財研究所
- 奈良文化財研究所編 2013 『新訂新版 日本古代木簡字典』 八木書店
- 新潟墨書き検討会編 2013 『平成24年度 新確認の新潟県内出土の墨書き土器』 新潟墨書き土器検討会
- 野村忠司ほか 2009 『子安遺跡』 上越市教育委員会
- 原明芳 1998 「埋められた大甕」『信濃』第50巻11号 信濃史学会
- 原明芳 1998 「信濃の古代埴輪」『長野県考古学会誌』第86号 長野県考古学会
- 原明芳 2001 「墓に埋められた品々」『中世土器研究論集』 中世土器研究会
- 原明芳 2003 「灰釉陶器考」『長野県考古学会誌』103・104号 長野県考古学会
- 原明芳 2009 「平安時代に出現する木棺からみえる信濃の在地社会」『信濃』第61巻4号 信濃史学会
- 東日本理文研究会 1995 『東日本における奈良・平安時代の墓制』
- 広瀬和雄 1986 「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』第6巻 岩波書店
- 広瀬和雄 1991 「古代の農村」『日本村落史講座2 景観1』 雄山閣
- 細井佳浩 2014 「新潟県における古代の「武石小溝」(品)について 一越後国域の検出事例から一」『三面川流域の考古学』第12号 奥三面を考える会
- 前田清彦 1996 「第4章第4節 土器祭祀の様相」『松任市三浦・幸明遺跡』 松任市教育委員会
- 前田清彦 1997 「土器祭祀類型試論」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 宮藤文二 1992 「日本古代の村落と開拓」『歴史学研究』658号 歴史学研究会
- 宮藤文二 2000 「日本古代の農民と『村堂』『村のなかの古代史』」岩田書院
- 望月精司 1997 「北陸における古代土器生産体制の変遷と展開」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 望月精司 2003 「古代縦状縫に関する一考察—北陸出土縦状縫資料の検討を中心に—」『北陸古代土器研究』第10号
- 望月精司 2005 「第2章 各地域の土師器生産と土師器焼成遺構」 第4節 北陸「古代の土師器生産と焼成遺構」 宮路研究会
- 望月精司 2005 「第1章 土師器焼成遺構の研究の現状と展望 第2節 土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』 宮路研究会
- 百瀬正恒 2008 「新潟平野における中世土器の成立」 報告の概要』『北陸中世のみち』 北陸中世考古学研究会
- 山下峰司 1995 「Ⅲ土器・陶磁器 灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 山中敏史 2007 「地方豪族居宅の建物構造と空間的構成」『古代豪族居宅の構造と機能』 奈良文化財研究所
- 吉村武彦ほか編 2014 「新潟墨書き土器データベース」『私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 日本列島の文明化を明示する古代学の総合化研究』(事業番号 S0901026)
- [http://www.kise.meiji.ac.jp/~meikodai/obj\\_bukusho.html](http://www.kise.meiji.ac.jp/~meikodai/obj_bukusho.html) 明治大学日本古代学研究所
- 西柳嘉章 2006 『ものと人間の文化史 131—1 塚1』 法政大学出版社
- 渡邊美穂子ほか 2014 『新発田市埋蔵文化財調査報告 第50 丸山八遺跡 発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
- 渡邊ますみ・奈良貴史 2012 『四十石道路 第2次調査』 新潟市教育委員会

## 遺物類解説（1）

・歯根部から出土した遺物の場合は、最も出土した場所から離れない位置に記載した。  
 ・遺物を一まとめにした場合は、出土位置は「団」とし、編目が複数とした。  
 ・番号による「団」は、高さや横幅等で分類する。  
 ・番号が「団」ではない場合は、遺物が何個かあることを表す。また、団の左側に「団」を表示。  
 ・団に記載される場合は、団の内訳を記載する。団に記載しない場合は、団を省略する。

## 土器類解説（1）

No.	番号	グリッド	場所	縦幅	横幅	高さ	寸法(内径)	寸法(外径)	寸法(合計)	底面	側面	色調	調査(内面)	調査(外面)	調査(内面)
1	S00166-P9	13109	280 壁	上縁部 小縫	B	6.0	36	石・長・角・圓	やや丸	縦・横切面	土+ナメル 土ナメル	土ナメル	土ナメル	有	-
2	S00167-P8	13108	1348	長	長	3.0	2	石・ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	-
3	S00170-P1	13107	13274	1 130 壁	上縁部 無	B	13.0 (13.1)	3	石・ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	-
4	S00171-P5	13106	13143	1 130 壁	上縁部 無	C3	6.9	15	石・長・ナ・外・執	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
5	S00172-P9	13105	13051	1 130 壁	上縁部 無	B	7.0	5	石・ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	-
6	S00173-P5	13104	13053	1 130 壁	上縁部 無	B	6.6	10	砂・黑・白	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
7	S00174-P6	13103	13054	1 130 壁	上縁部 無	B	8.4	16	石・長・执・輪	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
8	S00175-P5	13103	13055	1 130 壁	上縁部 無	B	13.0 (13.0)	2	石・長・ナ・外・輪	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
9	-	80209-P9	80210-22	壁	底部部 長頸部	B	11.0	19	砂・白	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
10	S00182-P5	80208	80204-6	壁	上縁部 無	B	7.2	16	石・ナ・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
11	S00183-P6	80207	80203	壁	上縁部 無	B	7.3 (7.3)	2	石・長・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
12	S00184-P5	80206	80202	壁	上縁部 無	B	7.1	5	石・長・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
13	S00185-P6	80205	80201	壁	上縁部 無	B	12.1	5	石・長・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
14	S00186-P7	80204	80202	壁	上縁部 無	B	10.7	20	砂・白	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
15	S00187-P9	80203	80200	壁	褐色土部 無	B	10.6	36	石・長・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
16	S00188-P7	80202	80199	壁	褐色土部 無	B	10.0	6	石・長・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
17	S00189-P9	80201	80197	壁	褐色土部 無	B	11.0	5	石・ナ・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
18	S00191-P7	80211	80197	壁	上縁部 無	B	9.8	7	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
19	S00192-P7	80210	80199	壁	上縁部 無	B	9.9	9	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
20	S00193-P7	80209	80198	壁	上縁部 無	B	9.2	7	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
21	S00194-P7	80208	80199	壁	上縁部 無	B	9.0	10	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
22	S00195-P7	80207	80196	壁	上縁部 無	B	9.3	14	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
23	S00196-P7	80206	80195	壁	上縁部 無	B	13.3	5	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
24	S00197-P9	80194	80193	壁	上縁部 無	B	13.4	4	石・長・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
25	S00198-P7	80194	80193	壁	上縁部 無	B	12.9	6	石・長・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
26	S00199-P7	80205	80199	壁	上縁部 無	C3	6.4	10	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
27	S00200-P7	80205	80199	壁	上縁部 無	B	14.0 (14.0)	2	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
28	S00201-P7	80204	80199	壁	上縁部 無	B	13.2	31	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
29	S00202-P7	80203	80199	壁	上縁部 無	B	7.4	7	砂・長・白	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
30	S00203-P7	80202	80198	壁	褐色土部 無	B	12.8	10	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
31	S00204-P7	80201	80197	壁	上縁部 無	B	11.5	7	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
32	S00205-P7	80201	80197	壁	上縁部 無	B	9.8	19	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
33	S00206-P7	80196	80195	壁	上縁部 無	B	13.4	2	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
34	S00207-P7	80195	80193	壁	上縁部 無	B	8.4	8	石・長・执・砂	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル
35	S00208-P7	80194	80193	壁	上縁部 無	B	12.6	13	砂・白	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル	土ナメル

土器類別表(2)

No.	遺跡	グリフ	施乞	縦列	横幅	縦列	幅 (cm)	縦幅 (cm)	縦幅 (cm)	施乞	縦	横	調査 (内面)	調査 (外周)	寸法 (内面)	寸法 (外周)	備考
26	S110	141.6	141.3	180	上縦縫	輪打目	A	12.6	3.1	8.1	18	20	縦・直	縦	81.7	81.7	-
31	S110	141.3	141.6	79	上縦縫	輪打目	A	13.1	3.2	7.2	7	20	縦・直・横	縦	81.7	81.7	縦・直
37	S110	141.3	141.6	79	上縦縫	輪打目	A	11.8	2.5	7.0	17	23	縦・直・横	縦	81.7	81.7	-
38	S110	141.6	141.3	79	上縦縫	輪打目	C3	12.1	3.4	8.8	13	22	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
29	S110	141.3	141.1	140	上縦縫	輪打目	B	8.1	1.0	1.0	16	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
60	S110	141.6	141.6	140	上縦縫	輪打目	B	8.1	1.0	1.0	16	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
41	S110	141.6	141.2	140	上縦縫	輪打目	B1	12.3	4.6	5	20	20	縦・直・横	縦	81.7	81.7	-
42	S110	141.3	141.7	140	上縦縫	輪打目	B1	15.2	6	6	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
43	S110	141.9	140.1	140	上縦縫	輪打目	B1	-	-	-	-	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
44	S114	141.2	141.3	140	上縦縫	輪打目	B1	13.0	3.3	7.8	4	22	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
65	S110	141.3	141.4	140	上縦縫	輪打目	A	12.8	3.1	7.0	12	19	縦・直・横	縦	81.7	81.7	-
66	-	141.6	141.8	140	上縦縫	輪打目	B	8.1	1.0	1.0	16	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
51	S114	141.3	141.3	140	上縦縫	輪打目	B1	16.0	6.0	7.3	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
67	S110	141.3	141.3	140	上縦縫	輪打目	B1	15.8	6.0	7.3	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
79	-	141.0	141.2	140	上縦縫	輪打目	B1	12.1	4	4	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
48	S114	141.7	140.1	140	上縦縫	輪打目	B1	23.4	6	6	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
49	S110	141.0	141.0	140	上縦縫	輪打目	B1	15.8	7.0	8	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
50	S110	141.0	141.0	140	上縦縫	輪打目	B1	23.4	6	6	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
51	S110	141.0	141.0	140	上縦縫	輪打目	B1	23.4	6	6	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
52	S110	140.0	140.0	140	上縦縫	輪打目	B1	23.4	6	6	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
53	S110	141.0	141.0	140	上縦縫	輪打目	B1	23.4	6	6	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
54	S110	141.1	141.1	140	上縦縫	輪打目	D	13.5	3	3	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
56	(S110)	141.8	141.8	140	上縦縫	輪打目	B	8.0	0	23	0	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
57	(S110)	141.9	141.9	140	上縦縫	輪打目	B1	20.8	0	20	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
59	S110	140.0	140.0	140	上縦縫	輪打目	B1	3.0	1	1	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
60	S110	140.0	140.0	140	上縦縫	輪打目	B1	21.9	0	20	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
61	S110	141.1	141.1	140	上縦縫	輪打目	B	33.0	0	2	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
62	P2	140.2	140.2	140	上縦縫	輪打目	B1	13.0	5.5	8	17	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
63	P2	140.2	140.2	140	上縦縫	輪打目	B1	11.6	3.3	0	7	1	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
64	P2	140.2	140.2	140	上縦縫	輪打目	B1	13.6	3.9	4	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
65	P2	140.2	140.2	140	上縦縫	輪打目	B1	14.2	5.3	6	14	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
66	S112	141.9	141.9	140	上縦縫	輪打目	B1	16.9	4.9	6	10	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
67	S112	141.9	141.9	140	上縦縫	輪打目	B1	13.8	4.6	3	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
68	S112	141.9	141.9	140	上縦縫	輪打目	B1	13.8	4.0	0	9	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-
69	S112	141.9	141.9	140	上縦縫	輪打目	B1	12.8	0	7	20	20	縦・直・横・直	縦	81.7	81.7	-

## 土器類別表(3)

S.	遺跡	グリッド	組合	種別	基盤	分類	寸法 (cm)	底面 (cm)	底質 (cm)	底質 特徴	地質	色調	測量 (内面)	測量 (外面)	用意 状況	備考
70	-	0332	06239	V3	土器底	無台陶	101	18.4	3.5	6.9	9	石・灰・チ	ケリ・カセ・ナメ	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
71	5332	06239	100	土器底	無台陶	103	13.8	8.0	6.2	17	36	石・灰・チ・陶・白	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
72	5332	06239	100	土器底	無台陶	104	13.5	8.3	7.0	13	36	石・灰・チ・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
73	5332	06239	100	土器底	無台陶	104	13.6	8.0	6.0	13	36	石・灰・チ・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
74	5332	06239	100	土器底	無台陶	C3	20.9	7.9	7.9	5	16	石・灰・チ	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
75	5332	06239	100	土器底	無台陶	100	16.8	8.0	6.4	7	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石	
76	5332	06239	100	陶色上部	無台陶	105	16.0	8.0	6.0	24	石・灰・陶	底・陶・白	ケリ・カセ・ナメ	ケリ・カセ・ナメ	石	
-	1023	06239	100	土器底	無台陶	103	17.0	8.0	6.8	26	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石	
77	5432	06239	100	土器底	無台陶	103	15.8	8.1	7.0	4	20	石・灰・チ	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
78	5432	06239	100	土器底	無台陶	102	14.0	8.0	6.0	9	17	石・灰・チ	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
79	5432	06239	100	土器底	無台陶	104	13.5	8.3	7.0	13	36	石・灰・チ・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
80	5432	06239	100	土器底	無台陶	104	13.6	8.0	6.0	13	36	石・灰・チ・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
81	5432	06239	100	土器底	無台陶	103	13.0	8.0	5.8	12	17	石・灰・チ	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
82	5432	06239	100	土器底	無台陶	103	13.0	8.0	5.8	12	16	石・灰・チ	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
83	54329	06239	100	土器底	無台陶	103	15.4	8.5	6.0	17	17	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
84	54329	06239	100	土器底	無台陶	103	15.6	8.1	6.0	18	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石	
85	54329	06239	100	土器底	無台陶	103	15.6	8.1	6.0	18	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石	
86	54329	06239	100	土器底	無台陶	103	14.8	8.0	5.2	14	20	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
87	54329	06239	100	土器底	無台陶	103	14.8	8.0	5.0	34	36	石・灰・陶・白	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
88	54329	06239	100	土器底	無台陶	A2	13.2	5.0	7.7	36	石・灰	底・陶	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石	
89	54329	06239	100	土器底	無台陶	D1	14.4	8.2	6.7	36	石・灰・チ	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石	
90	54326	06239	100	土器底	無台陶	103	13.7	6.3	6.0	24	17	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
91	54326	06239	100	土器底	無台陶	103	12.8	6.0	5.8	26	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石	
92	54326	06239	100	土器底	無台陶	103	13.0	6.0	5.6	36	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石	
93	54326	06239	100	土器底	無台陶	103	13.8	6.1	6.0	2	12	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
94	54326	06239	100	土器底	無台陶	C2	13.7	4.1	6.8	21	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石	
95	-	16215	100	土器底	無台陶	C3	13.2	3.9	6.2	13	36	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
96	54302	061615	100	土器底	無台陶	D1	13.4	3.3	6.0	10	24	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
97	54302	061615	100	土器底	無台陶	B2	12.4	4.2	6.0	27	36	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
98	-	16215	100	土器底	無台陶	B2	12.6	4.0	6.4	1	36	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
99	54302	061615	100	土器底	無台陶	B	13.5	5.1	7.2	12	24	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
100	54302	061615	100	土器底	無台陶	B3	13.1	5.0	6.0	36	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石	
101	54302	061615	100	土器底	無台陶	B4	11.9	3.8	6.0	30	36	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
102	-	16215	100	土器底	無台陶	C4	12.0	5.0	5.6	29	34	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
103	54373	06215	100	土器底	無台陶	C4	13.2	5.3	6.6	23	18	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
104	54373	06215	100	土器底	無台陶	C4	11.8	4.3	6.1	12	10	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
105	54373	06215	100	土器底	無台陶	E1	12.3	4.0	6.0	27	36	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
106	54304	12116	100	土器底	無台陶	B1	12.2	5.0	6.0	5	21	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
107	54304	12116	100	土器底	無台陶	B1	12.0	5.1	6.7	16	21	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
108	-	12116	100	土器底	無台陶	B2	12.9	5.0	6.0	15	36	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石
109	54304	12116	100	土器底	無台陶	B4	12.1	4.3	4.8	26	26	石・灰・陶	底・陶・白	ナマダ・底ト付・底ホコナマ	ナマダ	石

## 土器類別表(4)

No.	遺跡	グリッド	発生	種別	基盤	分類	寸幅 (cm)	寸高 (cm)	寸厚 (cm)	寸幅 (cm)	寸高 (cm)	寸厚 (cm)	寸幅 (cm)	寸高 (cm)	寸厚 (cm)	測量(内部)		測量(外部)		性質(内面)	性質(外面)	目録 登録	備考			
																内面 形状	内面 質地	外側 形状	外側 質地							
110	S0304	12116	188	上部縦	輪台陶	C12	11.8	4.6	3.0	26	石・灰・土・角・陶	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030405上		
111	S0304	12116	189	上部縦	輪台陶	B3	12.0	4.5	3.5	20	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030405上	
112	S0304	12116	190	上部縦	輪台陶	B3	12.1	4.2	3.8	27	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030405上	
113	S0304	12116	191	上部縦	輪台陶	B3	12.9	3.5	3.1	17	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030405上	
114	S0304	12116	192	上部縦	輪台陶	B3	14.5	1.1	0.8	8	石・灰・土・角・陶	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030405上	
115	S0304	12116	193	上部縦	輪台陶	D	12.0	5.5	6	26	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030405上	
116	S0304	12116	194	油上縦	輪台陶	D	12.0	5.5	6	26	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030405上	
117	S0304	12116	195	上部縦	底付縦	-	-	-	-	-	石・灰・土・角	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030405上	
118	-	-	196	上部縦	底付縦	-	-	-	-	17	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030405上	
119	-	-	197	水付	底付縦	水付	13.7	6.7	9.8	16	白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030405上	
120	S0305	1615	水付縦	底付縦	底付縦	B3	12.5	5	5	26	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
121	S0305	1615	198	水付縦	底付縦	B3	16.0	6.0	6.0	4	白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
122	S0305	1615	199	圓点縦	土基縦	底縦	B3	18.0	9	9	26	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501
123	S0305	1615	200	水付縦	土基縦	底縦	B3	18.0	9	9	26	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501
124	S0305	1615	201	水付縦	土基縦	底縦	B3	26.6	6	6	26	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501
125	S0305	1615	202	水付縦	土基縦	底縦	B3	11.0	4.3	4.9	35	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501
126	S0305	1615	203	水付縦	土基縦	底縦	B3	13.8	4.6	4.0	36	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501
127	S0305	1615	204	水付縦	土基縦	底縦	B3	13.8	4.6	4.0	36	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501
128	S0305	1615	205	水付縦	土基縦	底縦	B3	13.8	4.6	4.0	36	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501
129	S0305	1615	206	上縦	輪台陶	C12	13.8	3.4	6.2	9	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
130	S0305	1615	207	上縦	輪台陶	B3	14.0	3.9	6.0	4	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
131	S0305	1615	208	上縦	輪台陶	B3	14.0	4.4	6.8	10	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
132	S0305	1615	209	上縦	輪台陶	C12	12.4	4.1	5.4	26	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
133	S0305	1615	210	上縦	輪台陶	A	15.8	6.1	6.0	36	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
134	S0305	1615	211	上縦	輪台陶	A	11.8	2.4	3.8	13	砂・白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
135	S0305	1615	212	上縦	輪台陶	B3	13.0	6.3	6.0	11	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
136	S0305	1615	213	上縦	輪台陶	C1	12.0	2.7	2.2	6	灰・白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
137	S0305	1615	214	上縦	輪台陶	C1	12.0	2.7	2.2	6	灰・白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
138	S0305	1615	215	上縦	輪台陶	A	12.7	3.0	7.5	25	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	
139	S0305	1615	216	上縦	輪台陶	A	12.7	3.0	7.5	25	石・灰・土	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	右	S030501	

土器類別表(5)

No.	遺跡	グリッド	施江	種別	器形	分類	寸法 (cm)	底面 (cm)								
110	S603	148.7	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	3.5	4.2	7	36	石・灰・土・陶	12.7	3.5	4.2	7
141	S608	148.7	1.98	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	18.6	4.2	4	4	36	石・灰・土・陶	18.6	4.2	4	4
152	S612	148.10	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.9	4.2	4	3	36	石・灰・土・陶	12.9	4.2	4	3
143	S612	148.09	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	14.2	4.7	6.2	4	36	石・灰・土・陶	14.2	4.7	6.2	4
144	S612	148.09	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	13	6.0	13	13	36	石・灰・土・陶	13	6.0	13	13
145	S612	148.09	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16	36	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16
147	S612	148.09	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16	36	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16
148	S612	148.09	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16	36	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16
149	S612	148.09	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16	36	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16
150	S612	148.09	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16	36	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16
151	S612	148.07	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16	36	石・灰・土・陶	12.4	6.0	16	16
152	S612	148.07	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	13.0	6.0	16	16	36	石・灰・土・陶	13.0	6.0	16	16
153	S612	148.03	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
154	S612	148.12	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
155	S612	148.12	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
156	S612	148.16	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
157	S612	148.16	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
158	S612	148.16	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
159	S612	148.16	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
160	S612	148.09	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
161	S612	148.09	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
162	S612	148.04	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
163	S612	148.02	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
164	S612	148.02	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
165	S612	148.02	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
166	S612	148.12	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
167	S612	148.12	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
168	S612	148.12	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18
169	S612	148.12	1.88	上部縫	輪打柄	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18	36	石・灰・土・陶	12.7	6.4	5	18

## 土器類別表(6)

No.	遺跡	グリッド	柱穴	縦列	横列	分幅	幅員 (cm)	面積 (m <sup>2</sup> )	施上	地盤	色調	調査 (内面)	調査 (外周)	備考
170	S0342	10012	388	上段階	輪打目	33	18.2	21	石・瓦・土・鐵	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
171	S0342	10012	3+5	上段階	輪打目	33	18.0	14	石・瓦・土・鐵	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
172	S0342	10012	188	上段階	輪打目	33	18.0	7.4	石・瓦・砂	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
173	S0342	10012	1+2	上段階	小窓	B	-	-	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
174	S0342	10012	1+2	上段階	輪打目	33	18.0	7.0	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
175	S0342	10012	188	上段階	輪打目	32	18.0	5	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
176	S0342	10012	188	上段階	輪打目	32	18.0	5	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
177	S0342	10011	188	褐色土層	輪打目	32	18.0	5	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
178	S0342	10018	188	輪打目	輪打目	33	18.0	7	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
179	S0342	10022	188	上段階	貝殻	B	19.0	6	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
180	S0342	10019	188	上段階	貝殻	B	19.0	6	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
181	S0342	10019	188	上段階	貝殻	B	19.0	5	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
182	S0342	10011	188	上段階	貝殻	B	19.0	3	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
183	S0342	10016	188	上段階	貝殻	B	19.0	3	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
184	S0342	10016	188	上段階	貝殻	B	19.0	3	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
185	S0342	10017	188	上段階	貝殻	B	19.0	3	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
186	S0342	10017	188	上段階	貝殻	B	19.0	3	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
187	S0342	10017	188	上段階	貝殻	B	19.0	3	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
188	S0342	10016	188	上段階	貝殻	B	19.0	3	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
189	S0342	10016	188	上段階	貝殻	B	19.0	3	石・瓦・土	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
190	S0342	10021	1+2	上段階	貝殻	B	19.0	16	石・瓦	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
191	S037	-	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
192	S037	13135	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
193	S037	13135	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
194	S037	13135	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
195	S037	13135	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
196	S037	13135	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
197	S037	13135	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
198	S037	13134	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
199	S037	13134	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
200	S037	13134	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
201	S037	13132	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
202	S037	13130	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
203	S037	14113	188	上段階	貝殻	B	19.0	24	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
204	S037	13123	214	上段階	貝殻	B	19.0	20	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
205	S037	13124	188	上段階	貝殻	B	19.0	20	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-
206	S037	13115	218	上段階	貝殻	B	19.0	12	石・瓦・白	瓦質	ミナヅ	ミナヅ	ミナヅ	-

土器類聚表(7)

No.	遺構	グリッド	施口	縦引	横幅	幅引	分幅	寸法 (cm)	通口 (cm)	寸法 (cm)	通口 (cm)	寸法 (cm)	施口	色調	測量(外周)	測量(内周)	寸法	備考
207	S07	13110	-	280	直通路	無口引	A	12.6	3.6	7.6	2	19	砂・板・白	直	深灰白	石	直通路	
208	S07	13110	-	280	直通路	無口引	A	12.6	3.6	7.6	9	20	砂・板・白	直	深灰白	石	直通路	
209	S07	13110	-	280	直通路	無口引	A	12.4	3.2	7.2	5	20	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
210	S07	13110	-	280	直通路	無口引	A	12.6	3.0	7.6	15	24	砂・板	直	深灰白	石	直通路	
211	S07	14133	-	280	直通路	無口引	A	11.6	3.3	7.4	7	36	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
212	S07	14134	-	180	直通路	無口引	A	11.8	3.4	7.2	20	36	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
213	S07	13110	-	180	直通路	無口引	A	12.2	3.3	6.8	12	18	砂・板・白	直	深灰白	石	直通路	
214	S07	13131	-	170	直通路	無口引	A	13.2	2.9	8.3	11	36	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
215	S07	14131 + 14	-	280	直通路	無口引	A	12.3	3.3	7.6	20	20	砂・板	直	深灰白	石	直通路	
216	S07	14132	-	180	直通路	無口引	A	12.5	3.0	7.0	27	36	白	直	深灰白	石	直通路	
217	S07	13119	-	180	直通路	無口引	A	12.8	3.2	8.0	4	8	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
218	S07	14136	-	170	直通路	無口引	A	12.4	3.1	6.9	19	36	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
219	S07	13110	-	180	直通路	無口引	A	13.1	2.9	7.2	9	12	黑・白	直	深灰白	-	直通路	
220	S07	13124 + 14	-	180	直通路	無口引	A	12.0	3.1	6.3	22	12	白	直	深灰白	石	直通路	
221	S07	13115	-	180	直通路	無口引	A	12.3	3.1	6.8	5	13	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
222	S07	13121	-	180	直通路	無口引	A	12.6	3.4	7.3	9	7	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
223	S07	13115	-	180	直通路	無口引	A	12.8	2.8	7.4	27	36	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
224	S07	13115	-	180	直通路	無口引	A	11.6	2.9	7.5	31	29	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
225	S07	13116	-	180	直通路	無口引	A	12.1	3.2	7.4	36	36	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
226	S07	13110	-	210	直通路	無口引	A	12.6	2.6	8.0	11	13	黑・白	直	深灰白	石	直通路	
227	S07	13124	-	180	直通路	無口引	A	12.6	2.6	7.3	36	36	白	直	深灰白	石	直通路	
228	S07	13115	-	280	直通路	無口引	B	12.5	2.9	6.4	14	14	石・砂・白	直	深灰白	石	直通路	
229	S07	13121	-	180	直通路	無口引	A	12.0	2.8	6.8	27	36	白	直	深灰白	石	直通路	
230	S07	13135	-	180	直通路	無口引	A	12.2	3.0	7.2	10	10	白	直	深灰白	石	直通路	
231	S07	13112	-	180	上通路	無口引	B	16.5	3	8	石・陶	直	深灰白	石	上通路	-	内通路	
232	S07	13119	-	180	上通路	無口引	B	11.9	3.6	6.4	9	9	砂	直	深灰白	石	上通路	
233	S07	13110	-	180	上通路	無口引	B	11.9	3.6	6.4	15	27	石・板・砂・砂	直	深灰白	石	上通路	
234	S07	13112	-	180	上通路	無口引	B	13.6	4.1	4	26	27	石・板・砂・砂	直	深灰白	石	上通路	
235	S07	13115	-	180	上通路	無口引	B	15.2	5.1	5.8	8	18	石・板・砂・砂	直	深灰白	石	上通路	
236	S07	13113	-	180	上通路	無口引	B	17.2	4.9	8.2	4	9	石・板・砂・砂	直	深灰白	石	上通路	
237	S07	13119	-	180	上通路	無口引	B	12.2	4.2	5.0	4	15	石・板・砂・砂	直	深灰白	石	上通路	
238	S07	13109	-	180	上通路	無口引	B	13.9	4.2	5.2	6	36	石・板・砂・砂	直	深灰白	石	上通路	

土器類別表(8)

No.	遺跡	グリード	地元	種別	器種	分類	寸法 (cm)	底面 (cm)	側面 (cm)	底面 の特徴 や形状	側面 の特徴 や形状	側面 の特徴 や形状	調査 (付記)	調査 (付記)	備考
239	S07	12316	-	2-38	土器	輪台陶	82	13.0	6.2	10	14	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
240	S07	12314	1-18	土器	輪台陶	82	14.5	5.6	9	19	36	石・長・平	ホルダ	ホルダ	ホルダ
241	S07	12319	1-18	土器	輪台陶	83	11.8	4.1	4	7	21	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
242	S07	12315	1-18	土器	輪台陶	83	12.6	5.3	6	29	石・長・平	ホルダ	ホルダ	ホルダ	
243	S07	12314	1-18	土器	輪台陶	83	13.6	6.1	7	8	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石	
244	S07	12322	1-24	土器	輪台陶	83	13.6	6.1	7	21	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石	
245	-	12316	1-18	土器	輪台陶	C1	6.3	-	27	石・砂	石	石	ホルダ	ホルダ	石
246	S07	14133	1-18	土器	輪台陶	E4	15.0	3.4	6	2	24	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
247	S07	12323	1-18	土器	輪台陶	B1	12.3	4.0	-	2	-	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
248	S07	12314	1-18	褐色土器	輪台陶	B	13.4	-	10	16	石・長・平	ホルダ	ホルダ	ホルダ	
249	S07	12319	1-18	褐色土器	輪台陶	D	15.6	4.7	7	0	3	石・長・平	ホルダ	ホルダ	-
250	S07	14137	1-18	土器	輪台陶	G	-	-	-	-	-	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
251	S07	12315	1-18	土器	輪台陶	H	8.6	-	-	13	-	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
252	S07	12315+3-24	1-18	土器	輪台陶	Ho	15.0	-	-	18	-	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
253	S07	12319+3-24	1-24	土器	輪台陶	Ho	11.4	-	-	5	-	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
254	S07	12315	2-20	土器	輪台陶	Ho	10.8	-	7	-	-	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
255	S07	14125	-	土器	輪台陶	Ho	8.6	-	-	16	-	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
256	S07	12319+24	1-18	土器	輪台陶	Ho	7.0	-	35	石・長・平	ホルダ	ホルダ	ホルダ	ホルダ	石
257	S07	12310	1-24	土器	輪台陶	Ho	6.2	-	24	石・長・平	ホルダ	ホルダ	ホルダ	ホルダ	石
258	S07	12319+24	1-18	土器	輪台陶	Ho	5.9	-	22	22	22	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
259	S07	14127	1-18	土器	輪台陶	Ho	6.1	-	36	石・長・平	ホルダ	ホルダ	ホルダ	ホルダ	石
260	S07	12310	1-18	土器	輪台陶	Ho	22.3	-	6	-	-	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
261	S07	14132	2-24	土器	輪台陶	Ho	18.0	-	10	10	-	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
262	S07	14125	1-18	土器	輪台陶	Ho	18.8	-	19	石・長・平	ホルダ	ホルダ	ホルダ	ホルダ	石
263	S07	12310+14	1-18	土器	輪台陶	Ho	21.2	-	20	石・長・平	ホルダ	ホルダ	ホルダ	ホルダ	石
	-	12314+15	1-18	土器	輪台陶	Ho	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	S07	12317	1-18	土器	輪台陶	Ho	-	-	-	-	-	-	-	-	-
264	S07	12323	1-20	土器	輪台陶	Ho	22.5	-	13	石・長・平	ホルダ	ホルダ	ホルダ	ホルダ	石
265	S07	12311	1-18	土器	輪台陶	Ho	23.2	-	5	-	-	石・長・平	ホルダ	ホルダ	石
266	S07	12321	1-24	土器	輪台陶	Ho	20.7	-	24	石・長・平	ホルダ	ホルダ	ホルダ	ホルダ	石
	S07	12310	1-24	土器	輪台陶	Ho	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土壤観察表(9)

No.	地名	グリーン	柱位	傾斜	面積	分幅	断面 (cm)	断面 (cm)	断面 (cm)	地質		地質 外見	地質 内見	地質 外見	地質 内見
										上部	下部				
267	S07	14132	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
	S07	14135	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
268	S07	14135-14	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
269	S07	14135-14	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
270	S07	14134	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
271	S07	14136	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
272	S07	14131	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
273	S07	14136	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
274	S07	14135	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
275	S08	14122	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
276	S08	14133	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
277	S08	14133	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
278	S08	14133	143	3.8	粘土層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
279	S08	14122	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
281	S08	14133	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
282	S08	14133	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
283	S08	14133	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
284	S08	14133	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
285	S013	14019	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
287	S0153	14016	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
288	S0267	14013	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
289	S0267	14013	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
290	S0267	14014	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
291	S0267	14013	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂
292	S0267	14015	143	3.8	土壤層	長さ	80	20.3	10	石・瓦・骨・砂	砂	砂質粘土	砂	砂	砂

土器類別表(10)

No.	遺跡	グリッド	地元	種別	器種	縦横	分類	寸法 [cm]	底面 [cm]	寸法 [cm]	底面 [cm]	底面 寸法	底面 形状	底面 形質	底面 外観	調査 方法	日付	備考
293	SH002	12123	-	1.00	直筒形	輪打紋	A	12.6	2.6	1.6	10	14	80・直	底面	2ナット底・直筒	BT+P	-	
294	SH000	-	-	1.00	直筒形	輪打紋	A	12.2	3.1	1.2	10	21	底・直	底面	2ナット底・直筒	BT+P	-	
295	SH000	10022 + 17 + 22	1.00	直筒形	輪打紋	B1	15.0	6.5	7.4	19	36	60・直・ナ	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
296	SH002	10022	1.00	直筒形	輪打紋	B1	11.6	5	5	20	35	底・直	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
297	SH005	10019	1.00	直筒形	輪打紋	B1	15.9	2.9	8.4	1	8	底・直	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
298	SH005	10019	1.00	直筒形	輪打紋	B1	16.6	2.2	7.3	23	35	底・直・白	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
299	SH005	10014	1.00	直筒形	輪打紋	B1	16.1	2	7	6.6	20	60・直・ナ	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
300	SH016	10017	1.00	直筒形	輪打紋	B1	9.0	2	6	6	10	60・直・ナ	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
301	SH030	10015	1.00	直筒形	輪打紋	A	13.4	0	4	30	35	底・直	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
302	SH030	10015	1.00	直筒形	輪打紋	A	8.0	0	9	30	35	底・直	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
303	SH031	11014	-	直筒形	輪打紋	B1	5.6	8	8	石・長・白	底	砂~灰	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
304	SH026	11011	-	直筒形	輪打紋	B1	12.2	3.2	7.3	29	35	底・直	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
305	SH026	10019	1.00	直筒形	輪打紋	B1	7.0	9	7	20	35	底・直	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
306	SH020	10020 + 15 + 20	1.00	直筒形	輪打紋	A	11.0	14	石・長・ナ	底	底面	2ナット・直筒	BT+P	-				
307	SH041	10010	1.00	直筒形	輪打紋	B1	6.0	14	石・長・ナ	底	底面	2ナット・直筒	BT+P	-				
308	SH041	10016	1.00	直筒形	輪打紋	B1	6.8	16	石・長・ナ	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-				
309	SH041	10015	1.00	直筒形	輪打紋	B1	17.6	6	6	石・長・ナ	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-			
310	-	10015	1.00	直筒形	輪打紋	B1	21.2	18	石・長・ナ	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-				
3041	SH041	10015	1.00	直筒形	輪打紋	B1	40.0	5	5	石・長・ナ	底	底面	2ナット・直筒	BT+P	-			
-	SH042	10025	1.00	直筒形	輪打紋	B1	40.0	5	5	石・長・ナ	底	底面	2ナット・直筒	BT+P	-			
311	-	10022 + 19 + 25	1.00	直筒形	輪打紋	B1	38.0	5	5	石・長・ナ	底	底面	2ナット・直筒	BT+P	-			
-	-	1.00	1.00	直筒形	輪打紋	B1	38.0	5	5	石・長・ナ	底	底面	2ナット・直筒	BT+P	-			
312	SH012	10015	1.00	直筒形	輪打紋	B1	30.9	4	4	石・長・ナ	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-			
313	SH040	11111	1.00	直筒形	輪打紋	B1	35.2	3	3	石・長・ナ	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-			
314	SH010	13111	1.00	直筒形	輪打紋	A	31.0	4	4	石・長・ナ	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-			
315	SH0204	12114	1.00	直筒形	輪打紋	A	34.4	6	6	石・直	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-			
316	SH0204	12115	1.00	直筒形	輪打紋	A	32.8	6	5	砂・直・白	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-			
317	SH011	14008	1.00	直筒形	輪打紋	A	31.2	6	5	底・直	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-			
318	SH015	14005	1.00	直筒形	輪打紋	A	33.4	10	10	底・直	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-			
319	SH041	10015	1.00	直筒形	輪打紋	B1	6.0	12	石・長・ナ	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-				
320	SH4	10000	1.00	直筒形	輪打紋	A	8.0	31	石	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-				
321	SH4	10011	1.00	直筒形	輪打紋	A	12.6	2.3	7.4	7	9	80・白	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
322	SH4	10012	1.00	直筒形	輪打紋	A	12.1	4	4	40・白	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-			
323	SH4	10016	1.00	直筒形	輪打紋	B	12.3	2.8	0	7	11	底・直	底面	2ナット・直筒	BT+P	-		
324	SH4	10011	1.00	直筒形	輪打紋	B1	13.3	2.7	8.3	5	4	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-		
325	SH4	10011	1.00	直筒形	輪打紋	B1	40.0	26	6	底	底	底	2ナット・直筒	BT+P	-			

观察器 (11)

土器類聚表 (12)

No.	遺跡	グリッド	施設	縦引	横引	面積	分幅	柱間	施設	施設	色調	測量 (内面)	測量 (外周)	目録	備考
361	S111	SL111	壁	壁											
362	S111	SL111	壁	壁											
363	S111	SL111	壁	壁											
364	-	-	壁	壁											
365	S111	SL111	壁	壁											
366	S111	SL111	壁	壁											
367	S111	SL111	壁	壁											
368	S111	SL111	壁	壁											
369	S111	SL111	壁	壁											
370	S111	SL111	壁	壁											
371	S111	SL111	壁	壁											
372	S111	SL111	壁	壁											
373	S111	SL111	壁	壁											
374	S111	SL111	壁	壁											
375	S111	SL111	壁	壁											
376	S111	SL111	壁	壁											
377	S111	SL111	壁	壁											
378	S111	SL111	壁	壁											
379	S111	SL111	壁	壁											
380	S111	SL111	壁	壁											
381	S111	SL111	壁	壁											
382	S111	SL111	壁	壁											
383	S111	SL111	壁	壁											
384	P105	P105	壁	壁											
385	-	-	壁	壁											
386	-	-	壁	壁											
387	-	-	壁	壁											
388	-	-	壁	壁											
389	-	-	壁	壁											
390	-	-	壁	壁											
391	-	-	壁	壁											
392	-	-	壁	壁											
393	-	-	壁	壁											
394	-	-	壁	壁											
395	-	-	壁	壁											
396	-	-	壁	壁											
397	-	-	壁	壁											
398	-	-	壁	壁											
399	-	-	壁	壁											

土器類聚表 (13)

No.	遺跡	グリッド	施設	縦幅	横幅	少幅	高さ (cm)	測定 (cm)	測定 (cm)	施上		施下	施面	測定(外観)		
										内深	外深			内幅	外幅	
430	一	1311	Ⅹ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	3.0	2.0	8	17	石・灰・黒	石	13.5	3.5	0.7
431	一	1311	Ⅸ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	3.0	2.0	7	9	石・灰・黒	石	13.5	3.5	0.7
432	一	1487+8	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	3.0	2.0	17	石・灰・黒	石	13.5	3.5	0.7	
433	一	151+13	Ⅷ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	3.5	0.0	12	19	砂・灰・白	石	15.0	3.5	0.7
434	一	1319+20	Ⅷ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	2.9	0.4	8	14	砂・灰・白	石	13.5	2.9	0.7
435	一	1306	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	3.0	0.4	6	20	砂・灰・白	石	13.5	3.0	0.7
436	一	1412	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	11.8	2.0	0.6	13	13	砂・灰・白	石	13.5	2.0	0.7
437	一	1301+15	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	B	12.0	3.4	0.5	12	16	砂・灰・白	石	13.5	3.4	0.7
438	一	1311+12	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	B	11.6	2.8	0.5	13	13	砂・灰・白	石	13.5	2.8	0.7
439	一	1412+7	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	B	11.6	2.4	0.6	8	12	砂・灰・白	石	13.5	2.4	0.7
440	一	10811	Ⅹ	直筒形	輪台Ⅳ	A	11.6	2.4	0.6	8	12	砂・灰・白	石	13.5	2.4	0.7
441	一	14812	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	11.6	2.4	0.6	10	10	砂・灰・白	石	13.5	2.4	0.7
442	一	10720	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	11.6	2.4	0.6	7	19	砂・灰・白	石	13.5	2.4	0.7
443	一	10621	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	8.8	3.5	0.5	1	1	砂・灰・白	石	13.5	3.5	0.7
444	一	12121	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	2.8	0.6	4	26	砂・灰・白	石	13.5	2.8	0.7
445	一	10723	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	2.8	0.6	9	13	砂・灰・白	石	13.5	2.8	0.7
446	一	10616	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	2.8	0.6	9	13	砂・灰・白	石	13.5	2.8	0.7
447	一	14811+16	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	2.8	0.6	9	13	砂・灰・白	石	13.5	2.8	0.7
448	一	1323	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	2.8	0.6	9	13	砂・灰・白	石	13.5	2.8	0.7
449	一	1301+15	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	2.8	0.6	8	13	砂・灰・白	石	13.5	2.8	0.7
450	一	13813	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	2.8	0.6	13	13	砂・灰・白	石	13.5	2.8	0.7
451	一	14017	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	A	12.0	3.0	0.6	14	14	砂・灰・白	石	13.5	3.0	0.7
452	一	13064	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	B	12.0	3.0	0.6	5	20	砂・灰・白	石	13.5	3.0	0.7
453	一	13064	Ⅺ	直筒形	輪台Ⅳ	B	12.0	3.0	0.6	10	13	砂・灰・白	石	13.5	3.0	0.7
454	一	1211+21+22	Ⅹ	上部箱	輪台Ⅳ	B	15.9	5.0	3.8	8	26	石・灰・テ	砂	16.8	5.0	0.7
455	一	12809	Ⅺ	上部箱	輪台Ⅳ	B	16.7	5.7	7.4	32	34	砂・灰・テ	砂	16.8	5.7	0.7
456	一	10620	Ⅺ	上部箱	輪台Ⅳ	B	16.5	5.0	7.4	9	17	砂・灰・テ	砂	16.8	5.0	0.7
457	一	13115	Ⅺ	上部箱	輪台Ⅳ	B	16.5	5.1	7.4	16	26	砂・灰・テ	砂	16.8	5.1	0.7
458	一	11114	Ⅺ	上部箱	輪台Ⅳ	B	13.0	3.6	4.2	9	19	砂・灰・テ	砂	16.8	3.6	0.7
459	一	12018	Ⅺ	上部箱	輪台Ⅳ	B	12.2	3.9	4.8	7	19	砂・灰・テ	砂	16.8	3.9	0.7
460	一	14105	Ⅺ	上部箱	輪台Ⅳ	B	12.0	4.4	3.2	16	26	砂・灰・テ	砂	16.8	4.4	0.7
461	一	13114	Ⅺ	上部箱	輪台Ⅳ	B	12.5	3.8	4.7	8	26	砂・灰・テ	砂	16.8	3.8	0.7
462	一	12396	Ⅺ	上部箱	輪台Ⅳ	B	13.0	4.1	3.4	26	35	砂・灰・テ	砂	16.8	4.1	0.7
463	一	1221	Ⅺ	上部箱	輪台Ⅳ	B	13.0	4.1	3.4	15	35	砂・灰・テ	砂	16.8	4.1	0.7
464	一	13119	○	下部箱	輪台Ⅳ	B	13.2	3.9	3.5	8	26	砂・灰・テ	砂	16.8	3.9	0.7
465	一	13114	○	下部箱	輪台Ⅳ	B	13.0	3.6	4.8	4	9	砂・灰・テ	砂	16.8	3.6	0.7
466	一	1311+14	○	下部箱	輪台Ⅳ	B	13.4	3.8	4.0	13	36	砂・灰・テ	砂	16.8	3.8	0.7
467	一	11112	○	下部箱	輪台Ⅳ	B	13.2	4.0	3.4	13	36	砂・灰・テ	砂	16.8	4.0	0.7
468	一	10606	○	下部箱	輪台Ⅳ	B	6.0	6.8	0.6	6	7	砂・灰・テ	砂	16.8	6.8	0.7
469	一	14115	○	下部箱	輪台Ⅳ	B	7.0	7	0	4	7	砂・灰・テ	砂	16.8	7.0	0.7
470	一	12115	○	下部箱	輪台Ⅳ	B	10.4	3.5	4	32	36	砂・灰・テ	砂	16.8	3.5	0.7
471	一	12012	○	下部箱	輪台Ⅳ	B	12.0	3.6	3.2	27	45	砂・灰・テ	砂	16.8	3.6	0.7
472	一	11112	○	下部箱	輪台Ⅳ	B	11.8	4.3	4.2	10	22	砂・灰・テ	砂	16.8	4.3	0.7
473	一	12204	○	下部箱	輪台Ⅳ	B	11.8	4.3	4.2	10	22	砂・灰・テ	砂	16.8	4.3	0.7

土器類別表(14)

No.	遺跡	グリッド	施設	種別	基盤	輪縁	外縁	縁幅 (cm)	底面 (cm)	底面 形状	底面 特徴	施上	施下	内面	外面	調査 (付箋)	調査 (付箋)	備考
444	-	145.14	V8	土器場	無台輪	C1	13.0	6.4	6.6	6	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ・板ナガ 瓦・瓦切	手ナガ	瓦	
445	-	146.03	V8	土器場	無台輪	C1	16.0	8	8	8	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ・板ナガ 瓦・瓦切	手ナガ	瓦	
446	-	146.07	V8	土器場	無台輪	C2	12.2	4.2	6.0	14	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
447	-	146.07+11	V8	土器場	無台輪	C3	11.9	3.6	5.0	12	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
448	-	146.11	V8	土器場	無台輪	C3	13.2	5.3	5.9	8	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
449	-	146.19	V8	土器場	無台輪	C3	13.2	5.3	5.9	7	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
450	-	146.19	V8	土器場	無台輪	C4	12.6	3.3	5.3	12	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
451	-	146.1111	V8	土器場	無台輪	C4	12.6	3.6	6.6	8	17	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
452	-	146.09	V8	土器場	無台輪	C4	13.3	3.7	6.4	12	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
453	-	146.12	V8	土器場	無台輪	C4	13.5	4.0	6.6	25	25	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
454	-	146.114	V8	土器場	無台輪	D1	16.1	3.4	6.8	13	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
455	-	146.139	V8	土器場	無台輪	D1	18.8	4.0	8.0	27	19	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
456	-	146.05	V8	土器場	無台輪	D1	13.4	6.2	8.6	14	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
457	-	146.25+25	V8	土器場	無台輪	D1	13.4	3.3	6.6	20	16	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
458	-	146.125	V8	土器場	無台輪	D1	13.0	3.0	6.8	18	16	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
459	-	146.138	V8	土器場	無台輪	D1	13.6	3.6	6.0	16	25	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
460	-	146.25+25	V8	土器場	無台輪	D1	13.6	3.0	6.0	16	25	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
461	-	146.132	V8	土器場	無台輪	D1	13.6	3.6	6.0	10	36	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
462	-	146.133	V8	土器場	無台輪	D1	13.6	3.6	6.1	2	36	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
463	-	146.14	V8	土器場	無台輪	D1	16.1	5.0	6.0	14	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
464	-	146.148	V8	土器場	無台輪	D1	16.3	5.7	8.0	1	10	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
465	-	146.137	V8	土器場	無台輪	D1	16.3	5.7	8.0	12	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
466	-	146.110+11	V8	土器場	無台輪	A	17.0	-	-	11	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
467	-	146.04	V8	褐色土	無台輪	A	15.8	6.5	6.0	5	21	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
468	-	146.25+25	V8	褐色土	無台輪	B	13.9	4.0	5.7	3	20	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
469	-	146.25+25	V8	褐色土	無台輪	B	13.9	4.0	5.7	13	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
470	-	146.12	V8	褐色土	無台輪	B	13.9	4.0	5.7	13	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
471	-	146.12	V8	褐色土	無台輪	B	13.9	4.0	5.7	13	26	石・瓦・陶	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
472	-	146.0711	V8	褐色土	無台輪	C1	13.0	6.0	6.0	1	45+1	石・瓦	板	真面	手ナガ	手ナガ	瓦	
50296	142.221	53.1	14.1.14	Y8	II	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
473	-	146.113	V8	褐色土	無台輪	C1	11.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
474	-	146.116	V8	褐色土	無台輪	C1	11.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
475	-	146.115+23	V8	褐色土	無台輪	C1	10.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
476	-	146.12+3+4	V8	褐色土	無台輪	C1	10.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
477	-	146.12+16	V8	褐色土	無台輪	C1	10.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	



土器類別表(16)

No.	遺跡	グリッド	施引	種別	基盤	分類	寸法 (cm)	底面 (cm)	底質 (cm)	底質 特徴	地質	色調	測量 (外周)	測量 (内周)	備考
505	-	1000・23	V8	土師器	小型	B	21.8	21.7	26	石・長・海・軟	泥	ホワイト	ホワイト	石	
506	-	1012・19	V8	土師器	小型	B	7.4	7.4	6	石・長・土・質	泥	ホワイト	ホワイト	石	
507	-	1012・20	V8	土師器	小型	Ae	14.2	6	6	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
508	-	1012・18	V8	土師器	小型	Ae	17.0	1	3	石・長・土・質	泥	ホワイト	ホワイト	石	
509	-	1012・18	V8	土師器	小型	Ae	18.0	3	3	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
10017-P05															
510	-	1012・18	V8	土師器	大型		28.0	17	17	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	-	
10018-P05															
511	-	10019	V8	土師器	大型		20.4	15	15	石・長・土・海・軟	泥	ホワイト	ホワイト	石・長・土・海・軟	
512	-	10019	V8	土師器	大型		17.2	5	5	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石・長・土・海	
513	-	1012・14	V8	土師器	中型	Bn	21.4	7	7	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
514	-	1012・15	V8	土師器	中型	Bn	25.5	6	6	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
515	-	1012・13	V8	土師器	大型	Bn	25.8	6	6	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
516	-	1012・13	V8	土師器	大型	Bn	20.0	5	5	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
517	-	1012・19	V8	土師器	大型	Bn	19.0	7	7	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
518	-	1012・13	V8	土師器	大型	Bn	23.0	3	3	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
519	-	1012・18	V8	土師器	大型	Bn	23.0	4	4	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
520	-	1012・16	V8	土師器	大型	Bn	20.8	6	6	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
521	-	1012・18	V8	土師器	大型	Bn	21.4	9	9	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
522	-	1012・12	V8	土師器	大型	Bn	20.2	6	6	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
523	-	1012・15	V8	土師器	大型	Bn	21.4	5	5	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
524	-	1012・12	V8	土師器	大型	Bn	23.6	5	5	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
525	-	1012・14	V8	土師器	大型	Bn	21.2	4	4	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
526	-	1008	V8	土師器	大型	Bn	20.4	3	3	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
527	-	1012・17	V8	土師器	大型	Bn	19.8	3	3	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
528	V8	10015	V8	土師器	大型	Bn	23.8	8	8	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	-	
529	V8	1012・18	V8	土師器	大型	Bn	22.6	4	4	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
530	-	1012・12	V8	土師器	大型	Bn	20.9	1	1	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
531	-	1008	V8	土師器	大型	Bn	-	-	-	石・長・土	泥	ホワイト	ホワイト	石	
532	-	1012・17	V8	土師器	大型	Bn	-	-	-	石・長・土	泥	ホワイト	ホワイト	石	
533	531	1012・16	V8	土師器	大型	Bn	23.8	36	36	石・長・土	泥	ホワイト	ホワイト	-	
534	-	1012・17	V8	土師器	大型	Bn	-	-	-	石・長・土・海	泥	ホワイト	ホワイト	石	
535	-	1008・22	V8	土師器	大型	Bn	35.6	4	4	石・長・土	泥	ホワイト	ホワイト	石	
536	-	1008・23	V8	土師器	大型	Bn	-	-	-	石・長・土	泥	ホワイト	ホワイト	石	

土器類聚表(17)

No.	遺跡	グリッド	組合	種別	基盤	分類	寸法 (cm)	断面 (cm)	断面 (直角) 形状 の特徴	施上	被覆	内・表面 の性質	調査(内面)	調査(外面)	目録 記載	備考
寸法 (cm)	寸法 (cm)	寸法 (cm)														
537	-	1235	VII	土器組	持手型	B	-	-	石・瓦・土	施	滑	滑・陶質 内・表面	滑	滑	-	-
538	-	10918	VII	土器組	持手型	B	18.4	3	石・瓦・土・圓	内	滑	滑	滑	滑	滑	滑
539	-	1387	VII	土器組	持	B (19.0)	2	石・長・土・角・輪	内	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
540	-	1314	VII	土器組	持	B (19.6)	6	石・長・土・圓・輪	内	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
541	-	1387	VII	土器組	持	Ba (29.0)	2	石・長・土	内	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
542	-	12122	VII	土器組	持	Ba (36.9)	4	石・長・土・輪	内	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
543	-	10913	VII	土器組	持	Ba (37.1)	4	石・長・土・圓	内	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
544	-	1316	VII	土器組	持	Ba (32.40)	1	石・長・土	内	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
545	-	13720	VII	土器組	持	Ba (34.2)	12	石・長・土	内	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
546	-	1253	VII	土器組	持	Ba (38.0)	3	石・長・土・圓・角・凸輪	内	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
547	-	10113	VII	土器組	持	Ba (39.2)	4	石・長・土・輪	内	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
548	-	12116	VII	土器組	持	Ba (39.3)	1	石・長・土・圓・輪	内	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
549	-	12810	VII	火候陶器	瓦端	(13.0)	3	瓦	施	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
550	-	1311	VII	火候陶器	瓦端	T.2	2	瓦	施	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
551	-	1310	VII	火候陶器	瓦端	-	-	-	瓦	施	滑	滑・オリーフ	滑	滑	-	-
552	-	10205	VII	火候陶器	瓦端	-	-	-	瓦	施	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
553	-	12117	VII	火候陶器	瓦端	-	-	-	瓦	施	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
554	-	1313	VII	火候陶器	瓦端	1.4	3	瓦	施	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
555	-	1314+16	VII	火候陶器	瓦	-	-	-	砂	施	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
556	-	10204	VII	火候陶器	瓦	-	204	瓦	施	滑	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-
557	-	11911	VII	火候陶器	瓦	-	-	-	瓦	施	滑	滑・テ・カ・スリ	滑	滑	-	-

## 土製品観察表

・円筒形土製品の場合、法量は土源と同様に口径、器高、底径を記載した。・欠損している場合、括弧の中に残長や最大の弦長を記載した。

No.	遺構	グリッド	層位	種別	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	胎土	色調	備考
556	-	11K14	VII	円筒形 土製品	口径 15.6	器高 4.5	底径 16.7	石・長・雲	外:橙 内:黒褐色	内外ナガ調整 内面工具痕 埋存率3/26
557	-	14K14 11L24	VII VII	円筒形 土製品	口径 21.4			石・長 ・雲・海	灰白	内外ナガ調整 内面工具痕 埋存率3/26
558	S15	13J22	1層	管状土鉢	2.4	1.0	0.3	石	にぶい橙色	両端平底
559	S15	13J21	3層	管状土鉢	3.3	1.1	0.5	石・チ	浅黄橙色	片側端部わずかに面
560	SK342	10E12	7層	管状土鉢	2.8	1.3	0.4	石・長・チ	淡黄色	両端わずかに面
561	SK342	10E12		管状土鉢	4.8	1.4	0.4	石・長・チ	にぶい橙色	両端平底
562	SD7	14G17		管状土鉢	(5.9)	1.5	0.3	石・長	橙色	両端欠損
563	SD7	13J24	1層	管状土鉢	3.6	1.4	0.3	石・長	にぶい黄橙色	両端平底
564	SD7	13J15	1層	管状土鉢	4.6	2.0	0.4	石・長・チ	にぶい黄橙色	両端平底
565	SD7	14J7	1層	管状土鉢	4.0	1.1	0.3	石・黒	にぶい黄橙色	両端平底
566	SD7	13K1	1層	管状土鉢	5.8	1.3	0.4	石	にぶい黄橙色	両端平底
567	SD7	13K16	2層	管状土鉢	6.5	1.5	0.4	石・長	黒褐色	両端わずかに面、側面欠損
568	SD7	13J5	1層	管状土鉢	6.4	1.6	0.4	石・黒	灰黄色	両端平底
569	SD7	13J19	2層	管状土鉢	6.8	2.0	0.4	石・長	淡黄色	
570	SD7	14J7	1層	疊状土鉢	1.7	1.5	0.3	石・長	浅黄橙	
571	SD7	13J10	1層	疊状土鉢	2.0	1.7	0.3	石	灰白色	
572	SD7	13J10	1層	疊状土鉢	1.9	1.9	0.3	石・長	黒褐色	
573	SD7	13J10	1層	疊状土鉢	2.1	1.8	0.3	石・長	黒色	
574	SD7	14J7	1層	疊状土鉢	2.3	1.9	0.2	石・長・海	灰白色	
575	SD27	14I6		疊状土鉢	1.8	(1.5)	0.2	石・長	灰褐色	
576	SD296	12I21	1層	疊状土鉢	1.7	1.6	0.4	石	灰白	完形
577	SK1	14H14	下層	管状土鉢	(3.9)	1.1	0.5	石・長	にぶい黄橙色	片側端部欠損
578	SK1	11H17		管状土鉢	(3.9)	1.4	0.3	石・長・黒	浅黄橙色	片側端部わずかに面 片側端部欠損
579	SK1	14H12	下層	管状土鉢	5.0	1.6	0.4	石・長	にぶい黄橙色	両端平底
580	-	13J19	VII	管状土鉢	3.2	1.0	0.3	石・長・チ	にぶい黄橙色	
581	-	13J8	VII	管状土鉢	3.5	1.0	0.2	長・海	浅黄橙色	両端平底、切り離し痕
582	-	13J14	VII	管状土鉢	3.8	1.0	0.3	石・長・チ	浅黄橙色	両端わずかに面
583	-	13J19	VII	管状土鉢	3.2	1.4	0.4	石・長・チ	浅黄橙色	
584	-	10H2	VII	管状土鉢	3.0	1.4	0.4	石・長・海	にぶい橙色	両端わずかに面
585	-	11H17	VII	管状土鉢	3.1	1.7	0.5	石・長	淡黄色	
586	-	12J4	VII	管状土鉢	3.5	1.4	0.5	石・長	浅黄橙色	両端平底
587	-	13J24	VII	管状土鉢	3.6	1.3	0.3	石・長	黒褐色	両端平底
588	-	13J19	VII	管状土鉢	4.7	1.0	0.3	石・長	浅黄橙色	両端平底
589	-	14I3	VII	管状土鉢	4.9	1.2	0.4	石・長	灰黄色	
590	-	13L24	VII	管状土鉢	6.8	1.5	0.3	石・長	浅黄橙色	
591	-	13L23	VII	管状土鉢	7.2	1.5	0.4	石・長・海	にぶい黄橙色	片側端部わずかに面
592	-	13L16	VII	管状土鉢	7.4	1.7	0.3	石・長・海	橙色	両端わずかに面
593	-	12I17	VII	疊状土鉢	2.1	2.2	0.4	石・長	にぶい橙	
594	-	11J18	VII	疊状土鉢	2.1	2.3	0.3	石・長・チ	浅黄橙	

石製品観察表

・法線は残存部位の最大値を記載した。

No.	遺構	グリッド	層位	種別	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	色調	石材	備考
595	-	10C23	VII	石鏡	4.4	4.3	3.8	にら、黄褐色	砂岩	球状
596	-	10F18	VII	椎状鏡	4.2	3.6	1.2	褐色	砂岩	椎孔あり、成形楕円、孔径0.5cm
597	-	14K19	VII	砾石	4.3	2.0	1.4	灰白色	砾灰岩	方形、ややバナ状
598	-	11I24	VII	砾石	3.3	2.1	1.5	灰白色～明オーラブ灰色	砾灰岩	方形、ややバナ状
599	-	9C14+15	VII	砾石	6.1	4.0	2.4	灰白色	砾灰岩	バナ状
600	-	14L21	VII	砾石	8.3	3.3	2.8	暗褐色～灰白色	砾灰岩	方形、ややバナ状、被熱
601	-	12K1	VII	砾石	9.4	2.6	3.2	灰白色	砾灰岩	方形
602	-	9C2	VII	砾石	8.9	6.0	1.8	褐色	砂岩	バナ状、板状
603	-	10E21	VII	砾石	11.9	5.1	5.8	灰白色	砾灰岩	円錐状、金縫

木製品観察表

・法線は残存部位の最大値を記載した。

No.	遺構	グリッド	層位	種別	名称	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	
604	SB317-P1	12K4		柱根		47.5	19.5	18.8	上端折損、加工痕明瞭、芯持削材、多角形状に成形	
605	SB317-P4	12K1		柱根		34.5	15	11.5	上端折損、一部削れ、芯持丸木	
606	SB317-P8	11K16		柱根		15	14.4	14.3	上部折損、芯持丸木、ブロック状に分裂	
607	SB317-P11	11K19		柱根		55	19	17.5	上端折損、芯持丸木、多角形状に成形、左右側面が溶る	
608	SB317-P14	12K9		柱根		19.3	11.6	7.6	底面切削痕、上端折損、芯持丸木、表面食害い	
609	SB317-P20	11K11		柱根		31.2	17.9	14.6	底面切削痕、上端折損、芯持丸木	
610	SB317-P21	11K12		柱根		14.4	14.3	12.4	底面切削痕、上端折損、芯持丸木	
611	SB317-P22	11K13		柱根		30.1	17.1	13.8	底面2方向から切削、上端折損、裏面腐食か、芯持丸木か	
612	SB348-P11	10D4		柱根		28.2	14.4	12.3	底面切削痕あり、上端折損、芯持丸木	
613	SD348-P14	10E1		柱根		80.9	12.5	10.8	底面2方向から切削、芯持削材、上端折損(腐食か)、芯持丸木	
614	SB660-P5	11G12		柱根		17.8	12	10.5	裏面腐食、上端折損、芯持丸木、表面食害い	
615	P426	10E10		柱根		59.5	13.7	13.3	底面2方向から切削、上端折損、芯持丸木	
616	-	16M11	II	容器	漆桶	12径 12.6	器高 6.6	0.5	外表面厚く漆付着、施模のみ残存か、板目か	
617	-	13H10		腹瓦	食具皿	ヘラ状木製品	13	6.6	0.5	加工痕不明瞭、板目
618	SX1	15H15		立木板	整地器具	柵木	14.4	1.4	0.8	裏面切削痕、先端斜めに切削、板目
619	-	11E3	VII	容器	曲物蓋板	17.4	3.3	0.9	穿孔あり、サクフ根皮一部残存、板目	
620	-	11I16	VII	木製品	木箱	8.4	2.5	0.4	墨書き、裏面切削痕あり、軋文字「け口たし」か、板目	
621	SE877	11D16	10解	木製品	弓状木製品	58.8	1.7	1.6	切削痕や不明瞭、裏面を削いた時のものか、芯持丸木	

鋳造関連遺物・金属製品観察表

・欠損している場合、括弧の中に残存値を記載した。

No.	遺構	グリッド	層位	種別	名称	長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	備考
622	SD348-P3	10E2	1層	鋳造関連遺物	羽口	(8.5)	6.9	2.4	先端部欠損、わざかに発泡
623	SX1	14E3	下層	鋳造関連遺物	羽口	(5.8)	(5.7)	(1.8)	羽口先端部、発泡、淨化
624	SX1	14E3	下層	鋳造関連遺物	羽口	(3.9)	(3.2)	(1.6)	羽口先端部、発泡、淨化
625	SD7 SD7	14J3	1層	鋳造関連遺物	極細織治鋸	(6.9)	8.6	2.7	上面に微細な気泡多数
626	SE212	13J7	ガラス 直面	金属製品	逆方裏金具	2.9	厚さ 0.4	0.18	表面黒青に覆われる、穿孔4ヶ所
627	素土	15K17		金属製品	北宋銭	径2.4		0.75	元祐通寶(初鉄年1086年)



# 図 版







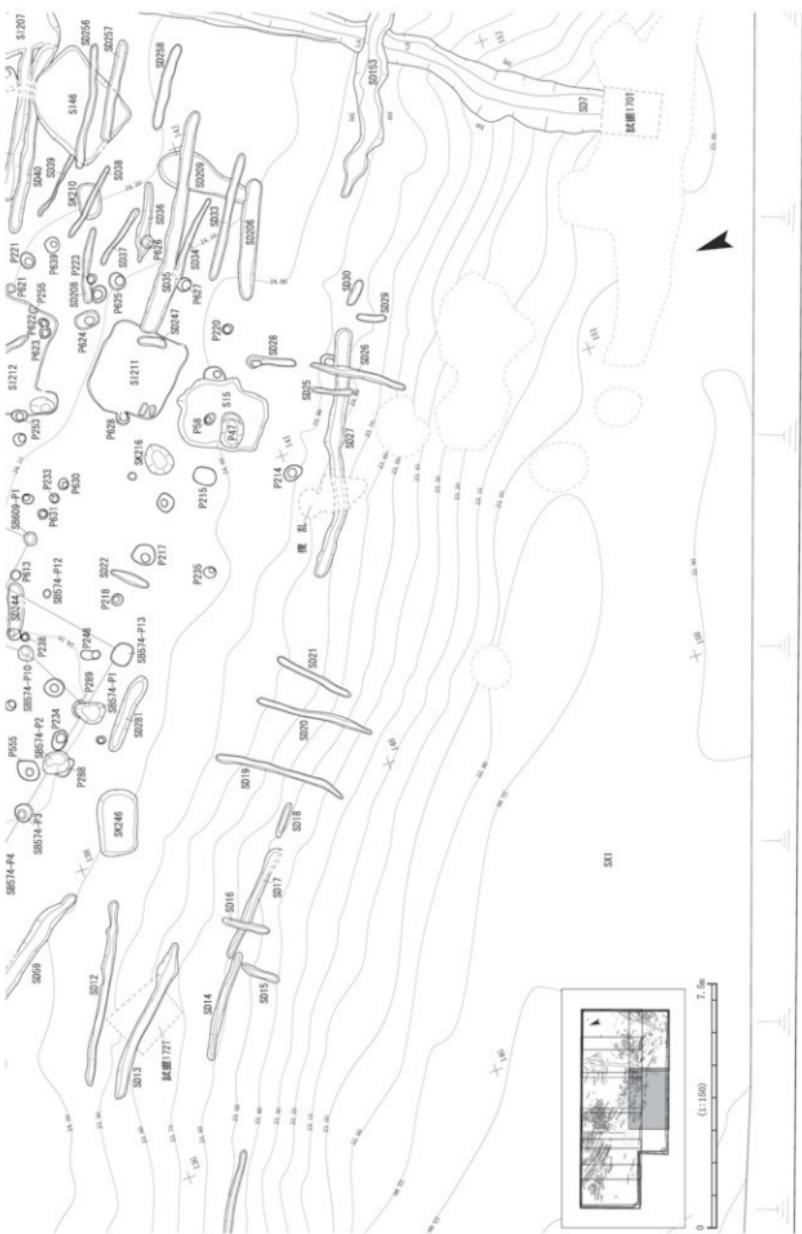






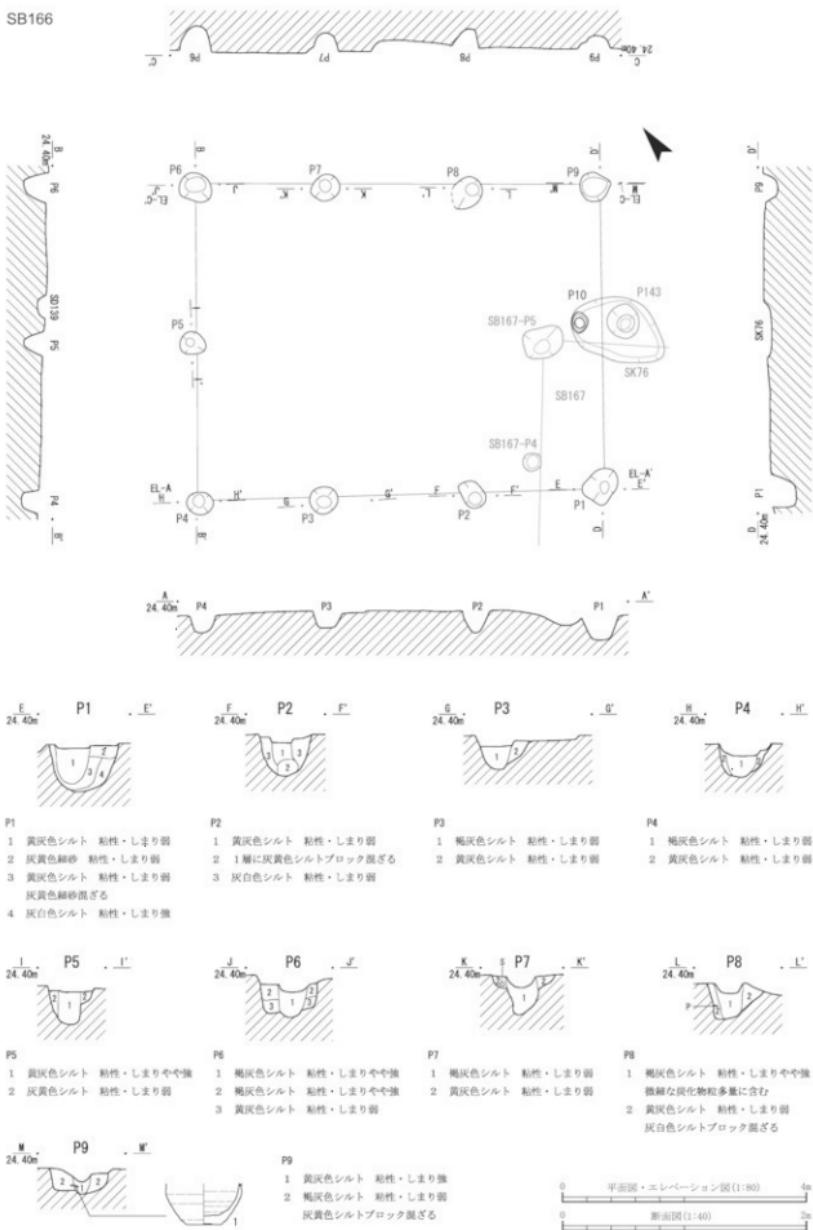




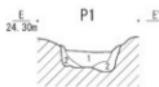
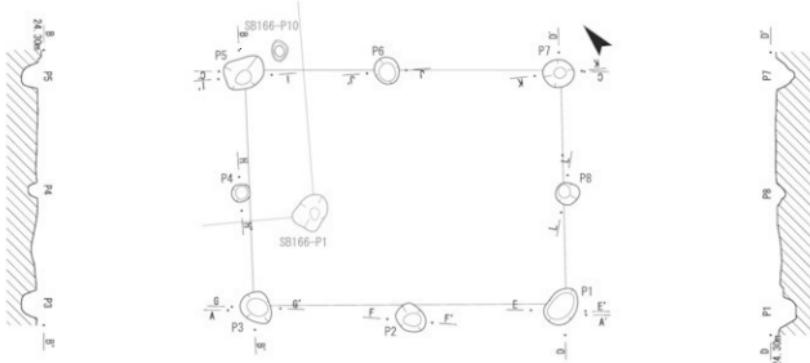




SB166



SB167



P1

- 1 棕灰色シルト 粘性・しまり弱  
φ 5mmの炭化物粒多量に含む  
2 黄褐色シルト 粘性・しまり弱



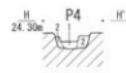
P2

- 1 黄灰色シルト 粘性・しまり強  
灰黄色シルトブロック混ざる  
2 黄灰色シルト 粘性・しまり強  
3 黄灰色シルト 粘性・しまり弱



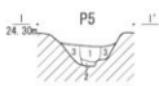
P3

- 1 棕灰色シルト 粘性・しまり弱  
2 灰黄色シルト 粘性・しまり弱  
3 黄灰色シルト 粘性・しまり弱



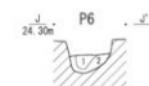
P4

- 1 棕灰色シルト 粘性・しまり弱  
2 黄褐色シルト 粘性・しまり弱



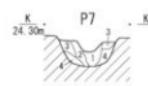
P5

- 1 棕灰色シルト 粘性・しまり強  
2 1層に灰褐色シルトブロック混ざる  
3 棕灰色シルト 粘性・しまり弱



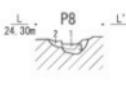
P6

- 1 棕灰色シルト 粘性・しまり強  
2 灰白色シルト 粘性・しまり弱



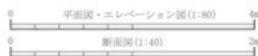
P7

- 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱  
2 黄灰色シルト 粘性・しまり強  
3 灰白色シルト 粘性・しまり強  
4 灰白色シルト 粘性・しまり弱

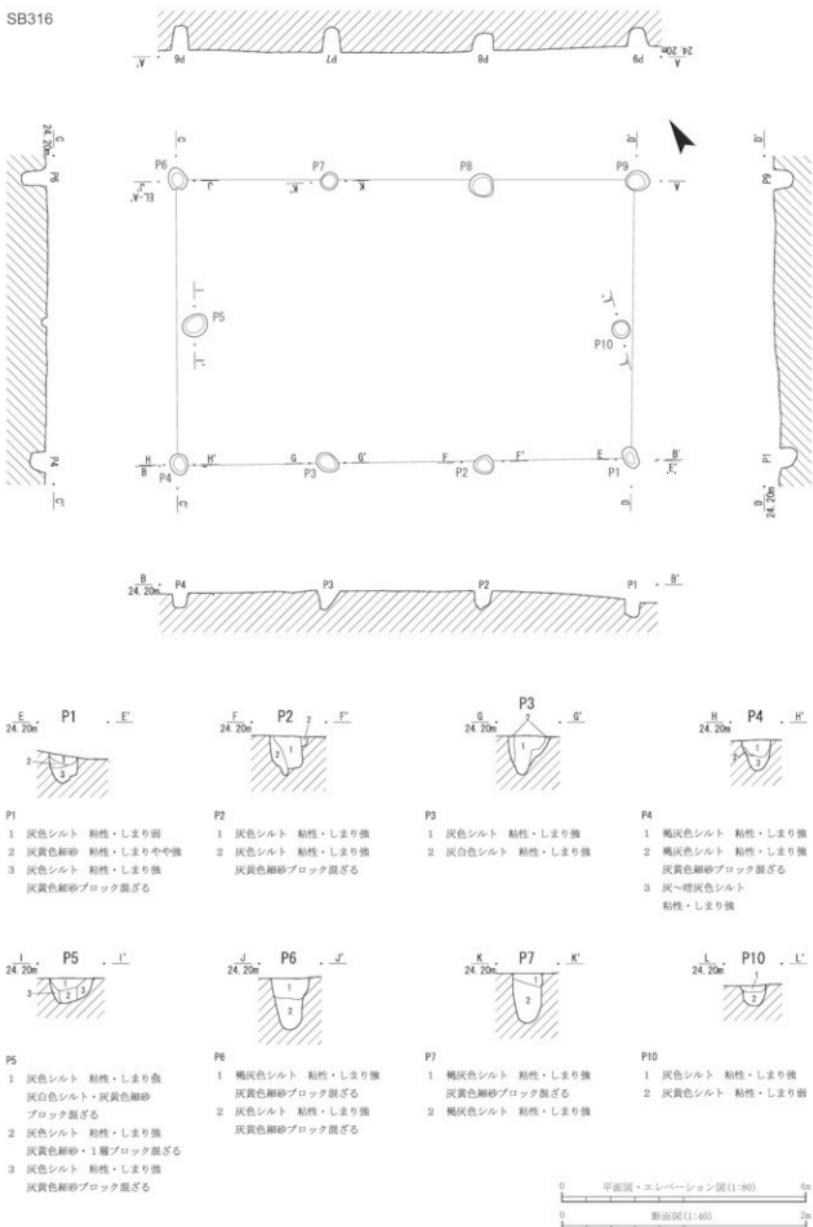


P8

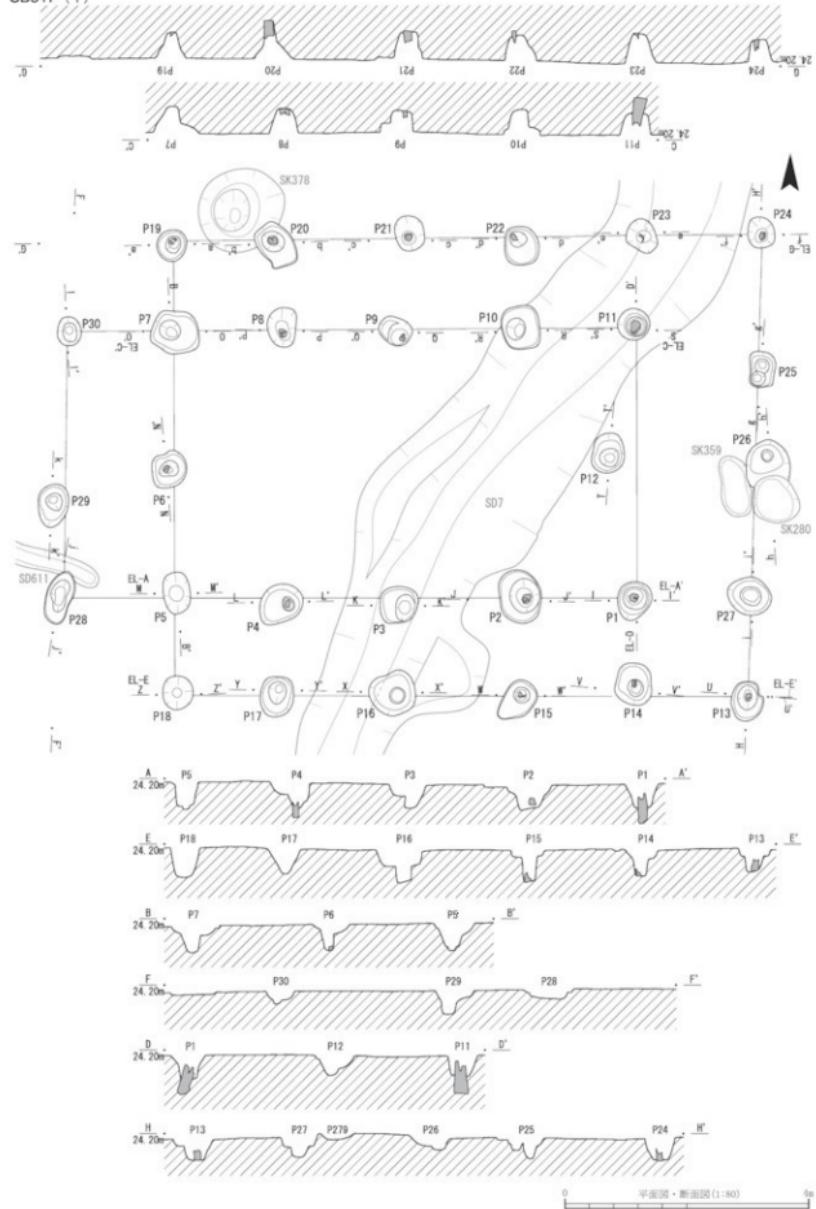
- 1 棕灰色シルト 粘性・しまり弱  
2 灰白色シルト 粘性・しまり弱  
3 灰黄色シルト 粘性・しまり弱



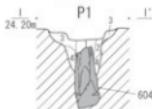
SB316



SB317 (1)

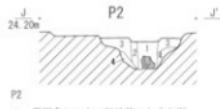


## SB317 (2)



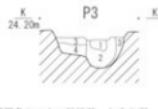
P1

- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
φ 10 mmの炭化物粒少量混ざる
- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
黄褐色オーリープ灰色砂少量混ざる
- 黄褐色砂 粘性なし しまり強  
黄褐色シルト多量に混ざる 黑褐色シルト少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性弱 しまり弱  
黄褐色シルト少量混ざる



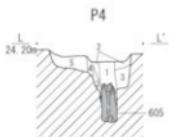
P2

- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
黄褐色砂少量混ざる
- 黄褐色～オーリープ灰色シルト 粘性弱 しまり強  
黒褐色シルト少量混ざる
- 黄褐色砂 粘性なし しまり強  
黄褐色シルト多量に混ざる 黑褐色シルト少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性弱 しまり弱  
黄褐色シルト少量混ざる



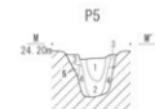
P3

- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
黄褐色砂少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性弱 しまり強  
黒褐色シルト多量に混ざる
- 灰オーリープシルト 粘性弱 しまり強  
黄褐色砂少量混ざる  
φ 2 mm炭化物粒少量混ざる
- 灰色シルト 粘性弱 しまり強  
φ 2 mmの炭化物粒少量混ざる



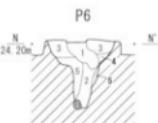
P4

- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
オーリープ灰色シルト少量混ざる
- 黒褐色シルト 粘性・しまり強  
オーリープ灰色シルト少量混ざる 黄褐色砂少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性・しまり強  
黒褐色シルト多量に混ざる 黄褐色砂少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性・しまり強  
黒褐色シルト少量混ざる
- 黄褐色砂 粘性なし しまり強  
黄褐色シルト多量に混ざる



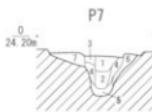
P5

- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
オーリープ灰色シルト多量に混ざる  
φ 4 mmの炭化物粒少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性弱 しまり強  
黒褐色シルト多量に混ざる  
黄褐色砂少量混ざる
- 黄褐色砂 粘性なし しまり強  
黄褐色シルト多量に混ざる  
黄褐色シルト少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性・しまり弱  
黒褐色シルト少量混ざる
- 5 黃褐色シルト 粘性なし しまり強  
黄褐色シルト多量に混ざる



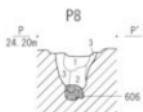
P6

- 黒色シルト 粘性・しまり強  
黄灰色シルト多量に混ざる  
φ 6 mmの炭化物粒少量混ざる  
黄褐色砂少量混ざる
- 黒褐色シルト 粘性・しまり強  
黄灰色シルト多量に混ざる 黄褐色砂少量混ざる
- 黄灰色シルト 粘性・しまり強  
黒色シルト少量混ざる 黄褐色砂少量混ざる
- 黄褐色砂 粘性なし しまり強  
黄灰色シルト少量混ざる
- 黄褐色シルト 粘性弱 しまり強  
黄灰色シルト多量に混ざる  
黒褐色シルト少量混ざる



P7

- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
黄褐色砂少量混ざる φ 1 mmの炭化物粒少量混ざる オーリープ灰色シルト多量に混ざる
- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
φ 1 mmの炭化物粒少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性・しまり弱  
黒褐色シルト多量に混ざる  
φ 1 mmの炭化物粒少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性・しまり弱  
黒褐色シルト少量混ざる  
φ 3 mmの炭化物粒多量に混ざる  
黄褐色砂少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性弱 しまり強  
黒褐色シルト少量混ざる



P8

- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
オーリープ灰色シルト多量に混ざる  
φ 5 mmの炭化物粒少量混ざる
- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
φ 5 mm炭化物粒少量混ざる
- 黄褐色～オーリープ灰色砂質土  
粘性弱 しまり強  
黒褐色シルト多量に混ざる



P9

- 黒褐色シルト 粘性・しまり強  
オーリープ灰色シルト少量混ざる  
φ 3 mm炭化物粒少量混ざる
- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
φ 2 mm炭化物粒少量混ざる
- 黒褐色～オーリープ灰色砂質土  
粘性弱 しまり強  
黒褐色シルト多量に混ざる
- オーリープ灰色シルト  
粘性弱 しまり強



P10

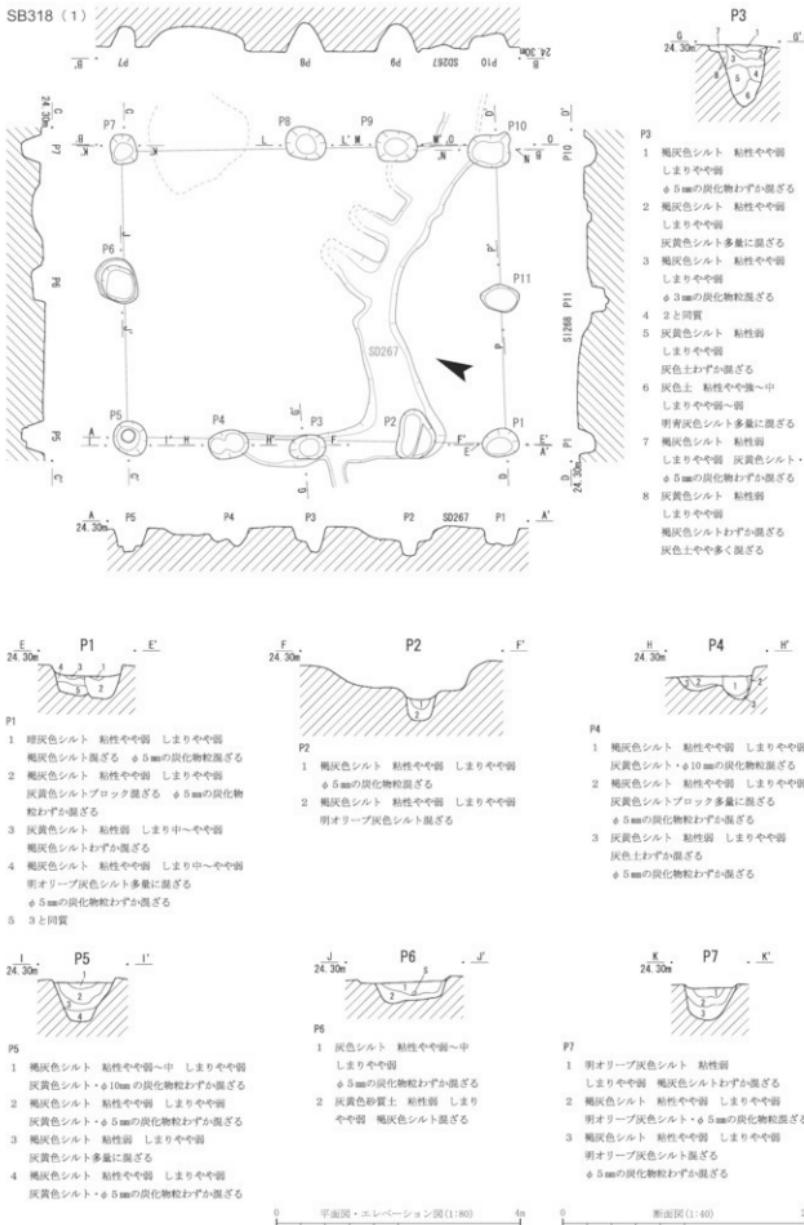
- 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱  
オーリープ灰色シルト少量混ざる  
φ 5 mm炭化物粒少量混ざる
- 黒褐色シルト 粘性・しまり強  
オーリープ灰色シルト多量に混ざる
- 黒褐色シルト 粘性・しまり強  
オーリープ灰色シルト多量に混ざる 黄褐色砂少量混ざる
- 黄褐色砂質土 粘性弱 しまり強  
黒褐色シルト少量混ざる
- オーリープ灰色シルト 粘性弱  
しまり強 黑褐色シルト少量混ざる

SB317 (3)

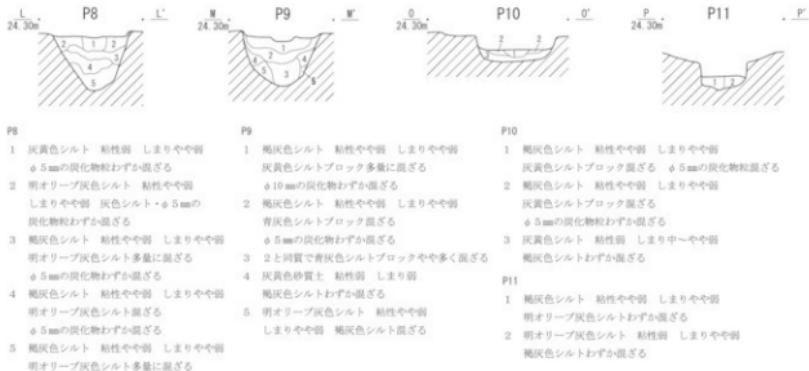


SB317 (4)

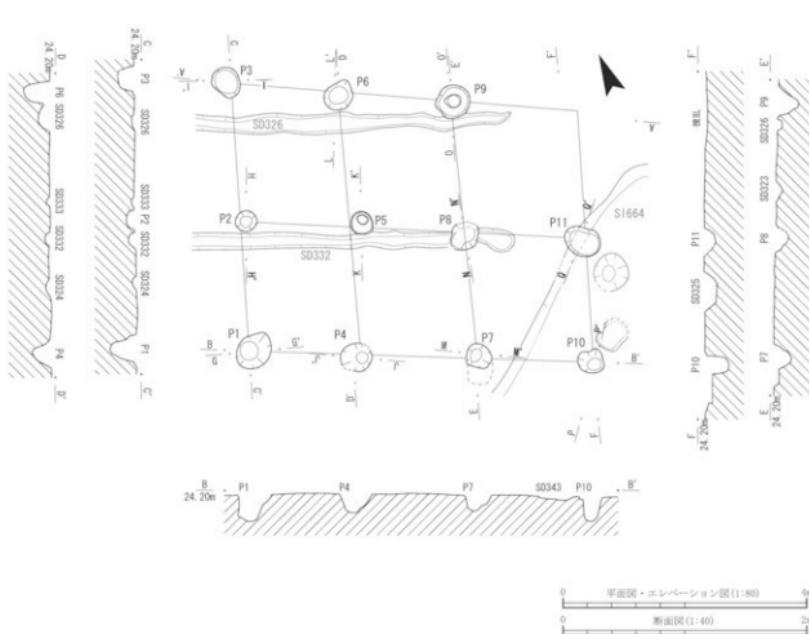




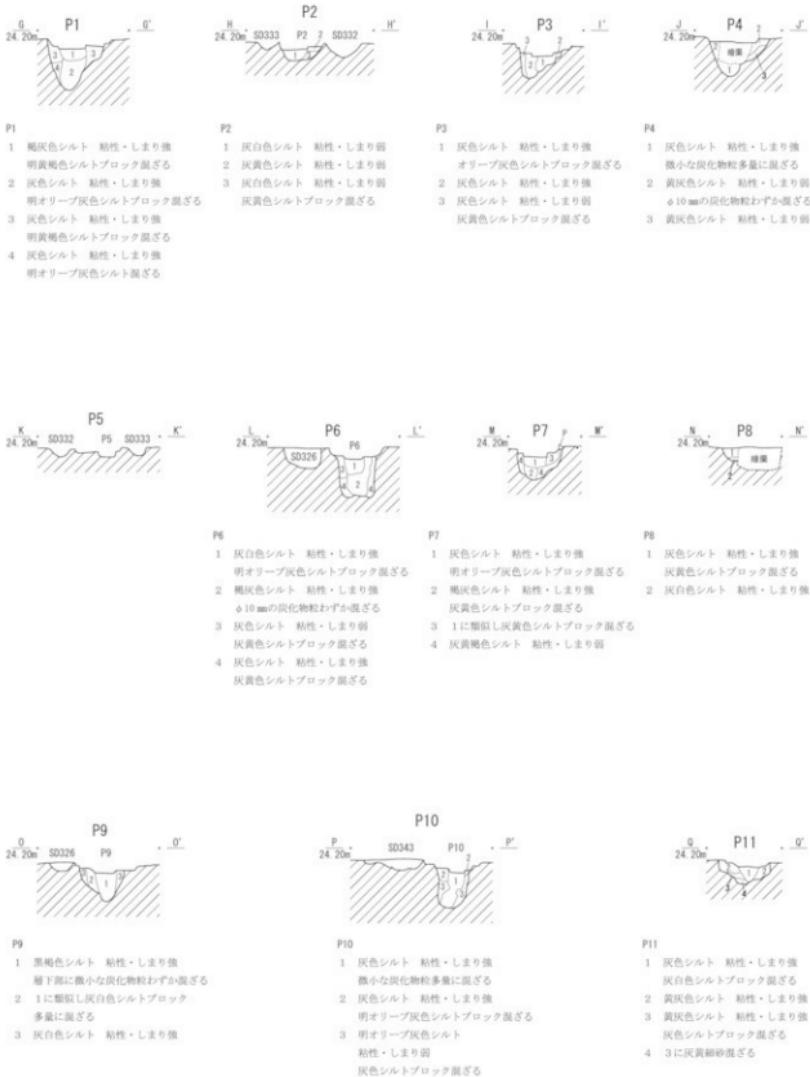
SB318 (2)



SB320 (1)

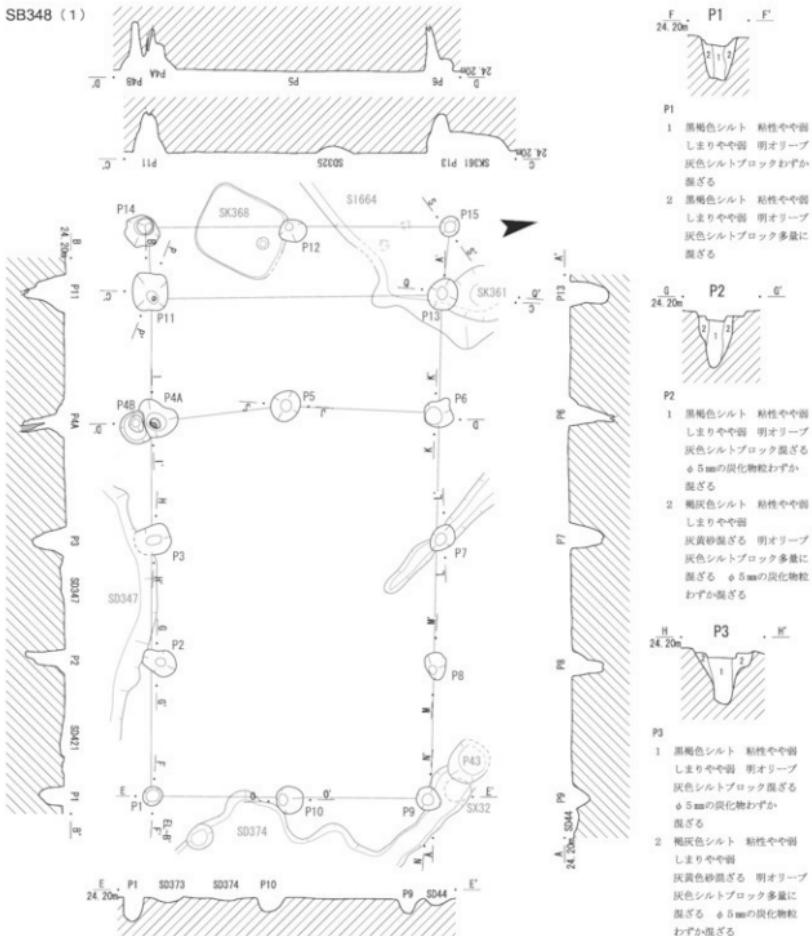


SB320 (2)

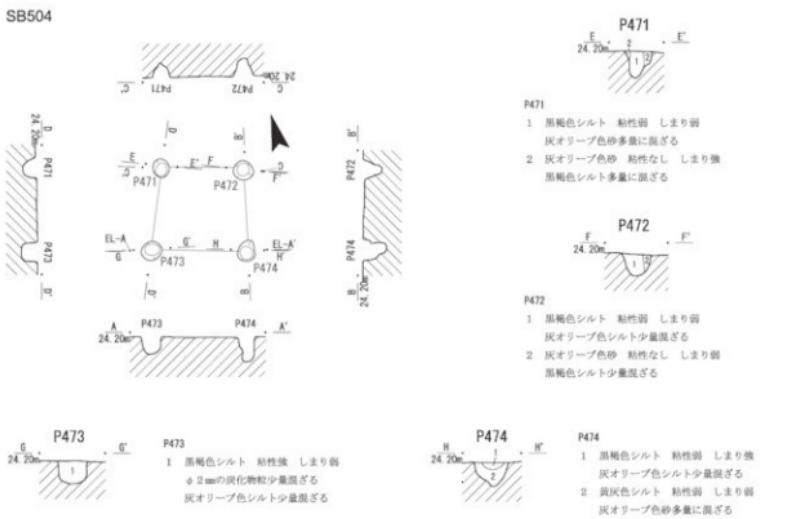
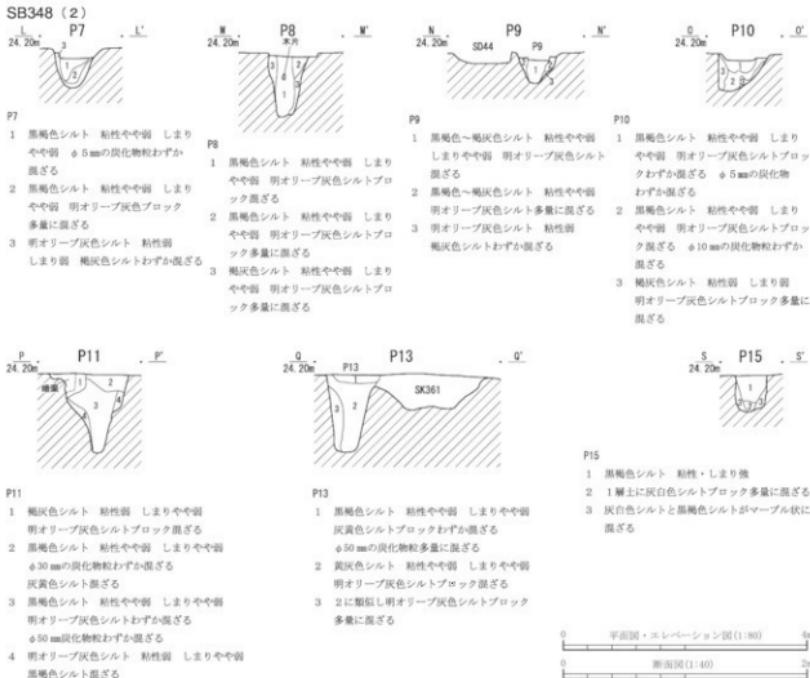


0 (1:40) 2m

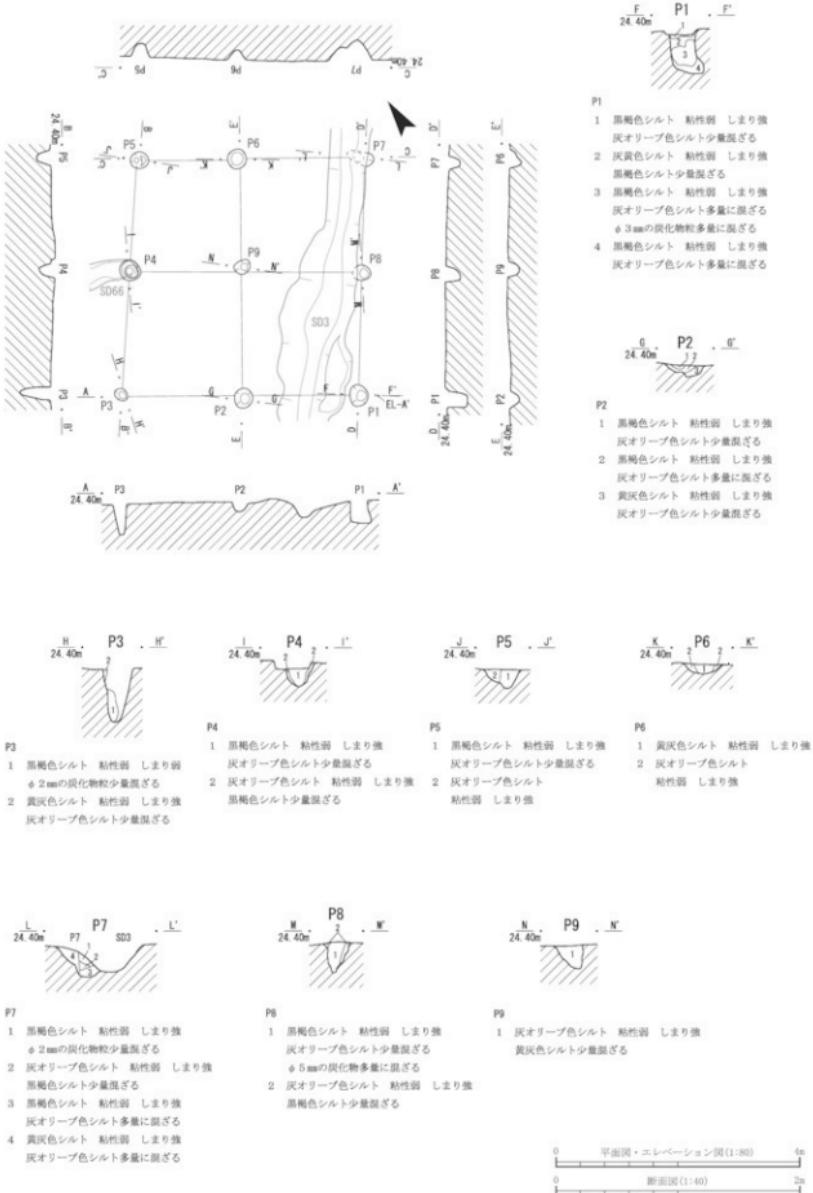
SB348 (1)



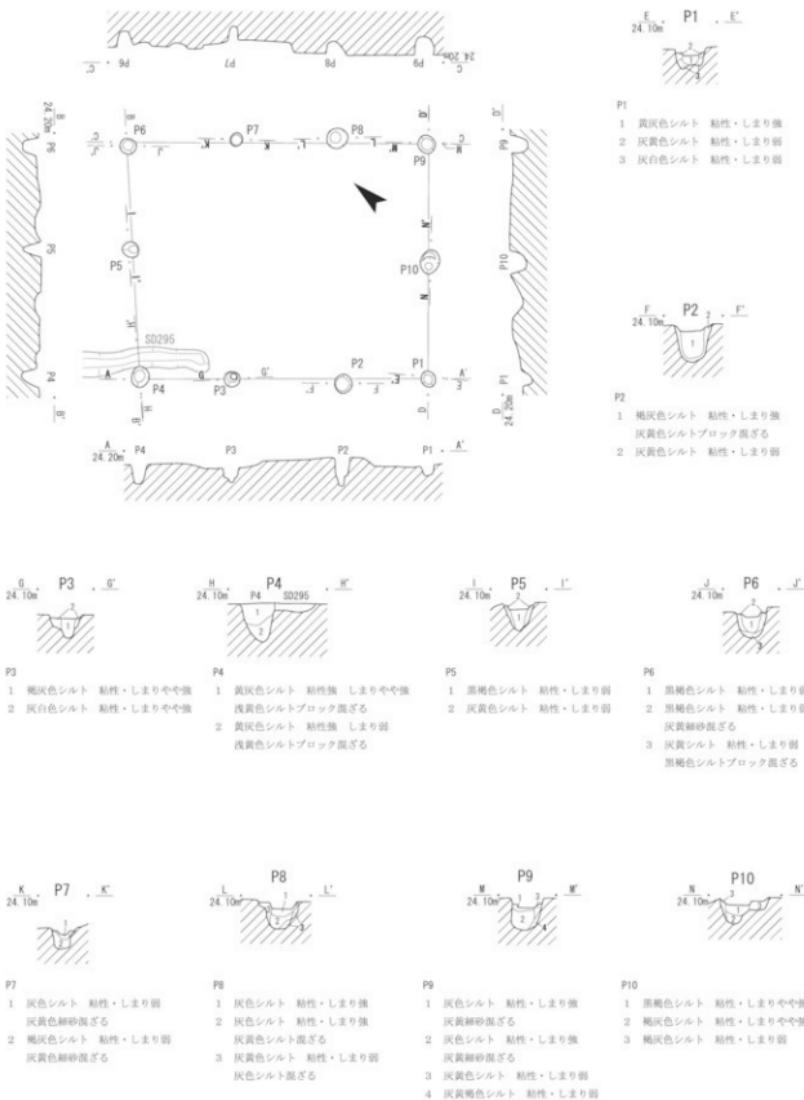
- P4A**
- 黒褐色シルト 粘性やや弱  
しまりやや弱 明オリーブ  
灰色シルトブロック  $\phi$  5 mmの  
炭化物粒わずか混ざる
  - 褐灰色シルト 粘性やや弱  
しまりやや弱 明オリーブ  
シルトブロック多量に混ざる  
 $\phi$  5 mmの炭化物粒わずか混ざる
- P5**
- 黒褐色シルト 粘性やや弱  
しまりやや弱 明オリーブ  
灰色シルトブロック混ざる  
 $\phi$  5 mmの炭化物粒わずか混ざる
  - 褐褐色シルト 粘性やや弱  
しまりやや弱 明オリーブ  
灰色シルトブロック多量に  
混ざる  $\phi$  5 mmの炭化物粒  
わずか混ざる
- P6**
- 黒褐色シルト 粘性やや弱  
しまりやや弱 明オリーブ  
灰色シルトブロック混ざる
  - 褐灰色シルト 粘性やや弱  
しまりやや弱 明オリーブ  
灰色シルトブロック多量に  
混ざる  $\phi$  5 mmの炭化物粒  
わずか混ざる
  - 黒褐色シルト 粘性やや弱  
しまりやや弱 中  
しより弱 明オリーブ  
シルトブロック多量に混ざる
  - 褐灰色シルト 粘性やや弱  
しまりやや弱 明オリーブ  
灰色シルトブロック多量に  
混ざる  $\phi$  5 mmの炭化物粒  
わずか混ざる



SB535

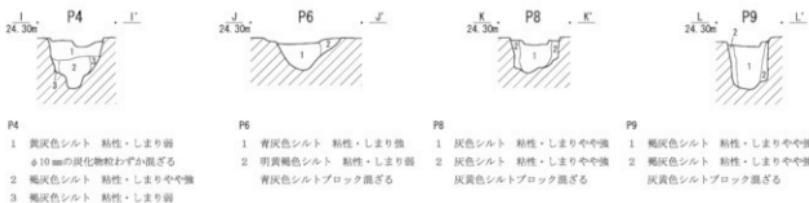
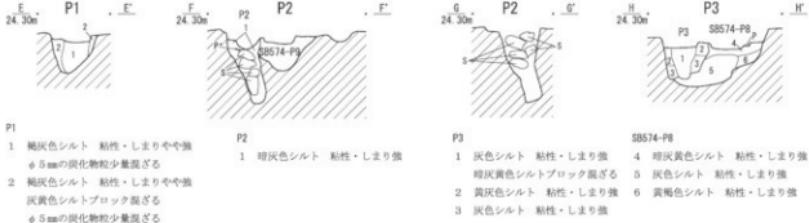
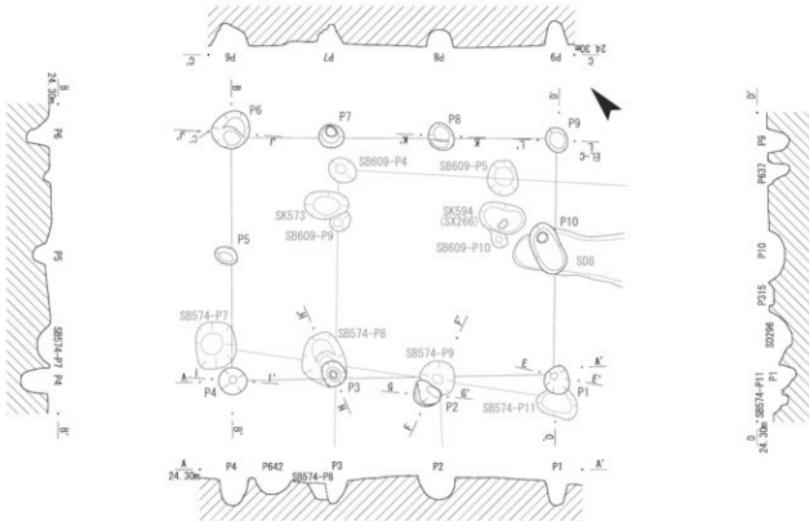


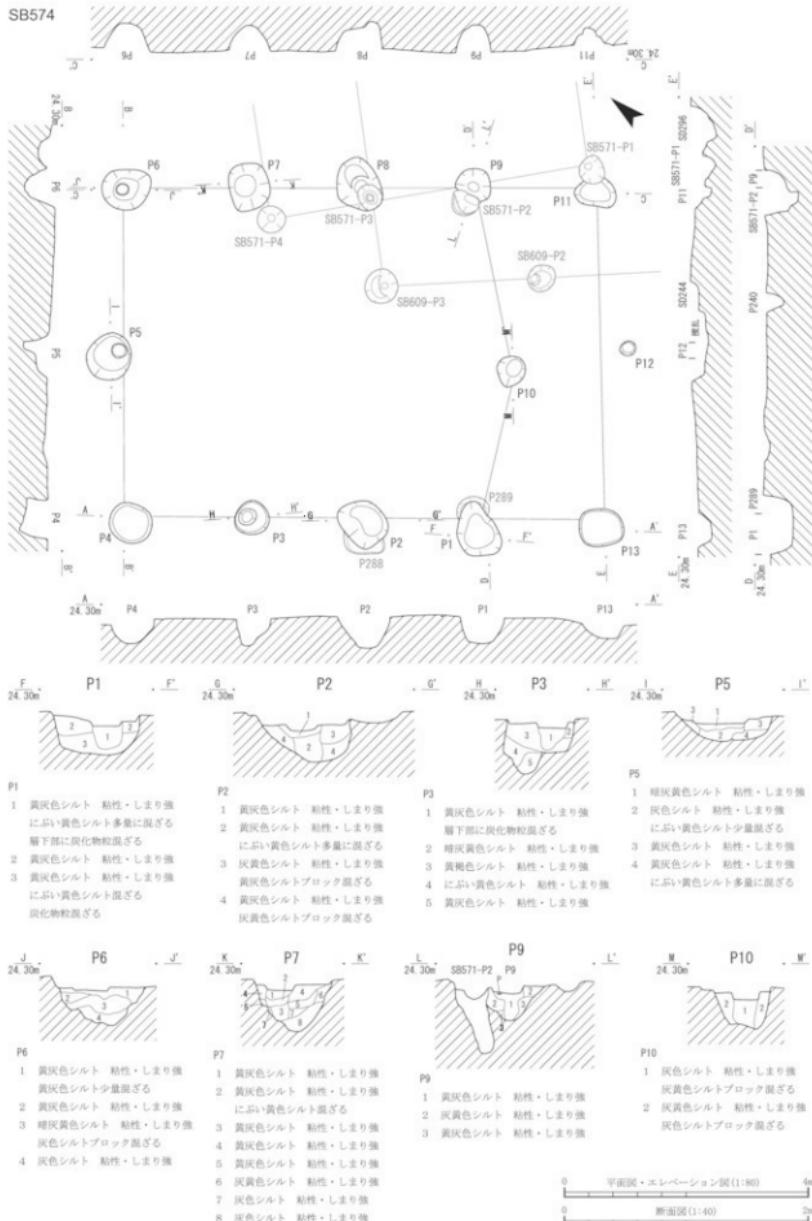
SB550



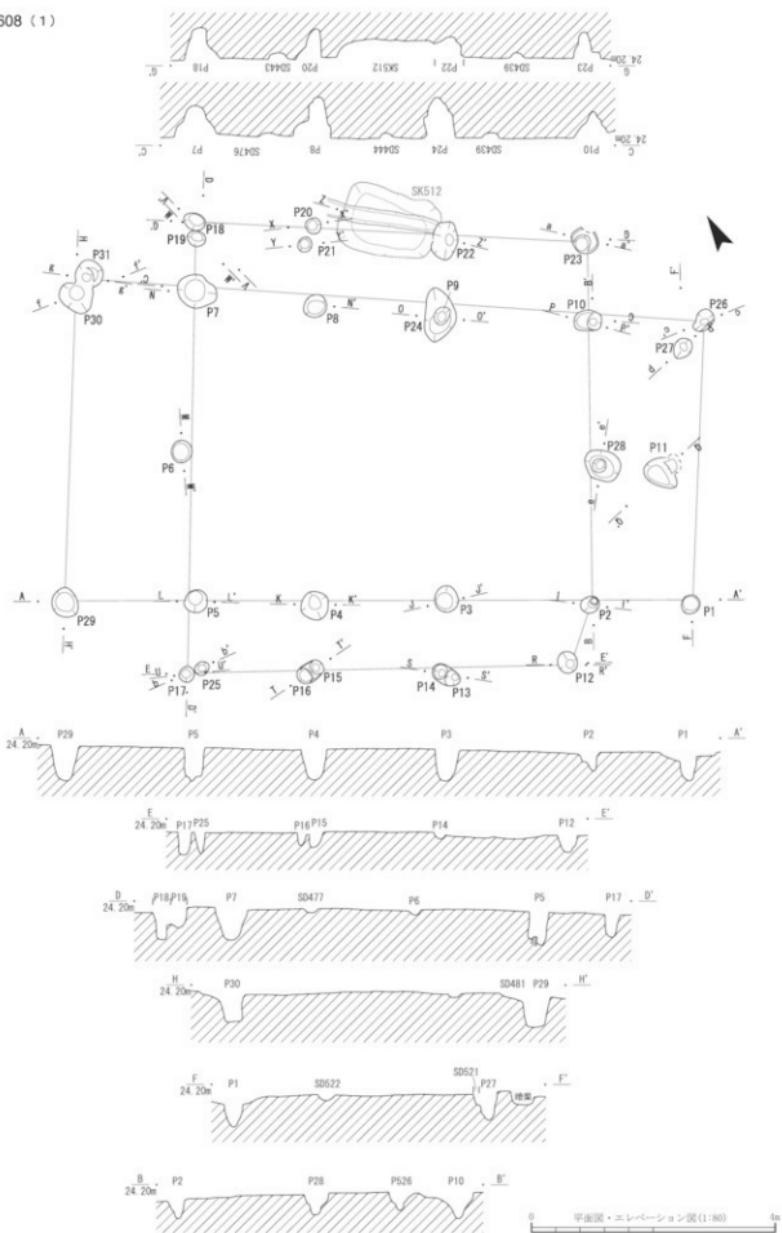
0 平面図・エレベーション図(1:80) 4m  
0 断面図(1:40) 2m

SB571

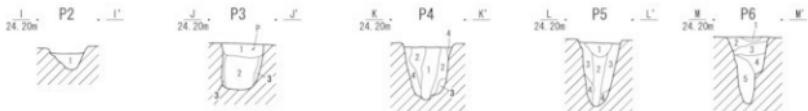




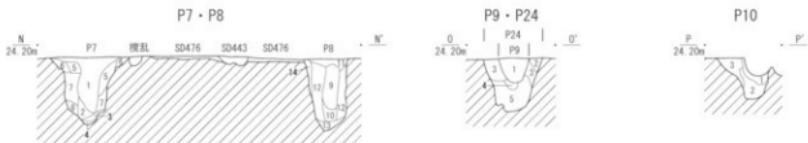
SB608 (1)



## SB608 (2)



P2	P4
1 褐色シルト 粘性・しまり弱 灰黄色シルトブロック混ざる	1 灰色シルト 粘性・しまりやや強 明黄褐色シルトブロック混ざる
2 灰色シルト 粘性・しまりやや強 明黄褐色シルトブロック混ざる	2 灰色シルト 粘性・しまりやや強 明黄褐色シルトブロック混ざる
3 灰色シルト 粘性・しまり強 灰オリーブ色シルトブロック混ざる	3 灰白シルト 粘性・しまりやや強 灰白色シルトブロック混ざる
4 灰色シルト 粘性・しまり強 灰黄色シルトブロック混ざる	4 灰白シルト 粘性・しまり強 明黄褐色シルトブロック混ざる
5 灰色シルト 粘性・しまり強 明黄褐色シルトブロック混ざる	



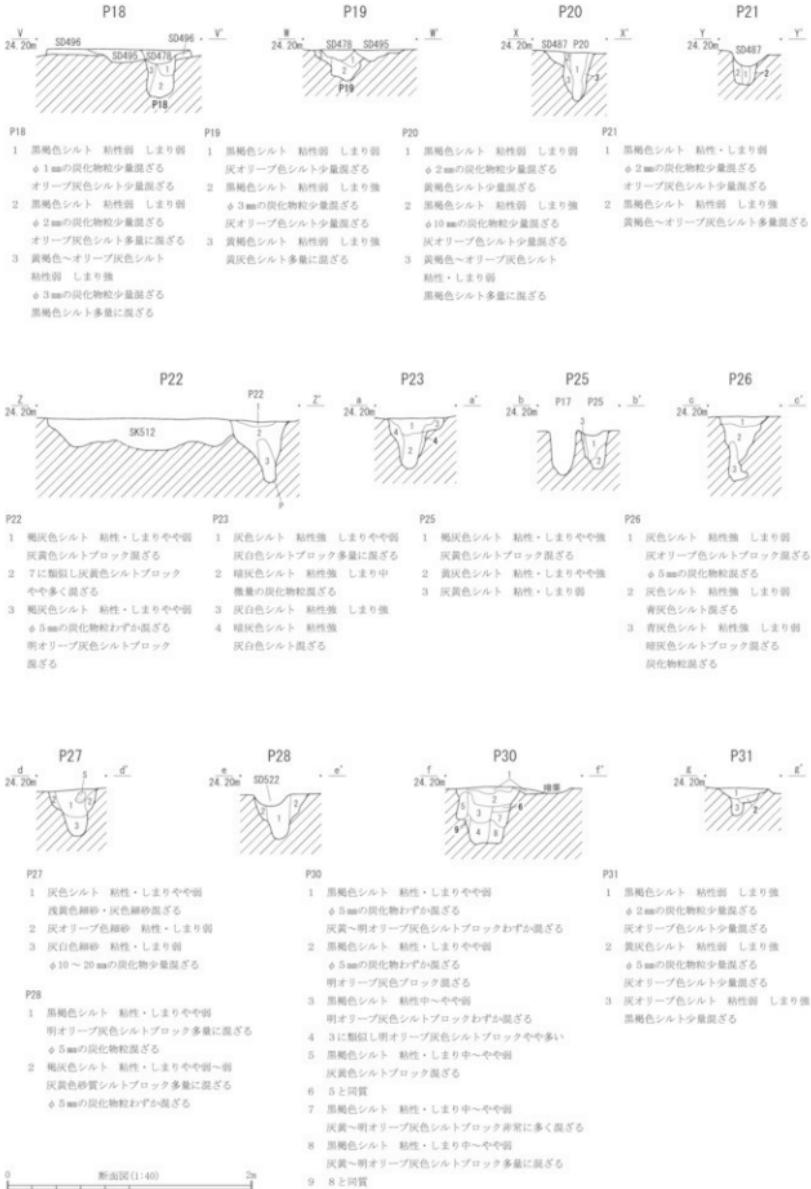
P7	P8	P9	P10
1 黑褐色シルト 粘性弱・しまり強 φ 2 mm の炭化物粒少量混ざる 灰オリーブ色シルト少量混ざる 植物遺体混ざる	9 黑褐色シルト 粘性強・しまり弱 φ 2 mm の炭化物粒少量混ざる 褐鉄鉱多量に混ざる 植物遺体混ざる	1 黑褐色シルト 粘性弱・しまり強 φ 10 mm の炭化物粒多量に混ざる 黄褐色シルト多量に混ざる	1 増灰色シルト 粘性強・しまり弱 2 1に灰白色シルトブロック混ざる 3 浅黄色シルト 粘性強・しまりやや弱
2 黑褐色シルト 粘性弱・しまり強 オリーブ色シルト少量混ざる	10 黑褐色シルト 粘性強・しまり弱	2 黑褐色シルト 粘性弱・しまり強 黑褐色シルト多量に混ざる	
3 オリーブ色シルト 粘性弱・しまり強 オリーブ色シルト少量混ざる	11 黑褐色シルト 粘性弱・しまり強 φ 5 mm の炭化物粒・黄褐色シルト・褐鉄鉱少量混ざる	3 黑褐色シルト 粘性弱・しまり強 φ 5 mm の炭化物粒・黄褐色シルト・褐鉄鉱少量混ざる	
4 黑褐色シルト 粘性弱・しまり弱 オリーブ色シルト少量混ざる	12 黑褐色シルト 粘性弱・しまり強 φ 3 mm の炭化物粒少量混ざる	4 黄褐色シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色シルト少量混ざる	
5 黑褐色シルト 粘性弱・しまり強 φ 3 mm の炭化物粒少量混ざる	13 黑褐色シルト 粘性弱・しまり強 灰オリーブ色シルト少量混ざる	5 黄褐色シルト 粘性弱・しまり強 φ 10 mm の炭化物粒少量混ざる	
6 黄褐色シルト 粘性なし・しまり強 φ 1 mm の炭化物粒少量混ざる	14 黄褐色シルト 粘性弱・しまり強 黑褐色シルト少量混ざる	6 オリーブ色シルト 多量に混ざる	
7 黑褐色シルト 粘性弱・しまり強 φ 1 mm の炭化物粒少量混ざる			
8 オリーブ色シルト 粘性弱・しまり強 φ 2 mm の炭化物粒少量混ざる			



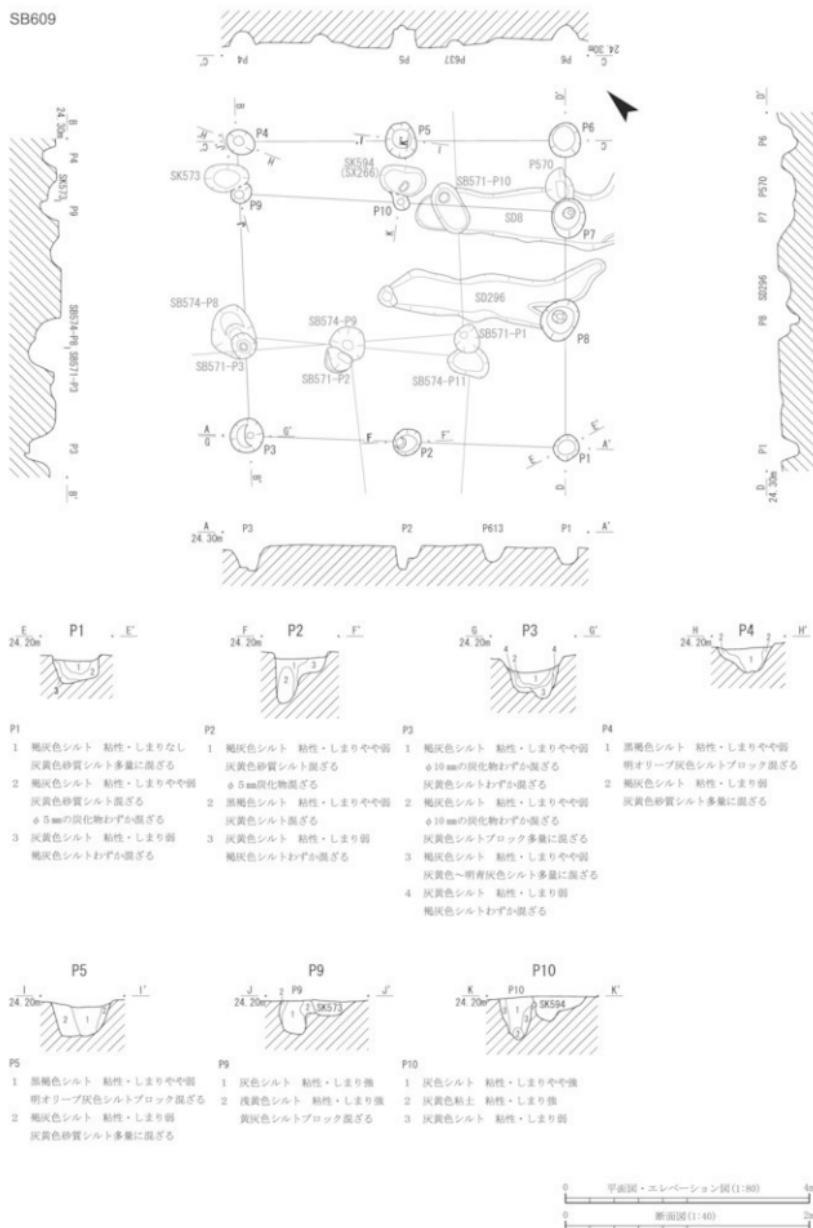
P11	P12	P13 • P14	P15 • P16	P17
1 灰色シルト 粘性・しまりやや強	1 黑褐色シルト 粘性・しまり弱	1 黄褐色シルト 粘性・しまり弱		1 褐色シルト 粘性・しまり弱
2 1に浅黄色細砂混ざる	2 灰黄色シルトブロック混ざる	2 白灰色シルト 粘性・しまりやや強 黄褐色細砂混ざる		2 褐色シルト 粘性・しまり弱
3 1に灰白色細砂混ざる		3 黑シルト 粘性・しまりやや強 黄褐色細砂混ざる		3 2層に灰黄色シルトブロック混ざる
4 灰色シルト 粘性弱 浅黄色細砂混ざる		4 明黄褐色シルト 粘性・しまり弱		1 黑褐色シルト 粘性・しまり弱 灰黄色シルトブロック混ざる
5 灰色細砂		5 層ブロック混ざる		2 褐色シルト 粘性・しまり弱 灰黄色シルトブロック混ざる

断面図 (1:40)  
2m

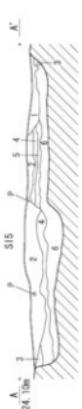
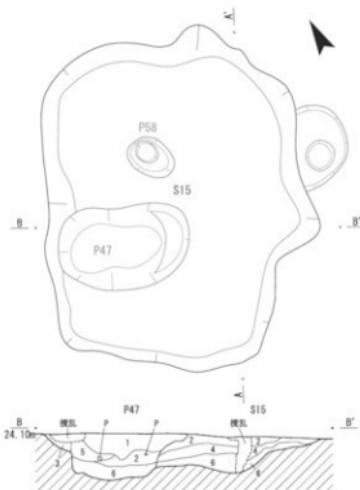
SB608 (3)



SB609



SI5



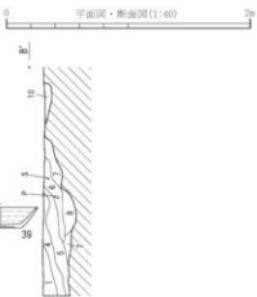
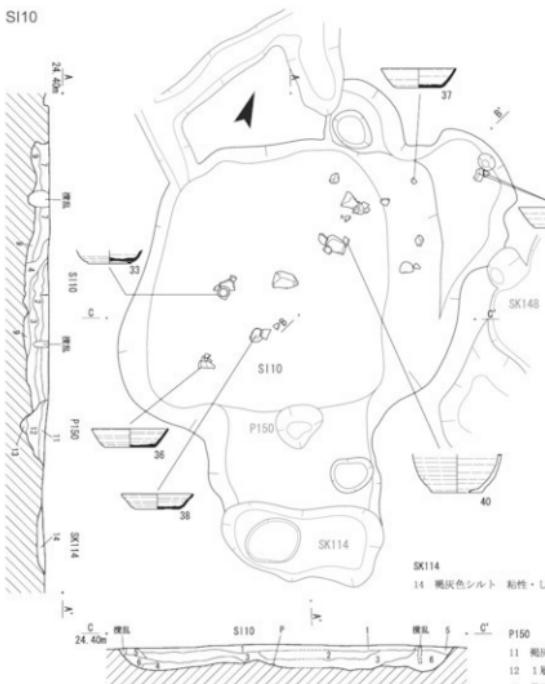
SI5

- 1 黄褐色シルト 粘性・しまり弱  
φ 10 mm の炭化物粒多量に混ざる
- 2 棕褐色シルト 粘性・しまり強  
φ 5 mm の炭化物粒多量に混ざる
- 3 棕褐色シルト 粘性・しまり強  
φ 5 mm の炭化物粒多量に混ざる  
明黄褐色シルトブロック少量に混ざる
- 4 棕褐色シルト 粘性・しまり強  
明黄褐色シルトブロック混ざる
- 5 灰白色粘土 粘性・しまり強  
4層土ブロック混ざる
- 6 明青灰色シルト 粘性・しまり強

P47

- 1 棕褐色シルト 粘性・しまり強  
φ 3 mm の炭化物粒多量に混ざる
- 2 棕褐色シルト 粘性・しまり強  
φ 5 mm の炭化物粒多量に混ざる
- 3 棕褐色シルト 粘性・しまり強  
φ 5 mm の炭化物粒多量に混ざる  
明黄褐色シルトブロック多量に混ざる
- 4 棕褐色シルト 粘性・しまり強  
明黄褐色シルトブロック混ざる
- 5 青灰色シルト 粘性・しまり強
- 6 明青灰色シルト 粘性・しまり強

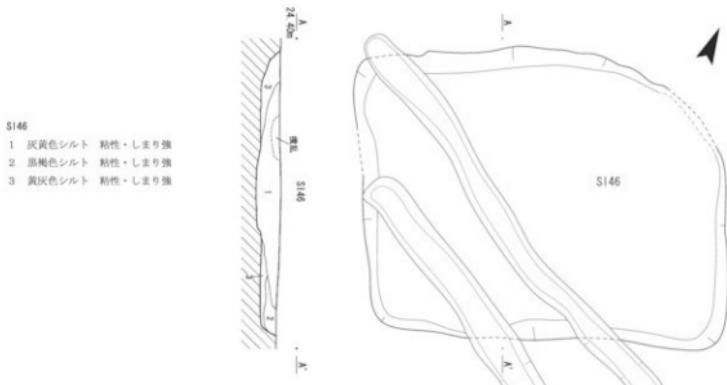
SI10



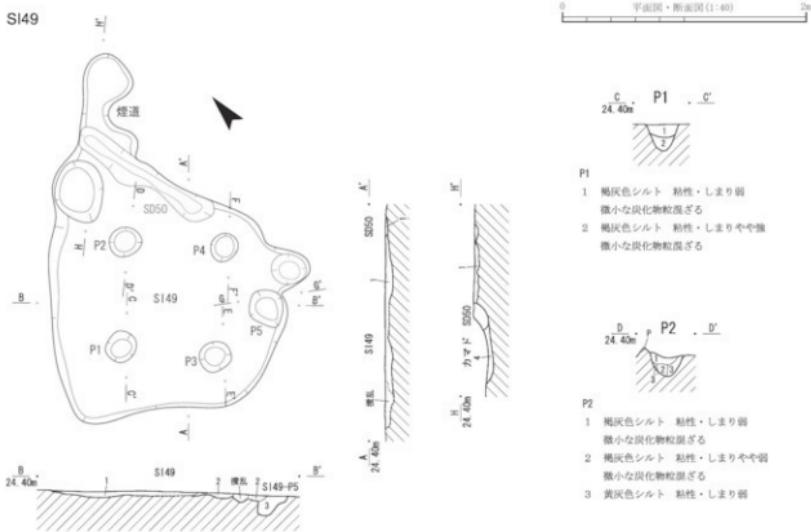
SI10

- 1 棕褐色シルト 粘性・しまり弱  
微小な炭化物粒多量に混ざる
- 2 黄褐色シルト 粘性・しまり弱
- 3 棕褐色シルト 粘性・しまり強  
φ 10 mm の炭化物粒多量に混ざる
- 4 黑褐色灰層 粘性・しまり強
- 5 棕褐色粘土 粘性・しまり強  
棕褐色シルトブロック混ざる
- 6 棕褐色シルト 粘性・しまり強  
φ 10 mm以下の炭化物粒多量に混ざる
- 7 黄褐色シルト 粘性・しまり弱
- 8 黄褐色粘土 粘性・しまり強  
φ 10 mm以下の炭化物粒多量に混ざる  
φ 30 mm の块土ブロック混ざる
- 9 棕褐色シルト 粘性・しまり弱
- 10 棕褐色シルト 粘性・しまり弱  
φ 3 mm の炭化物粒、块土ブロック混ざる
- 11 棕褐色シルト 粘性・しまり弱  
φ 10 mm の炭化物粒混ざる
- 12 1層より炭化物粒多量に混ざる
- 13 黄褐色シルト 粘性・しまり弱  
黄褐色シルトブロック混ざる

SI46



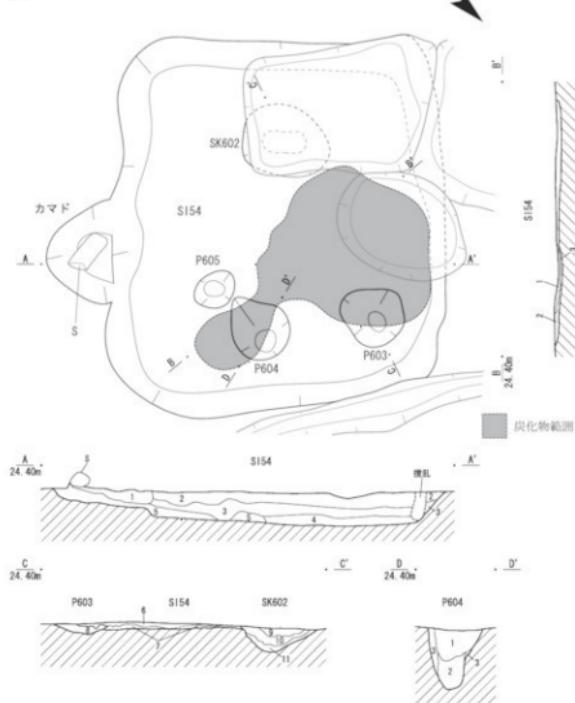
SI49



SI49

- |  |                                |                                |                                |  |   |  |
|--|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--|---|--|
| 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>微小な炭化物粒混ざる                 | 24.40m                         | P3 . E'                        | 24.40m                         | P4 . F'  | 24.40m  | P5 . G'  |
| 2 黄灰色シルト 粘性・しまり弱                               |                                |                                |                                |  |   |  |
| 3 黄灰色シルト 粘性・しまり強                               |                                |                                |                                |  |   |  |
| 4 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>灰黄色シルトブロック混ざる<br>燒土ブロック混ざる |                                |                                |                                |  |   |  |
| P3   | 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>微小な炭化物粒混ざる | 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>微小な炭化物粒混ざる | 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>微小な炭化物粒混ざる | 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>2 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>3 黄灰色シルト 粘性・しまりやや強<br>微小な炭化物粒混ざる | 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>2 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>3 黄灰色シルト 粘性・しまりやや強<br>6 mm の炭化物粒混ざる | 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>2 黄灰色シルト 粘性・しまり弱<br>3 黄灰色シルト ブロック混ざる |

SI54



SI54

- 1 暗灰色シルト 粘性弱 しまり強  
微細な炭化物粒多量に混ざる
- 2 暗灰色シルト 粘性・しまり弱
- 3 暗褐色シルト 粘性・しまり弱  
微細な炭化物粒混ざる
- 4 暗灰色粘土 粘性強 しまり弱  
 $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒多量に混ざる
- 5 暗黄色シルト 粘性・しまり弱
- 6 暗褐色シルト 粘性・しまりやや弱  
 $\phi 30\text{ mm}$ の炭化物粒多量に混ざる  
硬土ブロックわずか混ざる
- 7 明オリーブ~灰黄色シルト  
粘性・しまりやや弱  
暗灰色シルトわずか混ざる
- SI54 内 P603
- 8 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
 $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる

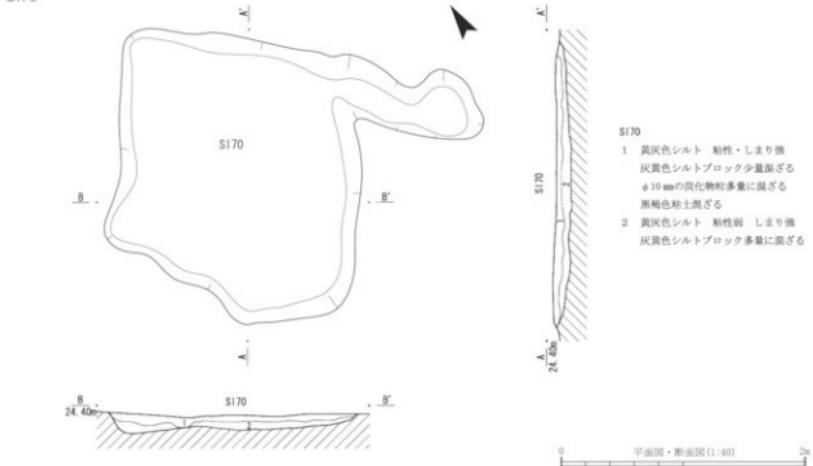
SI54 内 SK602

- 9 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
暗黄色シルト混ざる
- 10 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
黄褐色砂質シルト多量に混ざる
- 11 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
 $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる  
明オリーブ灰色シルト混ざる

SI54 内 P604

- 1 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
 $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒混ざる  
暗黄色砂質シルト混ざる
- 2 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
 $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる  
明オリーブ灰色シルト混ざる
- 3 暗黄色砂質シルト 粘性・しまり弱  
暗灰色シルトわずか混ざる

SI70



SI70

- 1 黄褐色シルト 粘性・しまり強  
灰黄色シルトブロック少量混ざる  
 $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒多量に混ざる  
黒褐色粘土混ざる
- 2 黄褐色シルト 粘性弱 しまり強  
黄褐色シルトブロック多量に混ざる

平面図・断面図(1:40)

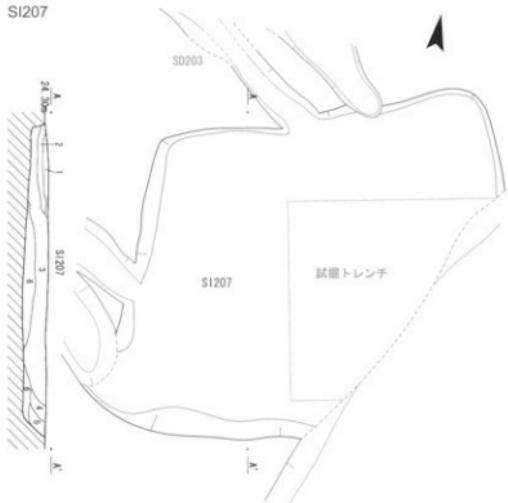
SI130



SI130

- 1 黄灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
灰黄色シルトブロック多量に混ざる  
△ 5mmの炭化物粒わずか混ざる  
2 灰黄色シルト 粘性・しまり弱  
灰灰色シルトわずか混ざる

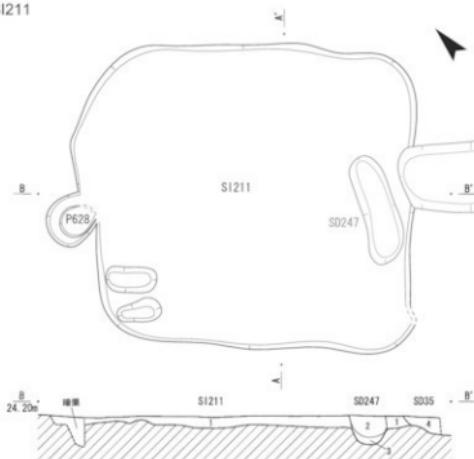
SI207



SI207

- 1 黄灰色シルト 粘性・しまり強  
2 黄灰色シルト 粘性・しまり強  
黑褐色シルト混ざる  
3 黄灰色シルト 粘性・しまり強  
黑褐色シルト混ざる  
4 黄灰色シルト 粘性・しまり強  
黑褐色シルト混ざる  
5 黄灰色シルト 粘性・しまり強  
6 黄灰色シルト 粘性・しまり強  
黄灰色シルトわずか混ざる

SI211



堆積

SI211

- 1 黄灰色シルト 粘性弱 しまり強  
灰黄色シルト・炭化物粒混ざる

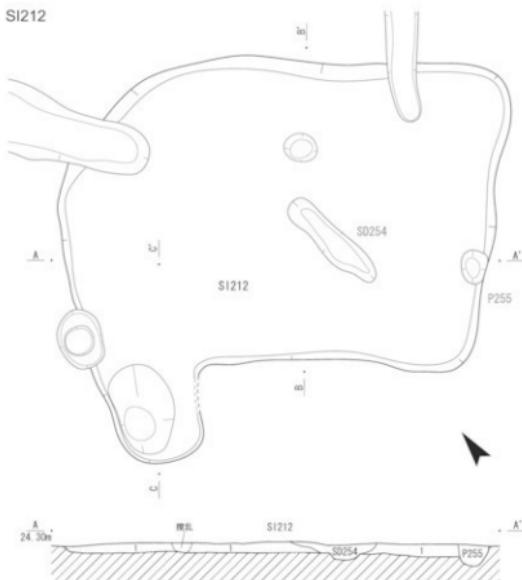
SD247

- 2 黑褐色シルト 粘性・しまり強  
3 黄灰色シルト 粘性・しまり強

SD35

- 4 黄灰色シルト 粘性・しまり強

SI212



SI212  
SD254  
SD212

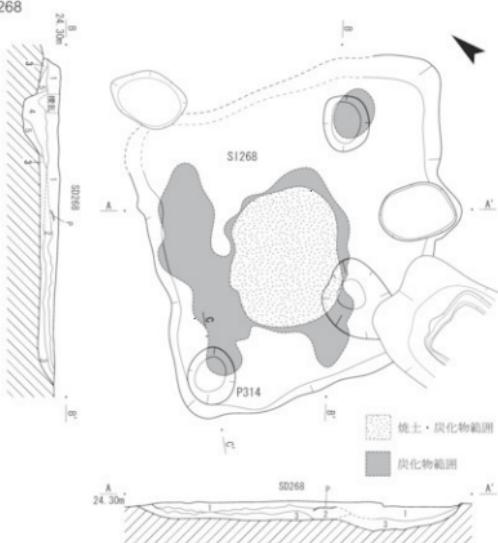
24.30m  
B-B'

## SI212

- 1 灰黄色シルト 粘性・しまり弱  
黄灰色シルト多量に混ざる  
φ 3 mmの炭化物粒少量混ざる
- 2 黄褐色シルト 粘性弱 しまり強  
黒褐色土少量混ざる  
純土ブロック多量に混ざる
- 3 灰褐色シルト 粘性弱 しまり弱  
黄灰色土少量混ざる

SI212  
24.30m  
B-B'

SI268



## SI268

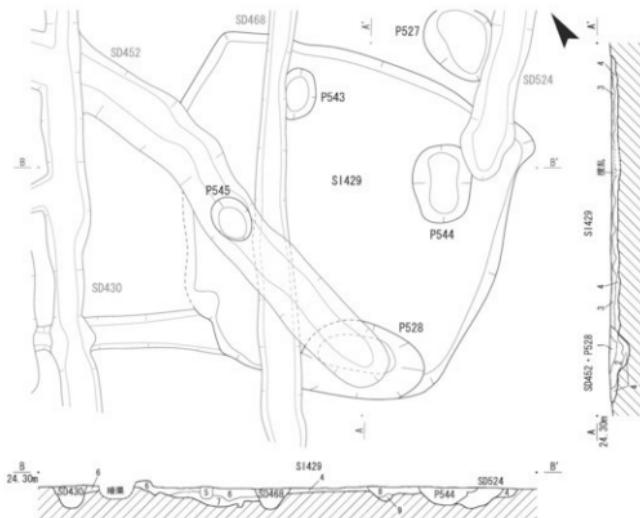
- 1 暗灰色シルト 粘性・しまり弱  
φ 5 mmの炭化物粒わずか混ざる
- 2 暗灰色シルト 粘性・しまり弱  
φ 15 mmの炭化物ブロック多量に混ざる
- 3 暗灰色シルト 粘性・しまり弱  
暗灰色シルトわずか混ざる
- 4 暗灰色シルト 粘性・しまり弱
- 5 暗灰色シルト 粘性・しまり弱  
暗黄色シルト混ざる

24.30m  
P314  
24.30m  
C-C'

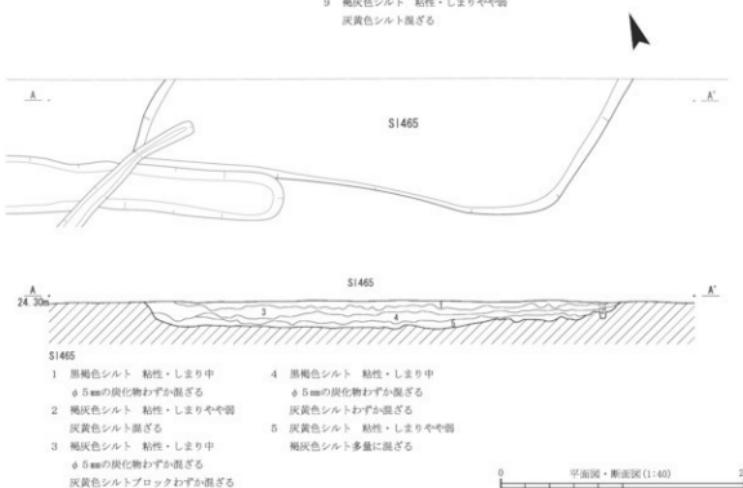
## SI268 内 P314

- 1 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
φ 5 mmの炭化物粒混ざる  
灰黄色土少量混ざる
- 2 暗灰色シルト 粘性・しまり弱  
暗灰色シルトわずか混ざる

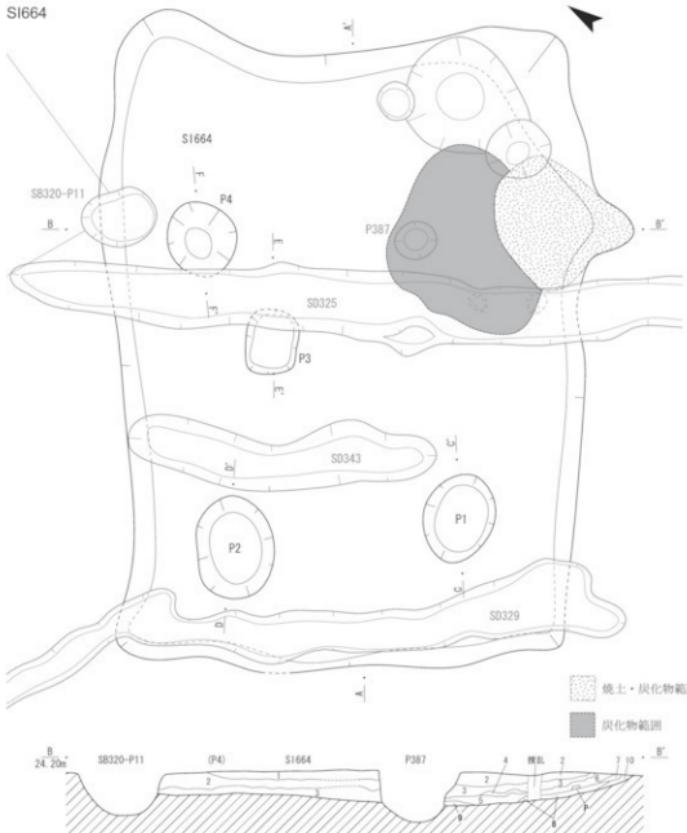
SI429



SI465



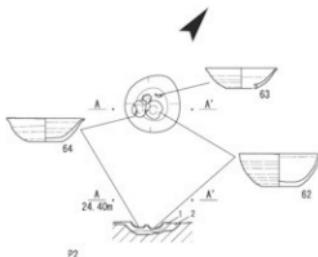
SI664



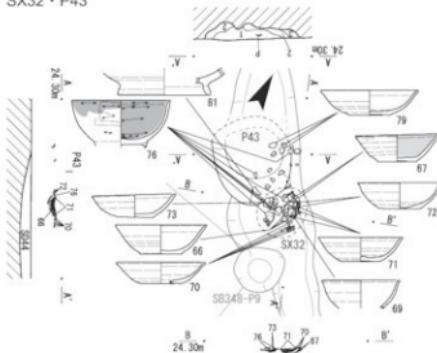
SI664

- 1 暗灰色～灰白色シルト 粘性・しまりやや弱  
灰黄色砂質シルト多量に混ざる
- 2 暗灰色～灰白色シルト 粘性・しまりやや弱  
1層より灰黄色砂質シルト多量に混ざる  
φ 5mm炭化物粒わずか混ざる
- 3 暗灰色～灰白色シルト 粘性・しまりやや弱  
1・2層より更に灰黄色砂質シルト多量
- 4 にがい褐色シルト 粘性・しまりやや弱  
炭化物粒多量に混ざる 地上ブロック多量に混ざる
- 5 黒色シルト 粘性・しまりやや弱  
炭化物粒多量に混ざる 地上ブロック混ざる
- 6 暗褐色シルト 粘性・しまりやや弱  
φ 5mmの炭化物粒わずか混ざる
- 7 黒色～褐灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
地上ブロック多量に混ざる 地上層
- 8 6に類似し炭化物粒・埴土ともに更に多量  
9 暗褐色シルト 粘性・しまりやや強  
炭化物粒混ざる
- 10 灰黄色砂質シルト 粘性・しまり弱  
にがい褐色の埴土ブロックわずか混ざる
- P1, P2 (土層番号は共通)
- 1 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
明青灰色砂質シルト多量に混ざる
- 2 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
1層より明青灰色砂質シルト多量
- 3 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
φ 5mmの炭化物粒多量に混ざる
- 4 青褐色細砂 粘性・しまり弱  
φ 5mm以下の炭化物粒少量混ざる
- 5 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
明青灰色砂質シルト多量に混ざる

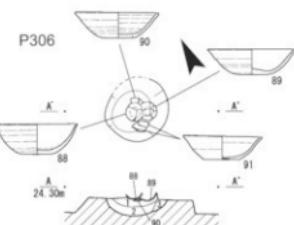
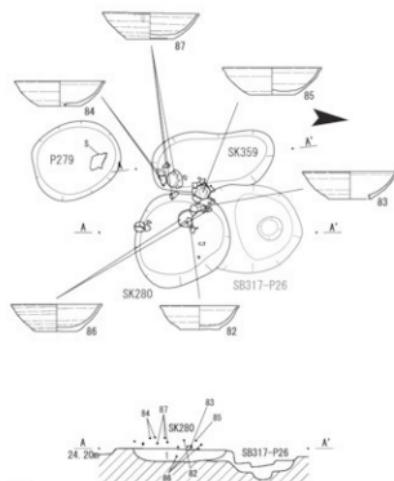
P2



SX32・P43

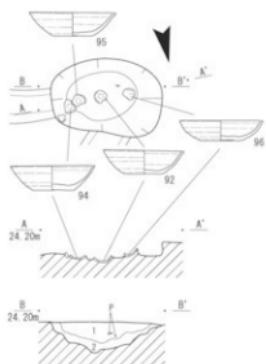


SK280・SK359・P279



P306  
1 黒褐色シルト 粘性強 しまり強  
オリーブ灰褐色土・ $\phi$  2 mm炭化物粒  
少量混ざる  
2 黄褐色シルト 粘性弱 しまり強  
オリーブ灰褐色土多量に混ざる  
3 オリーブ灰褐色シルト 粘性弱 しまり強  
黄褐色土少量混ざる

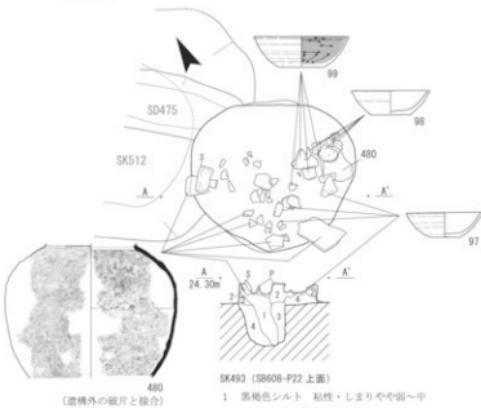
SK492



SK492

- 1 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまり中  
φ 10mmの炭化物混ざる
- 2 明オリーブ灰色シルトわずか混ざる
- 3 褐褐色シルト 粘性やや弱~弱 しまり中  
φ 10mmの炭化物わずか混ざる
- 4 明オリーブ灰色シルト多量に混ざる

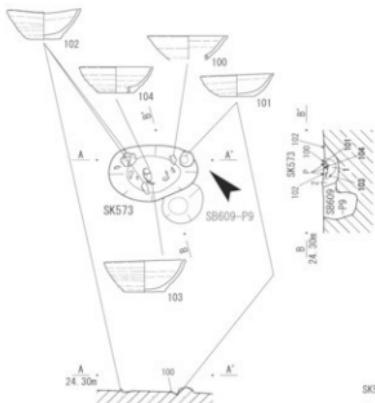
SK493



SK493 (SB609-P22 上面)

- 1 黒褐色シルト 粘性・しまりやや弱~中  
φ 5mmの炭化物わずか混ざる  
明オリーブ灰色シルトわずか混ざる
- 2 黒褐色シルト 粘性・しまりやや弱~中  
φ 5mmの炭化物わずか混ざる  
明オリーブ灰色シルトわずか混ざる
- 3 黒褐色シルト 粘性・しまりやや弱  
灰黄色ブロック多量に混ざる
- 4 灰黄色シルト 粘性・しまりやや弱  
褐灰色シルトわずか混ざる

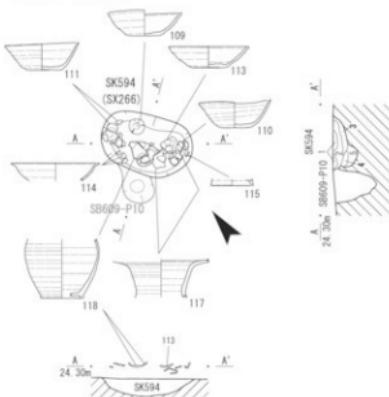
SK573



SK573

- 1 灰色シルト 粘性・しまり強  
黄灰色シルトブロック混ざる
- 2 黄褐色シルト 粘性・しまり強  
黄褐色シルト多量に混ざる

SK594 (SX266)

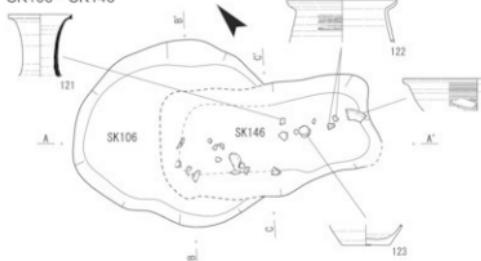


SK594

- 1 灰色シルト 粘性・しまりやや強
- 2 灰色シルト 粘性・しまりやや強  
灰黄色シルトブロック混ざる
- 3 灰白色シルト 粘性・しまり弱  
灰白色シルトブロック混ざる
- 4 灰褐色シルト 粘性・しまり強  
桃土層
- 5 黄灰色シルト 粘性・しまり弱



SK106・SK146



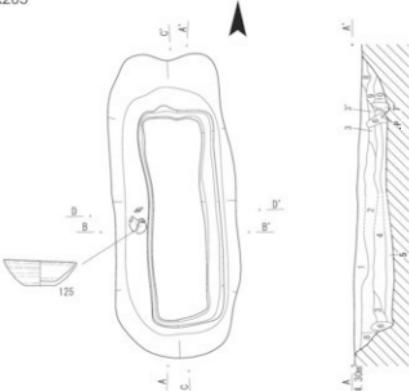
SK106

- 1 灰褐色シルト 粘性・しまり弱
- 2 灰褐色シルト 粘性・しまりやや弱
- 3 にふい黄褐色シルト 粘性・しまりやや弱

SK146

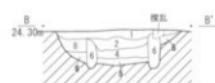
- 4 棕灰色シルト 粘性・しまり強
- 5 にふい赤褐色シルト 粘性・しまり強  
桃土ブロック混ざる
- 6 棕灰黄色シルト 粘性・しまり強  
白色粘土粒混ざる
- 7 灰色シルト 粘性・しまり強
- 8 棕灰色シルト 粘性・しまり強  
炭化物粒多量に混ざる
- 9 黄褐色シルト 粘性・しまり強  
褐灰色シルト多量に混ざる
- 10 棕灰色シルト 粘性・しまり強  
灰色シルトがブロック状に混ざる

SK205

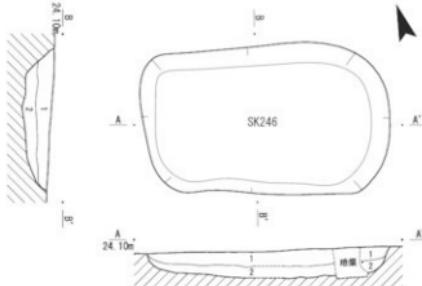


SK205

- 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱
- 2 棕灰色シルト 粘性・しまりやや強
- 3 棕灰色シルト 粘性・しまり弱
- 3' 3層に塑性しやや色調が暗い
- 4 黄灰色シルト 粘性・しまり弱
- 5 棕灰色シルト 粘性強・しまり弱  
微細な炭化物粒多量に混ざる
- 6 棕灰色粘土 粘性・しまり強
- 7 棕灰色シルト 粘性・しまり弱
- 7' 7層に塑性しやや色調が暗い
- 8 黄灰色シルト 粘性強・しまり弱
- 9 黄灰色粘土 粘性・しまり強
- 10 黄灰色シルト 粘性・しまり弱



SK246



SK482

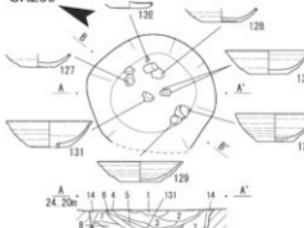
- 1 黑褐色シルト 粘性・しまり強  
 $\phi$  3 mm炭化物粒少量混ざる  
灰オリーブ色シルト少量混ざる  
2 黑褐色シルト 粘性弱 しまり強  
 $\phi$  5 mm炭化物粒少量混ざる  
灰オリーブ色シルト多量混ざる  
3 灰オリーブ色シルト 粘性弱 しまり強  
黄灰色シルト少量混ざる

平面図・断面図(1:40)

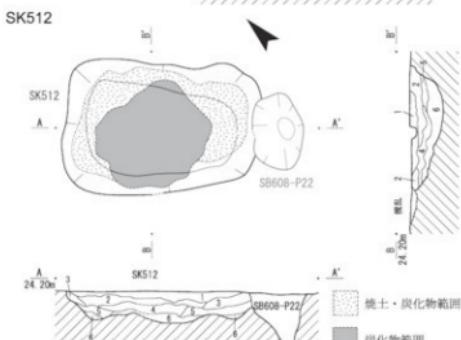
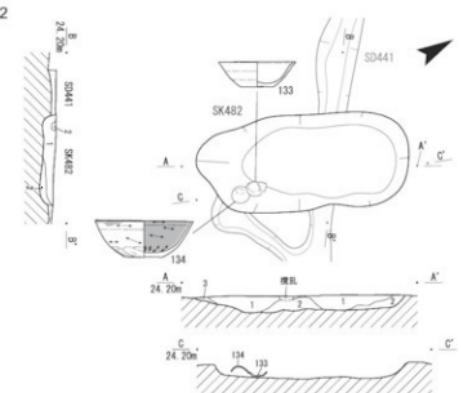
SK260

- 1 黄灰色シルト 粘性弱 しまり弱  
燒土ブロック  $\phi$  10 mmの炭化物粒・灰白色土少量混ざる  
2 黄灰色シルト 粘性強 しまり弱  
 $\phi$  5 mmの炭化物粒多量に混ざる 灰白色土少量混ざる  
3 黄褐色シルト 粘性弱 しまり強  
黒色土・ $\phi$  3 mmの炭化物粒少量混ざる 燃土層  
4 黄色シルト 粘性強 しまり弱  
 $\phi$  2 mmの焼土ブロック少量混ざる 纖維状炭化物粒  
多量に混ざる 灰白色土少量混ざる  
5 黄色シルト 粘性弱 しまり弱 焼土ブロック・灰白色  
土多量に混ざる  $\phi$  3 mmの炭化物粒少量混ざる 燃土層  
6 黑色シルト 粘性強 しまり弱 燃土少量混ざる  
 $\phi$  1.5 mmの炭化物粒多量に混ざる  
7 黑色シルト 粘性強 しまり弱 オリーブ灰色土多量に  
混ざる  $\phi$  3 mmの炭化物粒少量混ざる  
8 黄色シルト 粘性強 しまり弱  $\phi$  10 mmの炭化物粒・  
焼土層  
9 黄色シルト 粘性強 しまり弱 燃土ブロック少量混ざる  
 $\phi$  20 mmの炭化物粒多量に混ざる  
10 黑色シルト 粘性強 しまり弱  
オリーブ灰色土多量に混ざる  $\phi$  3 mmの炭化物粒少量混ざる  
11 オリーブ灰色シルト 粘性弱 しまり強  
黒褐色土多量に混ざる  $\phi$  5 mmの炭化物粒少量混ざる  
12 黑色シルト 粘性強 しまり弱 オリーブ灰色土多量に混ざる  
13 黄色シルト 粘性弱 しまり強 オリーブ灰色土多量に混ざる  
14 オリーブ灰色シルト 粘性弱 しまり強 黑色土少量混ざる

SK260

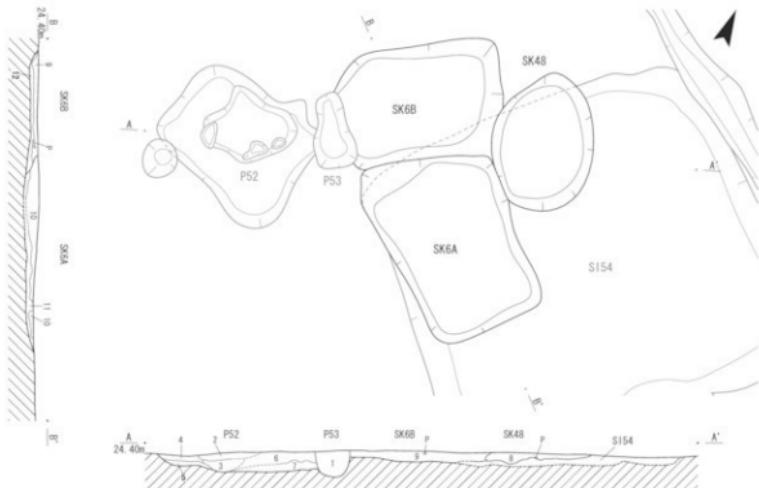


SK512



- 1 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  $\phi$  5 mmの炭化物粒わずか 灰黄色シルトブロック多量に混ざる  
2 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱  $\phi$  5 mmの炭化物粒わずか 灰黄色シルトブロック多量 背片わずか  
3 暗黄色シルト 粘性・しまりやや弱  $\phi$  5 mmの炭化物粒わずか混ざる  
4 黑色シルト 粘性・しまりやや弱  $\phi$  5 mmの炭化物粒特に多量に含む 纤維状骨片混ざる  
5 暗黄色シルト 粘性・しまりやや弱  $\phi$  5 mmの炭化物粒わずか混ざる 灰黄色シルト・微細な骨片混ざる  
6 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱 灰黄色シルトブロック多量に混ざる

## SK6A・SK6B・SK48



## P53

1 細灰色粘土 粘性・しまり強

## P52

2 細灰色粘土 粘性・しまり強

3 細灰色粘土 粘性・しまりやや強 灰オリーブ色シルトわずか混ざる

4 黄灰色粘土 粘性・しまりやや強 灰オリーブ色シルト多量に混ざる

5 灰黄色シルト 粘性・しまり弱 灰白色粘土混ざる

6 細灰色粘土 粘性・しまり強 灰オリーブ色シルトブロックわずか混ざる

7 細灰色粘土 粘性・しまり強 灰オリーブ色シルトブロック多量に混ざる

## SK48

8 細灰色粘土 粘性強  $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒混ざる

## SK6A

10 細灰色シルト 粘性・しまり強  $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒混ざる

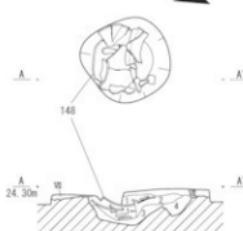
11 灰黄色シルト 粘性・しまり弱 10層土ブロック混ざる

## SK6B

9 黄灰色シルト 粘性・しまりやや強 微細な炭化物粒混ざる

12 灰白色シルト 粘性・しまり強

## SK42



## SK42

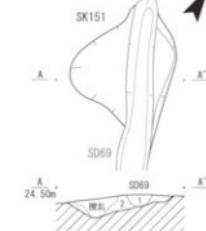
1 灰黄褐色粘土 粘性・しまりやや弱

2 細灰色シルト 粘性・しまりやや弱

3 細灰色シルト 粘性・しまりやや弱 黒色土ブロック混ざる

4 黄灰色シルト 粘性・しまりやや弱 黑色土ブロック混ざる

## SK151



## SD69

1 細灰色シルト 粘性・しまり弱

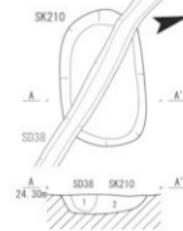
灰色シルトブロック多量に混ざる

## SK151

2 黄灰色シルト 粘性・しまり弱

灰色シルト多量に混ざる

## SK210



## SD38

1 黑褐色シルト 粘性・しまり弱

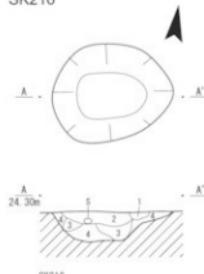
灰黄色シルトブロック多量に混ざる

## SK210

2 細灰色シルト 粘性・しまり弱

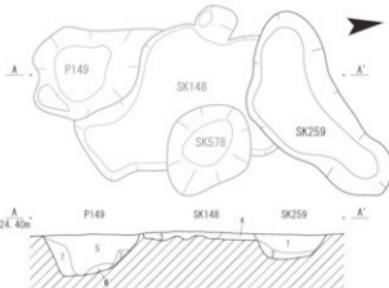
灰黄色シルト多量に混ざる

SK216



- 1 黒褐色シルト 粘性・しまり強  
黒色シルト混ざる
- 2 黒褐色シルト 粘性・しまり強
- 3 黒褐色シルト 粘性・しまり強  
黄褐色シルトブロック混ざる
- 4 黄灰色シルト 粘性・しまりやや弱  
灰黄色シルト多量に混ざる

SK259

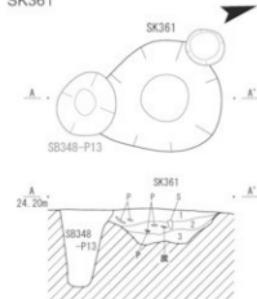


- P149
- 1 黒褐色シルト 粘性強・しまり弱  
 $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒多量に混ざる
- 2 黄褐色シルト 粘性・しまり弱  
 $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒混ざる
- 3 黄灰色シルト 粘性・しまり弱
- 4 黄褐色シルト 粘性・しまり弱  
 $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒混ざる

- SK259
- 1 黒褐色シルト 粘性強・しまり弱  
 $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒混ざる
- 2 黄褐色シルト 粘性・しまり弱

- SK148
- 3 黑褐色シルト 粘性・しまり弱  
礁上土プロック・ $\phi 30\text{ mm}$ の炭化物粒混ざる
- 4 黄褐色シルト 粘性・しまり弱

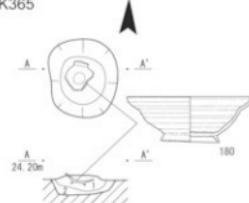
SK361



SK361

- 1 黑褐色シルト 粘性・しまりやや弱  
灰黄色シルトブロックわずか混ざる  
 $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒混ざる
- 2 黑褐色シルト 粘性・しまりやや弱  
明オリーブ灰色シルトわずか混ざる  
炭化木あり
- 3 黄褐色シルト 粘性・しまりやや弱  
灰黄色シルトブロック混ざる

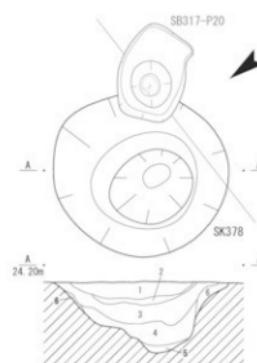
SK365



SK365

- 1 黑褐色シルト 粘性・しまりやや弱
- 2 明オリーブ灰色シルト 粘性・しまり弱  
褐灰色シルトわずか混ざる

SK378



SK378

- 1 黑褐色シルト 粘性・しまり強  
黄褐色砂少量混ざる  
 $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒多量に混ざる
- 2 黄褐色砂 粘性なし・しまり強  
黑褐色シルト多量に混ざる
- 3 黑褐色シルト 粘性強・しまり弱  
オーブグレー色シルト少量混ざる  
 $\phi 7\text{ mm}$ の炭化物粒多量に混ざる
- 4 黑褐色シルト 粘性強・しまり弱  
オーブグレー色シルト多量に混ざる  
 $\phi 7\text{ mm}$ の炭化物粒少量混ざる
- 5 オーブグレー色シルト 粘性強・しまり弱  
黑褐色シルト少量混ざる

SK396

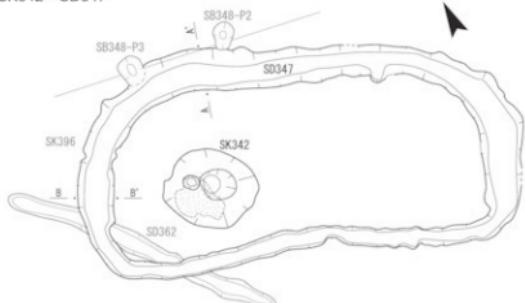


SK396

- 1 黑褐色シルト 粘性・しまりやや弱  
明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる  
 $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる

0 平面図・断面図(1:40) 2m

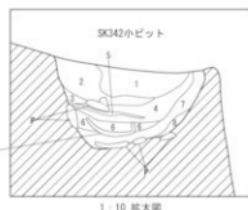
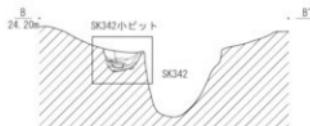
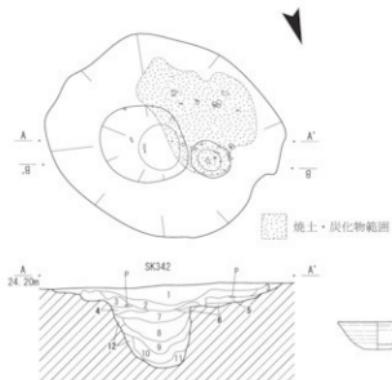
SK342・SD347



SD347(土層番号は共通)

- 1 黒褐色シルト 粘性・しまり強  
黄褐色シルトブロック混ざる
- 2 黄褐色シルト 粘性・しまり強  
1 層土ブロック混ざる

SK342



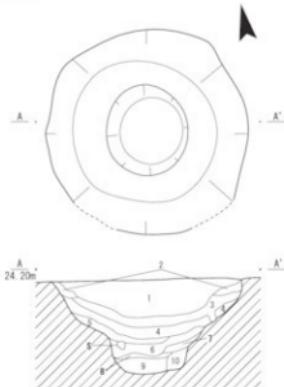
SK342

- 1 黒色シルト 粘性・しまり強 岩層
- 2 黑褐色シルト 粘性・しまり強 φ 1~3 mmの炭化物粒多量混ざる 岩層
- 3 灰黄色シルト 粘性・しまり弱 φ 10 mmの炭化物粒多量混ざる
- 4 黑褐色シルト 粘性・しまり強 φ 10 mmの他土ブロック・炭化物粒混ざる
- 5 浅黃褐色シルト 粘性弱・しまり強 施土層
- 6 灰白色シルト 粘性弱・しまり強 運元化施土層
- 7 灰褐色シルト 粘性・しまり極めて強  
灰白色シルト・灰褐色シルトブロック・φ 5 mmの炭化物粒多量に混ざる
- 8 黑色シルト 粘性・しまり弱 灰白色土 (R) 混ざる 岩・灰層
- 9 灰色シルト 粘性・しまり非常に強 灰白シルト・微細な炭化物粒多量に混ざる
- 10 黑褐色シルト 粘性・しまり非常に強 灰白シルトブロック・微細な炭化物粒混ざる
- 11 黑褐色シルト 粘性・しまり強 灰白色シルトブロック混ざる
- 12 灰白色シルト 粘性・しまり弱

SK342 小ビット

- 1 黑褐色シルト 粘性・しまり強 岩層
- 2 灰色シルト 粘性弱・しまり強 施土層
- 3 灰白シルト 粘性弱・しまり強
- 4 黑褐色シルト 粘性・しまり強 岩層
- 5 2層と同質 施土層
- 6 1層と同質 岩層
- 7 4層に類似し施土ブロック多量に混ざる 岩・施土層
- 8 2層と同質 施土層

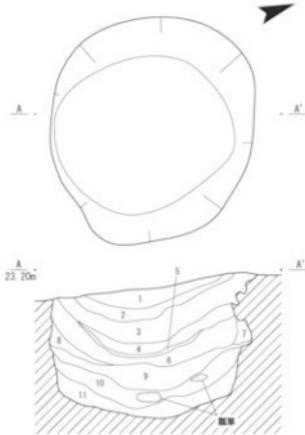
SE403



SE403

- 1 黒色粘土 粘性・しまり中へやや強 明オリーブ灰色ブロックわずか混ざる 植物遺体多量に混ざる
- 2 黒色粘土 粘性・しまり中 灰黄色シルトブロック多量に混ざる  $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる
- 3 黒色～基褐色粘土 粘性・しまり中へやや弱 明オリーブ灰色ブロック混ざる 植物遺体多量に混ざる
- 4 褐灰色粘土 粘性・しまり中 明オリーブ灰色ブロック多量に混ざる  $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる
- 5 明オリーブ灰色シルト 粘性・しまり中へやや弱 明オリーブ灰色砂質シルトが五層に堆積 細粒色シルト混ざる 植物遺体混ざる
- 6 褐灰色シルト 粘性・しまり中へやや弱 明オリーブ灰色シルトが五層に堆積
- 7 明オリーブ灰色シルト 粘性・しまり中へやや弱 灰色シルトが互層に堆積
- 8 黑褐色シルト 粘性・しまり中へやや弱 明オリーブ灰色シルトブロック混ざる 植物遺体多量に混ざる
- 9 褐灰色シルト 粘性・しまりやや弱 明オリーブ灰色ブロック多量に混ざる
- 10 褐灰色シルト 粘性・しまりやや弱 明オリーブ灰色ブロック多量に混ざる  $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒混ざる 9層より砂質

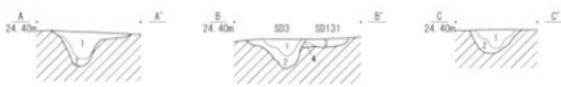
SE677



SE677

- 1 黒褐色～黒色粘土 粘性・しまり中
- 2 黒色粘土 粘性・しまり中  $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる
- 3 黒色粘土 粘性・しまり中  $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる
- 4 褐色～灰褐色粘土 粘性・しまり中  $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる 明オリーブ灰色粘土と植物遺体が互層に堆積
- 5 明オリーブ灰色粘土 粘性・しまり中 灰色土混ざる
- 6 4に類似しやや色調明るい
- 7 明オリーブ灰色粘土 粘性・しまり中 灰色土ブロック混ざる
- 8 褐色粘土 粘性・しまり中 明オリーブ灰色土混ざる
- 9 褐色～灰褐色シルト 粘性・しまり中へやや弱  $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる
- 10 明オリーブ灰色シルト 粘性・しまり中へやや弱 明オリーブ灰色シルトと植物遺体が互層に堆積
- 11 灰色～灰褐色シルト 粘性・しまりやや弱 明オリーブ灰色砂質シルト多量に混ざる  $\phi 10\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる

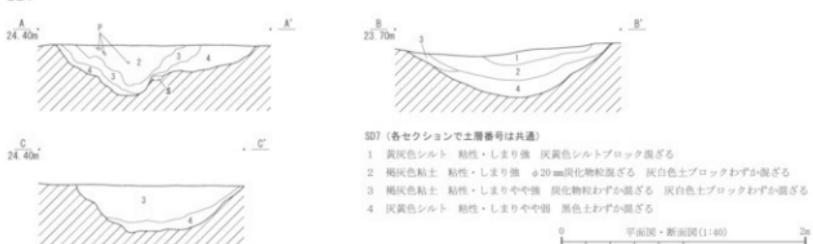
SD3



SD3 (各セクションで土層番号は共通)

- 1 灰色粘土 粘性・しまり強  $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる
- 2 明オリーブ灰色粘土 粘性・しまり強 1層土混ざる
- 3 褐灰色シルト 粘性・しまり弱 明オリーブ灰色シルト混ざる
- 4 明オリーブ灰色シルト 粘性・しまり弱 灰色土わずか混ざる

SD7



SD7 (各セクションで土層番号は共通)

- 1 黄灰色シルト 粘性・しまり強 灰黄色シルトブロック混ざる
- 2 褐灰色粘土 粘性・しまり強  $\phi 20\text{ mm}$ 炭化物粒混ざる 灰白色土ブロックわずか混ざる
- 3 褐灰色粘土 粘性・しまりやや弱 炭化物粒わずか混ざる 灰白色土ブロックわずか混ざる
- 4 国黄色シルト 粘性・しまりやや弱 黑色土わずか混ざる

SD8



SD8

- 1 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱 明オリーブ灰色シルト  
ブロック多量に混ざる  $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物わずか混ざる
- 2 明オリーブ灰色シルト 粘性・しまり弱 暗灰色シルトわずか混ざる

SD97



SD97

- 1 暗灰色粘土 粘性・しまりやや強  
 $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物わずか混ざる
- 2 暗黄色シルト 粘性・しまりやや弱  
灰色土わずか混ざる

SD153



SD153

- 1 黄灰色シルト 粘性弱・しまり強  $\phi 2\text{ mm}$ の炭化物粒少量混ざる
- 2 暗黄色シルト 粘性・しまり弱 黄灰色土少量混ざる

SD267



SD267

- 1 暗灰色シルト 粘性・しまり弱  $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物わずか混ざる
- 2 暗黄色シルト 粘性・しまり弱 暗灰色シルトわずか混ざる



SD153

- 1 黒褐色シルト 粘性・しまり強 灰黒色シルトブロック混ざる
- 2 黄灰色シルト 粘性・しまり強 黑褐色土ブロック混ざる



SD267

- 1 暗灰色シルト 粘性・しまり弱  $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物わずか混ざる
- 2 暗黄色シルト 粘性・しまり弱 暗灰色シルトわずか混ざる



SD153

- 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱 明オリーブ色土混ざる  
 $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒多量に混ざる

SD7

- 2 黄灰色シルト 粘性・しまり弱 暗オリーブ色土多量に混ざる  
 $\phi 2\text{ mm}$ の炭化物粒少量混ざる

SD273



SD273

- 1 暗灰色シルト 粘性・しまり弱  $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物わずか混ざる
- 2 暗黄色シルト 粘性・しまり弱 暗灰色シルトわずか混ざる

SD481・SD491・SX494



SD491

- 1 黒褐色シルト 粘性弱 しまり強 暗オリーブ色シルト少量混ざる

SD481

- 2 黑褐色シルト 粘性弱 しまり強
- 3 黄灰色シルト 粘性弱 しまり強
- 4 黄灰色シルト 粘性弱 しまり強 暗オリーブ色シルト少量混ざる

SX494

- 5 黄灰色シルト 粘性弱 しまり強  $\phi 2\text{ mm}$ の炭化物粒少量混ざる  
暗オリーブ色シルト少量混ざる
- 6 黄灰色シルト 粘性弱 しまり強
- 7 黄灰色シルト 粘性弱 しまり強

SD302



SD302

- 1 暗灰色シルト 粘性・しまりやや弱 明オリーブ灰色シルトブロック  
多量に混ざる  $\phi 5\text{ mm}$ の炭化物粒わずか混ざる
- 2 明オリーブ灰色シルト 粘性・しまり弱 暗灰色シルトわずか混ざる

SD480

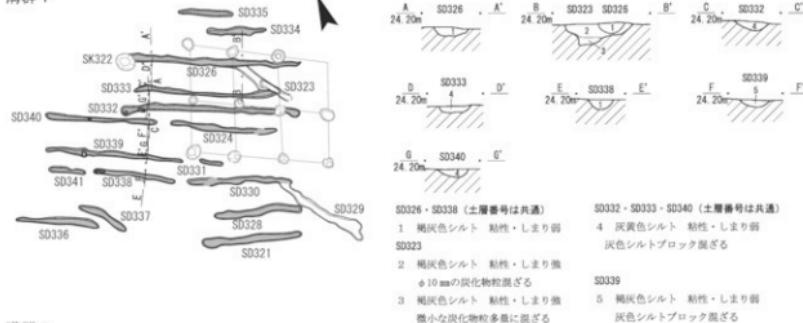


SD480

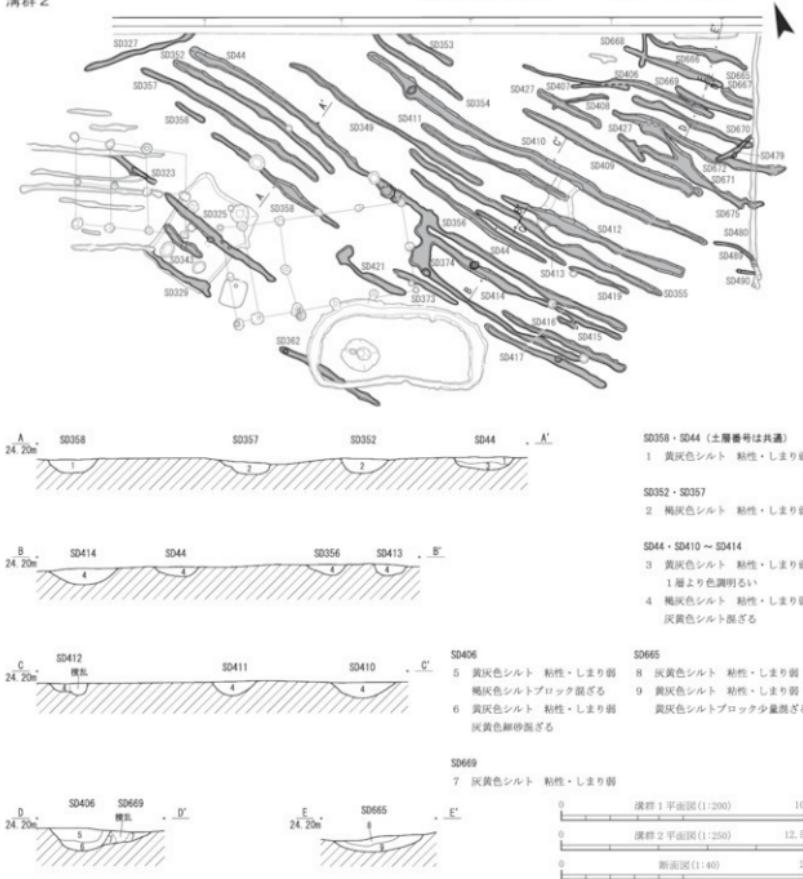
- 1 黄灰色シルト 粘性・しまり弱 黄褐色砂多量に混ざる



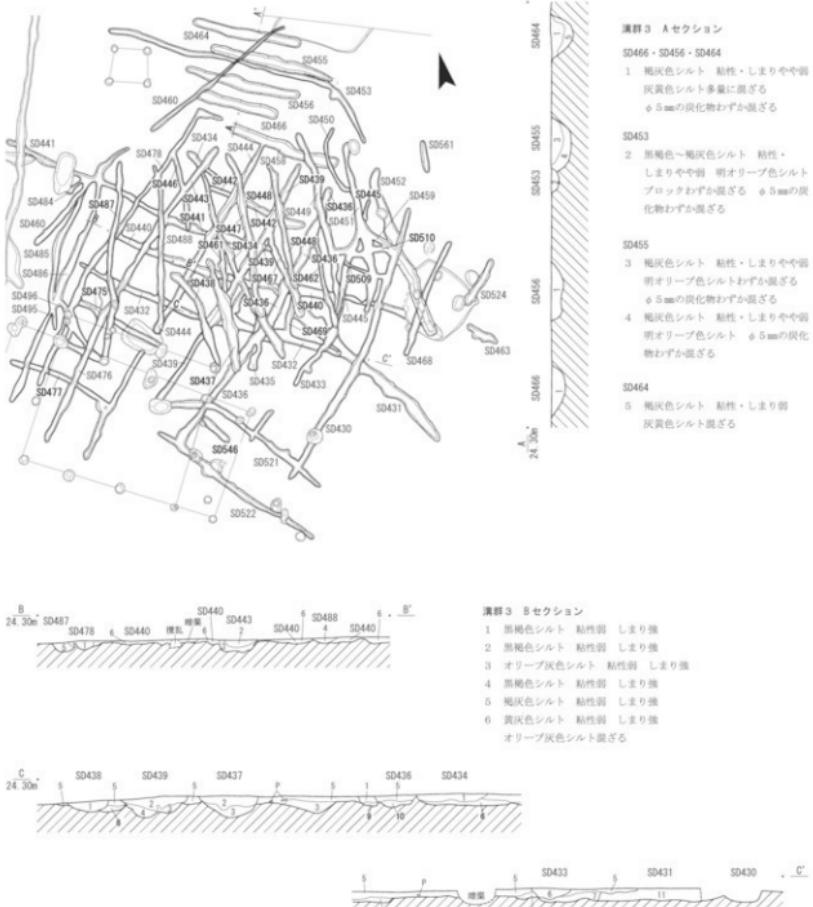
## 溝群 1



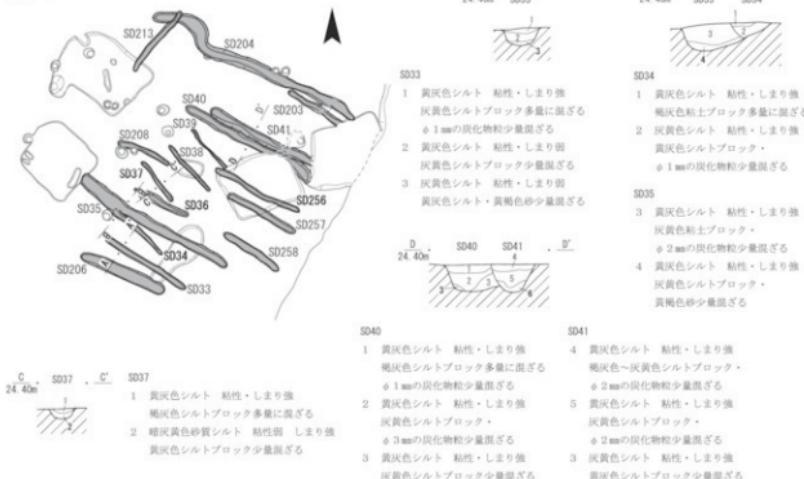
## 溝群 2



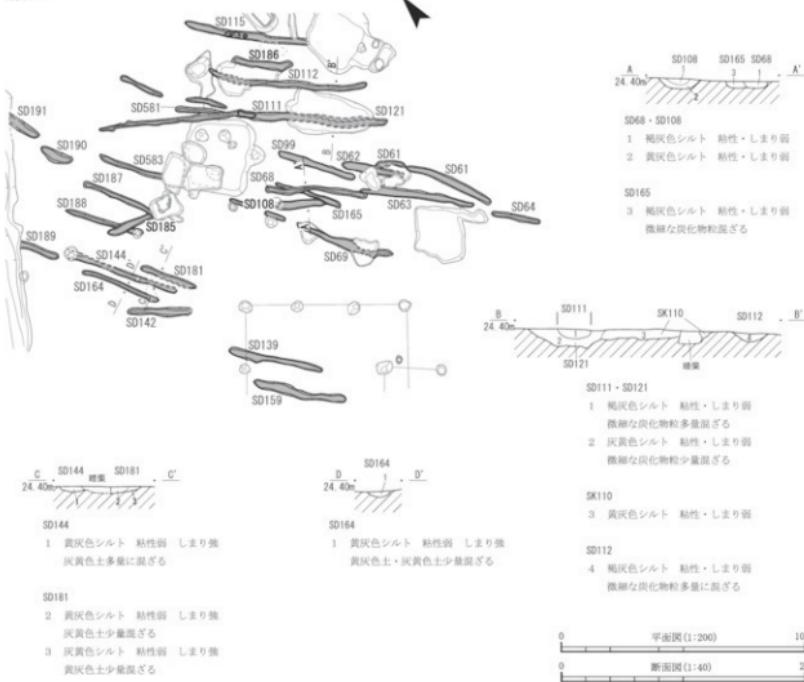
溝群 3



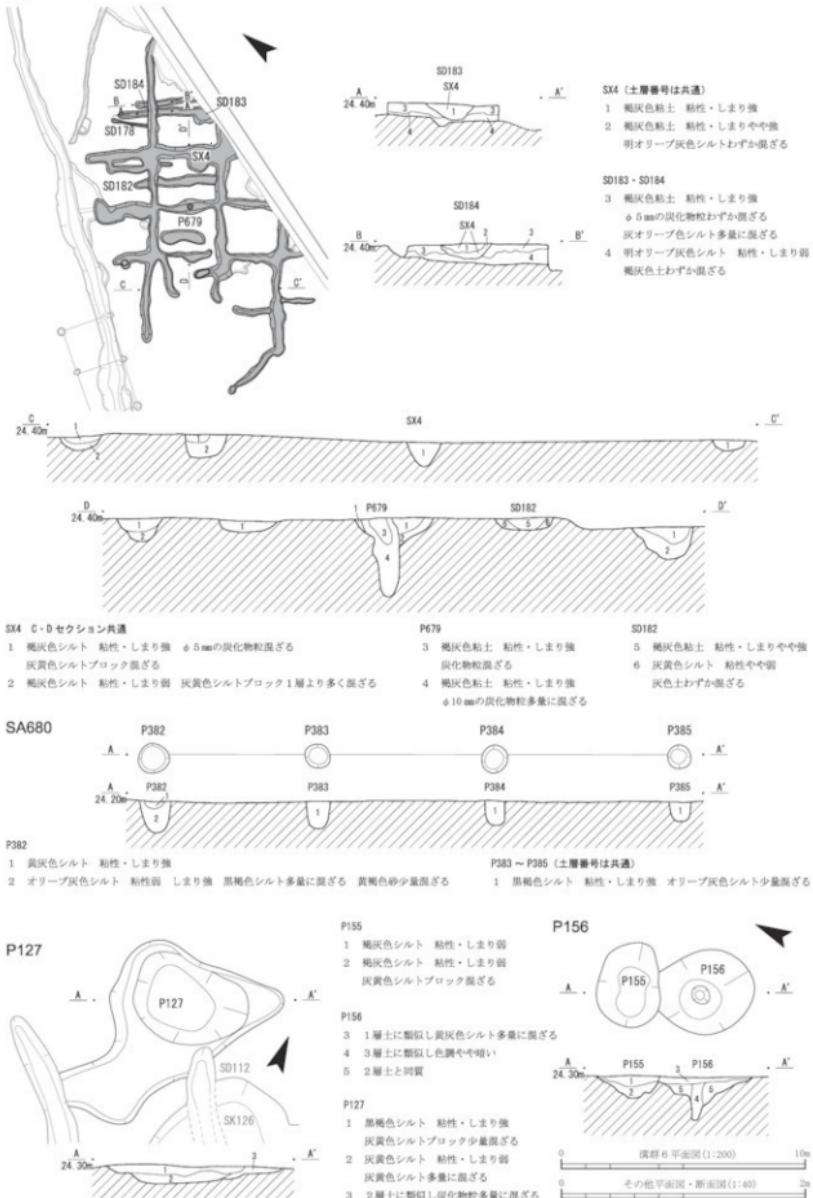
溝群 4



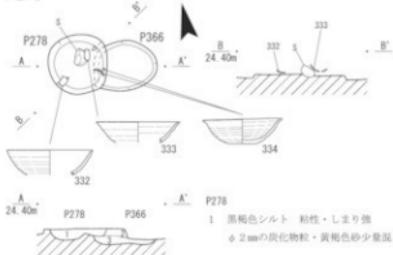
溝群 5



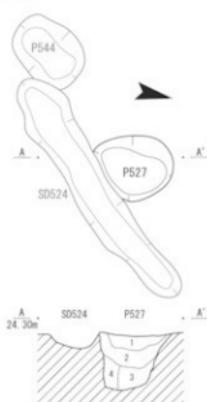
## 溝群6



P278



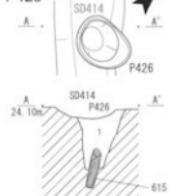
P527



P527

- 1 黒褐色シルト 粘性・しまり弱  
φ 2mmの炭化物粒・黄褐色砂少量混ざる
- 2 黄褐色シルト 粘性弱 しまり強  
黄褐色砂多量に混ざる
- 3 黄褐色砂 粘性なし しまり強  
黄褐色砂少量混ざる
- 4 黑褐色シルト 粘性・しまり  
やや弱 φ 10mmの炭化物粒わずか混ざる 黄褐色シルトブロック特に多量に混ざる
- 5 黑褐色シルト 粘性・しまり  
やや弱 φ 10mmの炭化物粒わずか混ざる 黄褐色シルトブロック特に多量に混ざる
- 6 黑褐色シルト 粘性・しまり弱  
黄褐色シルトプロック多量に  
混ざる

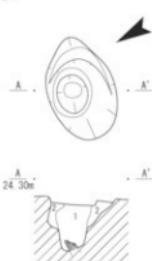
P426



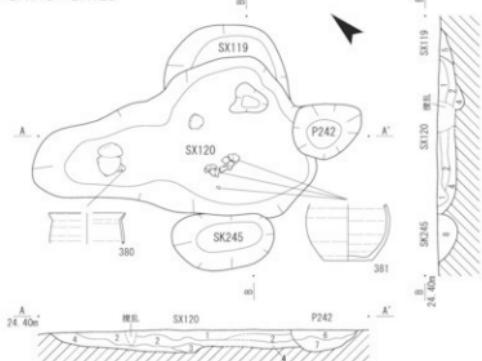
P426

- 1 褐灰色シルト 粘性・しまり弱  
灰黄色シルト多量に混ざる

P651



SX119・SX120



P242

- 1 黄褐色シルト 粘性・やや強 しまり弱  
φ 10mmの炭化物粒混ざる
- 2 褐灰色シルト 粘性・しまり弱  
φ 10mmの炭化物粒多量に混ざる
- 3 極褐色シルト 粘性・しまり弱  
灰黄色シルトブロック混ざる
- 4 黄褐色シルト 粘性・しまり弱  
微細な炭化物粒混ざる
- 5 黄褐色シルト 粘性・しまり弱
- 6 褐灰色シルト 粘性・しまり弱  
微細な炭化物粒混ざる
- 7 灰黄色細砂 粘性なし しまり弱
- 8 極褐色シルト 粘性・しまり弱  
φ 10mmの炭化物粒多量に混ざる

SX120

- 1 黄褐色シルト 粘性・やや強 しまり弱  
φ 10mmの炭化物粒混ざる
- 2 褐灰色シルト 粘性・しまり弱  
φ 10mmの炭化物粒多量に混ざる
- 3 極褐色シルト 粘性・しまり弱  
灰黄色シルトブロック混ざる

SX119

- 4 黄褐色シルト 粘性・しまり弱  
微細な炭化物粒混ざる

SB166



SB318

SB317

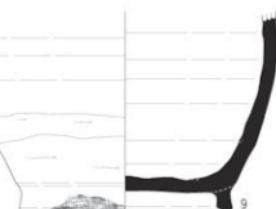
SB316



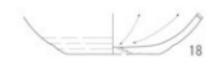
SB348



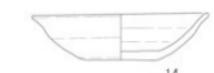
SB348



SB571

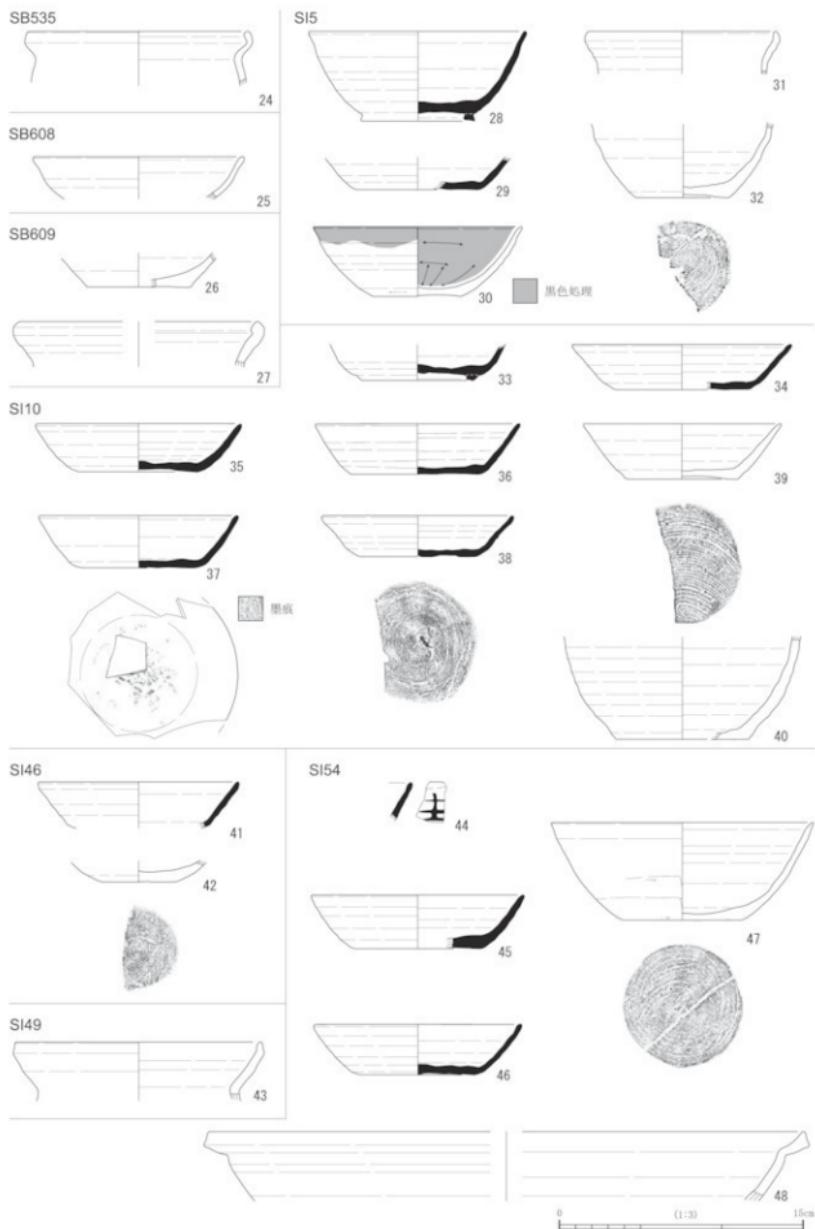


SB574



0 (1:3) 15cm

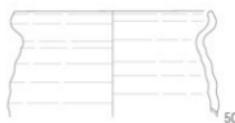
■ 黒色処理



SI70



49



50



51

SI130

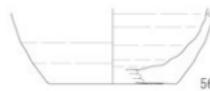


52



53

SI212内SD254



56



57

SI211

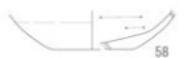


54



55

SI268



58



59

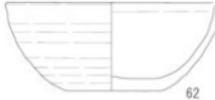


60



59

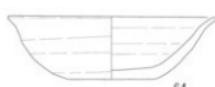
P2



62



63



64



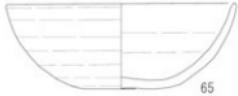
SI429



61

■ 黒色處理

SX32



65



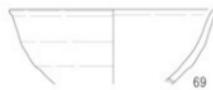
66



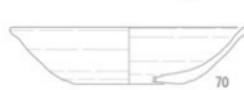
67



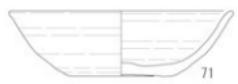
68



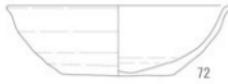
69



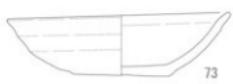
70



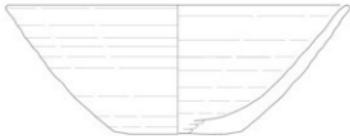
71



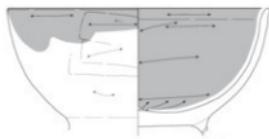
72



73



74



76



75



■ 黒色処理

P43



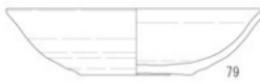
77



78



81



79



80



SK280



82



83



87



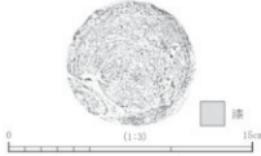
84



85



86



88



0

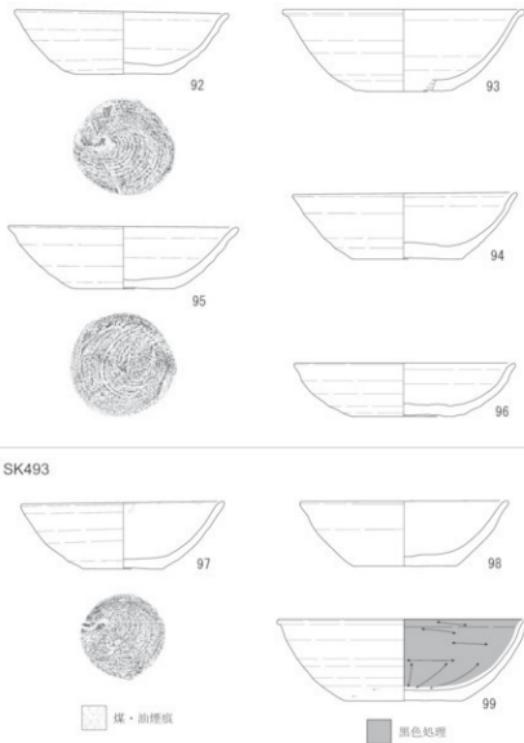
15cm

(1:3)

P306



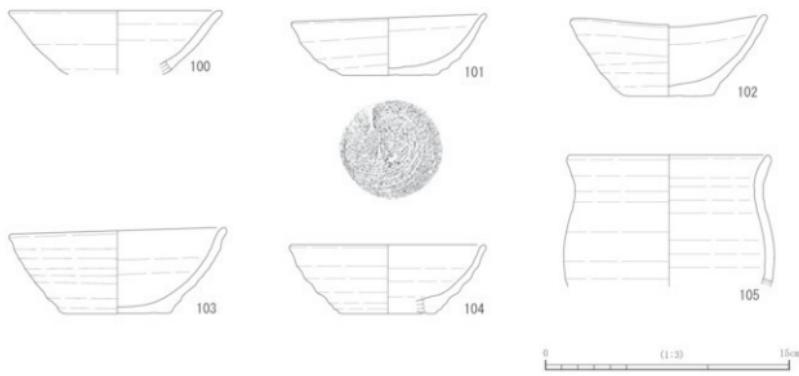
SK492



■ 煤・油煙痕

■ 黒色處理

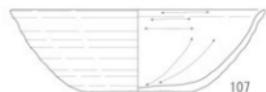
SK573



SK594 (SX266)



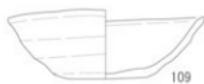
106



107



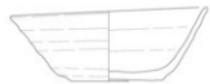
108



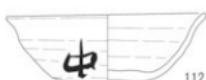
109



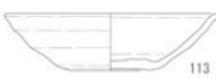
110



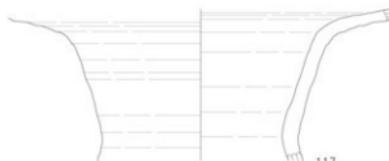
111



112



113



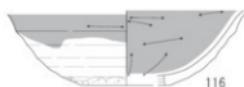
117



114

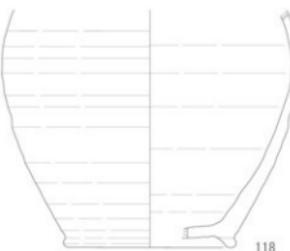


115



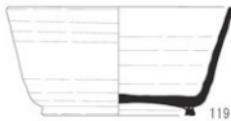
116

■ 黒色処理

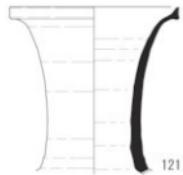


118

SK146



119



121

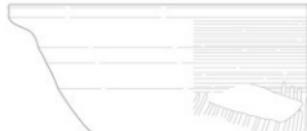


122



120

■ 灰・油煙瓶



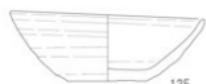
124

0

(1:3)

15cm

SK205



125

SK260



126



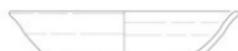
127



128



129



130

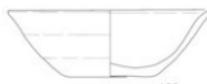


131



132

SK482



133



SK6



135



136

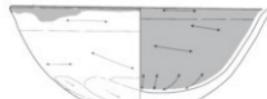


137

SK6B



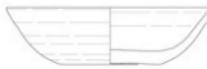
138



134



139

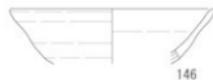
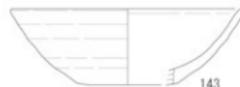
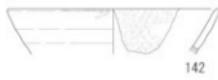


140

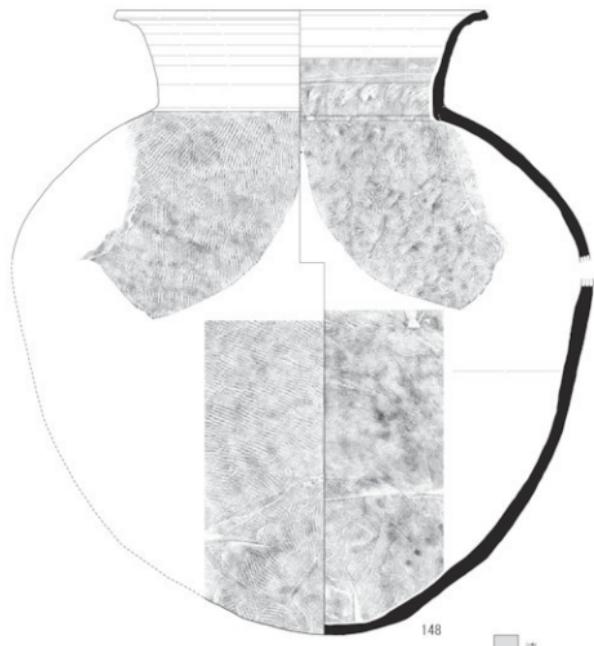


141

SK42



■ 煤・油煙痕



SK48



SK151



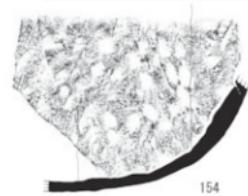
153

SK216



156

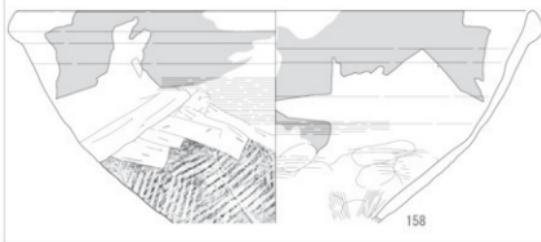
SK210



154



157



158

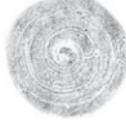


155

SK259



159



SK361



160



162



163

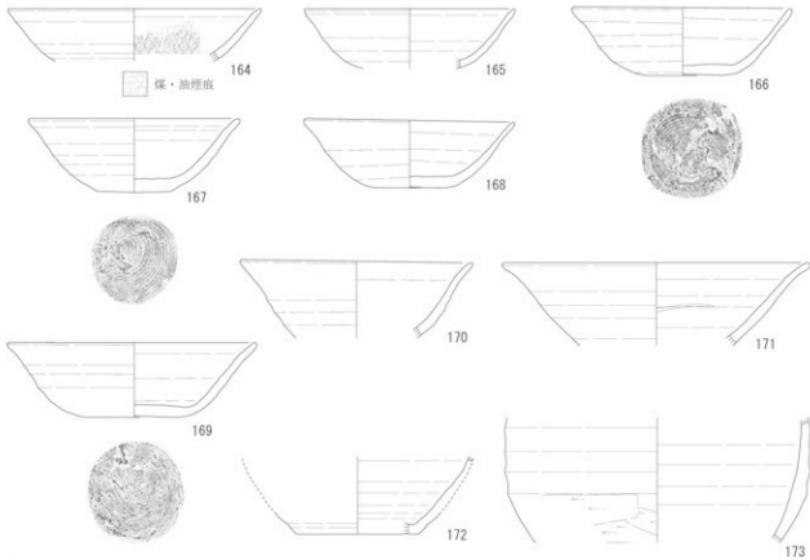


161

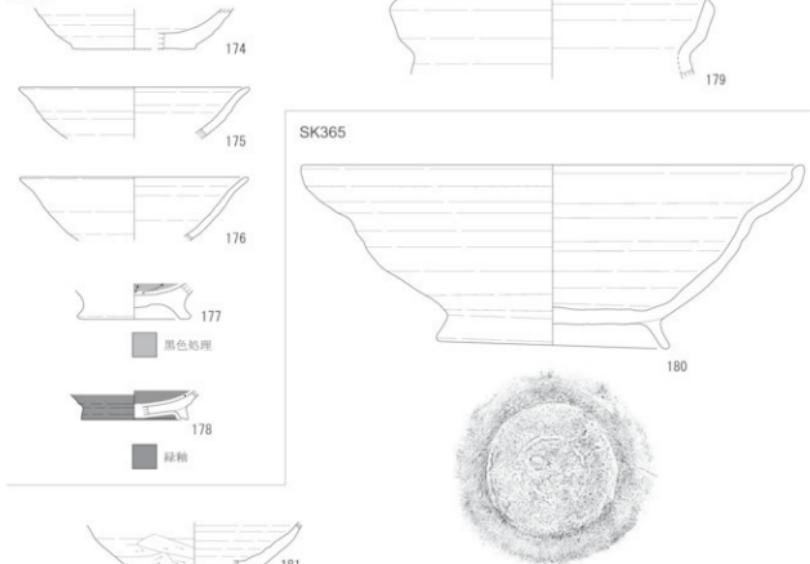
■ 深  
■ 黒色処理

0 (1:3) 15cm

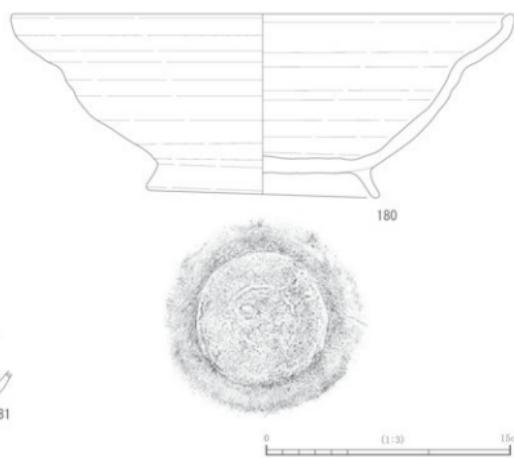
SK342



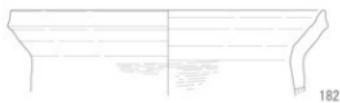
SD347



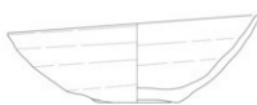
SK365



SK378



SK396



SD3



SE677

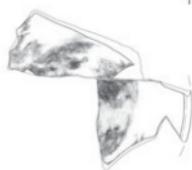
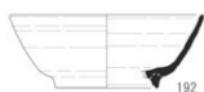


煤・油煙痕

SD7

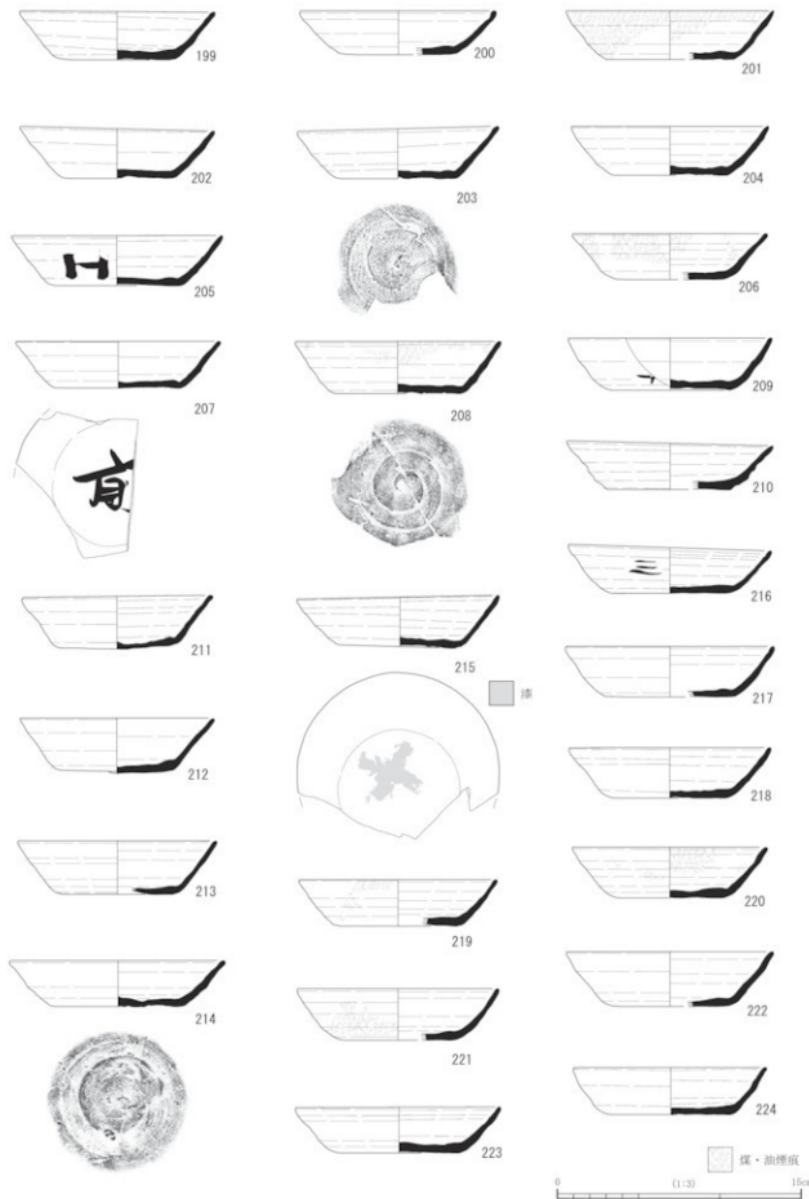


炭

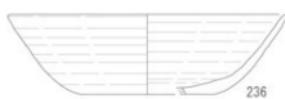
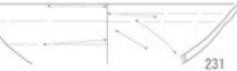


0 (1:3) 15cm

SD7



SD7



煤・油煙痕

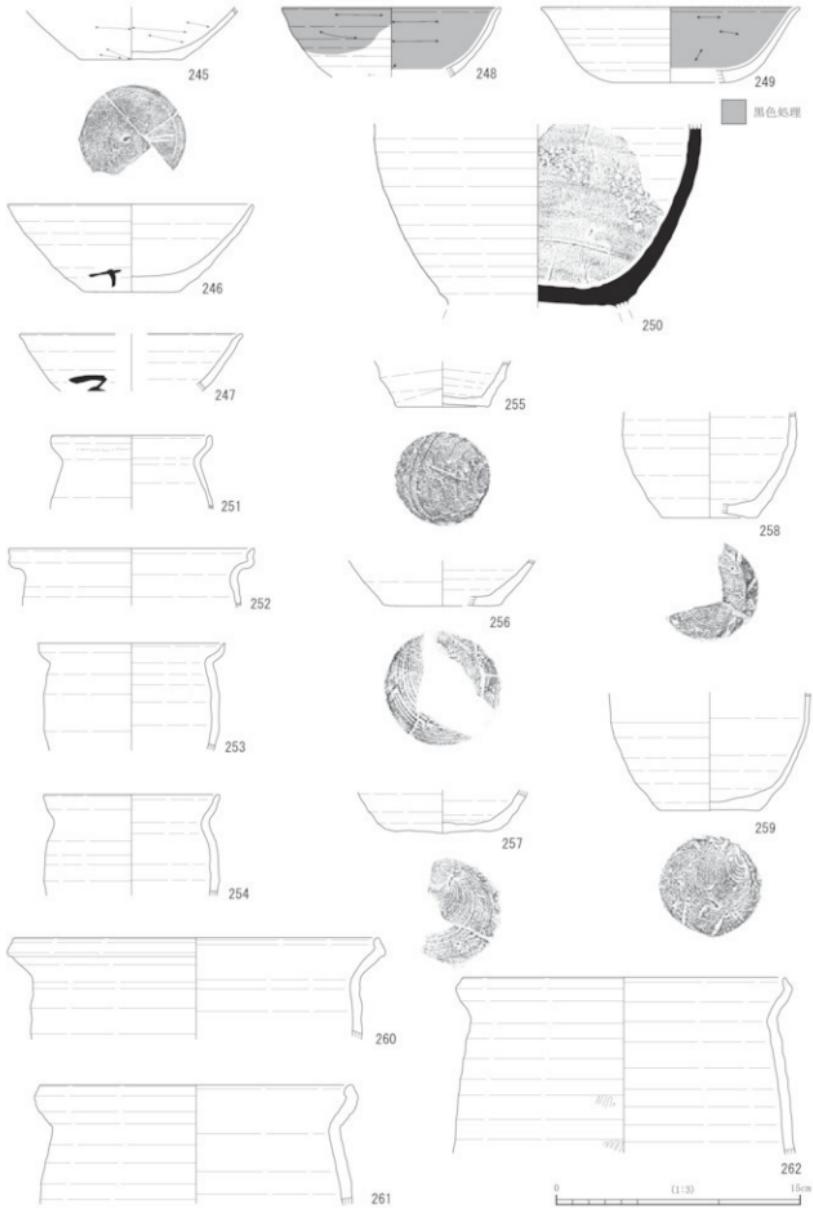


0 (1:3) 15cm

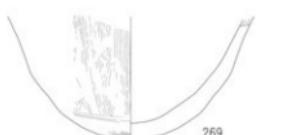
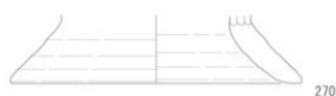
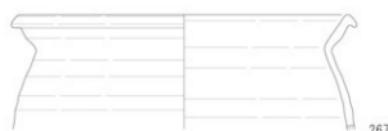
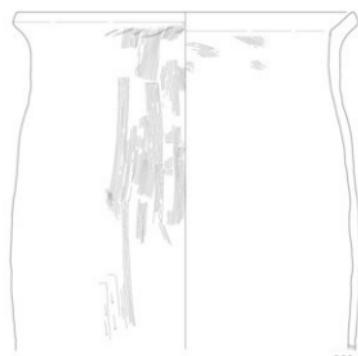
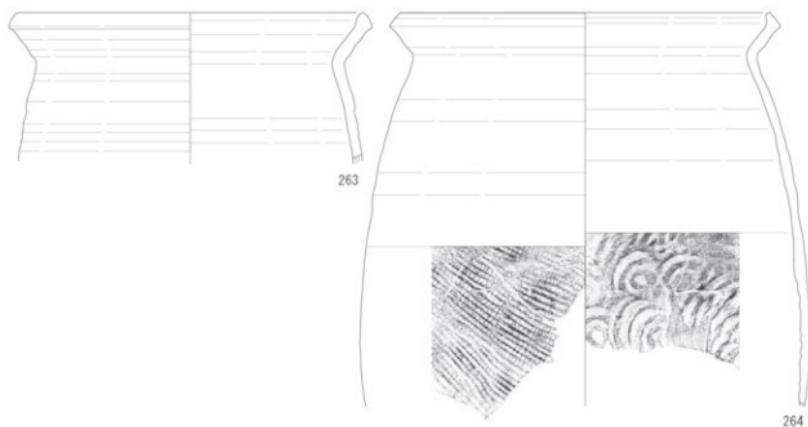
244



SD7

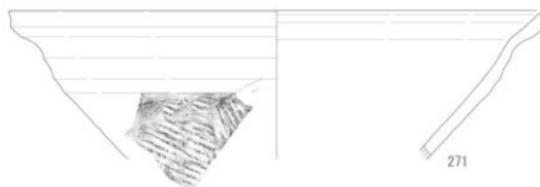


SD7



0 (1:3) 15cm

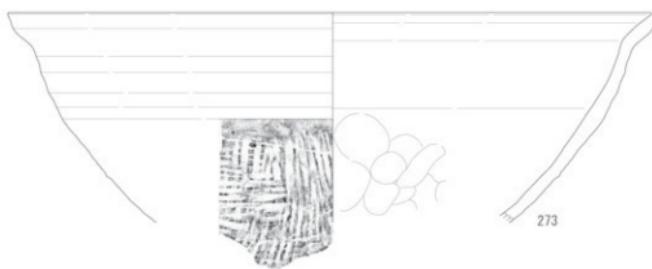
SD7



271



272

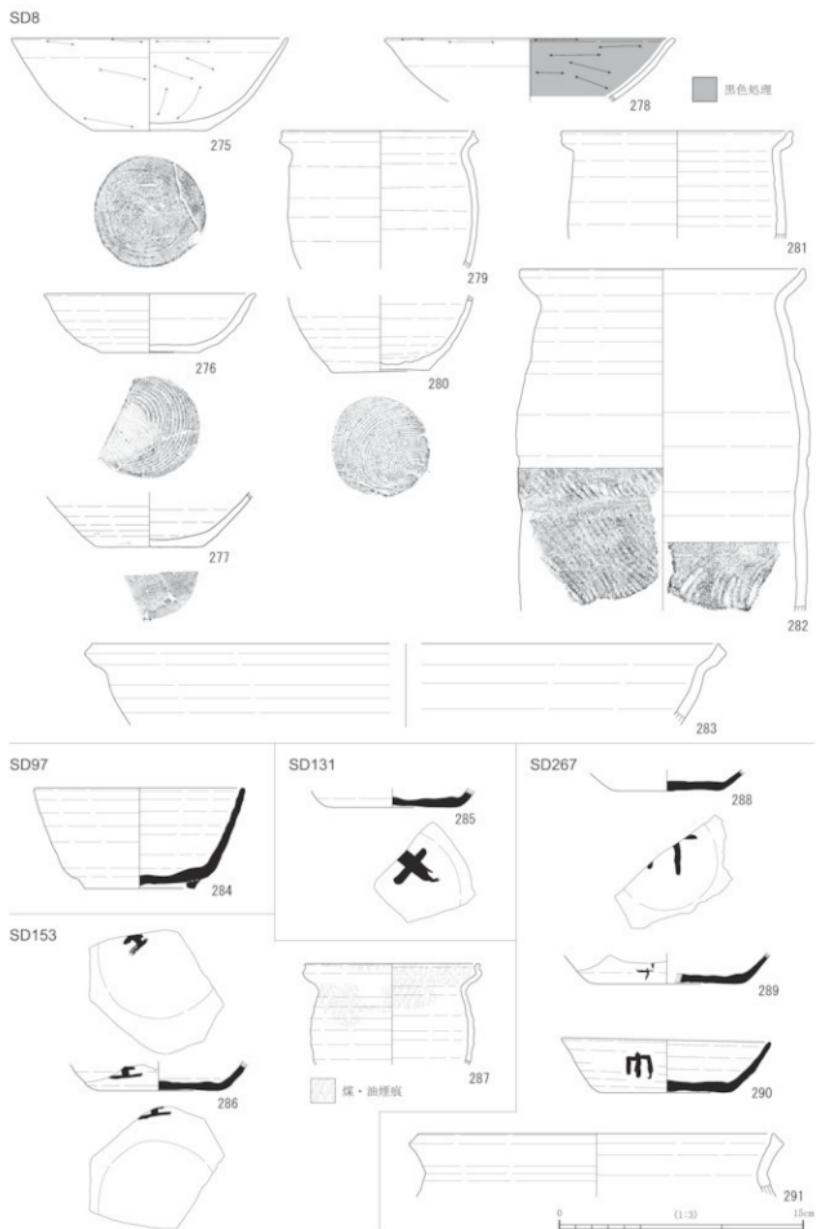


273



274





SD273



292



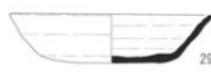
SD302



293



SD480



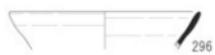
294



295

溝群 2

SD325



296



297



298



299



1cm

SD416



300



1cm

溝群 3

SD430



301



302

SD431



303

SD436



304

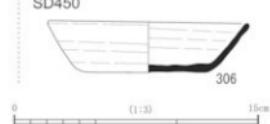


305

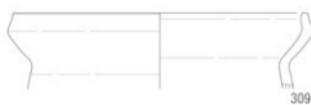
SD450



306



SD451



SD452



溝群4



SD204



溝群5

SD111



SD115



墨痕

SD581



0 (1:3) 15cm

## 溝群6

SX4



322

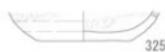


323

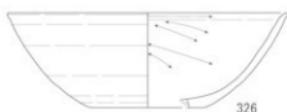


324

煤・油煙痕



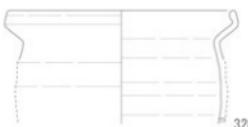
325



326



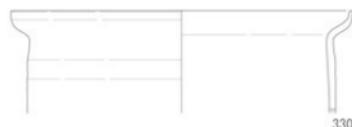
327



328



329



330

P156



331



P278



332



333



334

P527

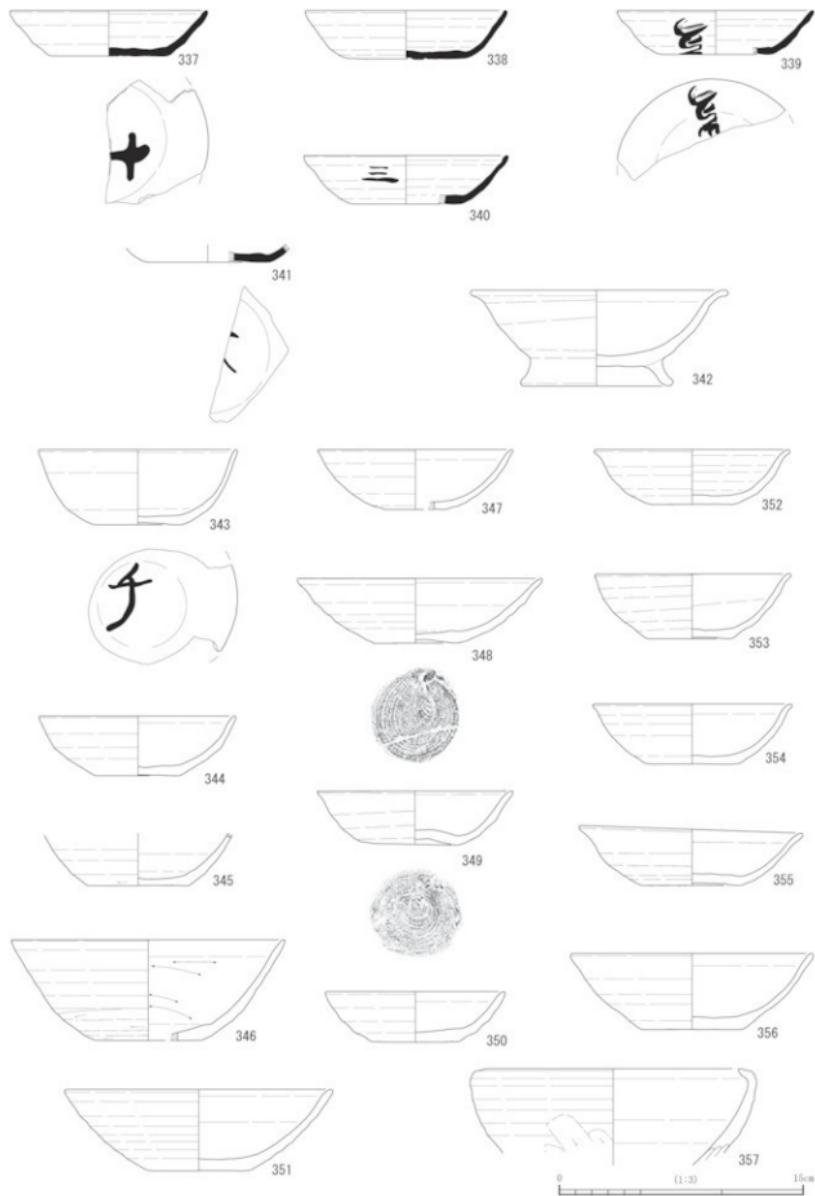


335



336

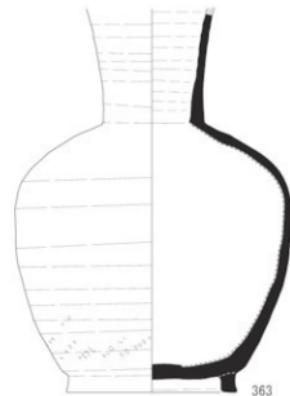
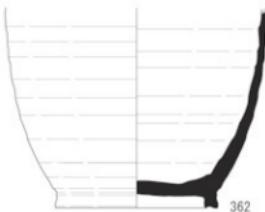
SX1



SX1

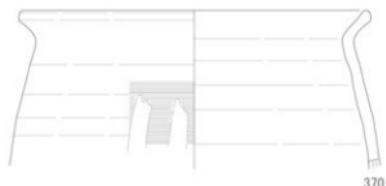
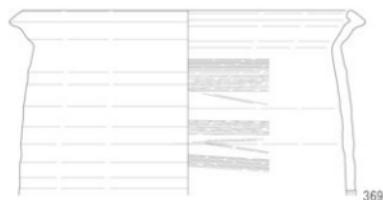
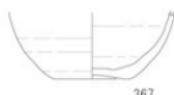
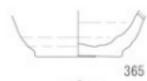


塗  
黒色處理



0 (1:3) 15cm

SX1



0 (1:3) 15cm

SX1



374



375

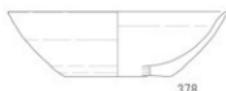


376



377

SX120



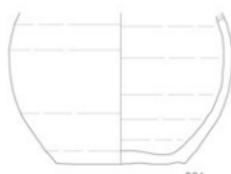
378



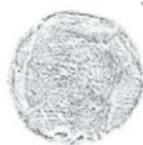
379



380



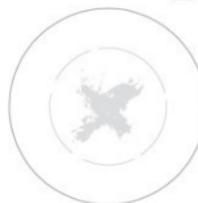
381



SX400



382



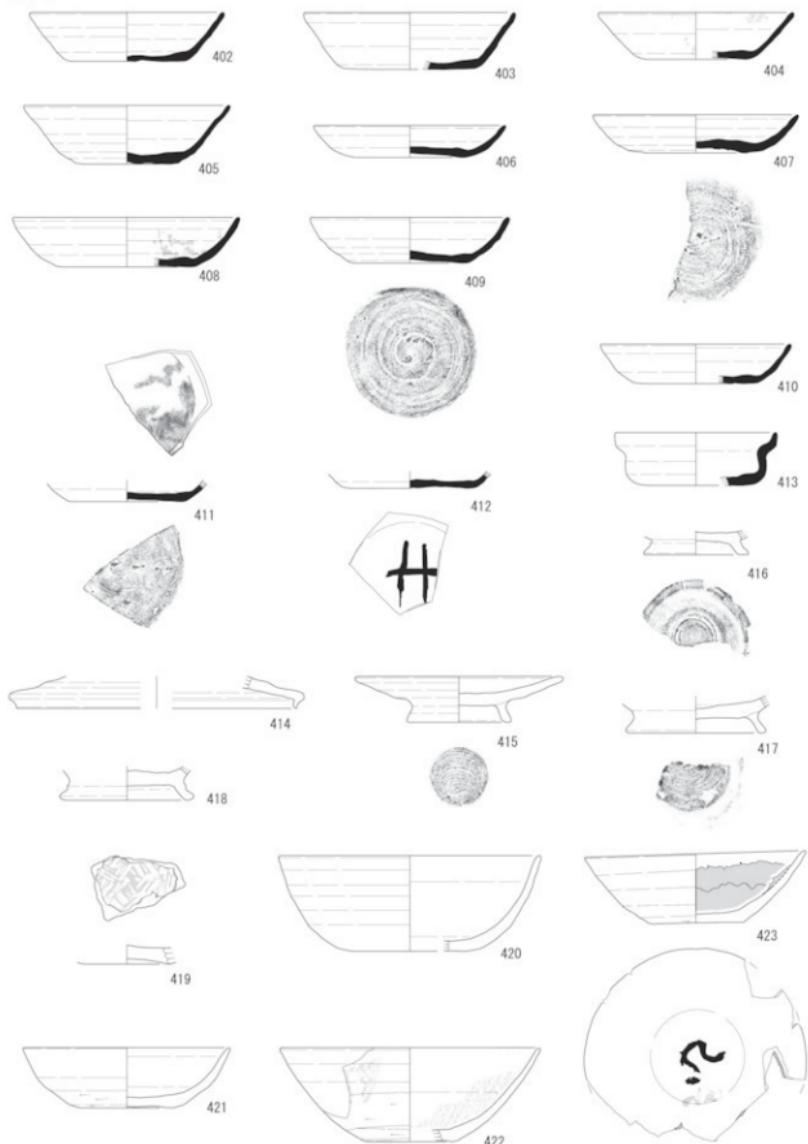
漆

0 (1:3) 15cm

遺構外



遺構外



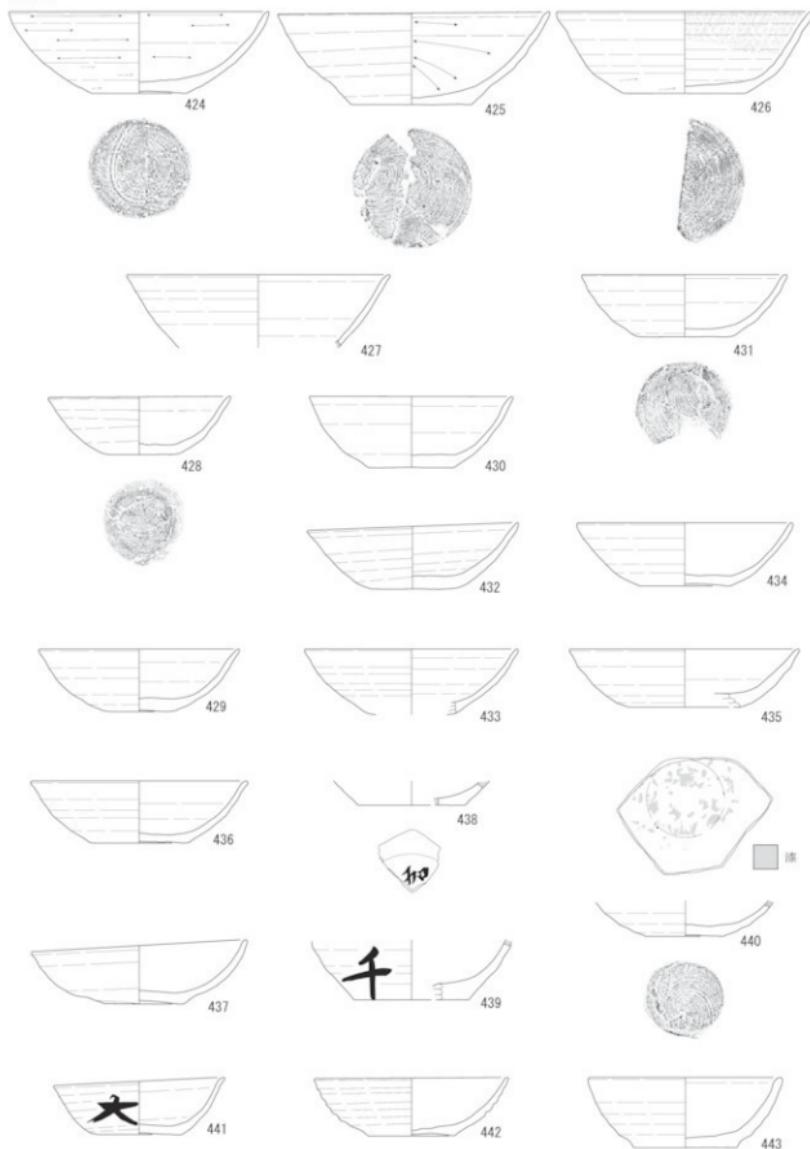
塗

墨痕

煤・焼痕

0 (1:3) 15cm

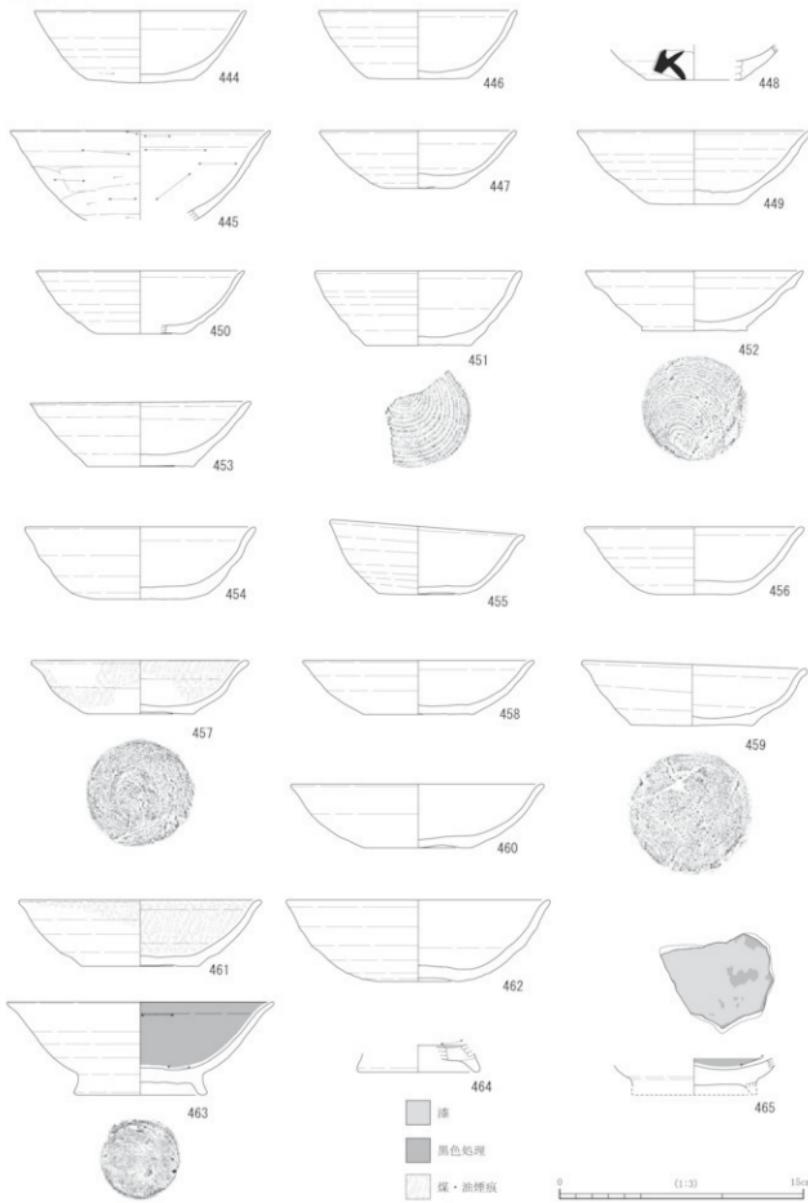
遺構外



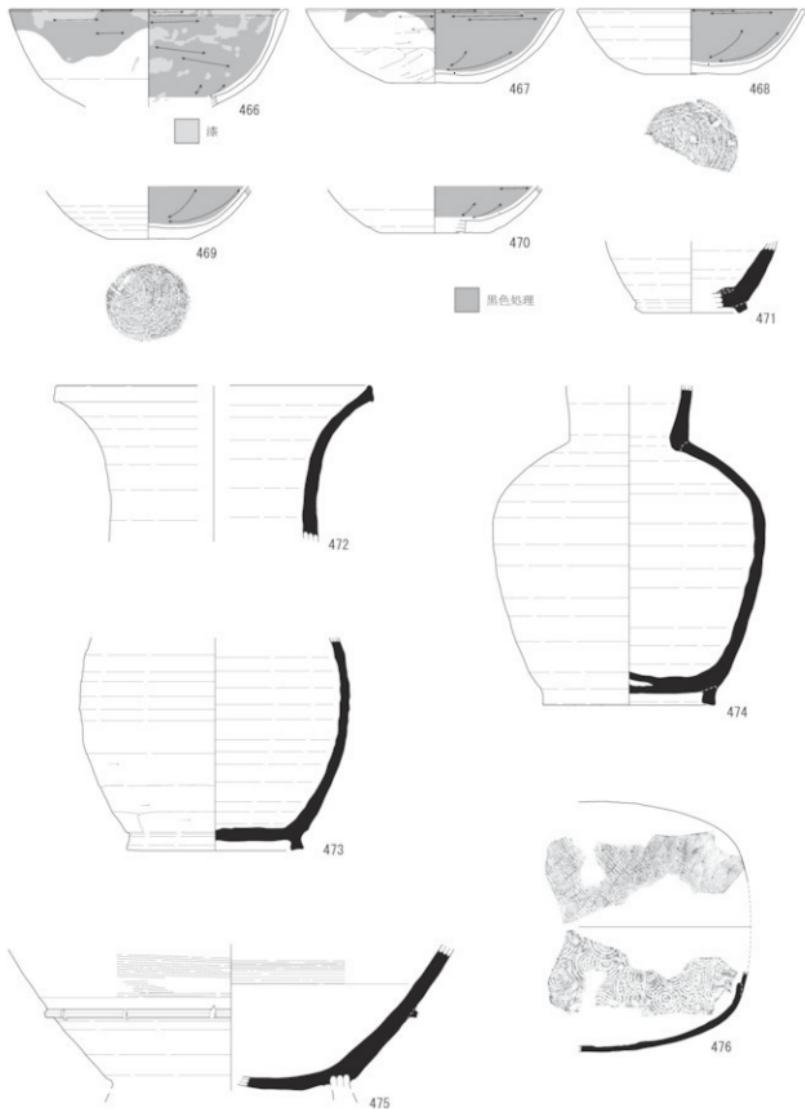
煤・油煙瓶

0 (1:3) 15cm

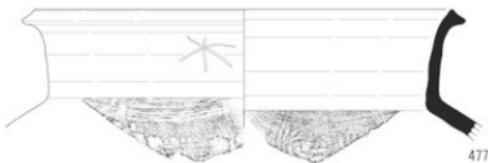
遺構外



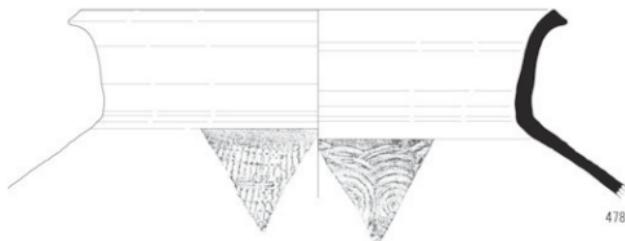
遺構外



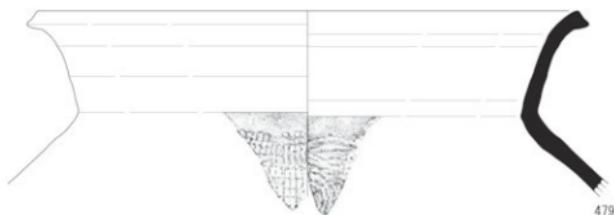
遺構外



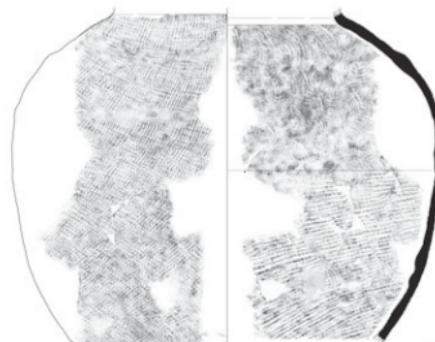
477



478



479

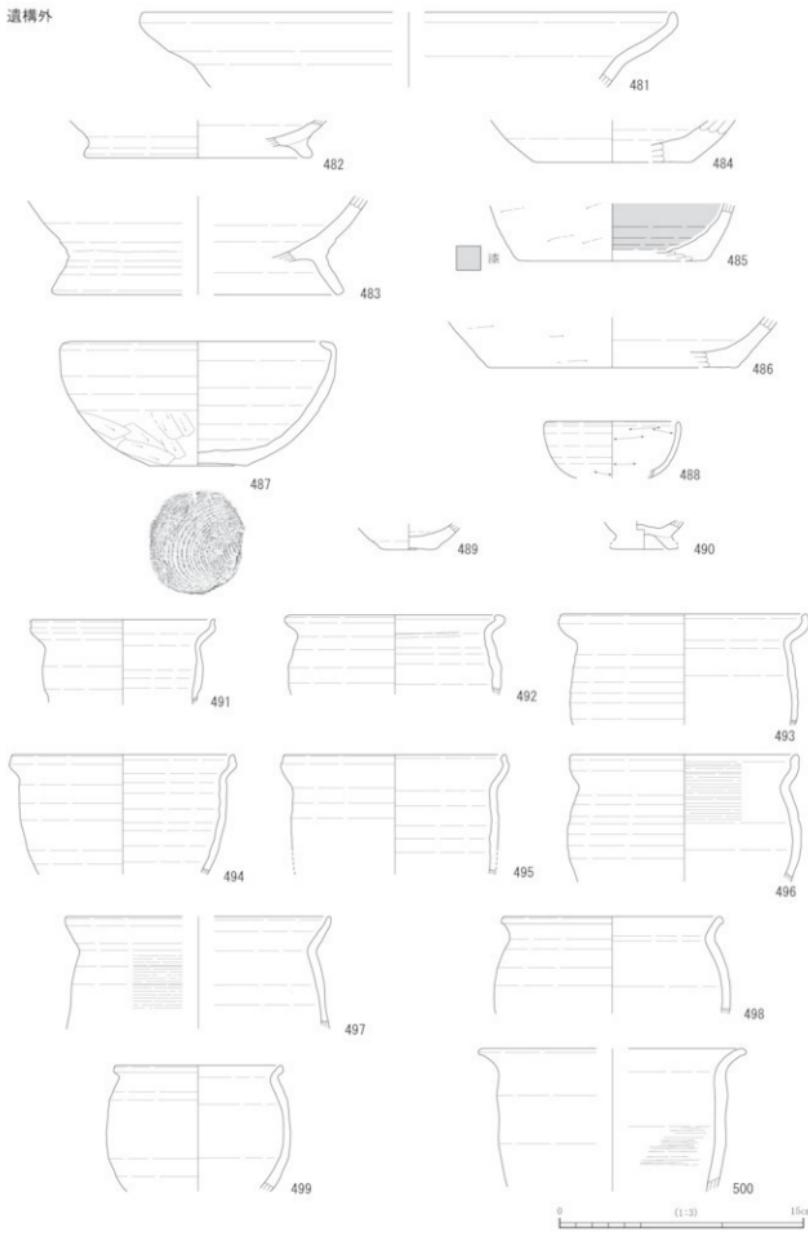


480

塗



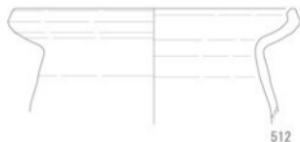
遺構外



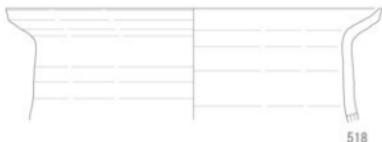
遺構外



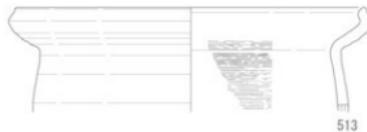
遺構外



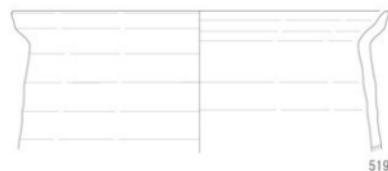
512



518



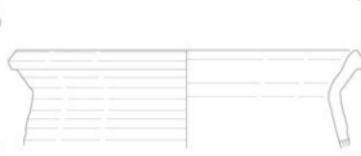
513



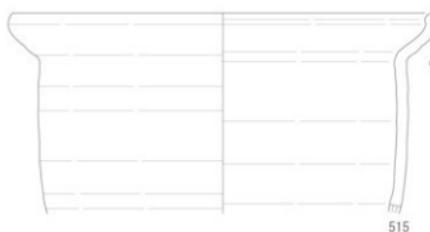
519



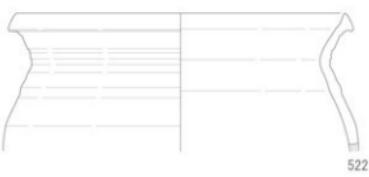
514



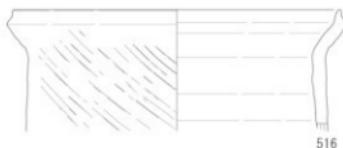
520



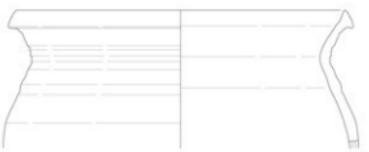
515



521



516



522



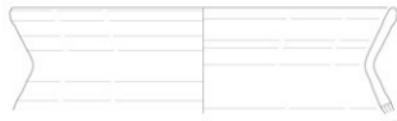
517



523



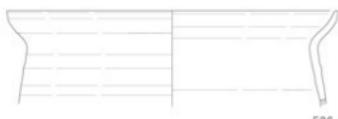
造横外



524



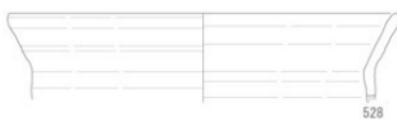
525



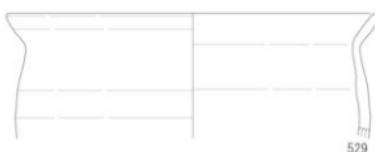
526



527



528



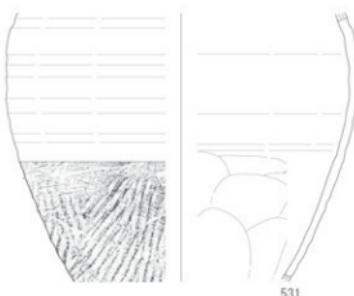
529



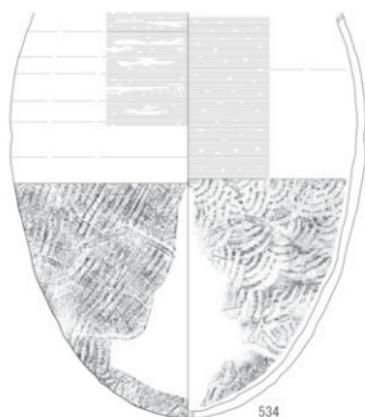
530



533



531



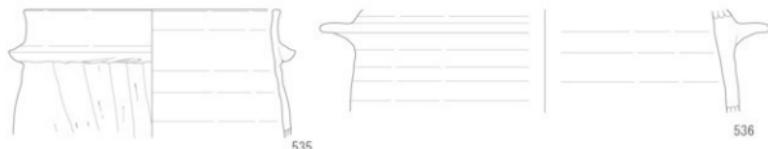
534



532

0 (1:3) 15cm

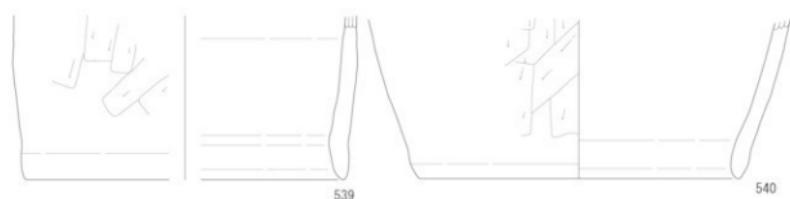
遺構外



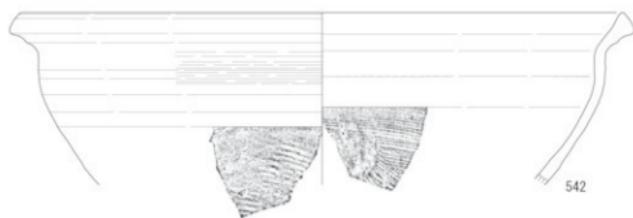
536



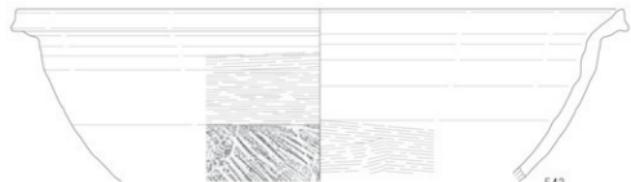
538



540

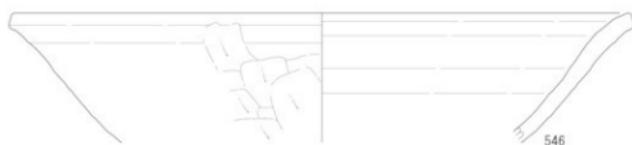
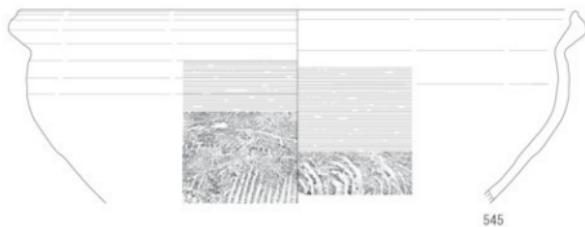


543



0 (1:3) 15cm

遺構外

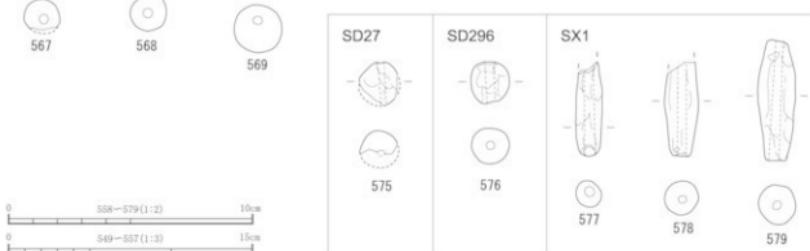
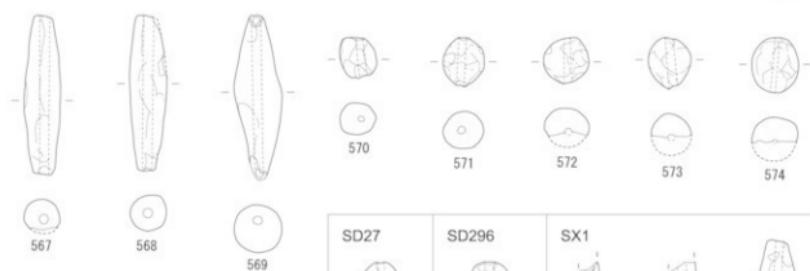
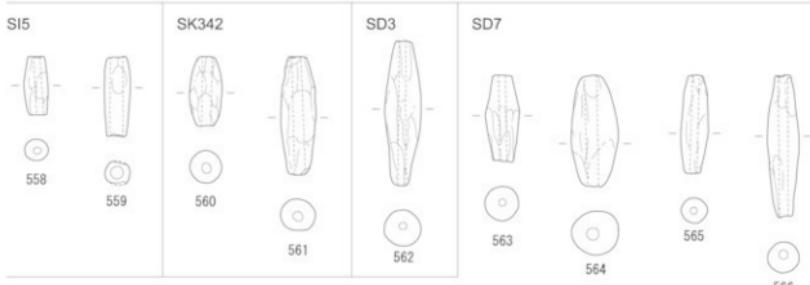
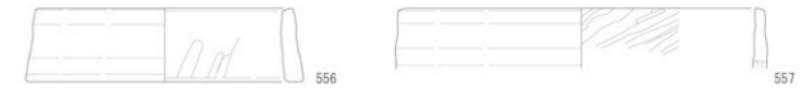


0 (1:3) 15cm

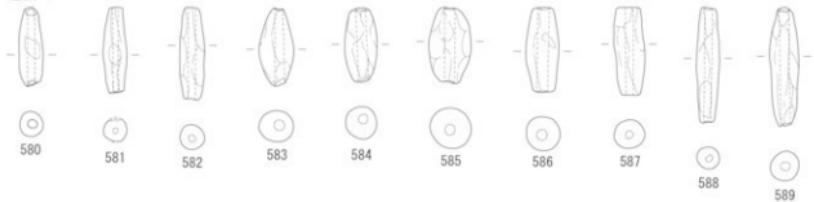
## 遺構外



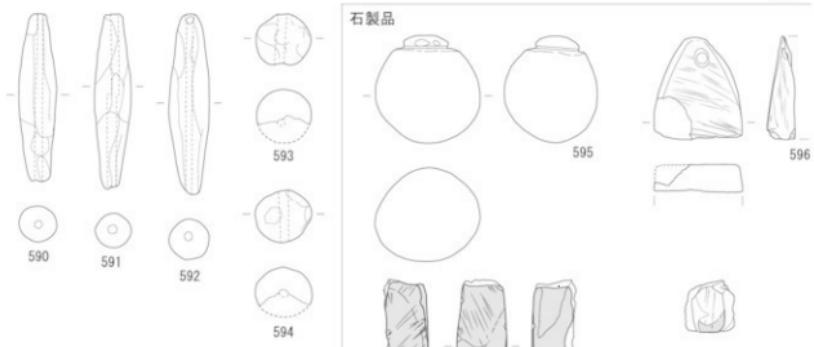
## 土製品



## 遺構外



## 石製品



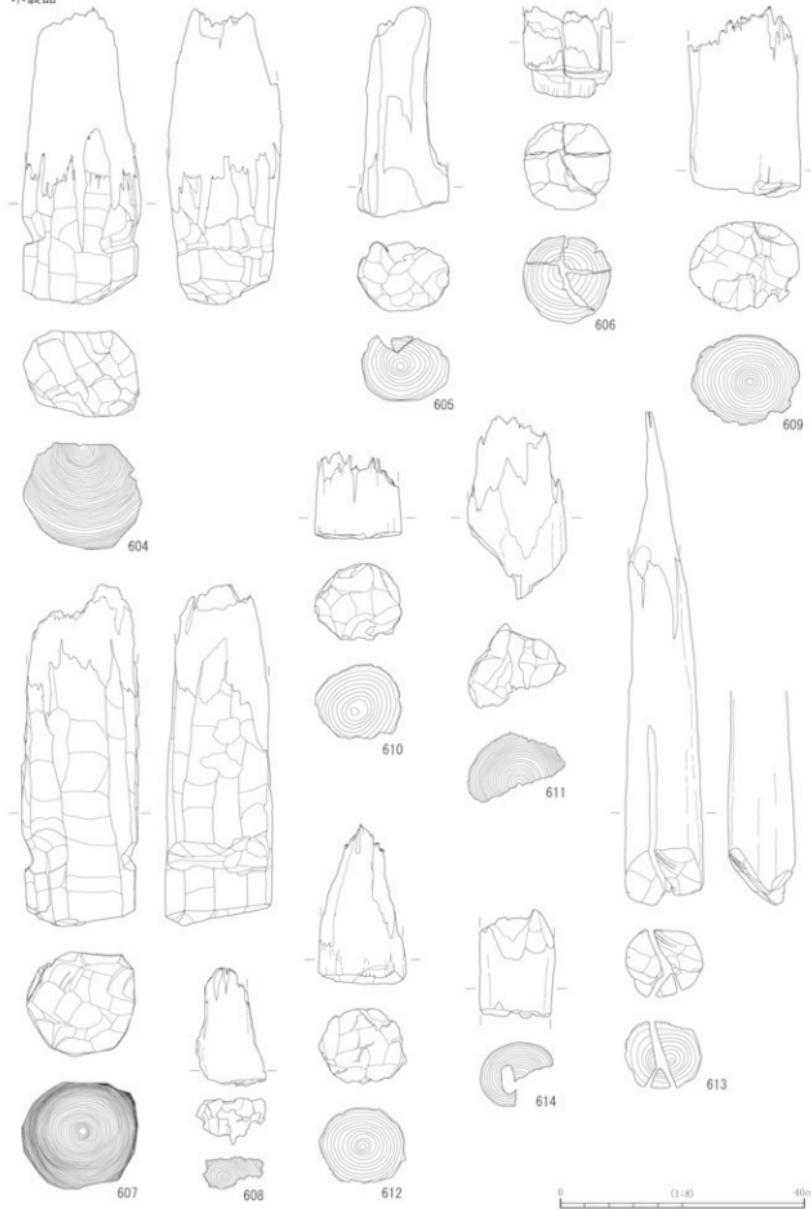
煤



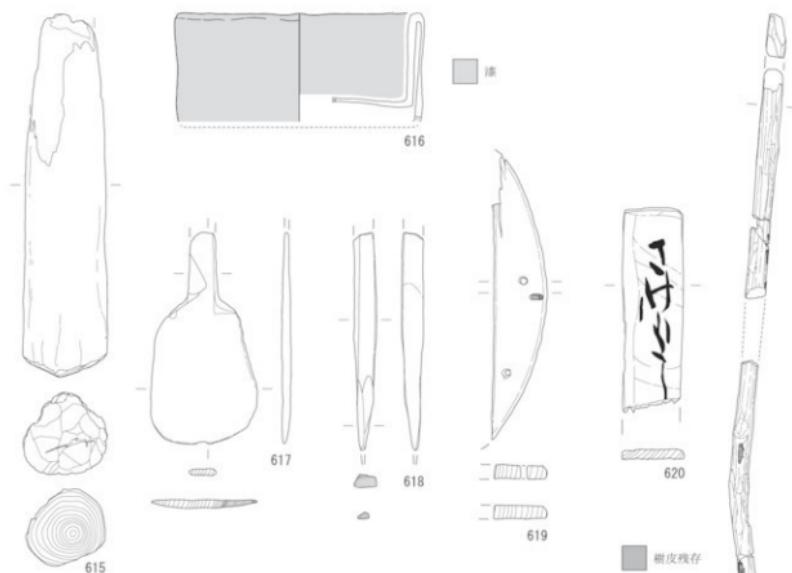
0 580-596 (1:2) 10cm  
0 597-603 (1:3) 15cm

砾面

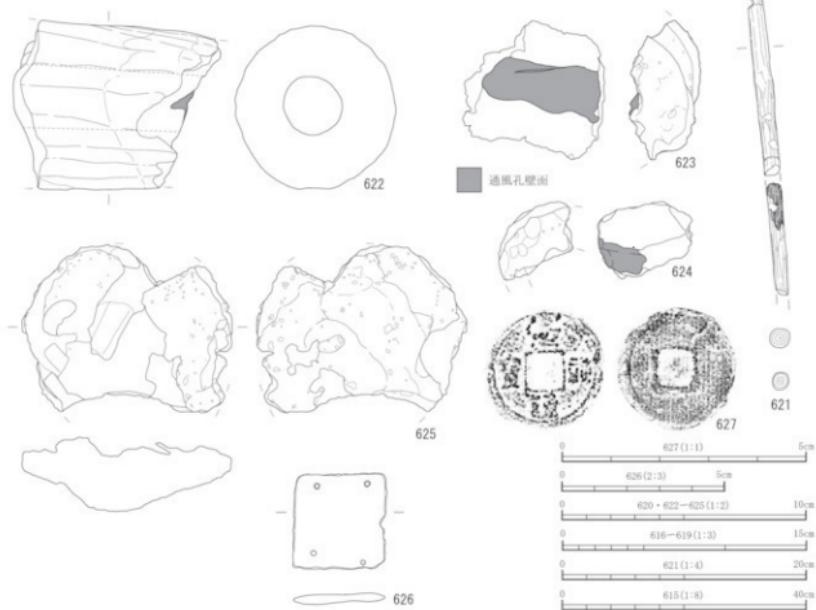
## 木製品



0 (1:8) 40cm



## 鍛冶関連遺物・金属製品・錢貨





遺跡全景（南東から）



遺跡全景



遺跡全景（西から）



基本層序①（東から）



SB317 全景（南から）



P306 遺物出土状況（南西から）



SK205 完掘（北から）



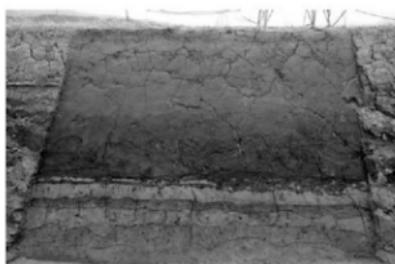
SK205 断面（南から）



SK482 完掘（南から）



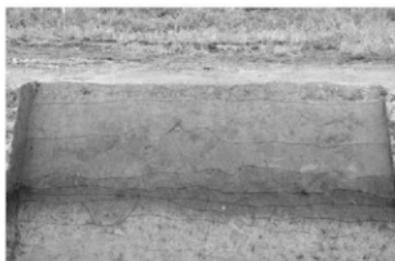
SK342 断面（北から）



基本層序②（北から）



基本層序③（北から）



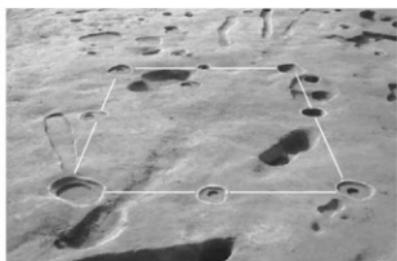
基本層序④（南から）



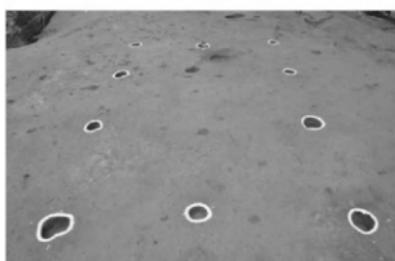
SX1 遺物出土状況（南東から）



SB166 全景（東から）



SB167 全景（東から）



SB316 全景（南東から）



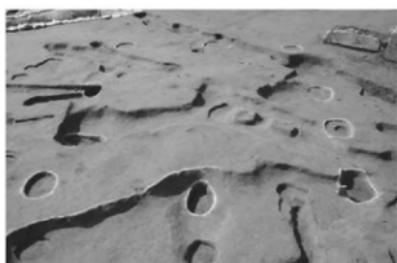
SB317-P1 柱根出土状況（南から）



SB317 - P11 断面 (北から)



SB317 - P11 柱根出土状況 (北から)



SB318 全景 (南東から)



SB320 全景 (東から)



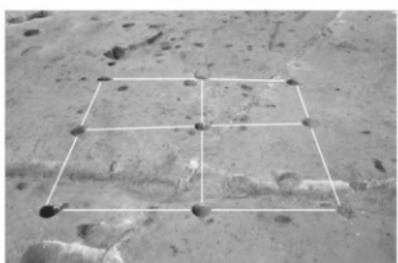
SB348 全景 (南東から)



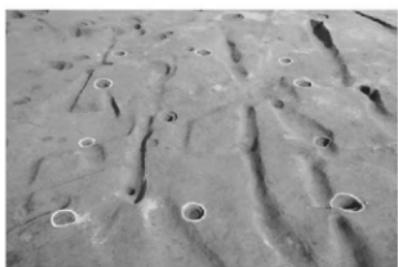
SB348 - P 4 柱根出土状況 (北西から)



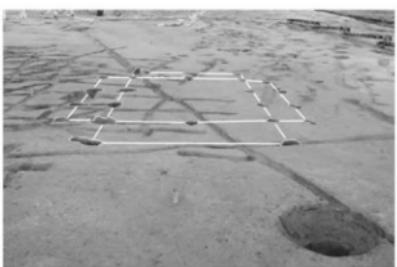
SB348 - P 6 遺物出土状況 (北から)



SB535 全景 (南東から)



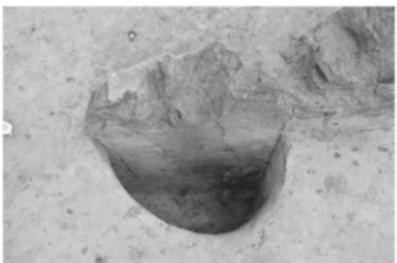
SB550 全景（北西から）



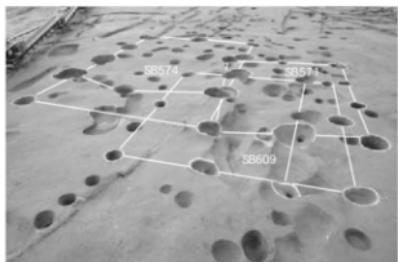
SB608 全景（北西から）



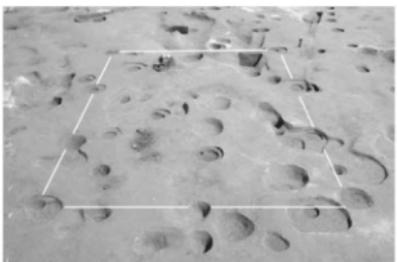
SB608 - P 5 柱根出土状況（北東から）



SB608 - P22 断面（南西から）



SB571・574・609 全景（南東から）



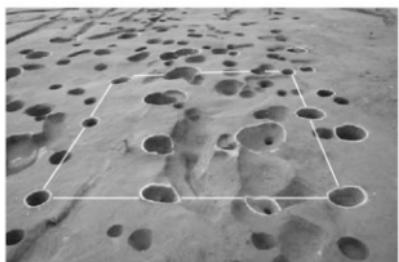
SB571 全景（東から）



SB571 - P 2 ・ SB574 - P 9 断面（南西から）



SB574 全景（西から）



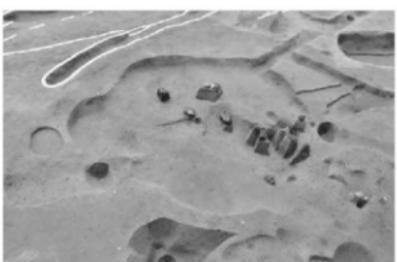
SB609 全景 (南東から)



SI 5 完掘 (南から)



SI 5 断面 (南東から)



SI10 完掘 (東から)



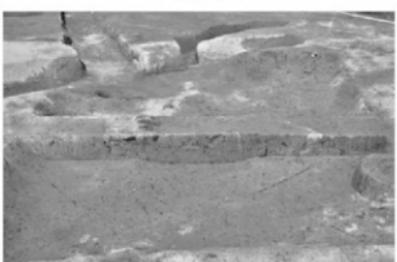
SI10 断面 (南東から)



SI10 カマド断面 (東から)



SI46 完掘 (南西から)



SI46 断面 (南西から)



SI49 完掘（南東から）



SI54 炭化物検出状況（西から）



SI54 断面（北東から）



SI70 床面検出（南西から）



SI70 断面（南東から）



SI207 完掘（西から）



SI207 断面（南西から）



SI130 完掘（南から）



SI212 完掘 (南西から)



SI211 完掘 (南西から)



SI211 断面 (南東から)



SI268 床面検出状況 (南西から)



SI268 断面 (南西から)



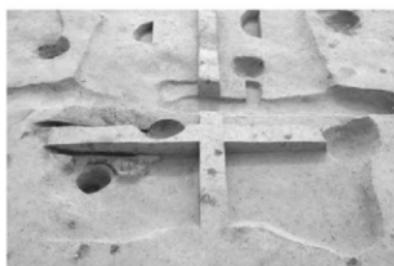
SI429 断面 (南東から)



SI465 断面 (南から)



SI664 床面検出状況 (北西から)



SI664 断面 (北東から)



P 2 遺物出土状況 (南から)



SX32 遺物出土状況 (南西から)



SK280 遺物出土状況 (南から)



P306 断面 (南西から)



SK492 遺物出土状況 (北から)



SK493 遺物出土状況 (西から)



SK594 (SX266) 遺物出土状況 (南東から)



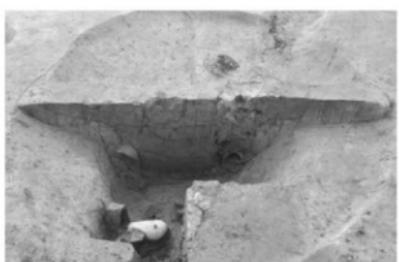
SK573 遺物出土状況（南から）



SK573・SB609 - P 9 断面（南東から）



SK146 検出状況（東から）



SK146B 断面（東から）



SK146A 断面（南から）



SK146 遺物出土状況（東から）



SK205A 断面（北東から）



SK246A 断面（南西から）



SK246B 断面（北西から）



SK246 完掘（南から）



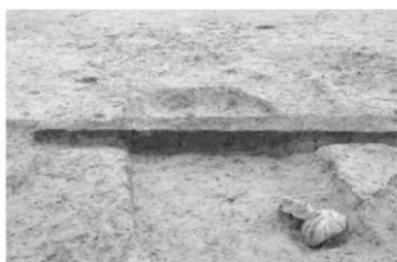
SK260 断面（西から）



SK260 遺物出土状況（西から）



SK482A 断面（北東から）



SK482B 断面（南西から）



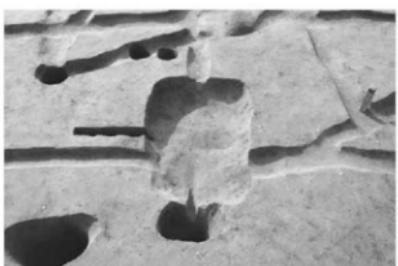
SK512A 断面（南西から）



SK512B 断面（南東から）



SK512 炭化物検出状況 (南西から)



SK512 完掘 (南東から)



SK 6 断面 (南から)



SD69・SK151 断面 (南東から)



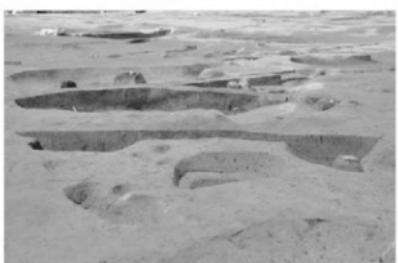
SK42 断面 (西から)



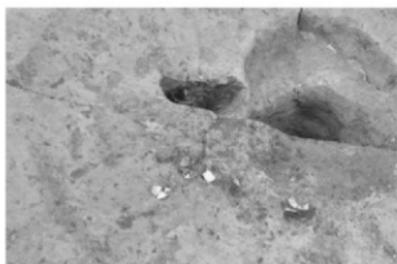
SK42 遺物出土状況 (南西から)



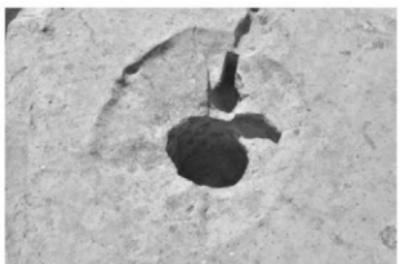
SK216 断面 (南から)



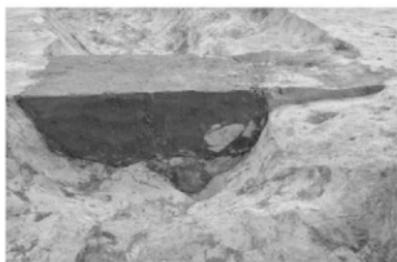
P149・SK148・SK259 断面 (東から)



SK342 延土検出状況 (南西から)



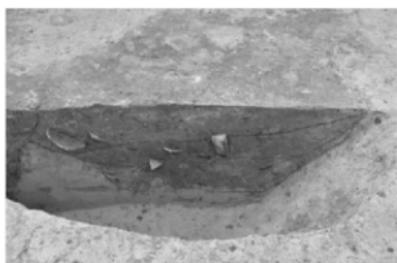
SK342 完掘 (南東から)



SD347 A 断面 (南東から)



SK359 断面 (東から)



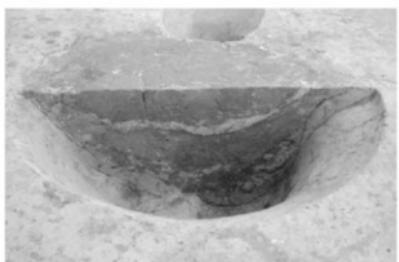
SK361 断面 (東から)



SB348 - P13・SK361 完掘 (東から)



SK365 遺物出土状況 (南東から)



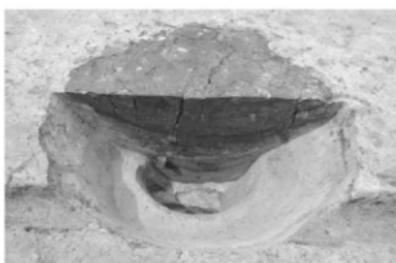
SK378 断面 (北西から)



SK396 遺物出土状況 (南から)



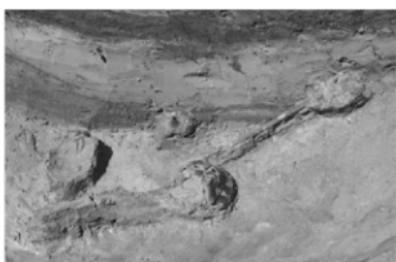
SK396 断面 (南から)



SE403 断面 (南から)



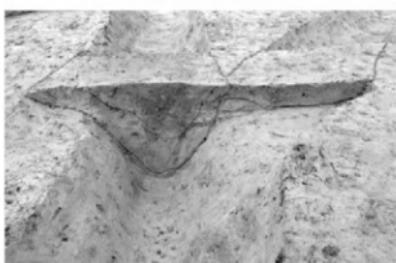
SE677 断面 (南東から)



SE677 遺物出土状況 (南東から)



SD 3B 断面 (南西から)



SD 3・SD131 断面 (南東から)



SD 7 遺物出土状況 (南西から)



SD 7 A 断面 (南西から)



SD 7 C 断面 (南から)



SD153 断面 (南東から)



SD267 断面 (南から)



SD480 断面 (南西から)



SD481・491・SX494 断面 (南西から)



溝群 1 SD323・326 断面 (南東から)



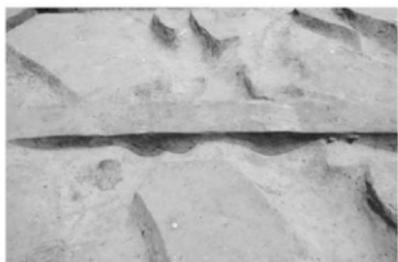
溝群 1 SD332 断面 (南東から)



溝群 2 完掘 (南東から)



溝群 2 SD356・413 断面 (南東から)



溝群 3 SD432・437・438・439 断面 (南西から)



溝群 3 SD440・443・488 断面 (南西から)



溝群 4 SD34・35 断面 (北西から)



溝群 4 SD40・41 断面 (南東から)



溝群 5 SD164 断面 (南東から)



溝群 5 SK110・SD111・112 断面 (南東から)



溝群 6 SX 4 検出状況 (南から)



溝群 6 SX 4 断面 (南西から)



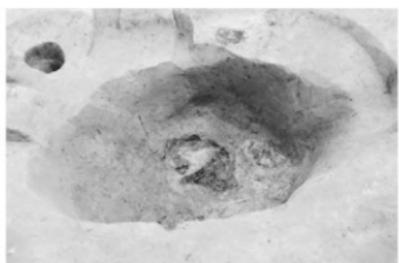
P278 遺物出土状況 (東から)



SK119・SX120・P242・SK245 断面 (南西から)



SX120 完掘 (南東から)



SX400 完掘 (南西から)



作業風景 1



作業風景 2



SD7 出土遺物



主な土器埋納遺構・土器溜まり出土土器・内面黒色土器（左列II期、中列III期、右列IV期）



漆紙付着土師器 (423)



縦縫付着土師器 (158)



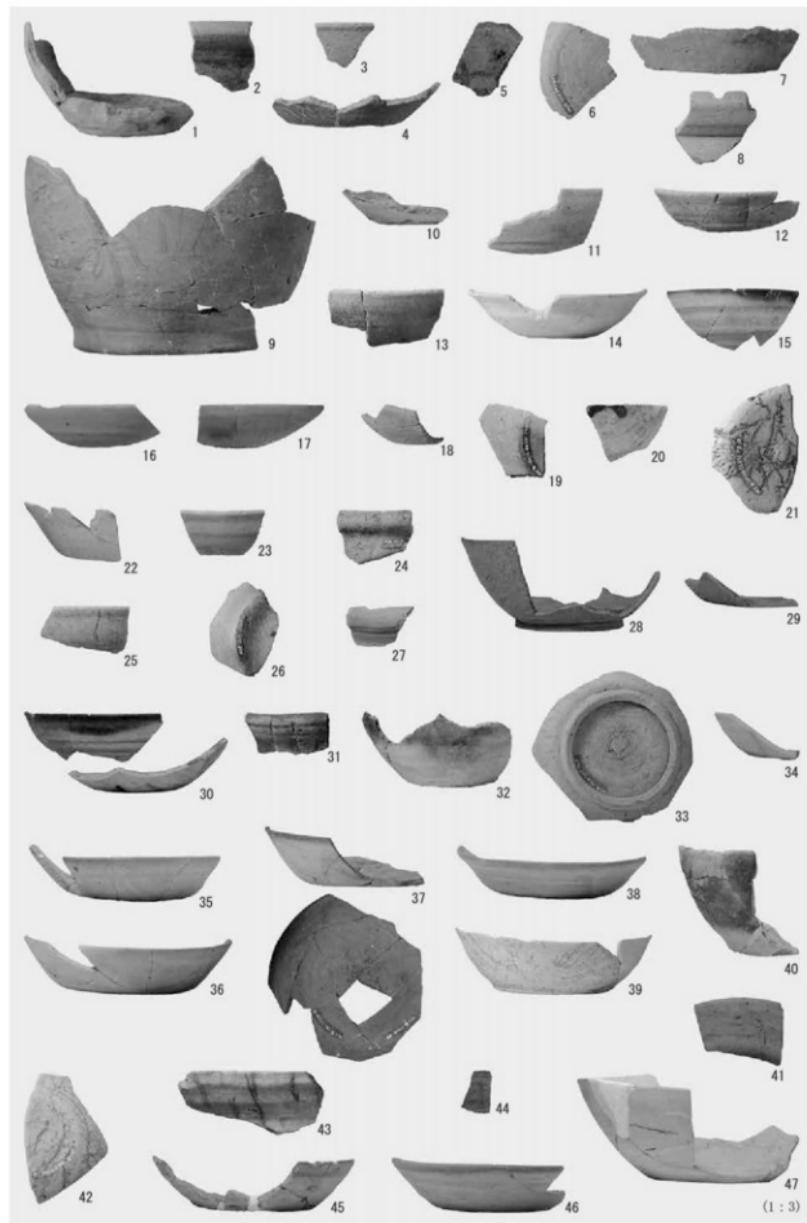
灰釉陶器・綠釉陶器



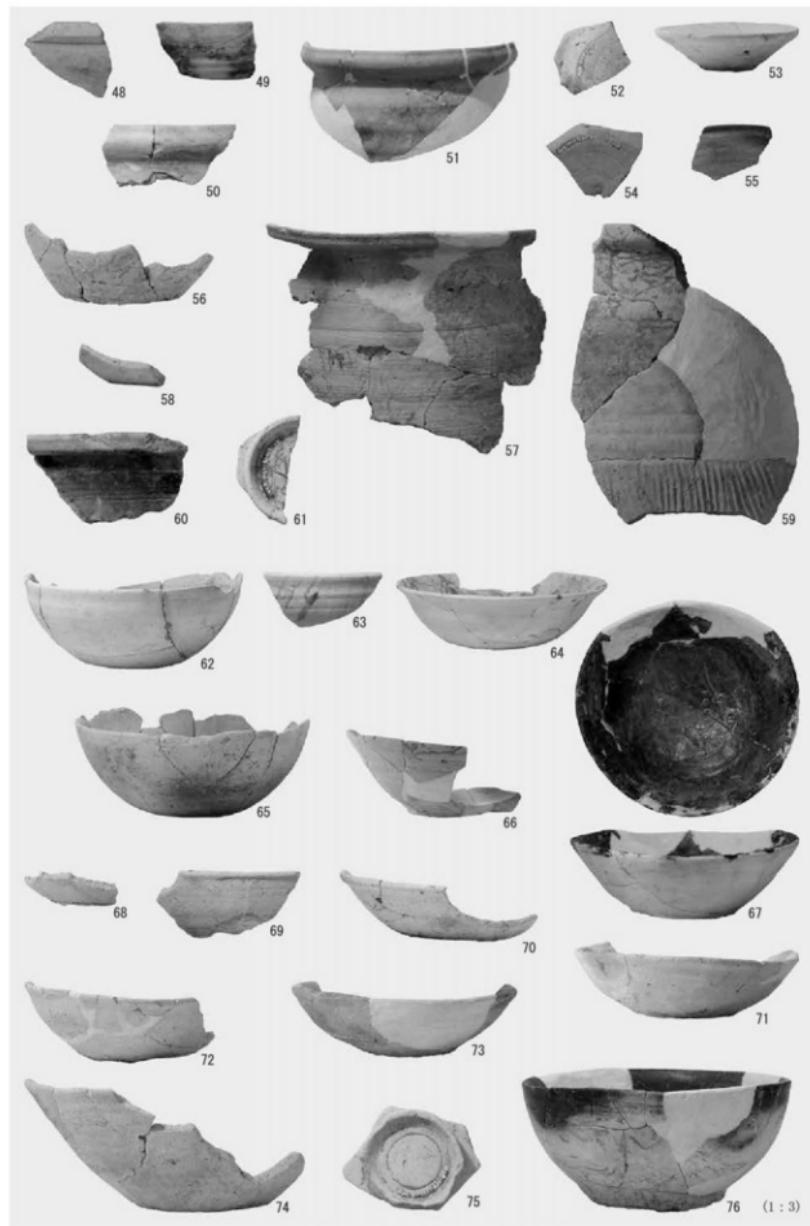
砥石・石錘・権状錘

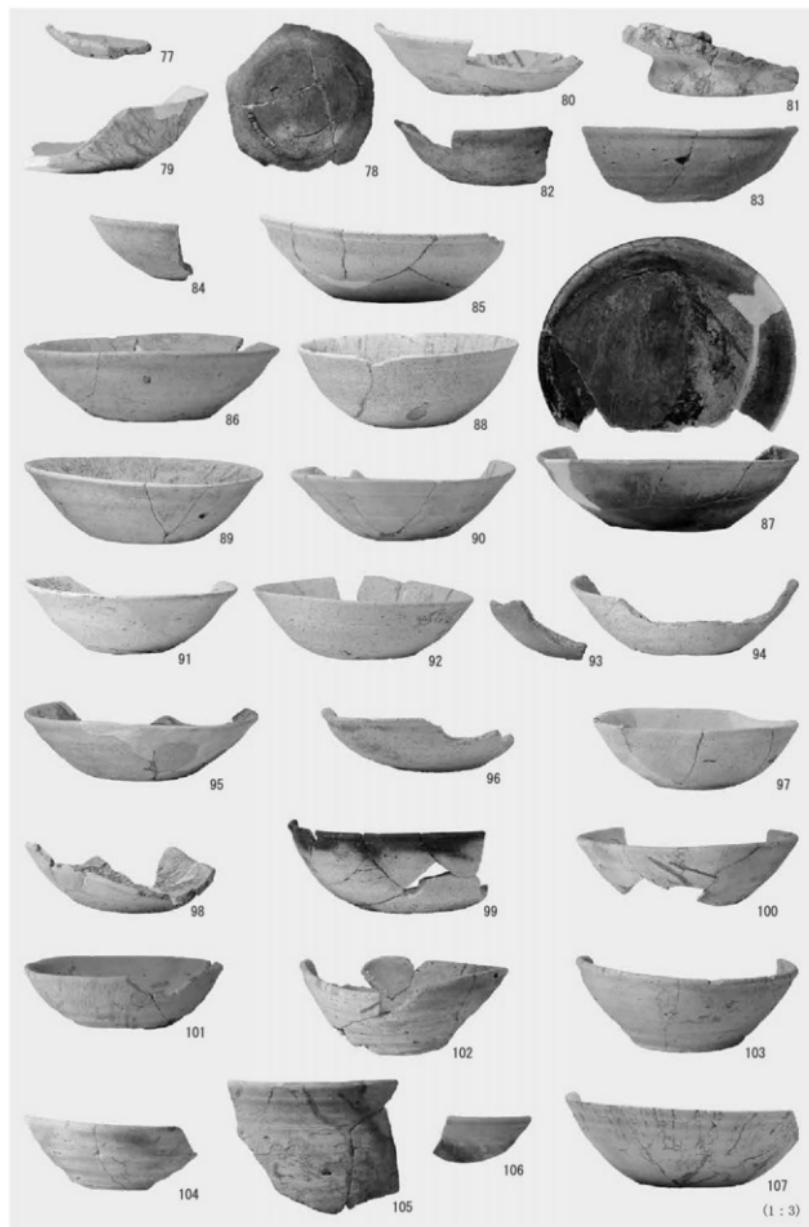


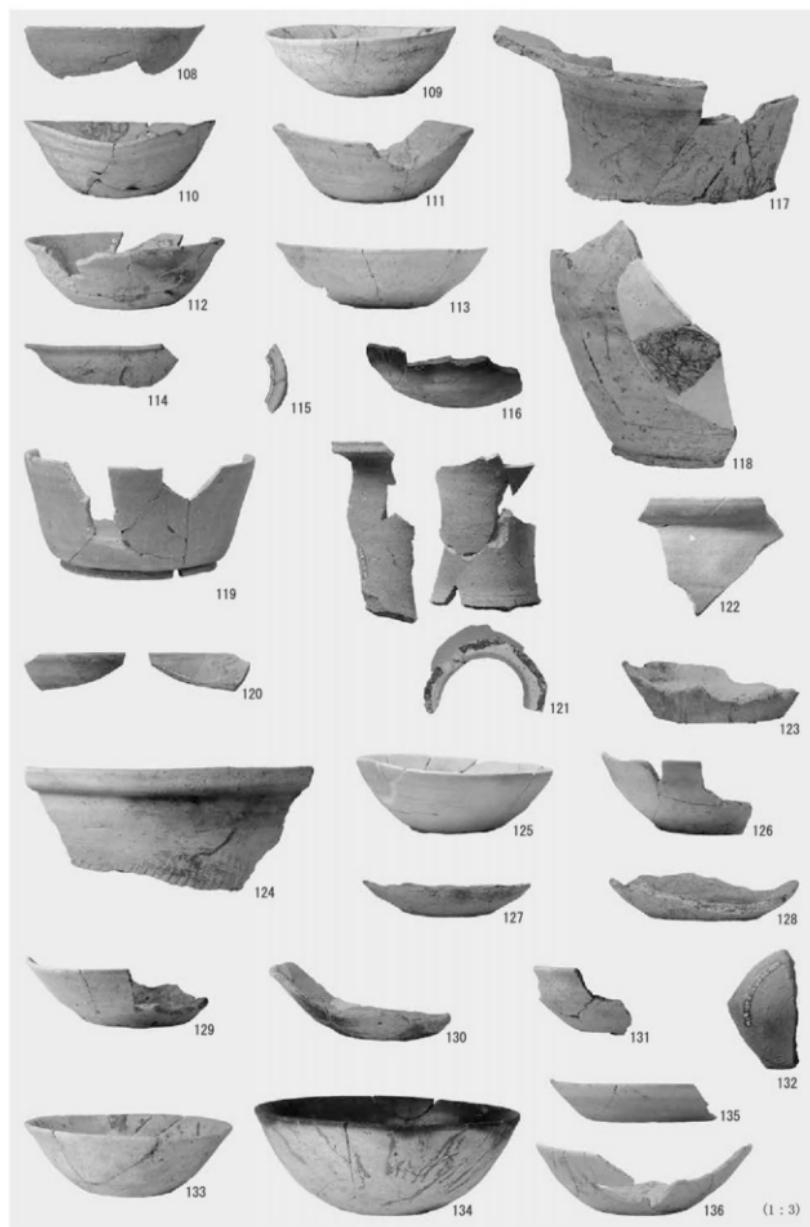
主な墨書・漆書・刻書 (2:3)

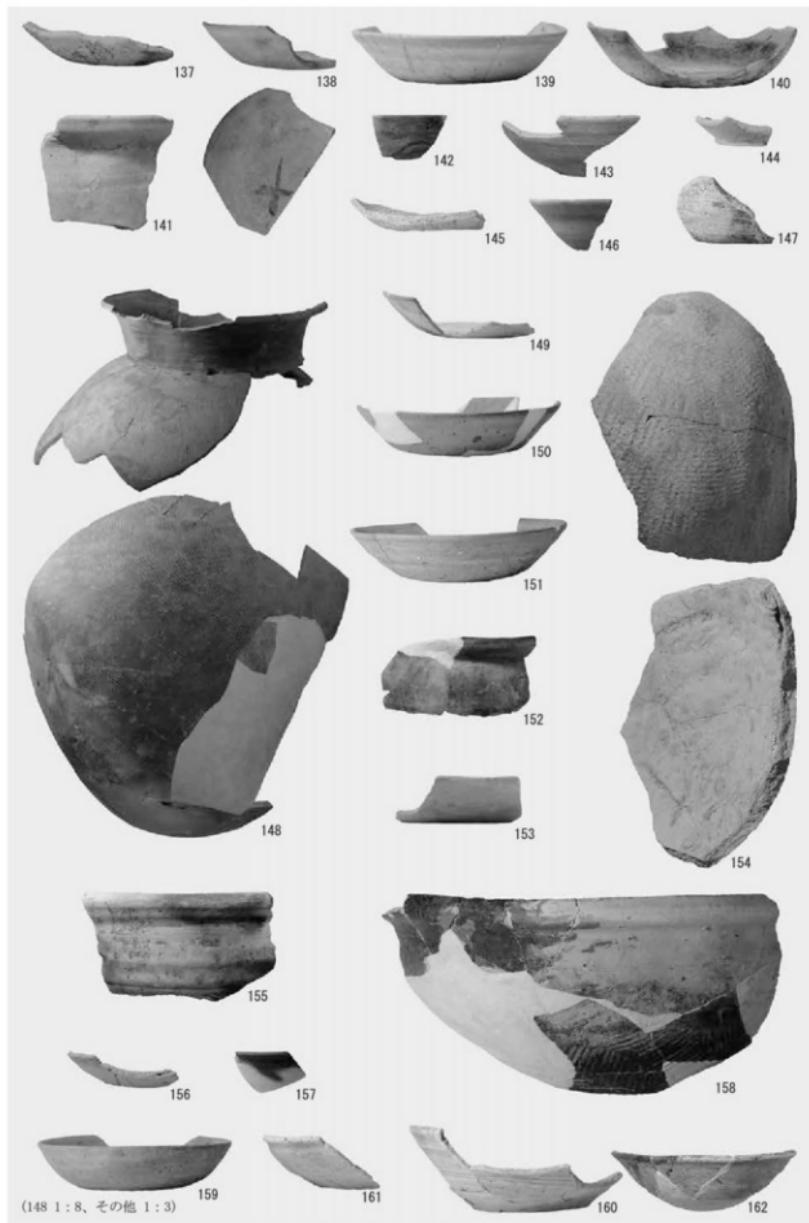


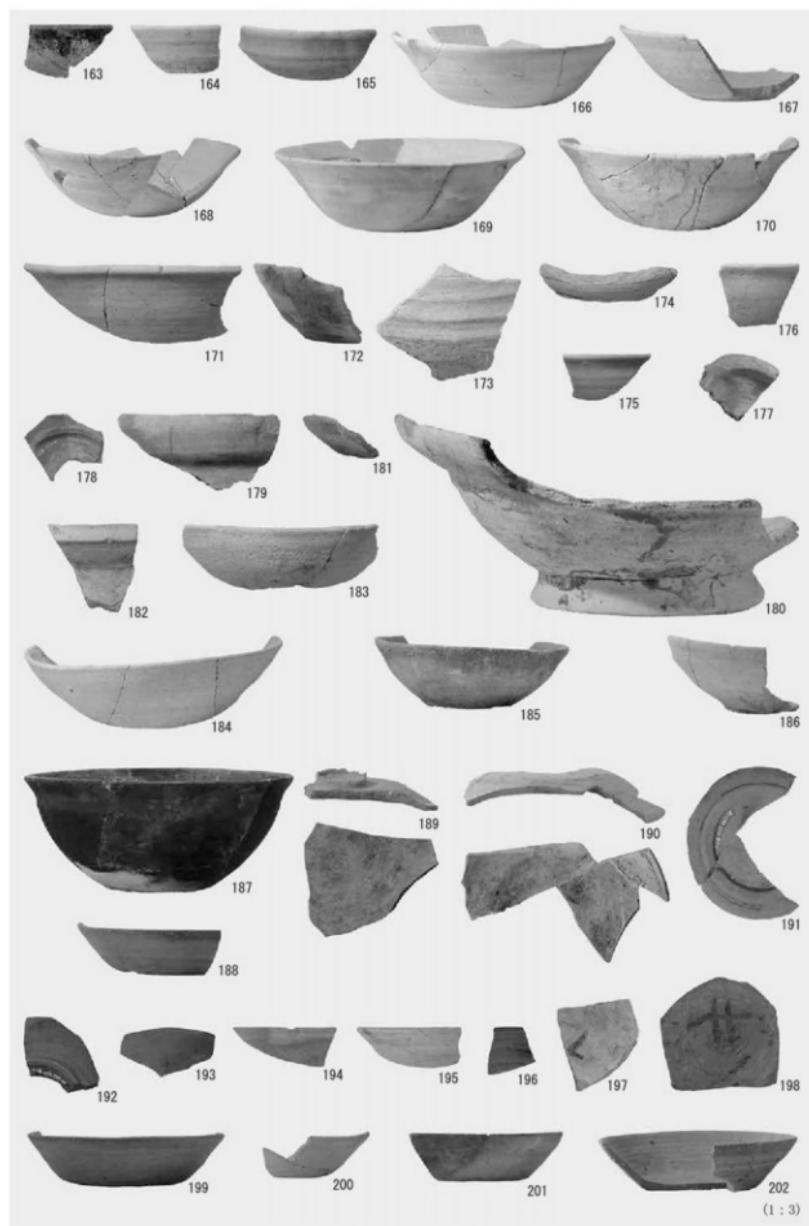
(1:40)



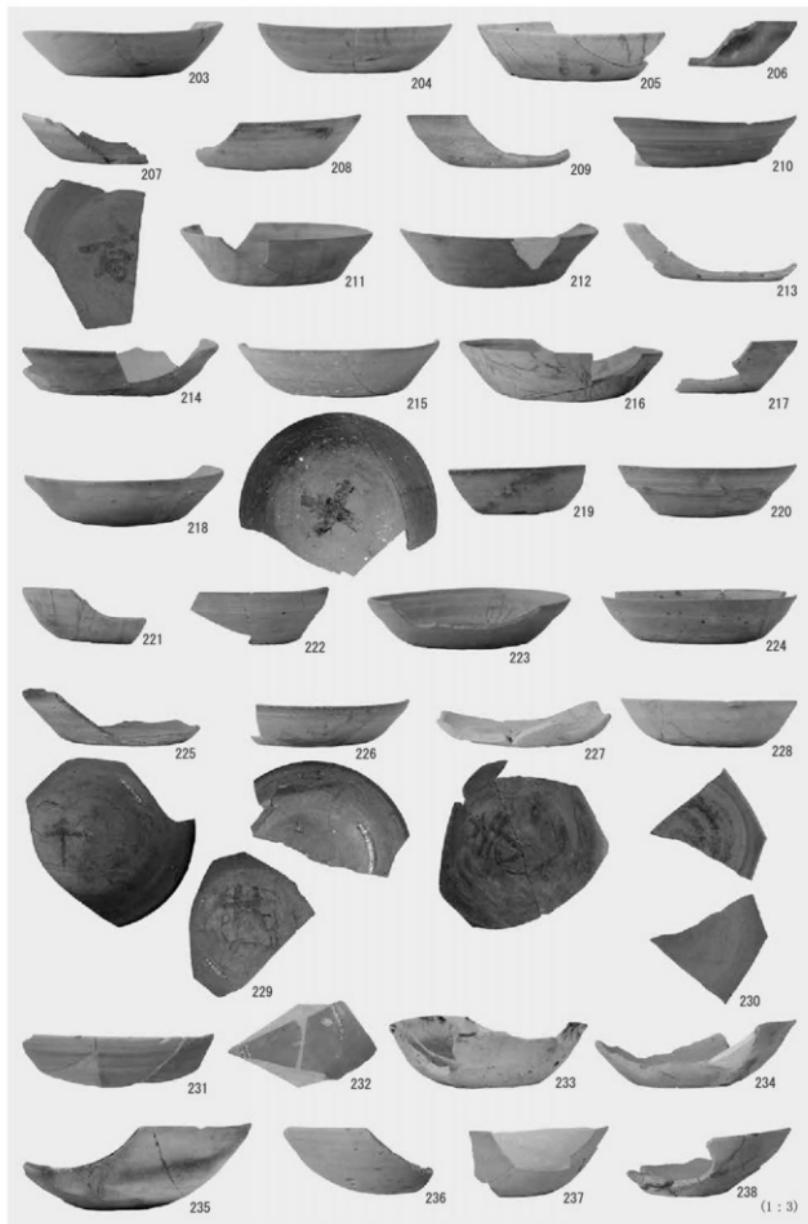


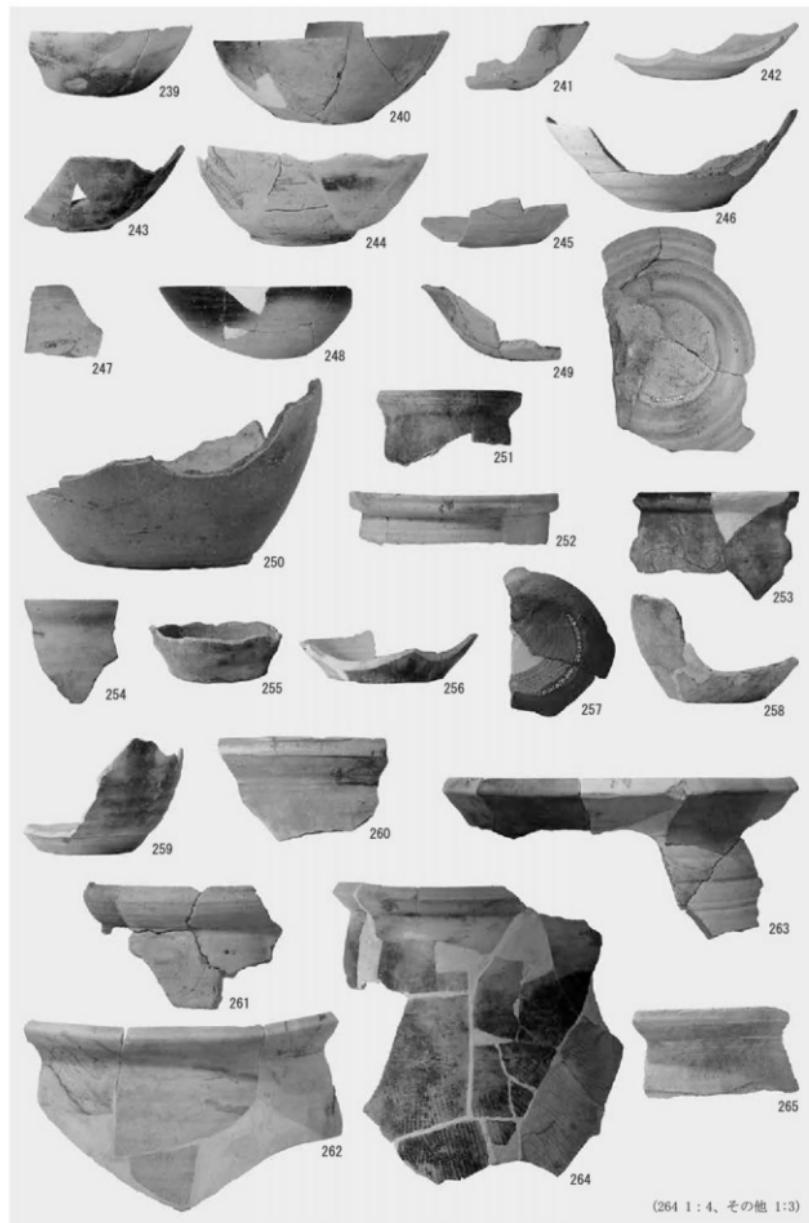


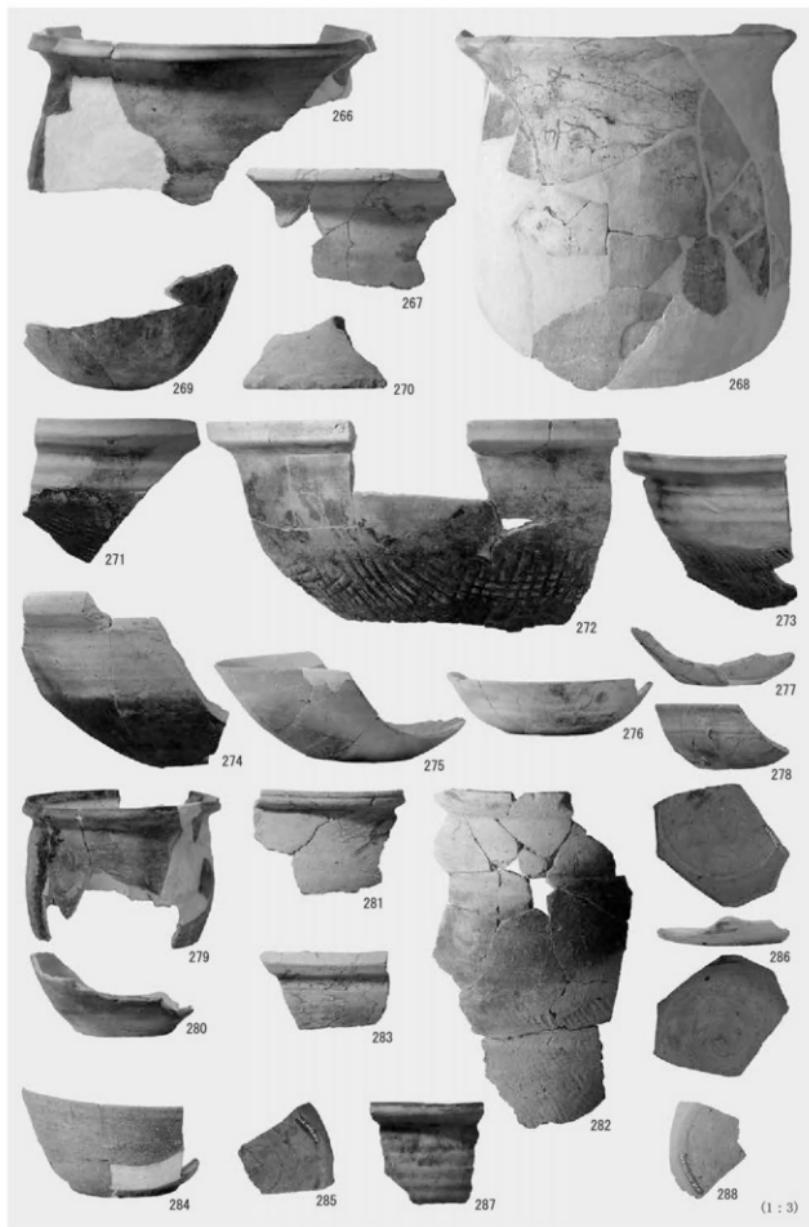




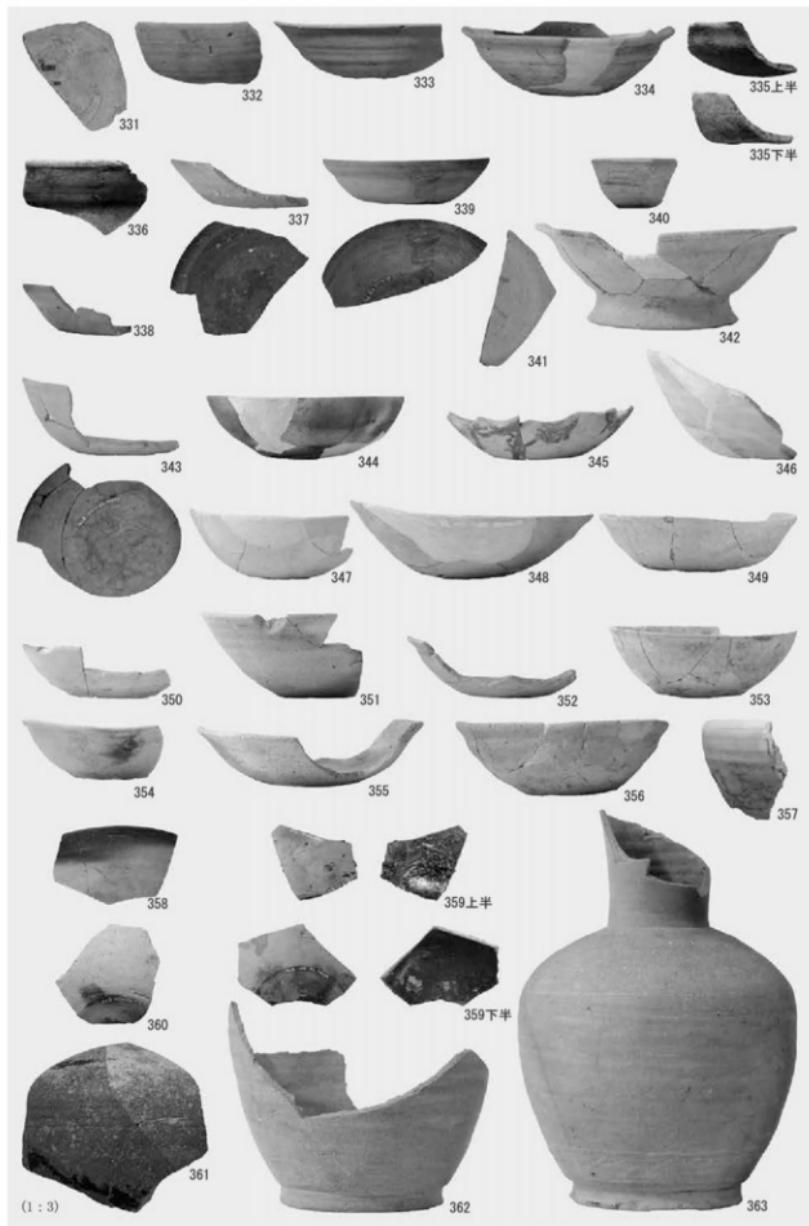
(1 : 3)

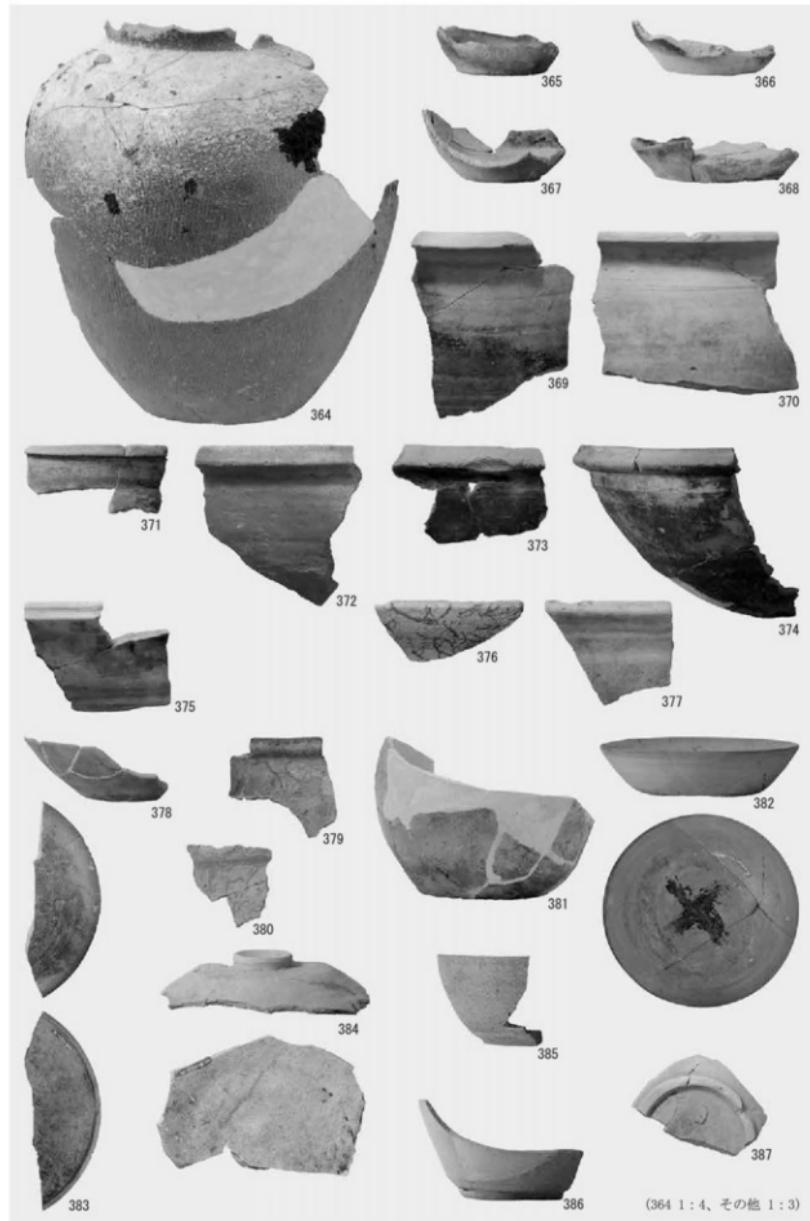


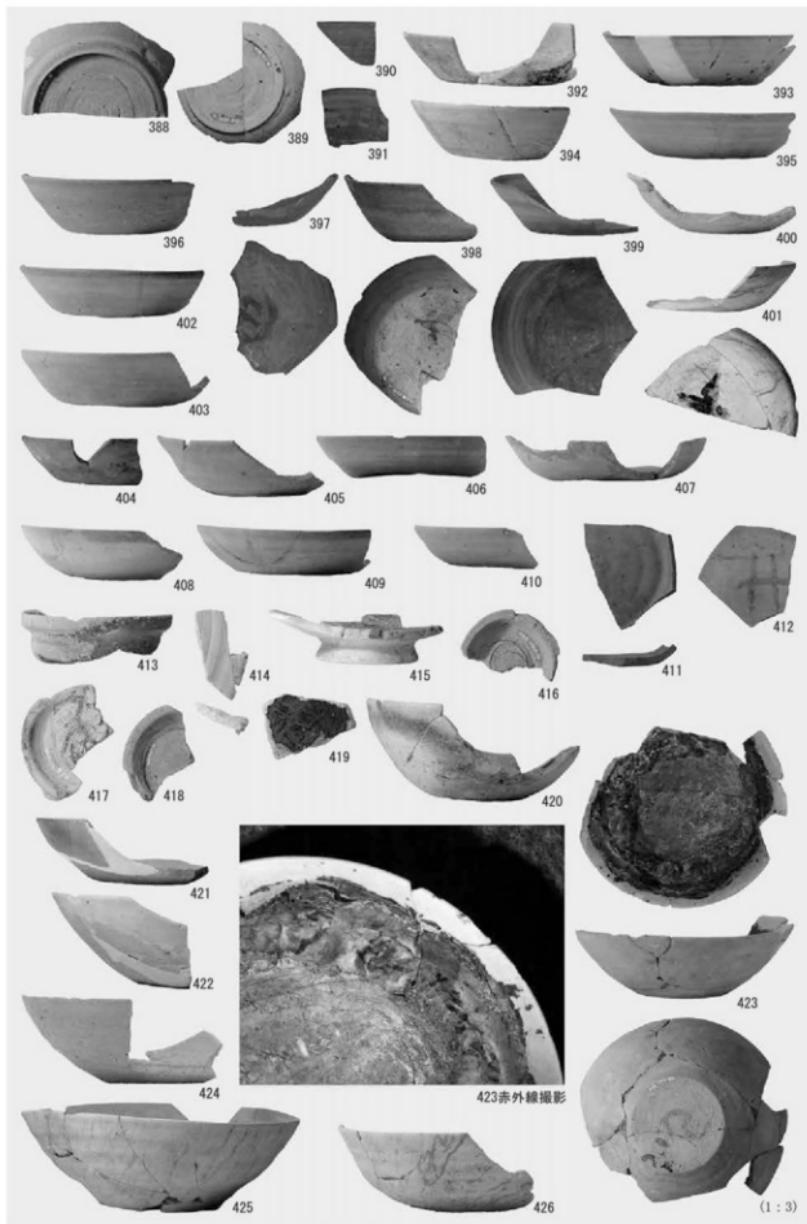


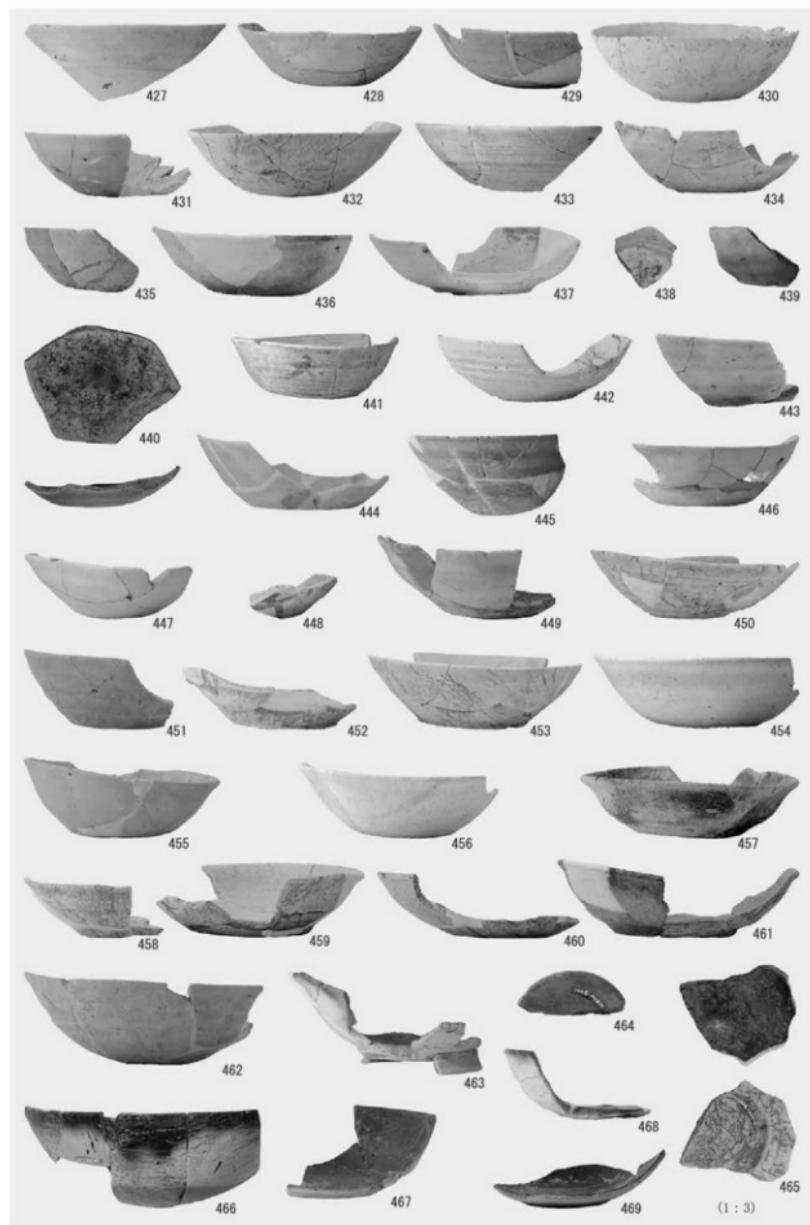


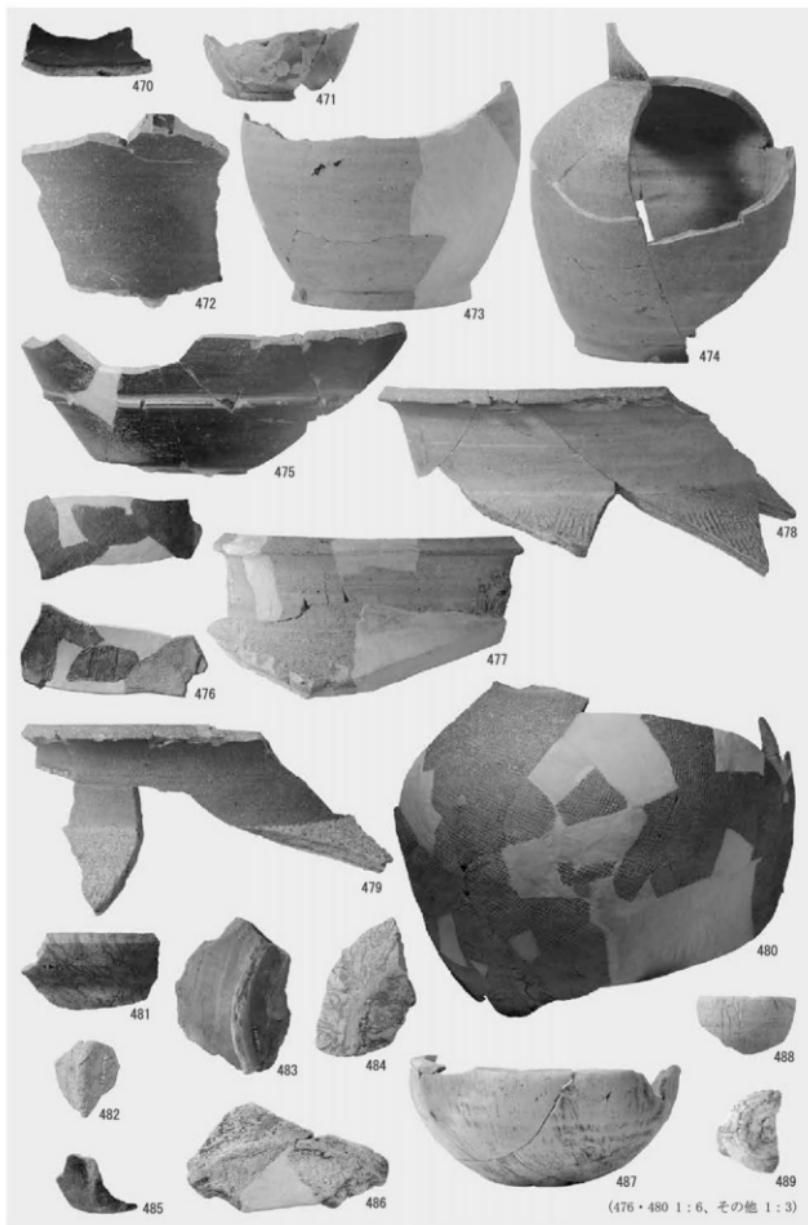


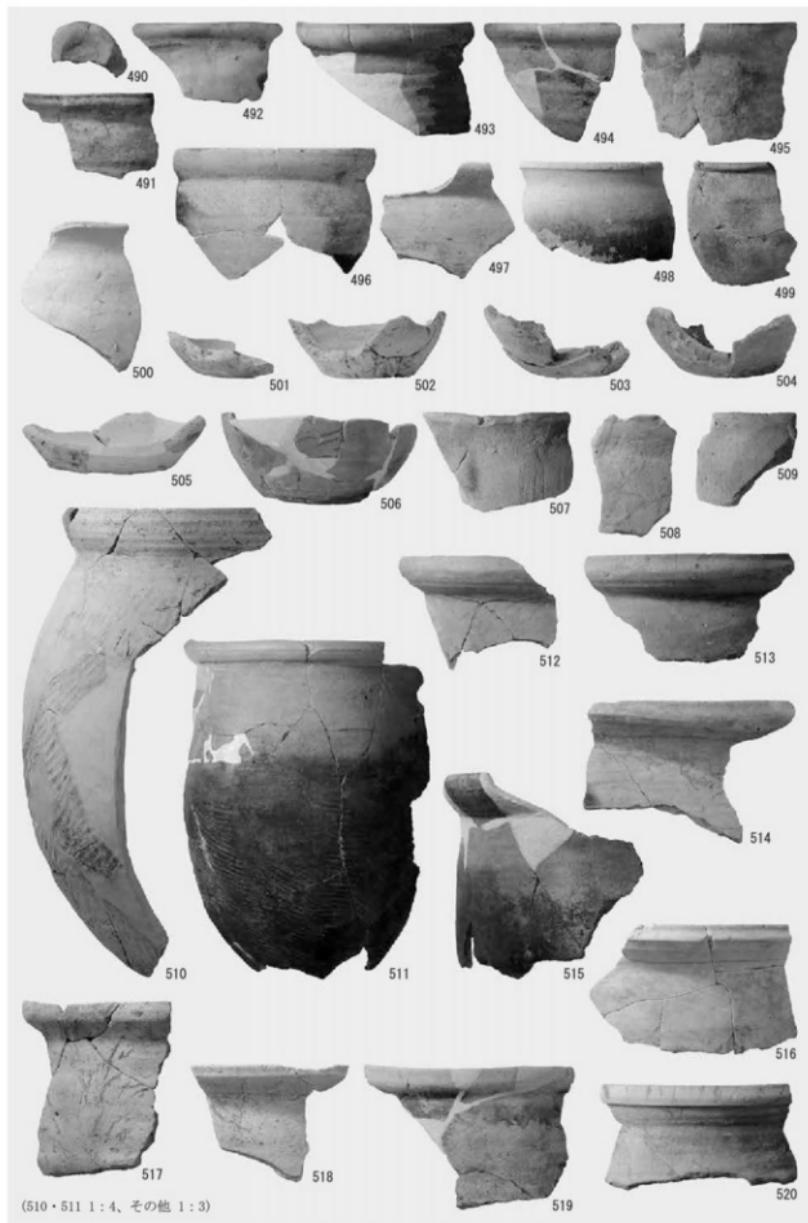


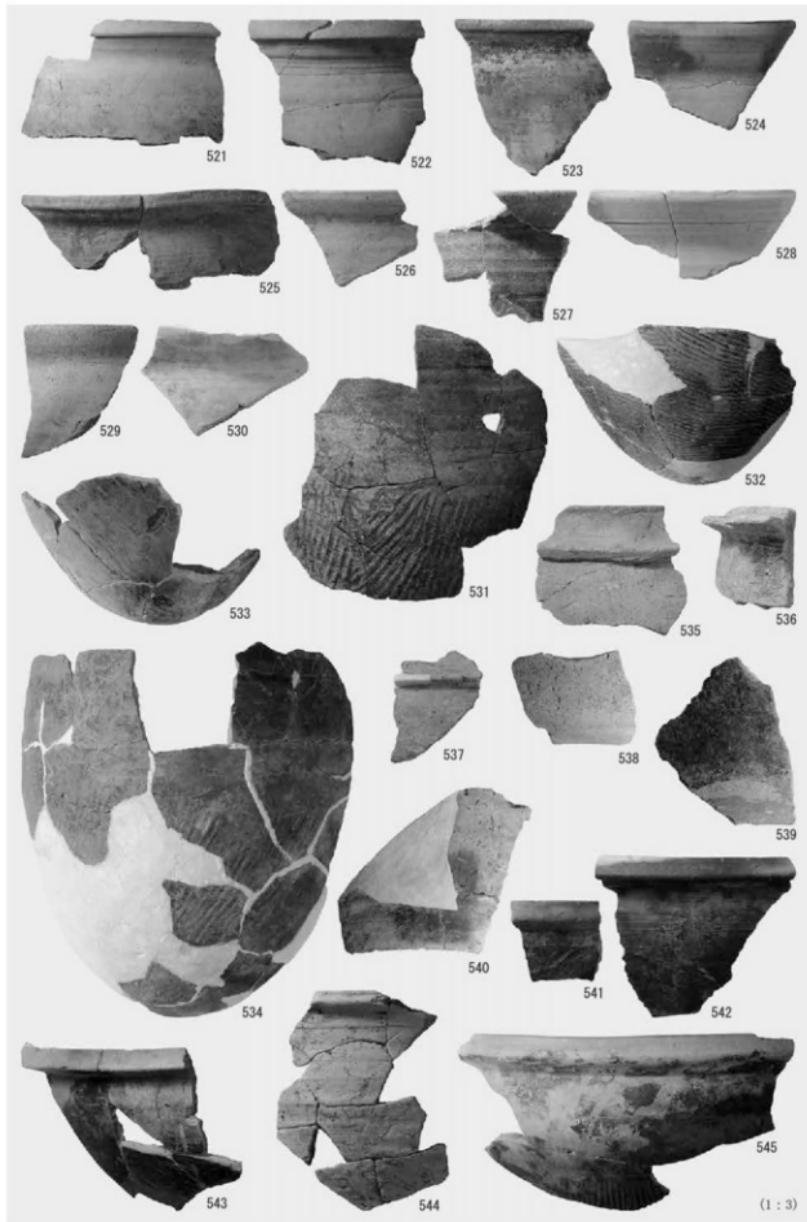


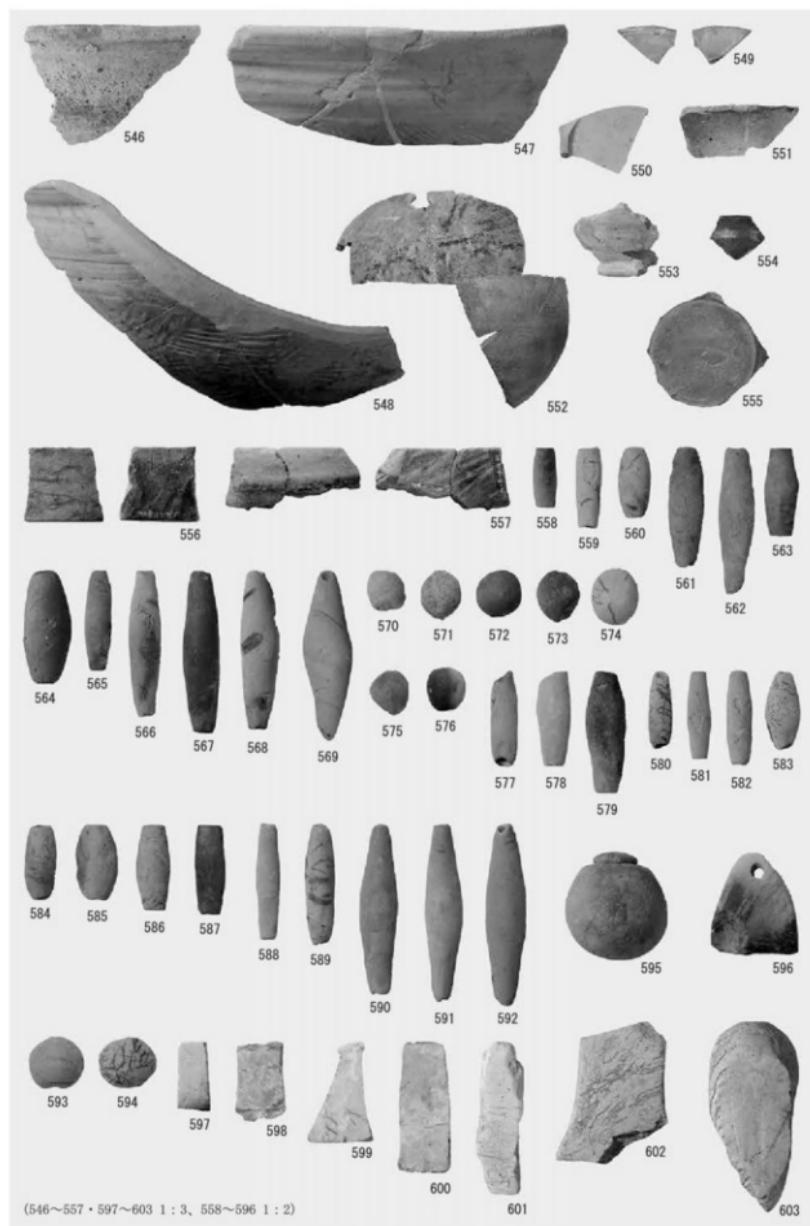


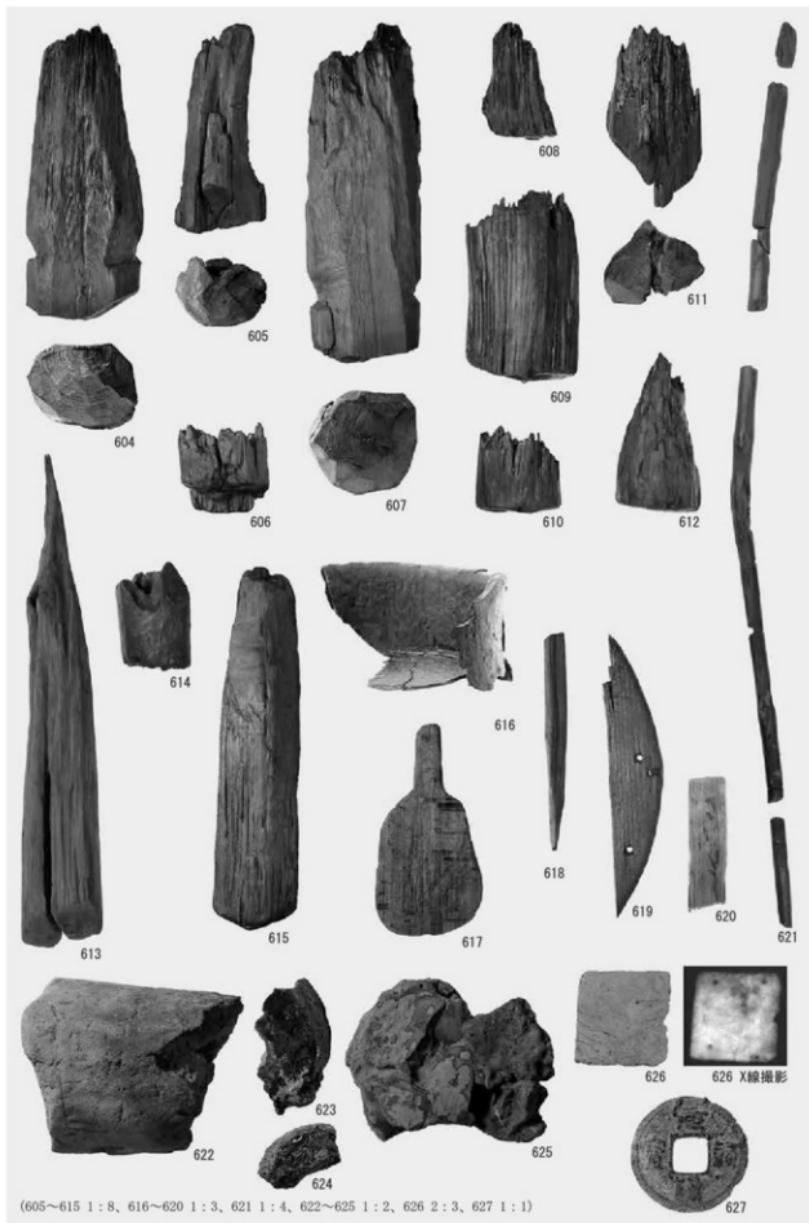












## 報告書抄録

ふりがな	じょうじょういせき							
書名	上条遺跡							
副書名	上条高畠地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山賀和也・竹部佑介・パリノ・サーヴェイ株式会社・四柳嘉章							
編集機関	長岡市教育委員会・株式会社大石組							
所在地	〒940-0084 新潟県長岡市幸町2丁目1番1号 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2016年3月11日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
上条遺跡	新潟県長岡市上条町	15021	1442	37°25'23"	138°51'30"	20140326～20140903	5,900 m <sup>2</sup>	土地区画整理事業及び病院建設事業
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物			特記事項	
上条遺跡	集落跡	平安時代 (9世紀後半～10世紀前半)	掘立柱建物跡・窓穴建物・埋葬関連遺構・井戸・竪状小溝群・溝・土坑・ピット	須恵器・土師器・灰釉陶器・縄文陶器・土製品・土鍋・砥石・石製品・柱根・木製品・鍛冶関連遺物・帶金具				四面廻建物を検出
要約	上条遺跡は信濃川右岸の沖積地上に立地している。出土遺物のほとんどは平安時代であり、9世紀後半から10世紀前半を中心とした集落遺跡である。四面廻建物を中心とし、側柱建物や窓穴建物が確認される。高跡が広がり、住居と耕地が一体となっている。また、埋葬関連遺構があり、木棺墓や土坑墓などが検出された。遺物には漆器関連遺物があり、漆工房があった可能性がある。土鍋の出土から造営が行われていたと考えられる。新たにこの地域に進出してきた新興勢力の集落と考えられる。							

### 上条遺跡

上条高畠地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成28(2016)年3月11日 印刷

平成28(2016)年3月11日 発行

発行 新潟県長岡市教育委員会

印刷 株式会社サンワプロセス